Osaka University Knowledge Archive

Title	馬に乗ったマプーチェの神々 : チリ先住民文化の変遷
Author(s)	千葉, 泉
Citation	大阪外国語大学学術研究双書. 1998, 19, p. 1-218
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80062
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大阪外国語大学学術研究双書19

「馬に乗ったマプーチェの神々
ーチリ先住民文化の変遷ー」

千　葉　泉　著

1998

大阪外国語大学学術研究双書19

「馬に乗ったマプーチェの神々
ーチリ先住民文化の変遷ー」

千　葉　泉　著

1998

Publications of Osaka University of Foreign Studies, No.19 1998

The horse-riding Mapuche Gods
—Transformation of a Chilean indigenous culture—

Izumi CHIBA

目　次

序 …… 1
第1部：馬に乗ったマプーチェ戦士 …… 9
＜1＞スペイン人騎馬兵への対抗：馬の消極的同化 …… 10
第1章：「インカのリャマ」：馬との遭遇 …… 10
第2章：「気力による対抗」から「馬の威力の認識」へ …… 16
第3章：対抗戦略の開発 …… 23
（1）地理的要因の利用 …… 24
（2）対騎馬用武器の開発 …… 32
a．様々な武器の開発とその実験的使用
b．征服期のマプーチェ槍
c．鉄製尖頭槍の開発
d．逃亡兵・捕虜の鍛冶職の利用
＜2＞マプーチェ騎馬隊：馬の積極的同化 …… 53
第1章：王室による規制 …… 53
第2章：反乱マプーチェによる馬の調達 …… 55
第3章：馬に乗った少数のマプーチェ …… 58
第4章：マプーチェ騎馬隊の出現 …… 62
（1）従来の見解の検討 …… 62
（2）マプーチェ騎馬隊の出現とその初期の機能 …… 64
第5章：クララバの奇襲と第2次大反乱 …… 69
（1）新しい戦闘スタイルの出現 …… 69
（2）クララバの奇襲と第2次大反乱 …… 71
第6章：軍事組織の拡大 …… 74
第7章：騎馬兵数に勝るマプーチェ …… 78
第8章：騎馬隊保有がもたらした戦略上の影響 …… 83
第9章：騎馬隊利用法の変遷 …… 87
（1）騎馬隊の重要性の拡大 …… 89
（2）単一騎馬形式による経済的性格の襲撃 …… 95
第10章：「マプーチェ式騎馬兵」の誕生 …… 107
（1）独特な長槍攻撃法 …… 108

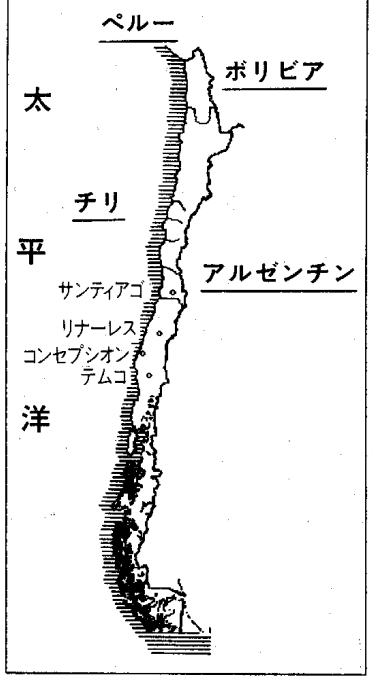
（２）軽量馬具・携帯食・感染呪術 …… 111
第11章：「アラウカーノ騎馬隊」：マプーチェ騎馬兵との同盟 …… 115
（１）反乱マプーチェと外国人海賊の同盟 …… 115
（２）和平交渉と反乱マプーチェの「アミーゴ」化 …… 118
（３）「アラウカーノ騎馬隊」の登場 …… 120
（４）フロンティア地区のアミーゴ騎兵の確立 …… 123
（５）奥地のマプーチェ騎兵との軍事同盟 …… 126
第12章：「天に登った」マプーチェ騎馬兵 …… 130
第１部結論 …… 134
第１部注 …… 135

第２部：「白い邪術師」と戦う先住民シャーマン …… 141
－疾病治療に見る土着の西欧の相互補完－
第１章：マプーチェ社会における西欧医療体系の浸透 …… 147
（１）マプーチェの伝統的な疾病概念：「邪術」と「悪霊」 …… 147
（２）『平定』と西欧医療体系の浸透 …… 151
（３）『ウィンカ病』と『マプーチェ病』 …… 154
第２章：マチの新しい機能 …… 166
（１）『マチ』の治療をうける『ウィンカ患者』 …… 166
（２）『ウィンカ邪術師』と戦う『マプーチェ医療師マチ』 …… 169
（３）『霊の通訳』から『バイリンガル通訳』へ …… 182
第３章：両体系の相互補完 …… 185
（１）ウィンカ医師の治療を受けるマチ …… 185
（２）医師とマチの分業 …… 187
（３）『総合医療実行課』：西欧近代医療によるマチの再評価 …… 189
（４）マチに患者を回す診療所医療補助員 …… 191
（５）マチの儀礼を支持する医療補助員 …… 193
（６）マプーチェとウィンカの共闘：槍と銃 …… 195
第２部結論 …… 201
第２部注 …… 202
結び：馬に乗ったマプーチェの神々 …… 206
参考文献 …… 211

序

日本から見て地球のちょうど真裏側、南米大陸南部の太平洋に面した細長い国、それがチリである。本書はそのチリ南部に居住する先住民マプーチェが、征服者スペイン人が到来した16世紀以降今日に至る約450年の間に経験してきた文化変容と伝統の再編成の過程に関して、二つのテーマに焦点を絞って考察することを目的としている（地図１）。

地図１．チリ全図



スペイン人に征服された新大陸の先住民文明のうち、日本でもよく紹介されているのはインカやアステカを初めとする『高文明』である。これらの文明を築いた民族は統治方法における差異やコントロールの実効度に関する議論はあるものの、スペイン人による征服当時、神聖化された単一の支配者のもとに多くの異民族を支配下におき、巨大な領域を範図に収めていたという点では共通している。

ところがマプーチェはそれとは極めて対照的に、自民族のレベルですらこれを統括する権威は存在せず、地区ごとに散在して居住していた。地区には一応首長がいたものの、その権威は極めて名目的なものであり、一般の家長たちは彼に対して納税や労働奉仕の義務も負ってはいなかった。また集落を形成することもなく、各家族が散り散りに分かれて居住していた。要するに、一応地区という社会単位は存在したものの、日常的には各家族が独立して生活していたのである。

またアステカのピラミッドや「インカの道」に代表されるような、多大な人的エネルギーの結集を必要とする巨大な建造物も造らず、旅行者の興味を引きそうな遺跡も残してはいない。今年の５月に出版されたばかりの『ユネスコ世界遺産第２巻』（中米・南米遍）にも、メソアメリカやアンデス高地についてはふんだんなページがさかれているのに対し、チリの遺跡はものの見

事に一つも紹介されていない。

このように書いてくると、マプーチェが一見何ら取り柄のない、注目に値しない民族であるように思われるかもしれない。

しかし、少なくとも一つだけマプーチェが誇りに出来る事実がある。それは、スペイン人の征服の試みに対して彼らが徹底的に抗戦し、結局植民地時代を通じてその多くの集団が事実上の独立を守り抜いた事である。社会構造がバラバラであったのだから簡単に征服されてしまいそうなのだが、実際には全くその逆の事態が起こったのである。

労働奉仕や奴隷制に基づく支配のシステム、しかも異民族によるそれを耐え難い不幸と見なしたマプーチェは、スペイン人による征服を一時的に受け入れた後これをはねのけ、17世紀の初頭には事実上の独立を回復してしまったのである。これは、インカやアステカといった『高文明』を築いていた民族、あるいは彼らの支配に服していた多くの民族が比較的早期にスペイン人の支配に甘んじたのと対照的であった。そしてこの事実は、今日まで彼らの民族的アイデンティティーを支える誇りになっている。

だが、このように植民地時代を通じて実質的な支配を受けることのなかったマプーチェも、チリがスペインから独立した後、19世紀の末にチリ共和国軍の推進する『平定』と呼ばれる軍事作戦により敗退する。こうしてチリ共和国に統合され、その法制に従属するようになった結果、支配的社会からのヨーロッパ的、あるいは近代的な文化要素が体系的に彼らの社会に流入するようになった。

したがって、スペイン人到来以後のマプーチェの歴史は大きく二つの時期に分けることができる。スペイン人や独立後のチリ人の圧力を受けながらも基本的な自律性を維持した16世紀中葉から19世紀中葉までの時期、そして19世紀末から現在に至る「ヨーロッパ化」の時期である。

本書は、これらの二つの時期において、異なる条件のもとに異文化に対峙することを余儀なくされたマプーチェ民族が、異文化の影響を様々な形で受容しながら、いかに伝統を再編成してきたのかという問題関心に基づき、そ

れぞれ特定のテーマに着目して論じることを目的としている。

一つは、植民地時代の初期にあたる16世紀中葉から17世紀中葉にかけて、征服者がもたらした軍事要素である「馬」をマプーチェ社会が同化した過程と、それが彼らの社会やチリ植民地社会に与えた影響を考察することである。そしてもう一つは、19世紀末の『平定』以降、ヨーロッパ型の支配文化に包摂されて生活することを余儀なくされたマプーチェ社会が、疾病治療体系の分野で現在経験しつつある変容と再編成の実態を論じることである。

「馬」と「医療」という一見関連のなさそうに見えるこの二つのテーマに対し、私が興味の発端を同時に与えられたのは、今から数年前の事であった。

1993年3月から翌年の1月にかけての10カ月間、私は文部省の海外研究員としてチリに滞在した。そのチリでの生活も終わりに近づた1993年12月のある日、南部の小村落カラウエでチリ人女性文化人類学者カルメンと知り合った。彼女は、まだ知り合って間もない私をある近隣の共同体に居住する友人のマプーチェ男性のアントニオに紹介してくれるということになった。アントニオは今日のマプーチェの宗教儀礼の場で重要な役割を果たすシャーマン的医療師『マチ machi』であった。そしてアントニオの仲介で、私たちは偶然にも、彼の叔母でやはり隣接する共同体に住むマチ、フアナの家で開催される祈願儀礼「ギジャトゥン nguillatun」に参加できることになったのである。

フアナの家の裏庭にはシナモンに似たマプーチェの聖木「カネーロ」が植えられ、木製のハシゴを立てかけた「レウエ（聖なる場所）」とよばれる場所が設けてあった。我々も含め出席者全員がカネーロの木の枝を右手に持ち、時計の針と反対の方角に踊りながら回ったり、レウエに向けて前進や後退の動作を繰り返していく。1時間ほど踊った後、マチはトランス状態に入ってある霊の憑依を受け、木製のハシゴを登る。そして、ハシゴの上で上半身を左右に揺らしながら、胸の奥から絞り出すような太い声を発し、儀礼的なマプーチェ語で即興的にマプーチェの民族神や一族の祖先霊に豊作を祈願して行った。(1)

こうしたマチの神秘的な儀礼行為に圧倒された後に、私の興味を引いたことが一つあった。儀式も終わりに近づいたある時、主催者の家族の少年の一人が、布でできた馬の顔らしきものを先端に取りつけた木の棒にまたがり、向こうから走ってきてはある成年男性の臀部に衝突するという行為を繰り返したのである。

今日、共同体のマプーチェ１家族あたりが保有する土地は狭く、大量の牧草を消費する馬を飼育することは容易ではない。またほとんどの地域にはバスの路線が開通し、毎日都市と共同体とを結んでいる。こうした状況から、現在実際に馬を所有しているマプーチェの家族はごく少数である。

この地域でも主要な移動および運搬手段は牛車であり、馬を見かけることはほとんどなかった。参加者30名ほどの家族的な規模で行われたこの「小ギジャトゥン」の儀式にも本物の馬の姿はなかった。当時まだマプーチェの宗教についてあまり知識がなかった私は、単に子供が「ホウキ馬」に乗って遊んでいるのだろうと考えていた。だが後に私は、この「ホウキ馬」にはある重要な儀礼的機能が隠されていたことを知った。

その後日本に帰国した筆者のもとに、筆者がマプーチェ語を習っていたクララ・アンティナオから手紙が届いた。クララはチリ南部チョルチョル出身の移民マプーチェで、首都であるサンティアゴ市の市内に居住し、マプーチェ語とマプーチェ銀細工のクラスを開いている。(2)

マプーチェ語で書かれたその手紙にはある興味深い事実が記されていた。サンティアゴ市でも、南部から移民してきたマプーチェの人々の手で毎年盛大に「ギジャトゥン」が行われている。その年もフロリダ区の空き地で「ギジャトゥン」が行われたのだが、儀式で中心的な役割を果たすサンティアゴ市在住の男性マチが、「ウィンカ winka」の「ウアソ huaso（牧童）」２名を招待して儀式に参加させたというのである。「ウィンカ」というのは、マプーチェが混血・白人系のチリ人を指す言葉で、クララを初め多くの参加者はこの行為を伝統の逸脱と見なし、マチを非難したという。

一般のマプーチェ以上に伝統的な慣習に敏感なはずのマチが、何故わざわ

ざこのような行動を取ったのだろうか。これを説明するためには伝統的な「ギジャトゥン」の中で「馬」という要素が果たしてきた極めて重要な役割を思い起こさなくてはならない。

「グネチェン」という民族神や一族の先祖の霊などの憑依を受けた際、マチ自身の魂は「ウェクフ wekufü」と呼ばれる邪悪な霊、あるいは邪悪な力に汚染される危険がある。そこで、ウェクフの脅威をはねのけマチが無事に祈禱を遂げられるように、周囲の参加者がさまざまな形で「魔除け」を行うことが必要となる。そしてこうした魔除けの儀礼の中でも特に重要なものの一つが、「アウン awün」である。この儀礼は、多数の若者の男性が馬に乗って、「ヤーヤーヤー」と鬨(とき)の声を上げながら、レウエの回りを時計の針と逆方向に疾走することにある。

大都市であるサンティアゴ市に移民したマプーチェが馬を保有することはほとんど不可能に近い。こうした状況の中で、マチは伝統的に「ギジャトゥン」の場で行われてきた「アウン」を実現するべく、敢えて非マプーチェ・チリ人の牧童を招待したのであった。

また後述するように、今日『マチ』が行う治療儀礼の場においても、馬は「霊」の形を取り、治療を援護する神々が乗る天界との交通手段として重要な役割を果たしている。

このように「馬」という要素が、今日物理的な有用性をほとんど喪失しているにも関わらず、マチが関わる魔術・宗教的なコンテクストにおいて重要な要素として認識されているのである。

これらの体験を通して、私は「馬」という要素と「マチ」を中心とするマプーチェの宗教体系や病気と治療の体系の問題に興味を持つに至った。

ヨーロッパ人による征服以降のマプーチェの歴史を振り返って見ると、『馬』という要素はマプーチェの運命に極めて大きな影響を及ぼしたことがわかる。

冒頭で述べたように、マプーチェは長期に渡ってヨーロッパ人による植民地支配を拒んだことで知られている。征服者バルディビアがチリに到来した16世紀中葉から植民地時代の終焉を経てチリ独立後の19世紀末に至るまで、

ほぼ3世紀半にわたってスペイン人、そしてチリ人による征服の意図をはねのけ、独立的な性格の強い領域を保持することに成功している。こうした長期にわたるヨーロッパ人による支配に対する抵抗の過程で、『馬』は戦闘に威力を発揮する最も重要な武器として、マプーチェ戦士たちによって大規模な形で利用されたのである。

また軍事以外の側面でも長距離移動の手段、食糧、ウインカとの交易の商品、婚資、そして宗教儀礼の構成要素と、マプーチェの物質的・精神的生活のあらゆる側面で重要な役割を担ってきた。

ところで、マプーチェはスペイン人の到来以前から馬を知っていたわけではない。なぜなら、当時馬は新大陸には存在しなかったからであり、チリにも16世紀の中葉に征服を行ったスペイン人が始めて「馬」をもたらしたのである。

このように外来の要素であった「馬」を、マプーチェが早い時期から導入したことは、植民地時代のチリの歴史にも重要な結果をもたらした。

マプーチェは、火器と並んでスペイン人征服者たちの軍事力の要のであった騎馬兵に対抗するための戦法や武器を矢継ぎ早に開発していった。そして、16世紀末には早くも自分たちの騎馬隊を編成し、迅速さと威力においてスペイン人騎馬兵に勝る独自の騎馬兵のスタイルを確立するに至った。こうして戦力を飛躍的に向上させたマプーチェは、大規模な反乱を展開してビオビオ川以南に立てられていたスペイン人の都市を全て破壊してしまう。その結果、17世紀の初頭以降19世紀末に至るまでマプーチェは自立的な領域を維持することに成功するのである。この意味で、軍事的な側面での馬の導入という問題は、チリ植民地社会の歴史を大きく変える要因の一つになったといっても過言ではない。

こうして、馬を初めとする敵方の戦闘要素を積極的に導入することによって戦力を向上させ、長期にわたって高度な自律性を保持することに成功したマプーチェ社会にも19世紀末には大きな転機が訪れる。近代的なチリ共和国軍の手で進められた『平定』により、ついにマプーチェ社会はチリの国家シ

ステムに統合されることになったのである。

『平定』以降マプーチェたちは、それまでの自律的な状況とは対照的に狭い共同体に押し込まれ、西欧近代の価値観を絶対視する支配社会に包摂される形で生活することを余儀なくされたのである。支配社会からの影響が極めて急速で体系的に流入してくる状況の中、言語、宗教、政治、経済とマプーチェ社会のあらゆる側面において急速な「近代化」あるいは「ヨーロッパ化」が起こりつつある。このような急テンポの「ヨーロッパ化」のプロセス中で、先住民としてのマプーチェのアイデンティティーは不可逆的に消滅していくかに見える。

このように急速な変容を被りつつある現代マプーチェ社会の中で、私が特に興味を持ったのはマプーチェ社会のシャーマン的医療師、マチである。魔術的な儀礼や霊の憑依などの行為に代表されるように、マプーチェの伝統性を体現する存在であるマチは、近代合理主義と真っ向から対立する存在である。とすれば、ヨーロッパ化の進む今日のマプーチェ社会の中でマチはその存在意義を失いつつあるのであろうか。

こうして、カラウエでの体験を発端に私は「マチ」と彼らを取り巻く疾病や治療の世界に現在どのような変化が起こりつつあるのかという問題に興味を持つようになった。そして、1996年の7月から9月にかけてチリ南部アラウカニーア地域を訪れ、複数のマプーチェ共同体や病院、診療所などを訪れて調査を行った。

この調査を通じて私にとって最も新鮮な驚きであったのは、西欧近代的医療体系の浸透と平行して、いわば逆方向での興味深い変化が進展しつつあることであった。それは一言でいって、ウィンカの間で起こりつつあるマプーチェ伝統医療に対する再評価である。

特に目立つのは、ウィンカの患者がマチの治療を受けるという現象がすでに一般化していることである。1950年代頃までは事実上ウィンカたちにとって未知の存在であったマチだが、近年こうした白人・混血系の患者たちが霊的疾病や邪術を原因とする疾病に関する彼らの効力を積極的に評価し、その

治療を受けるようになっているのある。

こうした事実は、マプーチェ以上に近代的な価値観が浸透しているはずのヨーロッパ系人口の間で「前近代」の象徴ともいえる霊的あるいは邪術系疾病の概念が決して消失していないことを示している。そして、まさに「前近代」「非西欧」あるいは「未開」の象徴ともいえるマプーチェのシャーマン「マチ」が、そうした西欧系住民の意識の中に生き続ける「前近代性」に対して、医者が果たすことのできない役割を果たす唯一の存在として地歩を確立しつつあるのである。

植民地時代初期における馬の同化という問題と、現代マプーチェ社会におけるマチを中心とする伝統医療の変容の問題は時代も分野も異なる。だが両方とも、ヨーロッパという全く価値観の異なる異文化と対峙した先住民社会が、文化変容を被りながらどのように自己の伝統的な体系を再編成してきたかという問題を考察するために示唆に富んだ事例であると思われるのである。また後述するように、馬は今日のマプーチェの治療儀礼の場において重要な要素の一つとして認識されており、その意味でこの二つのテーマが無関係ではないことも事実である。

以下、この2つのテーマをそれぞれ第1部、第2部に分けて扱う。まず第1部では、ヨーロッパ人による征服から植民地時代の初期にあたる16世紀中葉から17世紀中葉にかけて、マプーチェが征服者の騎馬兵に対抗するために行った馬の導入のプロセスと、それがマプーチェ社会や植民地社会にもたらした軍事・社会的影響について考察する。そして第2部では、19世紀末の『平定』以降「ヨーロッパ化」の進行するマプーチェ社会において、マプーチェの伝統的な治療体系が経験しつつある再編成のプロセスについて考察する。(3)

第1部：馬に乗ったマプーチェ戦士

マプーチェの歴史を考える上で極めて重要な問題である軍事的目的での馬の導入の問題は従来の研究でも繰り返し指摘されている。しかし多くの側面においてこのテーマの研究が、十分に行われてきたとはとは言いがたい。

まずほとんどの研究では、「アラウコ戦争」やマプーチェの軍事的特徴に関する一般的な叙述の中で馬の導入についても簡潔に言及するという程度である。また、ラゴスやレイバの論文[(4)]のように一応軍事面での「馬」の導入に焦点を絞った研究でも、以下に述べるような多くの重要な問題の分析がなされていないか、不十分にしかなされていない。

例えば征服初期の時期に、初めて目にする馬をマプーチェがどのように認識しこれに反応したのかという問題。また、マプーチェがみずから騎馬隊を編成する以前の段階で、征服者の騎馬隊に対抗するためにいかなる戦法や武器を考案して行ったかという問題。マプーチェに騎馬技術が伝播したルートの問題。これらの問題を十分に詳しく扱った研究はない。

そして、マプーチェが実戦において騎馬隊を投入し始める時期については多様な説が出されているものの、信頼に足る一次資料に基づいて実証的な形で呈示した研究はない。

また近年、植民地軍側に友好的であったマプーチェ集団「インディオス・アミーゴス」に関して研究が進んでいるが[(5)]、「騎馬兵」としての「アミーゴス」の奉仕の実態に関しては考察がなされていない。さらに、マプーチェの対騎馬技術、あるいは騎馬技術向上のプロセスにおいて植民地軍からの脱走兵や捕虜が果たした役割についての考察も十分に行われていない。

つまり、騎馬隊の導入がマプーチェの軍事力を向上させ、チリ植民地社会の運命を大きく左右するほどの要素になったことはあまりにも有名な事実であるにもかかわらず、究明すべき問題点が多く残されているといえる。

こうした研究動向を念頭に置き、本稿では植民地時代初期の軍事的な側面における馬の同化のテーマに限定し、上に挙げた諸項目を中心に分析を行っ

ていく。[6]

具体的には、マプーチェが「馬」に始めて遭遇したアルマグロのチリ遠征(1536年)から、植民地社会と反乱マプーチェとの初めての大規模な和平交渉であるキジンの和平（1641年）が開催された17世紀の中葉に至るまでの約1世紀の時期を中心に検討する。これはマプーチェ社会が植民地社会と最も激しい形で軍事的に衝突していた時期にあたる。ただし、軍事的な側面と関連する事項の範囲内で、これ以降の時期の問題や社会・宗教的な側面での馬の同化の問題にも若干触れる。

第1部は前半（＜1＞）と後半（＜2＞）の二つの部分から構成されている。前半では「消極的」な形での馬の同化のプロセス、すなわち、始めて見る征服者スペイン人の騎馬隊に対してマプーチェの戦士たちがどのような対策を講じていったのかという防衛的な局面を扱う。そして後半では、より積極的な形での馬の同化、すなわちマプーチェ自身による「騎馬隊」の導入とそれがマプーチェ社会や植民地社会に対してもたらした影響について扱う。

＜1＞スペイン人騎馬兵への対抗：馬の消極的同化

第1章：「インカのリャマ」：馬との遭遇

そもそも馬という動物は、スペイン人が到来した15世紀末から16世紀の前半の時期において、新大陸の先住民にとっては未知の存在であった。

ただ時代を遠くさかのぼれば事情は異なる。なぜなら、馬はもともと北米大陸で発祥した動物であり、太古の昔には南北アメリカ大陸に棲息していたからである。したがって、先住民のさらに祖先にあたる新石器時代の人々にとってはなじみのある動物であったといえる。しかし、氷河期の末期にあたる約1万年前、マンモスを初めとする大型動物とともに馬は南北両大陸において絶滅してしまう。[7] なお、当時「馬」は狩猟民であったパレオインディアンたちにとって狩りの対象であったに過ぎず、家畜でも、これにまたがっ

て移動するための手段でもなければ、ましてや戦闘のために用いる武器でもなかったことは言うまでもない。

こうして、スペイン人が新大陸に到達した当時、各地に存在していた先住民たちは、始めて見る「白い人」や彼らを乗せて走る「馬」に対して、当初驚きや恐れを抱き、これを「誤解」する形で認識した。

メキシコ中央高原を中心としてメソアメリカ地域に広大な支配圏を築いていたアステカ王国のモクテスマ2世は、メキシコ湾岸に上陸したコルテスの一隊に使者を送っている。フランシスコ会のサアグーン神父の質問に答えた先住民のインフォーマントの証言によると、コルテスとの接触を終えて戻った使者は、馬を見た時の印象を次のように語っている。

> 「そして彼らを背中に乗せた動物といったら、これは彼らの鹿なのですが、天上ほどの高さにも達するのです。」**[Sahagún : 19]**。

一度も見たことのない大型獣を、アステカの人々は自分たちになじみの深い動物の名称を使って「鹿」と表現した。ただ、その「鹿」が異様に大きく、人間を背中に乗せて自由に動きまわるという情報は、モクテスマ2世にも威圧的な印象を与えたに違いない。

一方、フランシスコ会のモトリニーア神父は、1555年1月2日付けでスペイン国王カルロス5世に宛てて執筆した手紙の中で、征服当初の時期にメキシコの先住民たちがスペイン人のことを「神 tetehuv」、そして馬のことを「カスティーリャの鹿 castillan mazatl」と呼んでいたと記している [Motolinía : 115]。

スペイン人のことを「神」と呼んだのは、単に彼らが見たことのない「白い人間」だったからだけではなく、かつてメキシコ中央高原に栄えたトルテカ文明にまつわる伝説に基づいている。すなわち、羽毛の蛇の神ケツァルコアトルを信奉するトルテカ王トピルツィン・ケツァルコアトルは、内紛の結果追放され、イカダに乗ってメキシコ湾を東方に去った。伝説によると、彼

は白い肌をして黒い髭をたくわえており、いつか再び支配するために帰ってくることを予言して去っていったという。

こうしてアステカの人々は、自らの伝統的な宗教観に基づいてスペイン人を「ケツァルコアトル神」と解釈し、そして「馬」を「鹿」と表現した。つまり、彼らは馬という要素を「神の乗る鹿」と認識したのである。したがって、少なくとも初期の遭遇の時点では、武器としての破壊力のみならず神を乗せる動物であるという認識も手伝って、「馬（鹿）」は彼らにとって大いに畏怖すべき存在として認識されたのではないかと思われる。

征服の時代に新大陸で使用されていた武器を扱ったアルベルト・マリオ・サラスの研究「征服期の武器」によると、アステカ以外の地域でも先住民たちはさまざまな形で始めて見る「馬」を誤解する形で認識し、畏怖の態度を示した。人間と馬とが一体であると考えたり、馬のいななきの声を人間と会話するための言語と誤解した場合もあった。また、ハミが血で滲んでいるのを見て馬が人肉を食べるのだと考えたり、あるいは金属を食すると考えて金や銀を捧げる場合もあった［Salas：130-131］。

このように、「馬」に遭遇した各地の先住民たちはその未知性、それが備える軍事的な威力、そしてしばしばスペイン人を「神」と誤解したこともあって、多くの場合恐怖あるいは畏怖の感情をこれに対して抱いたものと考えられる。

それでは、チリの先住民たちは始めて遭遇したスペイン人や「馬」に対してどのような反応を示したのだろうか。この問題を考える前に、スペイン人の到来より半世紀ほど前の状況を思い起こす必要がある。

マプーチェはスペイン人に対する長期にわたる抵抗で知られているが、その前にもう一つ強大な敵との戦闘を経験していた。アンデス高地のクスコをを中心に南米大陸の西側一帯に一大勢力圏を築いていたあのインカである。

スペイン人がチリにやってくる半世紀前、トゥパック・インカ・ユパンキ皇帝の時代（1463～93年）に、インカは南方のチリに遠征を行っている。その結果インカの支配下に入ったチリ中北部の地域の住民には、インカの親族

が統治者として派遣され、労働奉仕のミタや租税のシステムが課せられ、インカの国家宗教の中心的な要素である太陽信仰が流布されていた。

今日のほぼ首都圏地域にあたるチリ中央部地域でもインカに対して定期的に金の租税を収めるという制度が確立していたことは、ペドロ・デ・バルディビアのチリ征服に参加した軍人マルモレホやロベーラの記録に記されている[Marmolejo：79, Lobera：235]。またもう一人の同時代の軍人記録者であるビバルは、サンティアゴ地域の先住民の間に、インカの宗教体系の根幹をなす要素ともいえる太陽信仰や、『グワカ』と呼ばれる巨石に対する信仰が導入されていたことを記している [Vivar：104]。

このようにチリ中北部の先住民たちは、スペイン人到来の当時、すでに「太陽の御子」であるインカの支配に甘んじ、経済・社会・宗教などさまざまな側面で一定の変容を被っていた。

そして、インカの次に到来したスペイン人征服者の支配もこの地域の先住民たちは比較的容易に受け入れたのである。

1536年に始めてのチリ遠征を行ったディエゴ・デ・アルマグロの軍には、当時ピサロが傀儡インカに擁立していたマンコの弟にあたるパウリュ・インカが随行していた。こうしてアルマグロの一行は、パウリュの権威やクスコから派遣されていたインカの血を引く首長の仲介などを通じて、コピアポ地域やアコンカグア地域の先住民から歓待されている。

期待していた金を見いだすことができず、幻滅してペルーに帰還したアルマグロに代わってチリ征服を行ったのはペドロ・デ・バルディビアであった。バルディビアもクスコを出発し、チリ北部の平定を進めたのち、チリ中央部のマポーチョ盆地に設営する。この地でバルディビアもインカの血を引く首長たちの協力を得ることに成功し、1541年には同地に始めての都市であるサンティアゴ市を建設する。

同市域の先住民首長の一人であったミチマロンゴは、征服者による都市建設を遺憾に思い、近隣地域の先住民戦士の大軍を率いて反乱を起こし、市を襲撃した。ところがミチマロンゴ軍は戦士数の多さもあって一旦は戦闘を有

利に進めながら、突然何かにおびえたように我先にと敗走してしまう。

ビバルは、後にその理由を尋ねられた捕虜の先住民たちが、「白馬」に乗った年老いた「ビラコチャ」が現れ、剣を振りかざして威嚇したので逃走したと証言したことを記している［Vivar：126］。「ビラコチャ」とは、インカにとって「太陽神」と並んで重要な創造神である。この叙述によれば、彼らはスペイン人そのものを創造神ビラコチャと見なしたのではないにせよ、少なくともビラコチャ神が「馬」に乗って現れ、スペイン人を援護したと認識したものと思われる。

つまりチリ中央部地域の場合、インカ系の首長を頂く従順な先住民集団がスペイン人の支配を容易に受容したのみならず、初期の遭遇の段階でスペイン人を攻撃した好戦的な集団でさえもインカが流布していた信仰体系に基づいてスペイン人を「ビラコチャ神」によって支援される存在として認識した。そして、「白い馬」に対してもその「ビラコチャ神」を乗せる動物として一定の畏怖すべき属性を認識したものと考えられる。その意味では、上で述べたアステカの場合と同じ様な認識であったといえるだろう。

それに対し、より南部のイタタ川以南の地域に居住していたマプーチェは、スペイン人や「馬」に対して、極めて異なる反応を示した。この点について考察するためには、やはりその半世紀前に起こったインカの侵攻について考察しなければならない。

チリの中央部を征服したインカ軍はさらに南方まで兵を進め、マウレ川に結集したマプーチェ戦士の猛反撃に会う。インカ皇室の血をひくメスティーソの記録者であるインカ・ガルシラソによれば、この時インカ軍は結集したチリの先住民たちに使者を送り、太陽を神として、そして「太陽の御子」であるインカを支配者として受け入れるようにというメッセージを送ったという［Garcilaso：301］。

チリの先住民戦士たちがインカの要求をはねつけると両軍は戦闘に突入する。6日間にわたる激戦の結果双方に多数の死傷者が出ると、インカ軍は勝利を得ることなく撤退する［Ibid.：302-303］。なおビバルによれば、インカ

軍は今日のサンティアゴ市の南の境をなすアンゴストゥーラ山峡の位置まで撤退し、ここに集落を築いている［Vivar：240］。

つまりマプーチェはスペイン人が到来するほんの2～3世代前に、「北方から」「異文化の強制」や「支配」とを目的として侵入した「異民族」集団と戦ってこれを打破し、自らの独立を守ることに成功していたのである。

インカによる他民族の支配を肯定的に見るガルシラソは、戦闘の前にチリの先住民側に派遣されたインカ側の使者が、彼らの侵攻の目的は土地を奪うためではなく、「人として生活する術を教える」ことにあったと伝えたと表現している［Garcilaso：300］。つまり、「野蛮な」チリの先住民が送っていた「獣的な生活」をやめさせ「人間らしい生活」ができるように「文明化」してやろう、という発想である。

しかし当時のマプーチェにとって、「インカ」とは決して『太陽神』から派遣された文明をもたらす神聖な存在ではなく、むしろ冒頭で述べたように平等主義的な性格の強い当時のマプーチェ社会には存在しなかった異民族による支配のシステム、そして異なる宗教体系の受容を強要しようとする侵略者に他ならなかった。

半世紀後、同じく北方から白い肌をした人々が見たこともない動物に乗って到来する。彼らも、「文明化」あるいは「キリスト教化」を口実に、軍事力にものを言わせてマプーチェを支配しようとしたという意味では何らインカと変わりはなかった。

チリの征服者ペドロ・デ・バルディビアは、チリ南部の征服に着手してから間もない1550年10月15日にスペイン国王カルロス5世に書簡を送り、マプーチェたちがスペイン人のことを「インガス ingas」と呼び、スペイン人の乗る馬を「インガのウエケ hueques ingas」と呼んでいる、と報告している［Valdivia：157］。「ウエケ」とは、広くアンデス地域に生息するラクダ科の動物「リャマ」をさすマプーチェ語である。要するに「インカが乗ったリャマ」という意味である。

「インカである」ということは、彼らにとってスペイン人がインカと同様に

北方から到来し、自分たちに異民族支配を強要する侵略者であるという認識であり、始めて見る「馬」も「略奪者インカが連れてきたリャマ」に過ぎなかった。なぜなら、彼らにとって「太陽神」も「ビラコチャ神」も意味を持たない存在であったからである。

なお通説によれば、この後マプーチェの間では「インカ」という語にマプーチェ語の複数形を作るための前置詞「プ pu」をつけた「プ・インカ pu inka」という形が変形し、「よそ者」をさす「ウィンカ winka」という言葉が生まれたとされている。この「ウィンカ」という表現は、植民地時代には「スペイン人」、そして独立後のチリでは「白人・混血系チリ人」一般を指す言葉として使われてきた。今日マプーチェたちに「ウィンカ」という言葉の含蓄を尋ねると、単なる「よそ者」という意味の他に、「略奪者」、「泥棒」といった強い民族的怨念の含蓄がこもっているという返事がしばしば返ってくる。(8)

こうして、マプーチェはスペイン人を「インカ」と、そして馬を「リャマ」と誤解して認識した。しかし、その誤解は恐怖や畏怖を誘うものではなく、むしろ最初の遭遇の時から彼らを侵略者、そして馬を侵略者の乗り物として敵対的に認識させるという方向で働いたものと考えられる。

こうして、始めて見る馬を「侵略者インカが乗ったリャマ」と認識する形で、マプーチェによる馬の長い同化のプロセスが幕を開けるのである。

第2章：「気力による対抗」から「馬の威力の認識」へ

マプーチェも、初めて見るスペイン人や「馬」というものを誤解する形で認識したという点では、他の地域の先住民たちと共通していたといえる。しかしマプーチェの場合、スペイン人をインカと同一視することによってこの誤解が決して不利な形では働らかなかったという点に特徴があったといえる。

実際、インカとの戦闘を経験していたより北方の地域のマプーチェに関する限り、初期の戦闘の際にスペイン人や馬に対して恐怖心を抱いたような形跡はなく、むしろ最初から果敢に戦闘をしかけていたものと思われるのである。

既に述べたように、チリ征服を試みた最初の人物はディエゴ・デ・アルマグロであった。アルマグロはペルー征服で得た財産や地位に飽き足らず、1536年にクスコを出発してチリへ向かった。多大な犠牲を出してアンデス山脈を越えたのち、アルマグロはサンティアゴ市の北に位置するアコンガクア盆地に設営する。そしてここから部下のゴメス・デ・アルバラードに、騎馬隊を率いて南方探索を行うよう命じるのである。

リマの聖堂の聖歌隊長でアルマグロのチリ遠征に参加したクリストバル・デ・モリーナは、この時アルバラードが率いた部隊は騎馬兵70～80名、歩兵20名という編成であったと記している［Cristóbal de Molina：86］。

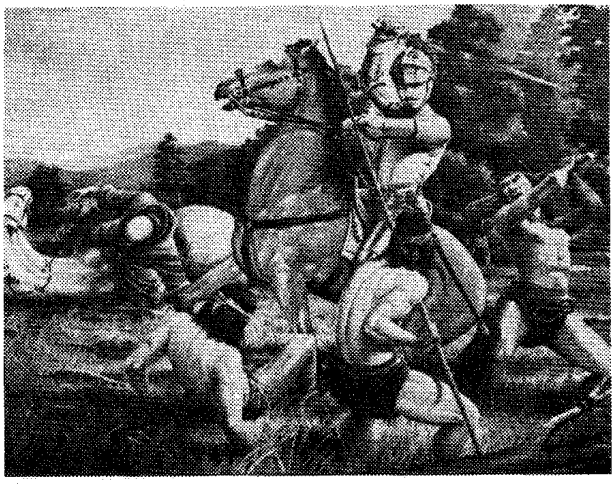
南下したアルバラード隊は、イタタ川とニュブレ川の合流点に近いレイノウエレンの地を通過した時、初めてマプーチェの大軍の攻撃を受ける。残念ながらモリーナの叙述にはこの戦闘に関する具体的な記述は一切含まれていない。

それに対し、アルマグロに代わってチリ征服を実現したペドロ・デ・バルディビアに随行した兵士マリーニョ・デ・ロベーラは、レイノウエレンの戦いの様子を比較的詳しく叙述している。ロベーラは、アルバラード隊の構成を騎馬兵100名とした上で、この時マプーチェ戦士が見せた戦いぶりを次のように表現している［Lobera：243］。

> 「インディオたちはこの上もなく大勢で、勢いがあり体力にも恵まれ、恐れ知らずともいえる勇気と気力を備えていた。だが彼らの戦闘経験といえば無に等しかった。騎馬兵と対戦する術は知らなかったし、平地で戦闘することにも長けていなかった。剣や槍の穂先を避けたり防御したりすることも上手ではなかった。ただ野蛮で無謀な者のごとく前身後退し、まるで自分たちと同じ野蛮な者たちと対戦しているかのように突進してくるのであった。」[Ibid.：244]

この叙述には、馬の威力が遺憾なく発揮されうる平原的な地形の場所で、

ただ数と勇気と勢いにまかせて正面から猛突してくるマプーチェ戦士の姿が描かれている（絵１）。結局、武器と戦闘技術に勝るスペイン人のもとになす術もなく、マプーチェ軍は多大な死傷者を出して敗走する。



絵１．スペイン人騎馬兵に戦いを挑む初期のマプーチェ戦士。
[González y López: 15]

一方、同じくバルディビアのチリ征服に同行したもう一人の兵士の記録者にゴンゴラ・デ・マルモレホがいる。

マルモレホはアルバラードが率いた兵士の数を200名とし、この戦闘についても簡潔な叙述を行っている。彼は、応撃のために集まった近辺の「多数の先住民」をアルバラード隊が難なく打倒し、相手方に多数の犠牲者を出させたと記し、その時の彼らの戦闘の様子を「秩序も隊形もなく、ただ平原地に広がって」攻撃して来る、と表現している［Marmolejo：75］。

マルモレホの叙述の場合、「騎馬兵」に対する戦闘の様子が特筆されているわけではないが、少なくとも彼らの戦闘技術が極めて低く、馬鹿正直に平原で正面攻撃をしかけてきたという点ではロベーラの叙述と共通している。

ただ「馬に対する反応」という点では、これらの記録を見る限り、マプーチェが初めて見る「インカのリャマ」に対して恐怖心を抱いたことを示唆するような表現は一切見られないことを指摘しておこう。

さて、征服の主要な目的の一つであった金を見つけることができず、好戦

的な先住民が居住するチリに幻滅してペルーへ帰還したアルマグロに代わり、チリの征服を実現したのがペドロ・デ・バルディビアであった。

1541年にサンティアゴ市を建設した後、バルディビアはいよいよ南部遠征に出発する。彼がスペイン王室の宮廷における彼の代理人たちに宛てて1550年10月15日付けで執筆した書簡によれば、この時の遠征隊は60名の騎馬兵から構成されていた。そして、ビオビオ川付近に到達した時、8千名の先住民の攻撃を受け2頭の馬が殺害されたことを記している。イタリア、フランドルなどヨーロッパの激戦地において数々の戦闘に参加した経験を持つバルディビアは、この戦闘におけるマプーチェ戦士の屈強さを高く評価し、「ドイツ人に匹敵する戦いぶり」という賞賛の言葉を送っている［Valdivia：93-94］。

一方、軍人の記録者ロベーラは、この戦闘に参加したマプーチェの数を8万名[9]とした上で、この戦闘における彼らの戦闘技術についても、「ただスペイン人を取り囲めば勝てると考え」、「秩序も調和もない形で、ただ突進してきた」と表現し、バルディビアとは対照的に低い評価しか与えていない。ただ、彼らが極めて活発に攻撃をしかけてきたことは認めている。つまりこの叙述でも、彼らが馬に対して「恐れ」を抱いたことを示すような記述は一切見られないのである［Lovera：270］。

同じ戦闘におけるマプーチェの戦闘技術に関する両者の評価の違いは、単に個人的な印象の違いということではないと思われる。

もちろん、バルディビアの場合は書簡の相手が王室内に送り込んだ代理人であるため、王室に対して自分が果たした軍事的貢献をアピールするために、敵の戦闘技術に関してある程度誇張的な表現を用いたという可能性も考えられないわけではない。

ただそれ以上に、両者の叙述の背後にはある重要な客観的条件の相違がある。バルディビアの手紙は戦闘の10年後の1550年に書かれているのに対し、ロベーラがクロニカの執筆を完了したのは1593年である。スペイン人との遭遇から数十年たったこの時点で、騎馬隊の導入を含め、マプーチェの戦闘技術が極めて高いレベルに達していたことは、彼が残したクロニカの叙述その

ものからうかがえる。したがって、1593年当時の反乱マプーチェ戦士の水準を熟知していたロベーラの眼から見れば、征服当初のマプーチェの戦闘技術が低いものに思えて当然であろう。

それに対しバルディビアの眼には、インカを初めとする新大陸の他地域の先住民の一般的な水準と比べると、当時のマプーチェの戦いぶりですらすさまじいものに映ったのであろう。

いずれにせよ、スペイン人たちに遭遇したマプーチェの戦士たちは、初めて目にするスペイン人や馬に対して恐れを抱くということはなく、最初から果敢に戦いを挑んでいたものと思われる。

ただそのマプーチェも、騎馬隊のみならず銃や大砲などの火器、鉄製の穂先を持つ槍や剣などの武器、あるいは戦闘技術一般において圧倒的な優勢を誇るスペイン人の部隊に敗退していたことも事実である。

またこれら以外に征服者側の軍事力を増した要因に、「インディオス・アミーゴス」と呼ばれる先住民補助兵の存在がある。アルマグロもバルディビアも、チリ遠征時にペルーから数千名の先住民を補助兵として随伴しているのである。したがって、あたかも圧倒的多数の先住民が一握りのスペイン人兵に敗退していたような印象を受けるが、実際にはかなりの数の先住民補助兵の援護を受けており、これも征服者側に有利に働いた要因の一つであった。

なおバルディビアはこの戦闘の後、多勢に無勢と見て南部の征服を一旦打ち切りサンティアゴ市に帰還する。この時、ペルーにおいてピサロに対してアルマグロが反乱を起こしたという情報が届くと、バルディビアはピサロ派を支援するためにペルーに赴く。そして数年の戦闘を経てアルマグロ派が打倒されると、彼はチリ南部の征服を実現すべくチリに帰還する。

その後1550年に再びビオビオ川に到達したバルディビア隊は、ビオビオ川とアンダリエン川との合流点の近くで再びマプーチェ軍の襲撃を受ける。

前述のバルディビアの手紙によれば、この戦闘の際マプーチェ戦士たちは矢と槍の嵐を降らせることによって馬の前進を阻止した。そして、3時間にわたる騎馬兵の攻撃でもマプーチェ戦士の隊列を崩すことができないのを見

たバルディビアは、騎馬兵に馬を降りるように命じる。こうして歩兵戦を余儀なくされたスペイン人部隊は、アルカブス（火縄）銃の威力などもあり、結局マプーチェ隊を敗走させるのに成功する。ただこの時の戦いで60頭の馬が負傷したことをバルディビアは記している［Valdivia：106］。

ビバルも、この戦闘の際にマプーチェ戦士たちが堅い槍で幾度も幾度も馬の頭部を殴りつけて後ろ足で立たせ、騎馬に対抗したことを記している［Vivar：245-246］。

一方マルモレホによれば、この戦闘の際にマプーチェ戦士たちが馬の前進を阻んだのは、密に組んだ隊列と彼らがひっきりなしに繰り出してくる「棍棒」の嵐であった［Marmolejo：95］。

なお、ロベーラの叙述でもこの戦闘において馬が威力を発揮できなかったことが指摘されているが、その理由は戦闘が夜間に行われたために馬が闇を恐れて前進を拒み、ひっきりなしに引き返そうとしたからであると記されている［Lobera：302］。

いずれにせよ、10年前にその威力を思い知らされていた騎馬兵に対し、マプーチェはこの戦闘において伝統的な武器を気力をふりしぼって使用することによって、あるいは夜襲という単純な戦略を採用することで、その攻撃力を緩和することに一応は成功したと思われる。

ただ同時代の記録を見るかぎり、この時期にマプーチェ戦士団がある程度善戦するのは後にも先にもこの戦闘一つであり、騎馬兵に対する対策もまだまだ確立していたとはいえなかった。その意味でアンダリエンの戦いはむしろ例外であったといえる。

この戦闘の後、ペンコに要塞を築いていたスペイン人に対してマプーチェ軍が3月12日にしかけた襲撃を見てみよう。ビバルによれば、この戦闘に参加したマプーチェの大軍は3隊に分かれ、そのうち先鋒隊として攻撃をしかけてきたのは、アンダリエン川の戦いでスペイン人と一戦交えた戦士団の残党1万5千名余であった。バルディビアの手で派遣されたアルデレーテ率いる騎馬兵50名は、すでに騎馬隊との対決を経験しているはずのこの部隊に対

して遺憾なく実力を発揮し、これ徹底的に打倒してしまう。その様子をうかがっていた他の2部隊は、頼りにしていた先鋒隊を彼らが「初めて見る馬」がひとたまりもなく打ちのめす様子を見て、我先にと敗走してしまうのである［Vivar：248-250］。(10)

アンダリエンにおける敗戦でマプーチェは馬の威力を決定的に認識し、これが与える実害ゆえに恐れを抱くようになったようである。バルディビアは1551年9月25日にカルロス5世に宛てて執筆した手紙の中で、チリの先住民が馬に「多大な恐怖心」を抱いていることを記している［Valdivia：172］。最初の遭遇の段階では、未知の動物である馬を「インカのリャマ」と誤認することによって、これに果敢に攻撃を加えたマプーチェだが、幾度かの対戦を通じてその威力を実際に経験することにより、客観的な形で畏怖を抱くようになったといえるだろう。

ただしこれまで扱ってきたのは、マプーチェといってもイタタ川以南からビオビオ川周辺までの地域、つまり旧インカ帝国の領域に南接する地域に居住していた人々である。言い換えれば、記憶に新しい時期にインカとの激しい戦闘に直接関わり、異民族との戦闘に慣れていた人々であったといってもいい。

それに対し、同じマプーチェでもより南部に居住する集団の「馬」に対する初期の反応はこれとは異なっていた。最初の遭遇の時から多大な恐怖を示したのである。

バルディビアがコンセプシオンからより南方に位置するカウテン川近辺の先住民の平定に出発したのは、1551年のことであった。ビバルは、この地域の先住民たちがスペイン人との最初の戦闘の際、スペイン人隊が降り立った川中の島までカヌーで渡り攻撃をしかけてはみたものの、向こう岸から一人の兵士が馬を従えて島に泳ぎつくと、その「一頭の馬」の姿を見ただけで恐れをなし、向こう岸に泳いで逃げてしまったことを記している［Vivar:258］。

一方ロベーラは、カウテン川の南を流れるトルテン川周辺の先住民たちも、始めて見るスペイン人や馬の姿を見ただけで恐怖にかられて逃げだし、山岳

地に避難したことを記している［Lobera：313］。またトルテン川のさらに南部に位置するマリキーナ盆地の先住民たちも、始めてみる馬の姿に呆然とし、火器の音に恐れをなして逃亡したと記している［Lobera：317-318］。(11)

つまり同じマプーチェといっても、より南方に居住する集団の戦士たちは未知の存在であるスペイン人や「馬」に対して初めから多大な恐怖心を抱き、戦わずして逃走していたといえる。彼らが異民族であるインカによる征服の圧力やインカ軍との戦闘を経験していなかったこともそうした相違を生んだ要因の一つなのだろう。

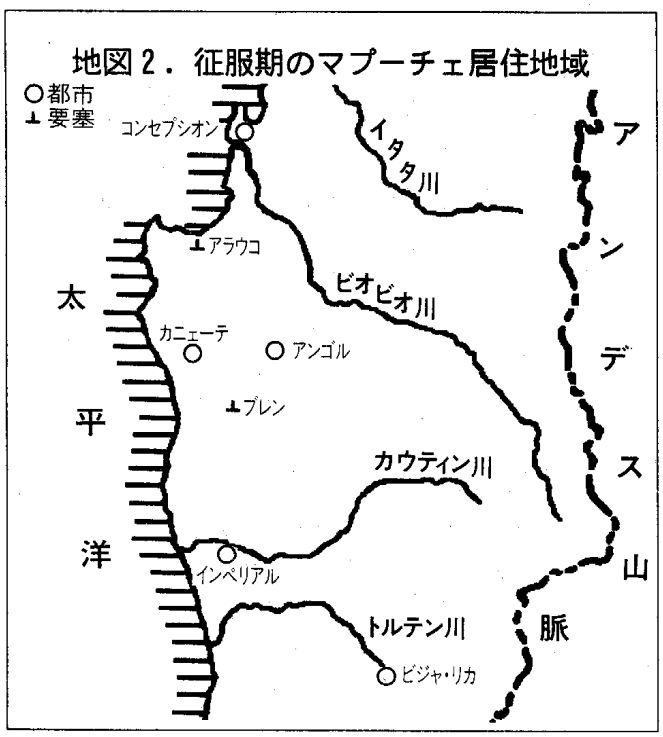
ただ、初期の遭遇の段階で果敢に征服者の軍勢に戦いを挑んでいた北方のマプーチェ戦士たちといえども、ほとんどの戦闘において騎馬兵の威力には対抗できず、火器の威力や先住民補助兵の援護といった要因も相俟って、成す術もなく敗退していた。そして、こうした経験に基づき「馬」が敵の有する恐るべき武器の一つであることを客観的に認識するに至った。これがマプーチェ戦士による「馬」の同化のプロセスの第一歩であったといえる。

第3章：対抗戦略の開発

アンダリエンの戦いの後、スペイン人征服者たちは圧倒的な軍事的優位を生かし、幾多の戦闘でマプーチェ戦士団を破り征服を進める。マプーチェの居住領域内にもコンセプシオン市を始めとする都市が各地に建設されていった。こうして1550年から53年までの3年間の間はスペイン人による支配体制がほぼ安定的に機能し、マプーチェも「エンコミエンダ」の制度を通じて征服の功労者に委託され、金の採掘や建築、農耕などの過酷な強制労働に駆り出されていたのである（地図2）。

ところが、スペイン人が賦課した過酷な労働の重圧に耐えかねたマプーチェたちは、1553年に海岸部のアラウコおよびトゥカペル地区の戦士の主導のもとに蜂起を計画し、征服者バルディビアを打倒することに成功する。こうして、のちに「アラウコ戦争 Guerra de Arauco」の名で知られるようになる長

大な抵抗の過程が始まるのである。



ところで、既に見たように征服当初の時期マプーチェ戦士団がスペイン人と対戦していたのは、全て平地的な地理条件の場所においてであった。つまり、征服者軍の主要な戦闘要素である騎馬隊が最大の威力を発揮できるような地理的条件の場所で、気力と体力だけを頼りに、いわば「馬鹿正直に」正面からスペイン人隊に戦いを挑んでいたのである。また武器の点でも、こん棒、弓矢、槍、石といった伝統的な武器を大量に投入していたにすぎなかった。

しかし、こうした戦闘法に効果がないことに気が付いたプーチェ戦士たちは、1553年の蜂起以来スペイン人の騎馬隊と正面から対戦することを避け、馬の威力を減じるような様々な戦略を考案するようになる。

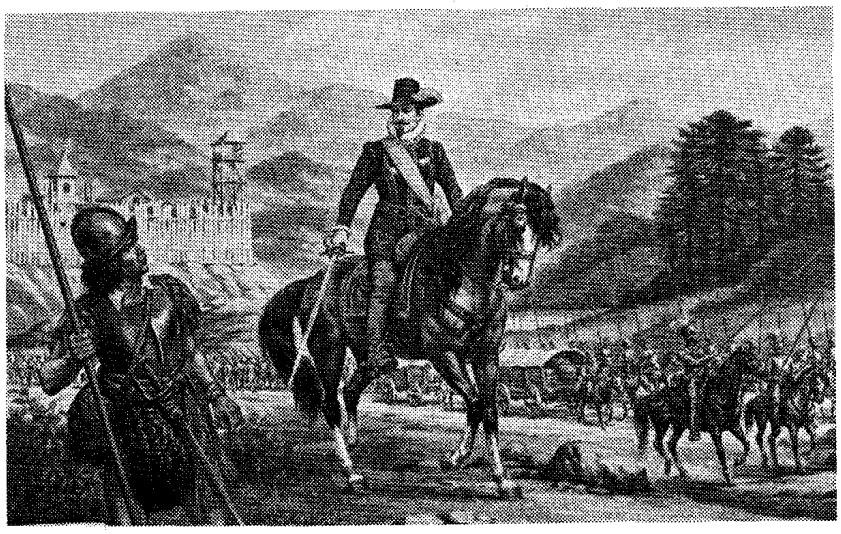
（１）地理的要因の利用

マプーチェ戦士たちが採用した最初の対騎馬兵戦略は、地理的要因の活用であった。馬がその威力を思う存分に発揮できる平地での戦闘をできるだけ避け、堅牢な地理的条件の場所に征服者の軍を誘う。こうして馬の体力を消耗させてその動きを封じ、騎士に馬から降りること余儀なくさせて歩兵戦にもちこむという戦術である。

同時代の記録を見る限り、こうした作戦を実行に移した最初の例は1553年末に起こったトゥカペルの戦いである。この戦闘の時マプーチェ軍は、スペ

イン人が建設していたトゥカペル要塞を攻撃した後、近くにある丘の頂上で待ち伏せた。こうして先住民友軍を従えて討伐にやってきたバルディビア率いる数十名のスペイン人騎馬隊が、丘の中腹まで登ったところで奇襲攻撃をしかけたのである。

マプーチェ戦士たちは上から下へ、そしてスペイン人騎馬兵たちは下から上へと登りながら戦闘することを余儀なくされた。長時間に渡る激戦が続き、照りつける灼熱の太陽の下で、騎士も馬も疲労で動作が鈍り、結局マプーチェ戦士たちの手で総督バルディビア本人を含むスペイン人の騎馬兵全員が殺害されるという劇的な結果に終わる。これはスペイン人と始めて対戦した1536年のレイノウエレンの戦い以降、マプーチェが征服者から勝ち取った初めての、そして重要な勝利であった。



絵2．征服者バルディビアとヤナコーナのラウタロ。
[González y López：16]

この勝利を決定づけた重要な要因の一つは、丘陵地という地理条件や日中の陽射しなどの気候条件など、馬の威力を削ぐような環境要因を考慮に入れた戦闘方針をマプーチェ軍が採用したことにあった。

ところで、この戦闘での勝利に大きく貢献した人物に「ヤナコーナ」のラウタロがいた。「ヤナコーナ yanacona」とは、出身地区の社会組織から切り離され、スペイン人征服者など個人のもとで私的な奉仕を行う先住民を指すケチュア語起源の言葉である。

あるマプーチェ地区のカシーケ（首長）の息子であったラウタロは、征服者バルディビアの厚い信頼を受け、馬丁として仕えていた（絵2）。そのラウ

タロがトゥカペルの戦いに際して取った行動と彼が果たした役割に関しては、大きく分けて二つの異なる説が同時代の記録に観察される。

その一つは、バルディビア配下の兵士であったゴンゴラ・マルモレホの記録に記されているものである。マルモレホによれば、ラウタロはトゥカペルの戦いの前にバルディビアのもとを抜け出し、戦闘方針を討議する反乱マプーチェの軍事指導者たちの前に姿を現す。そして、スペイン人も馬も不死身ではなく、暑い時に長時間戦えば疲労して自由がきかなくなること、全軍を複数の小隊に分けて丘の上に待機させ、スペイン人が到来したところで上方から一隊ずつ交替で攻撃をしかけるのがよいこと等々の助言を行ったというのである [Marmolejo : 112-116]。

マルモレホは戦闘の後に執行されたバルディビアの処刑に関する情報を、戦闘に参加したサンティアゴ地区のある先住民カシーケから直接得たと記している [Ibid. :116]。ただ戦闘前のラウタロの行動や戦闘そのもののについてもこの証言者の情報に依拠したのかどうかははっきりしない。

そしてラウタロの行動に関するもう一つの説は、やはりバルディビアと同時代の兵士ビバルが残した記録に見られるものである。ビバルの叙述によれば、ラウタロがマプーチェ側に鞍替えするのは戦闘の最中ということになっている。丘の中腹に到達したスペイン人たちはマプーチェ軍の猛攻を受け、夏の太陽の暑さの中で長時間戦ったのち、兵士も馬も疲労の極に達していた。しかしながら、バルディビア総督の叱咤の言葉に気力を取り戻して決然と戦うスペイン人兵士たちを前に、反乱マプーチェ勢の士気は低下し劣勢になってしまう。

こうした状況を目にして民族心に駆られたラウタロは敵側に移り、意気消沈した戦士たちにスペイン人騎馬兵たちがすでに疲れ果てていること、そして暑さと疲労で馬も自由に動けなくなっていることを告げる。そして自ら槍を手にスペイン人隊に挑んで行くと、その姿に鼓舞されたマプーチェの戦士たちもこれに続き、遂にはバルディビア隊を壊滅させることに成功する、というのである [Vivar : 289-290]。

なおビバルは、実際に戦闘に参加し、からくも逃げ帰ったヤナコーナ等の従軍先住民たちからこれらの情報を得たと記している［Ibid.：290］。

エルシージャが残した不朽の叙事詩「ラ・アラウカーナ」(12)や、同時代のもう一人の兵士マリーニョ・デ・ロベーラが書き残した記録も、基本的に後者の説に立ってこの戦闘を記述している[Ercilla:73-85.Lobera:334-335]。

このように、ラウタロの逃走のタイミングについては違いが見られるが、元ヤナコーナで馬丁としてバルディビアその人に仕えていた経験と知識を生かし、マプーチェ戦士にとって脅威の対象であった馬や騎馬兵の性質、あるいは戦闘中の状態について客観的な情報をマプーチェ軍に伝えたことが彼らの勝利の一因となったという点では共通しているといえる。

そしてラウタロはこの後も、馬を含むスペイン人側の武器や戦術に対抗するための様々な知識を反乱マプーチェたちに伝授していくことになる。(13)

トゥカペルの勝利を皮切りに、反乱マプーチェの間で威信を高めたラウタロや総指揮官に選出されたカウポリカンの指揮のもと、マプーチェ戦士たちは各地で征服者に対する戦闘を展開し、多くの勝利を手にする。この時期の反乱を便宜的に「第1次大反乱」と呼んでおこう。

この第1次大反乱中に各地で展開された一連の戦闘において、マプーチェ側の戦術の特徴として観察されるのは、彼らが丘陵地帯や沼地、狭い渓谷地、断崖絶壁の迫る川や海沿いの地、あるいは湖など地理条件を考慮する形で戦場を選択していることである。

処刑されたバルディビアの後を継いで征服者たちの軍事指導者に選ばれたフランシスコ・デ・ビジャグランは、160名のスペイン人兵士を率いて反乱マプーチェ討伐に出発する。そして、ビオビオ川の南数レグアの距離に位置し、西側にすぐ海岸の絶壁が迫るアンダリカン（あるいはチビリンゴ）の丘まで進行したところで、待ち伏せしていたマプーチェ戦士軍の奇襲攻撃を受ける。

この戦闘については、同時代の3名の兵士の記録者であるビバル、マルモレホ、ロベーラの全員が言及している。(14)

そしてこの3名の叙述に共通しているのは、このときマプーチェ軍が空間

が狭く、馬の自由がきかない海岸近くの丘陵地を攻撃場所に選んでいることである。側面を山岳に囲まれているため、マプーチェ戦士たちは馬の攻撃を受けてもやすやすと山林地帯に逃げ込んで休息できるが、スペイン人騎馬兵は引き返す他はないというわけである。

ビバルは、マプーチェ戦士たちが「馬を恐れるがゆえに、そしてスペイン人に対して有利に戦闘を展開するために」、普段からこうした地形の場所を戦闘場所に選んでいると指摘している [Vivar : 297]。

またマルモレホは、この戦闘の最中に一旦山林地帯に逃げ込んで体勢を立て直してから、逆に槍をかざし「馬上槍試合」のような格好で馬の背後から攻撃してくるマプーチェ戦士の姿を記述している [Marmolejo : 125]。

この戦闘の結果、マプーチェ戦士側は敵側友軍先住民の戦死者の他、ビバルによればトゥカペルの戦いの時を上回る90名の、そしてマルモレホによれば86名のスペイン人騎馬兵を殺害することに成功している [Vivar:299. Marmolejo : 128]。

さらに1558年には、アラウカニーアの内地に位置するプレンの、二つの丘に挟まれた狭い峠道のところに近隣地区のマプーチェ戦士たちが待ち伏せし、インペリアル市から海岸部に建設されたばかりのカニェーテ市へ向けて家畜を護送中のスペイン人隊に奇襲攻撃をしかけている。

この戦闘の様子を詳しく記録したマルモレホによれば、馬の自由が全くきかない場所で苦戦を強いられたスペイン人隊は馬を降りて歩兵として戦わざるを得なくなった。結局丘の高みに登った数名のスペイン人兵士の活躍によって形勢が逆転し、軍配は征服者軍側に上がったものの、近隣の山岳地に逃れた敵の戦士を追うことはかなわず、決定的な打撃を与えるには至らなかった [Marmolejo : 162-164]。

一方、この戦闘についてビバルやロベーラはより簡潔な叙述しか残していないが、やはり地形的な理由で騎馬隊の威力が発揮できなかったという点では同様の見解を示している [Vivar : 338. Lobera : 385-386]。

以上見たように、第１次大反乱期のマプーチェ戦士たちは、征服者たちが

到来した当時のように、みすみす騎馬の威力を発揮させる平地部で戦いを挑むことを避け、丘陵地、岸壁地、狭い峠道、湿地など、馬の自由が利かない地理的条件の場所を選んで待ち伏せ攻撃を行うようになった。こうした地理的戦略が、敵方の強力な武器として恐れる「馬」の威力に対抗するために、彼らが採用した最初の戦略であったといえる。

さらに、こうした自然の地理条件の活用に加え、より人口的な性格の地理戦略も用いるようになる。

ロベーラによれば、前述した1554年のアンダリカンの戦いの時、すでにこの手の戦略は採用されていた。この戦闘の最中にカウポリカンが指示を出して戦士たちに大量の木材を切らせ、敵の逃走経路に敷き詰めさせるという戦法を採用したというのである。こうして、極度の疲労から敗戦を予期したスペイン人騎馬隊の一部が逃走しようとした際、木材に馬が足を取られ、逃げ場を失った多くの兵士たちは道から外れ、海側の断崖から転落死したとロベーラは記している［Lobera：344-345］。

その後もマプーチェ軍はチリ南部で数々の勝利を収め、すでに消失していたトゥカペル要塞のほか、プレン要塞、アラウコ要塞、そして南部におけるスペイン人の拠点であったコンセプシオン市をも放棄させることに成功する。勢いに乗ったマプーチェ軍はラウタロの指揮のもと、1556年、ついにチリ中央部地方の拠点サンティア市の攻略を目指して北上するのである。

マルモレホによれば、300名のアラウコ地区の戦士を率いてマウレ川に到達したラウタロは近隣のカシーケ衆を集め蜂起への加担を呼びかける。そして近くの平地に、馬が自軍の陣地に到達することを妨害するために塹壕を掘らせ要塞を築く。その上でラウタロは、スペイン人の戦力の要が「馬」にあること、また彼らが重い武器に身を包んでいるので歩兵の形態であれば勝てること、そのために要塞の中でスペイン人の攻撃を待ち受け、馬から降りて戦わざるをえないように仕向けること等の指示を与えたという［Marmolejo：143］。つまり騎馬隊の威力を封じるために塹壕付きの要塞で自己防衛しつつ相手の攻撃を誘い、歩兵戦に持ち込むという戦略である［Marmolejo:143］。

一方ロベーラによれば、その後ラウタロ軍はさらに北上してマタキート川付近に駐屯した際にも要塞を築いている。この時ラウタロは近くの川や運河を堰止めてあたり一面を水浸しにするよう命じたという。こうして湿地状になった場所に馬を誘い、動きを封じ込めることを意図したのである [Lobera: 356]。

これらラウタロの実行した塹壕作戦を発展的に応用したのが、アラウカニーアの南部地域にあたるカニェーテからインペリアルへ至る道の周辺に居住していた戦士たちであった。マルモレホによれば、1558年には同地域の先住民たちが地面に塹壕を掘るだけではなく、掘った塹壕の底の部分に先端を鋭くとがらせた太い槍を埋め、外から見えないないように蓋をしてしておくという仕掛けを編み出した。こうして知らずに通りかかった騎馬兵たちは穴に落ち、仕掛け槍が腸に突き刺さって多くの馬が死亡したという [Marmolejo : 169-170]

またロベーラも、その4年後の1562年に、マレグアーノに向けて派遣されたマルドナード以下50名の騎馬隊も、これを迎え撃ったマプーチェ軍が高い森林地の丘の上に築いた要塞の周囲に巡らしていた隠し堀に馬ごと落ちて苦戦を強いられたと記録している [Lobera : 424]。

以上見たようにマプーチェ戦士たちは、敵スペイン人のもたらした強力な武器である馬に対抗するために、自然的な地理条件を利用したり、それに人工的な加工を加えることによって戦闘を有利に展開するという戦略を習得したといえる。

そしてこうした地理戦略の習得の過程でも、元ヤナコーナのラウタロが果たした役割は小さくなかったと思われる。

既に述べたように、「ヤナコーナ」は征服の功労者であるスペイン人など、植民地社会の上流層の個人に、私的奉仕人として使えていた先住民出身者のことである。ということは、自分の意志如何にかかわらず、征服者・植民者側の文化体系の中で生きることを余儀なくされていたということである。もちろんそのままヨーロッパ的な文化を身につけ、出身地や出身民族の文化を

忘却し、植民地支配システムの中に統合されていくヤナコーナも多かっただろう。

しかし植民地時代初期の反乱マプーチェに関する限り、ラウタロのように一旦征服者の社会に統合され、武器や戦術に関する知識や軍事情報を会得した後、意識的に反乱マプーチェ側に投降し、彼らの戦力向上に積極的に協力する先住民の例は後を絶たなかった。

そしてより後の時期になると、植民地社会から脱走した白人や混血住民が、マプーチェによる「馬」の同化の過程で、極めて重要な媒体としての役割を果たしていくことになる。この点については後述することにしよう。

以上、反乱期にマプーチェ戦士たちが採用した地理的要素を活用した騎馬対策について見てきたが、実はこの程度の戦術ならば、何もマプーチェだけが例外的に利用していたわけではない。

メキシコでは、1520年にキューバから派遣されたコルテス討伐隊を迎え討った後、アステカ征服の完了を目指して帰還するコルテス隊を、アステカ軍は湖中の都テノチティトランに誘い込み、土地の利を生かして馬の威力を削ぐことに成功して大勝利を収めているし、騎馬兵を罠にかけるための塹壕戦術も実行している。一方ペルーでは、ピサロに対する反乱に立ち上がった傀儡インカ皇帝マンコ・カパックが1536年にはクスコを制圧し、リマから派遣された征服者の討伐隊をトゥカペルの戦いと全く同じ方法、すなわち馬の攻撃が困難な丘の上で待ち伏せし、敵方が斜面を登り始めたのを見計らって上から攻撃するという方法で壊滅させるのに成功している。

またチリの先住民に限っても、例えばビバルの記録には、サンティアゴ市近辺で1541年に反乱を起こしたミチマロンゴ率いる軍勢を始め、各地の先住民が騎馬兵の威力を削減する効果を持つ塹壕付きの要塞を建設したことが記されている［Vivar：106-107, 111-112］。

マリオ・サラスは、前述の征服期の武器に関する研究の中で、新大陸の先住民が一般的に平地を避け、堅牢な地理を利用して騎馬兵に対抗していたと述べ、また塹壕戦略も新大陸の全域で記録されており、事例を引用する必要

もない程であると指摘している [Salas : 132-133]。

とすれば、この時期にマプーチェ軍が採用した地理的条件の利用という騎馬対策は、軍事力に勝る征服者の軍隊に対抗する必要にかられた新大陸の先住民の間で広く観察された、ごくあたりまえの戦術に過ぎなかったことになる。

しかし、マプーチェによる軍事的目的での馬の同化はこのレベルに留まることはなく、時間の経過とともに例外的な進展を示すことになる。

（2）対騎馬用武器の開発

a．様々な武器の開発とその実験的使用

地理的要因の利用と同時に、騎馬兵の威力に対抗しうる武器の開発という点でもマプーチェ戦士たちは試行錯誤を重ねて行った。

征服当初の時期に騎馬対策の武器として使われていたのは、矢、槍、こん棒、投石器といった伝統的な武器であった。

ロベーラによれば、1536年にアルマグロが南方に派遣したアルバラード隊、すなわち始めて見るスペイン人と対戦したマプーチェ戦士団は、「弓矢隊」と「槍隊」を中心に構成されていた [Lobera : 244]。

また、ペドロ・デ・バルディビアも南部征服の初期、1550年10月15日付けで執筆した手紙の中で、アンダリエン川の付近での戦闘の様子に触れ、待ち受けた先住民の軍隊が、「矢と槍」を浴びせかけることによって馬の前身を阻んだことを記している [Valdivia : 106]。ビバルもこの点について同様の叙述を残している [Vivar : 245-246]。

それに対しマルモレホは、この戦闘で馬の前進を食い止めたのは、緊密に隊列を組んだ戦士が繰り出してくる「こん棒 porras」の打撃であったとし、また「矢」を雨と降らせることによってスペイン人側全員が負傷し、窮地に追い込まれたと述べている [Marmolejo : 95]。

一方ロベーラはこの戦闘でマプーチェ戦士たちが用いた武器として、「銅の

先端部」を取り付けた「(スペイン人の) 槍よりも長い槍」と「中位の長さの槍」という二種類の槍、「こん棒」、そして「投石器」の4つを挙げている[Lobera：301]。(15)

このように、征服初期のマプーチェ戦士はスペイン人騎馬兵に対し、矢、槍、こん棒、投石器など、さまざまな種類の伝統的な武器をそのまま適用し頑強に立ち向かうことによって、時には一定の効果を上げていたといえる。

だが彼らは次第にこうした武器に飽き足らなくなり、馬や騎士に対してより有効な武器を新たに模索・開発し、それら新種の武器に特化した戦士団を編成するようになっていった。

前述した1554年のアンダリカンの丘の戦いで、マプーチェ隊がビジャグラン隊を打破したことは既に見たが、勝因は地理的条件の利用にあるだけではなかった。なぜなら、この時すでにマプーチェ軍は征服軍の騎馬兵に対抗するためにある武器を考案し、それを計画的に使用していたからである。

マルモレホによれば、それは槍の先端に植物の蔓を輪状に開いた形で取りつけた武器であった。この先端部分を敵騎馬兵の首に引っかけ、力一杯引いて馬から引きずり降ろす。これが地面に落ちると、別の戦士たちがすかさず槍やこん棒で殴りつけ、これを殺害するのである。ビジャグラン自身もこの戦法で馬から引きずり降ろされ、あやうく一命を落とすところであったことをマルモレホは記している [Marmolejo：125]。

ビバルやロベーラはマルモレホほど詳しい叙述は残していないものの、この武器の使用と騎馬兵に対する効果については同様の見解を示している[Vivar：264,298. Lobera：345]。

またマルモレホによれば、1556年に再建されたコンセプシオン市に対する襲撃の際に、マプーチェ戦士たちは大量の「投げこん棒」を用意し、突進してくる馬の頭をめがけて投げつけてその前進を阻むという効果を挙げたことを記している [Marmolejo：139]。

ロベーラも、別の戦闘に関する叙述の中で同じ武器の使用に言及している。1557年、アラウコ地域に位置するミジャラプエの地に侵攻したメンドーサ総

督隊に対し、カウポリカンが指揮するマプーチェの軍隊が戦闘を挑んだ。この時、敵の騎馬隊に対して攻撃を加えた戦士の一隊は、槍を構えた戦士が密に隊列を組むことによって敵の攻撃を防ぎつつ、大量の「投げこん棒」を敵の馬に投げつけてこれを後退させ、苦戦に追い込んだというのである[Lobera: 377]。

一方ビバルは、クロニカを執筆し終えた1558年の段階におけるマプーチェ戦士団の戦隊構成について詳しく説明している。その説明の中では、様々な攻撃用・防御用の武器で身を固めた戦士団に交じり、竿の先端にリンゴ大の重石を取り付けた武器に特化した戦士団に言及している。そして、彼らはこの武器を高く掲げた位置から振り下ろすことによってスペイン人を殺害するのみならず、「馬を後ずさりさせることもできる」とビバルは記している[Vivar：264]。

マルモレホもこれに類似した武器に言及し、1565年のコンセプシオン市襲撃の際に、敵の戦士たちが弾丸や鎌の形をした突起を先端につけたこん棒を使い「勇敢に馬の動きを崩していた」と記している[Marmolejo：221]。

このように反乱初期の時期、各地のマプーチェ戦士たちは敵騎馬兵に対抗するために多様な攻撃用武器を考案し、実戦に使用してはその効果を試していたといえる。だが、こうした試行錯誤はしばらくして終了し、1560年代の後半頃から騎馬兵に対して用いるべき主要な武器がほぼ確定されてくる。それは結局のところ、征服の時期から他の伝統的な武器とともに使用されていた「槍」であった。

マルモレホは既に、1562年のアンゴルの戦いに関する叙述の中で、二人のマプーチェ戦士が、槍を手にスペイン人騎馬兵に正面から一騎打ちを挑み、これを窮地に追い込む様子を記述している。そのうち一人はベラスコ隊長の乗った馬の胸部を真正面から槍の一撃で貫き、乗っていた隊長は危うく命を落とすところであったという。そしてもう一人のマプーチェ戦士も、駿馬に乗ってさっそうと戦うスペイン人兵士フアン・ベルナル・デ・メルカードを待ち受けて槍一本で立ち向かい、手元の狂いで馬には当たらなかったものの、

その槍先はフアンの太股を貫通している［Marmolejo：195］。これらのエピソードから、スペイン人騎馬兵を恐れることなく、槍一本を手に平然と一騎打ちを挑むマプーチェ戦士の姿が浮かび上がってくる。

また1568年に、敵に包囲されているアラウコ要塞を救援するためカニェーテ市から出動したマルティン・ルイス部隊を途中の渓谷地で待ち伏せしていたのは、やはり槍で武装する近隣のマプーチェ戦士たちであった。

マルモレホは、この時攻撃をしかけた先住民の戦士たちが、幾多の戦闘の経験から重武装した植民地軍兵士に対して効果の少ない矢を放棄し、「全員が長い槍で武装して馬に対抗しつつ、騎士を突き刺していた」と記している［Marmolejo：282-283］。

さらに翌1569年2月のある日、海岸部に建設されていたカニェーテ市から食糧収集のために出発したスペイン人部隊は、近くのパイジャタロ盆地で待ち伏せしていたマプーチェ戦士隊の奇襲攻撃を受け、あっけなく敗北を喫する。

マルモレホは、この戦闘に加わった敵戦士たちが「長い槍」で武装し、決然と攻撃をしかけてくる様子を叙述している［Marmolejo:284］。一方ロベーラもこの奇襲攻撃に言及し、より具体的に、この時攻撃に加わった戦士の中には伝統的な槍や弓矢の部隊の他、「剣の半分、短剣、ナイフといった鉄の尖頭を付けた槍」で武装した一隊がいたことを指摘している［Lobera：462］。

両者の記述に細かい相違点はみいだされるものの、この戦闘におけるマプーチェ戦士の主要な武器が槍であったという点では一致している。

そしてついに、槍で武装したマプーチェ軍がスペイン人の騎馬隊から決定的な勝利を収める時が訪れる。それは1570年のプレン平原の戦いである。

マルモレホの記録によれば、この時参加した先住民戦士の大半が槍で武装して決然と戦いに挑み、大半が騎馬兵であるベラスコ将軍の部隊を完敗させ、これを敗走させるのに成功している。なおこの戦闘について叙述する際マルモレホは、敵戦士の用いる槍が「騎馬兵や防具を付けていない馬と戦うのに極めて有利」な武器であることも指摘している［Marmolejo：301-302］。

一方ロベーラもこの戦いに言及している。隊列を密に組み、槍を構えて全

員が一歩たりとも持ち場を離れようとしないマプーチェ戦士隊の頑強な戦いぶりの前に、突撃したガスパール・デ・ラ・バーラ隊も、救援に駆けつけたベラスコ将軍隊（いずれも騎馬隊）も全く歯が立たない。そして、鉄砲や大砲の攻撃にも怖じ気ず、整然と本営まで前身してくる敵軍の姿を前に意気消沈したスペイン人兵たちは、我先に退却してしまったというのである[Lobera: 467]。

プレンの戦いにおけるマプーチェ軍の勝利の軍事上の意味は大きい。

ロベーラは、当時彼らが平原部で正面から戦闘を挑んでくるということは考えられず、果敢に攻撃してくるマプーチェ戦士の姿にスペイン人兵たちが当惑したことを記している [Lobera : 467]。

またマルモレホは、この戦闘での敗北が「インディアスにおいてかつて見たことも聞いたこともない」事態であり、「これによってスペイン人の軍隊がインディオの間で保持していた名声が失われた」一方で、反乱マプーチェ戦士側の「士気がこのうえなく大きなものとなった」ことを嘆いている。そしてこうした敵側の心理変化に関し「なぜならこの戦闘以前には、平地部においてキリスト教徒軍が進行する場所の近くにインディオたちが敢えて姿を見せることは決してなかったから」とその理由を説明している[Marmolejo:302]。

マルモレホは1575年にクロニカの執筆を終えており、マプーチェ騎馬隊の出現には触れていない。しかしそれでも、征服初期の時代からマプーチェの平定に関わってきた軍人として、マプーチェ戦士たちの戦闘能力の向上がこのように悲惨な結果を植民地軍にもたらしたのが大きな衝撃だったと見える。

だが、この戦闘における植民地軍の完敗の事実は、マルモレホのみならず植民地当局者たちをも震撼させた。

当時、チリのアウディエンシアの長官で総督も兼ねていたブラーボ・デ・サラビア博士は、翌1571年10月15日にスペイン国王に宛てて執筆した手紙の中で、次のような感想を吐露している。

「（この敗戦は）当地で起こった出来事の中でもこの上ない不幸の一

つであり、また（我が方の）名声がこれほど地に墜ちたこともありません。スペイン人が今日まで決して敗れたことのなかった平地部で攻撃を受けながら敗退してしまったのですから。」[CDIHCh,I:414]。

また、チリの総督であるサラビアの上官にあたるペルー副王トレドも、国王宛てに1572年３月１日付けで執筆した報告書の中で、次のようにこの事件に言及している。

「・・・当地で、我々がこの異教徒たちゆえに抱えている状況は悲痛に耐えません。今やあの者たちの士気が極めて高まったのに対し、我々スペイン人の方は士気を消失してしまったのです。なぜならチリ地方において、徒歩のインディオが騎馬兵のスペイン人に１対１で戦いを挑みながら、平地部で当方の騎馬隊もアルカブス隊も敗走させてしまったのですから…」[CDIHCh, I : 458]。

「１対１」というのは明らかに誇張だが、副王の悲痛な感情をよく表現している。

槍のみを手にしたマプーチェ戦士がわざわざ平野部で正面からスペイン人の騎馬隊に挑み、しかもこれを撃退した。この事実は、当時の植民地当局者たちに大きな衝撃をもたらしたようだ。

「平地部で戦闘することを避ける」、これが敵騎馬隊の威力を減じるためにラウタロなどの忠告でマプーチェ戦士たちが最も最初に学んだ鉄則であったはずである。しかしその鉄則をあえて破り、意図的に平地部でスペイン人の騎馬隊に挑んでこれを完全に敗走させた。この事実は、マプーチェ戦士たちが、敵の騎馬隊に対する最も有効な武器として槍を選びとり、その品質や使用法を向上させることによって馬や騎馬兵に十分対抗できるだけの戦力を蓄えていたことを示唆している。

チリの征服者であるバルディビアの時期にチリに到来し、以来30年近く反

乱マプーチェたちとの戦闘に従事してきた軍人ゴンサロ・エルナンデス・デ・ベルメホは、プレンにおける敗戦の数年後の1577年1月2日に国王に宛てて書いた手紙の中で、征服の時期以来マプーチェが達成した軍事力の向上に言及し、彼らの「槍」の技術を次のように特筆している。

> 「こうして、我々が始めてこの地に足を踏み入れた時には、1万5千名のインディオが我が軍のわずか15名から20名の騎馬兵の姿を見ただけで逃げ出していたというのに、今や彼らは槍で当方の槍に対して互角に挑戦するようになってしまったのです。こうして、あの者たちの人数が多くてスペイン人の数が少なかった頃と比べて、その数は100分の1にも満たないのに、今の方が優勢なのです…」[CDIHCH, II : 314]

前述したように、征服の最も初期の段階からスペイン人隊には多数の友軍先住民が随伴していたのだから、ゴンサロの数字上の比較をそのまま鵜呑みにするわけにはいかない。だが、1570年の段階でもチリ中北部地域の先住民を中心とする多数のアミーゴス兵が植民地軍には同伴していたのだから、やはり反乱マプーチェ側の戦力がかなり向上していたことは間違いがないだろう。

そしてすでにこの段階で、反乱マプーチェの主要な武器が「槍」に確定されていることを前提としてゴンサロが語っていることに注目しておこう。

b．征服期のマプーチェ槍

前節で見たように、マプーチェの戦士たちは初期の頃、始めて見る馬に対抗するためにさまざまな「珍武器」を開発しては実験的に使用するという試行錯誤の過程を経た。そしてその結果、騎馬兵に対する最も有効な攻撃用の武器が結局槍であることを学び、この武器に特化した。

だが一口で「槍」といっても、スペイン人の到来以前から彼らが使用していた伝統的な槍をそのままの形で使っていたのではなく、これに改良を加えてより強力な槍を開発していったのである。

最初に、征服当初の時期にマプーチェが使っていた槍の特徴を、その長さと尖頭部に注目して見てみよう。

同時代のクロニスタのうち、槍の長さについて具体的な叙述を残しているのはロベーラとビバルだけである。

ロベーラは、1550年のアンダリエンの戦いでマプーチェが用いていた槍には「(スペイン人の) 槍 (pica) より長い」タイプのものと「中位の長さ」のタイプのものの2種類があったことを記している [Lobera:301]。また、1557年のビオビオ川畔での戦闘で敗れた敵戦士が戦場に残していった槍が、30～25掌尺(約5～6メートル)」もの長さのものであったことを記している [Lobera：375]。

一方ビバルも、彼がクロニカを完成させた1558年の段階でマプーチェ戦士たちが用いていた槍が、堅い木製の竿を備えた25掌尺（約5メートル強）を越す長さのものであったと記録している [Vivar：264]。

こうしてみるとマプーチェたちは征服初期の段階から、スペイン人兵士の用いる槍を上回る長さの槍を武器の一つとして用いていたことがわかる。後述するように、歩兵のマプーチェ戦士たちの使用していた長槍は、後に騎馬技術を習得したマプーチェ戦士たちによっても使用されることになる。

次に槍の先端にはどのような処理が施されていたのだろうか。

この点について同時代のクロニスタの中で具体的な情報を残しているのは、やはりロベーラとビバルである。

まずロベーラの記録によれば、既に1550年にアンダリエン川の畔での戦闘、そしてコンセプシオン要塞近辺での戦闘の二回にわたり、マプーチェ戦士は「銅製」の先端を付けた槍を使用している [Lobera：301,307]。

一方、1558年の時点に用いられていた武器に関するビバルの叙述によると、前述の長槍の先端には1･5～2掌尺の長さ（約30～40センチメートル）の「銅

製」の尖頭が筋を用いて固定してあると記されている[Vivar:264]。ただし、この時期に対騎馬兵用の主要な武器として認識されていたのは槍ではなく、前述したように、竿の先に重石を付けた別のタイプの武器である。

以上から、同時代の情報によれば、征服当初の時期にマプーチェが使っていた槍には少なくとも銅製の先端部を取り付けたタイプのものがあったことがわかる。

ただ、これとは先端部の形態が異なるタイプの槍が使われていたことを示唆する情報もある。

17世紀の初頭、マプーチェ反乱鎮圧の最前線で活動していた軍人ゴンサレス・デ・ナヘラは、征服期のマプーチェの槍が木製の竿の先端を火で焦がして堅くしただけのものに過ぎなかったと記している [González de Nájera : 169]。

またゴンサレス・デ・ナヘラが活動した時期に総督を務め、卓越した戦略で反乱の鎮静に大きく貢献したアロンソ・デ・リベーラも、ソトマヨール総督期（1583～1592年）に敵が使用していた武器に言及し、当時マプーチェ戦士たちが使っていた槍は「銅製」の先端を付けたものと葦の先端をただ「焦がした」だけのものが大半であり、鉄製の尖頭をつけた槍（後述）はまだ少なかったことを記している [CDIHCH, VII : 570]。

ゴンサレス・デ・ナヘラは征服当初の時期ではなく、その数十年後のマプーチェが既に飛躍的な軍事進歩を遂げた後の時代に軍務にあたった人物である。したがって、ロベーラやビバルの記録のような同時代的な価値には欠けるといえる。しかし彼の記録の随所に、征服当初の時期からチリで生活してきた古参の兵士たちと戦略上の対話を行った形跡が見られる。従って、征服当初の時期に関する彼の情報が、あながち根拠に欠けるわけでもないといえるだろう。(16)

一方リベーラの情報は、1580年代以降の時期に関するものであるため、征服当初のマプーチェの槍に関する証言とはいえない。

ただ技術的には、銅の先端部を付けるよりも竿の先端を炎で焦がして硬く

することの方がはるかに単純である。したがって、征服当初の時期にマプーチェが使っていた槍の中に、ロベーラやビバルが証言している銅製の先端部を付けたものの他に、より単純な、鋭く尖らせた木製の先端部を焦がせて硬くしただけのタイプのものも使用されていたと考えてもあながち誤りではなかろう。

これらの情報を整理すると、征服期当初のマプーチェが用いていた槍の主要なタイプはスペイン人兵士が使用していた槍の長さを越えるもので、銅製の先端を付けたタイプのものと先端を焦がして堅くしただけのタイプのものの2種類があったものと推測される。

ただこの2つのタイプのうち、より大きな威力を持つ銅製の尖頭を付けた槍を使ったとしても、鉄製の鎧に身を固めて鉄刃の剣を構えるスペイン人歩兵や、同じく鉄製の尖頭を取り付けた槍を構えて突進する征服者の騎馬兵に対抗するには限界があったに違いない。

c．鉄製尖頭槍の開発

しかし時間の経過とともに、マプーチェの間でもスペイン人兵士が使用していた槍と同様な鉄製の尖頭部を付けた長槍の使用が普及し、植民地軍の騎馬兵に対抗するための主要な武器としての地位を確立していく。

周知の通り、スペイン人が到来した当時、新大陸先住民の間では「鉄」という要素は知られていなかった。テスココ湖に浮かぶ島に壮麗な都テノチティトランを築いたあのアステカも、また南米大陸の太平洋側地域一帯を縦横に結ぶ「インカの道」を初めとする数々の大規模な公共事業を成し遂げていたインカでさえ、鉄の使用は知らなかったのである。こうして、剣や鉄製尖頭を付けた槍などの武器は、征服者の軍隊に軍事的優位性を与える重要な要因の一つとなった。

こうした事情から、スペイン王室は新大陸征服の極めて当初の時期より先住民がスペイン人兵士の武器を所持することも、またスペイン人が彼らに武

器を売却することも禁じていた。

コロンブスによる新大陸「発見」からわずか9年後の1501年、王室は当時確認されていたカリブ海の島々、および南米北岸地域に居住する先住民が防御用、攻撃用の武器を所持すること、キリスト教徒が先住民に武器を売却したり物々交換によって与えたりすることを禁止する法令を制定している[Encinas, Libro IV：345-346]。

またアステカ征服直後の1534年には、メキシコ市のアウディエンシアに宛てて勅令を発布して彼地のスペイン人商人が先住民に武器を売却することを禁止し、これまで購入した武器についても適当と思われる方法でこれを没収するよう命じている［Ibid.：346]。

さらにその2年後の1536年には、国王が同アウディエンシア議長に宛てて送付した書簡の中で、先住民がいかなる種類の武器を保有することをも禁止するように指示している［Ibid.：346-347]。

一方、インカ征服後ほぼ20年近くたった1551年にペルーのアウディエンシアに対しても王室は勅令を発布し、先住民が「剣、ナイフ、短剣」を所持することを禁止し、首長層が武器を携帯する際には副王の許可を必要とすることを規定している［Ibid.：345]。

さらに1556年には、同じくペルーのアウディエンシアに対して勅令を発し、先住民のみならずメスティーソやムラートなどの混血層の武器所持をも禁止している［Ibid.：344-345]。

未だ少数のスペイン人支配者層が人口の大半を占める先住民に対する支配を安定した形で保持して行くためには、強力な威力を発揮する鉄製の武器を征服者が独占することが必要であった。こうした軍事・政治上の配慮から、王室は先住民の武器保持や先住民への武器売却を禁ずる法令を度々発布したのである。

しかし、こうした内容の勅令が再三再四発布されているところを見ると、王室の意図とは裏腹に、鉄製の武器を先住民たちが保有するという状況が各地でしばしば発生していたのであろう。

そしてチリの場合、先住民マプーチェによるスペイン人の武器の保有は極めて大規模な形で発生し、彼らの戦力拡大に実質的な形で寄与する重要な要因の一つとなった。

もちろん征服当初の時期、マプーチェの間でも「鉄」の使用は知られていなかった。したがって鉄製の尖頭を付けた槍を用いるには、征服者側からこれを調達する他はなかったのである。そこで以下、反乱マプーチェによる鉄器の調達方法の変遷について見ていくことにしよう。

まず反乱初期の時期には、鉱山労働のために配布されていた器具を加工して利用するという手段が取られていた。

マルモレホによれば、1554年当時金鉱山での採掘労働に投入されていたインペリアル地区の先住民たちが総督バルディビア死亡の情報を聞きつけて蜂起する。その際彼らは、自分たちが金の採掘に使っていた鍬を加工して作った鉄製の尖頭を槍に付けて武装し、近隣一帯の先住民もこの例にならったという［Marmolejo:122］。なお、1556年にラウタロがサンティアゴ攻略の途中マウレ川近辺の鉱山地帯を襲撃した時にも、採掘用の道具を押収したことをマルモレホは記している［Marmolejo：142］。

だが、採掘道具の加工という方法以上にマプーチェたちが頻繁に利用したのは、植民地軍の兵士が使用する剣やナイフなどの鉄製武器を入手することであった。

当初反乱マプーチェはこれら敵方の鉄製武器を戦勝の結果、すなわち戦利品という形で獲得していた。

ロベーラは、1553年にバルディビア隊を壊滅させたトゥカペルの戦いの戦利品の中には武器が含まれていたこと、そしてその直後にプレン要塞から出陣した14名のスペイン人を迎え撃ったマプーチェ戦士たちが、トゥカペルの戦いの時に征服者側から押収していた武器を用いたことを記している［Lobera：336,340］。また、反乱マプーチェの討伐に向かったフランシスコ・デ・ビジャグラ隊が打破されたチビリンゴ（アンダリエン）の丘の戦い（1554年）、さらにマレグアノの丘の戦い（1562年）に関するロベーラの叙述にも、戦勝

したマプーチェ隊が敵方の武器を戦利品として獲得したことが記されている[Lobera:345,425]。特にチビリンゴの戦いに関する叙述の中では、「(スペイン人隊の) 剣や槍」が反乱マプーチェ側の戦利品に含まれていたことが明記されている [Lobera : 425]。

一方マルモレホは、1565年にコンセプシオンを襲撃した2万のマプーチェ戦士の中には、さまざまな武器に混じり、スペイン人から事前に獲得していた剣を先端部に取り付けた長槍で武装するものが含まれていたことを指摘している [Marmolejo : 221]。

さらに、キロガ総督も1566年3月1日に国王に宛てて書いた手紙の中でアラウコ地域における反乱の情勢を報告し、敵軍の武器に言及している。その中で、総督自ら隊を率いて出陣したある戦闘において、敵マプーチェ戦士たちが、「それまでの数々の戦勝でスペイン人から奪っていた鎧、槍、剣、兜、アルカブス銃」で武装していたと記している [CDIHCh, I : 60]。

また前述したように、ロベーラによれば、パイジャタル盆地における奇襲攻撃 (1569年) の際に、マプーェチェ戦士の一部の隊が使用した槍の先端には「剣の半分、短剣、ナイフといった鉄製の尖頭」が取り付けられていた[Lobera : 462]。

このようにすでに征服直後の16世紀の中葉の時期から、各地のマプーチェ戦士は敵方から戦利品として獲得した鉄製武器をそのまま使用したり、あるいは槍の尖頭部に取り付けたりして使用していたといえる。

したがって、植民地関係者を大いに憂慮させた1570年のプレン平原の戦闘の際にマプーチェ戦士たちが用いたという槍の中にもこうした鉄製の先端を施したものが含まれていた可能性も少なくないだろう。

だが、マプーチェ戦士の間での鉄製尖頭槍の普及に決定的に寄与したのは、1598年からおよそ6年間続いた第2次マプーチェ大反乱であった。

当時軍人として反乱鎮圧の最前線で任務に当たっていたゴンサレス・デ・ナヘラは、この大反乱が契機となって反乱マプーチェ側の軍事力が飛躍的に向上した点を特筆している。すなわち、この反乱によって打倒した植民地軍

の兵士から各種の武器を戦利品として獲得したほか、植民地住民が放棄したビオビオ川以南の7都市や要塞から大量の武器を押収したことが、反乱マプーチェ軍の軍事力向上にとって画期的な出来事であったと指摘しているのである［González de Nájera：114］。

この点に関しては、当時の植民地の軍関係者の意見に著しい一致が見られる。

1599年11月8日に、ロヨラ総督の殺害の後に暫定総督となったキニョネスは、状況把握のために軍人関係者たちに対して行った質疑応答を報告書にまとめている。この報告の中で発言者たちは口々に、大反乱を通じて戦死した植民地軍兵士や放棄された都市から押収することによって敵マプーチェ側が大量の武器と馬を獲得したこと、植民地軍側が著しい武器不足に陥っていること、反乱マプーチェ側が武器や戦力において植民地軍に勝っていること、敵側の士気が大いに高揚していることなどを証言している［CDIHCH, V：160-161, 164, 174, 179］。

なお1599年という時点は未だ大反乱の初期であり、バルディビア市、インペリアル市、ビジャ・リカ市といった重要な都市が陥落する以前の段階であったことを指摘しておこう。

さらに、こうした戦勝や集落の放棄といういわば偶発的な要因による鉄製部品の獲得と並んで、遅くとも16世紀末頃からはより計画的な方法でスペイン人側の武器を調達する方法も利用されるようになった。

まず一つは、私的な形でスペイン人に奉仕する先住民「ヤナコーナ」を通じて入手する方法である。

チリで長年にわたって布教活動を続けてきたフランシスコ会のドミンゴ・デ・ビジェーガス神父は1599年10月23日付けで国王に宛てて執筆した手紙の中で、当時反乱マプーチェが植民地軍の武器を調達するため、戦利の他に従軍する「奉仕インディオ」から買い取るという方法を用いていたことを記している［CDIHCh, V：140］。

また、軍人ゴンサレス・デ・ナヘラの記録にも、これと同様の2つの方法が記録されている。すなわち、一つはイスパノクリオーリョ軍が遠征を行う

際、和平に応じるふりをして植民地軍に従軍している親類や友人のヤナコーナたちから鉄製の武器や道具を手に入れるという方法、そしてもう一つは、それ以外のヤナコーナたちの空腹につけ込み、食糧や果物などの食糧と交換することによって彼らからこれらの品を入手する方法である [González de Nájera : 171]。

それだけではない。食糧との交換で鉄製品を入手するという手口は、新米のスペイン人兵をターゲットとして実行されることもしばしばあった。長期の遠征で空腹に駆られた新米兵たちは、和平を装った反乱マプーチェたちが運んでくる食糧に誘われこれを武器と交換していたのである。ゴンサレス・デ・ナヘラは、このようにして遠征隊の装備の中から大量の剣が反乱インディオのもとに流出し、兵士たちの間で「剣」が「貨幣」のように認識されていたと記している [González de Nájera : 171-172]。

こうした闇取引は遠征隊のみならず、戦闘の前線に位置する要塞に駐留する兵士たちの間でも恒常的に行われ、反乱マプーチェたちは食糧と交換で剣や銃の発射装置を入手していた。戦闘の最前線に配置された海岸部のパイカビ要塞に隊長として従軍していたゴンサレス・デ・ナヘラは、こうした要塞周辺における闇取引の実態を直接の目撃者として批判している [Ibid. :172]。(17)

新大陸征服の当初から発布されていた先住民への武器売却禁止の勅令は、少なくともチリ南部においては効力を持たなかったようである。

以上のように、マプーチェ戦士たちが敵側の鉄製武器を大反乱時の戦利として、あるいは計画的な闇取引を通じて大量に獲得することによって自由になる鉄器の数が大幅に増大すると、その利用の仕方も贅沢になっていったものと思われる。

ロベーラによれば、1569年パイジャタロの盆地で食糧確保のために要塞から出発したスペイン人隊を待ち伏せ攻撃した敵兵の一部が使用したのは、剣の鉄刃の部分を半分に分割したもの、あるいは短剣やナイフの鉄刃を利用して作った槍であった [Lobera : 462]。

またゴンサレス・デ・ナヘラも、反乱の当初マプーチェ戦士たちが一本の

剣の鉄刃を砕いてその破片を3本から4本の槍に使用していたとする一方、17世紀の初頭には彼らが1本の槍に1枚の鉄の刃をそのまま取り付けるようになったと記している［Gonzalez de Najera：61］。

以上のように様々な方法を用いて大量の鉄刃を確保したマプーチェ戦士たちは、伝統的な武器であった「槍」をより強力なものに改造し、敵騎馬兵に対抗するための武器として広く使用することができるようになったのである。

d．逃亡兵・捕虜の鍛冶職の利用

このように自由になる鉄製武器の量が増え、その使用法が贅沢になることと平行し、獲得した鉄器を加工する技術も向上していった。

そして、この側面で反乱マプーチェの軍事力増強に貢献したのは、意外にも植民地軍からの脱走兵や捕虜であった。

脱走兵の問題を理解するためには、反乱マプーチェの鎮圧に当たっていた植民地軍の構成について説明する必要がある。

16世紀の末の時期までチリ植民地軍を構成していたのは征服者やその子孫を中核とする個人であった。王室は征服の功労者に対して、一定地域の先住民を保護し彼らを布教する義務と引き替えに、その労働力や租税を徴収する権利「エンコミエンダ」を付与した。そして「エンコミエンダ」を付与された人物、すなわち「エンコメンデーロ」の義務には、居住地域内で反乱が勃発した時には戦役に応じるという条件も含まれていた。

ところがチリの場合1553年のトゥカペルの戦い以来ほぼ恒常的にマプーチェ地域のどこかで反乱が起こっており、「アラウコ戦争 Guerra de Arauco」と呼ばれるようになっていた。したがって、チリのエンコメンデーロ層は反乱の鎮圧に協力するため、事実上永続的な戦事負担を強いられていたのである。

「アラウコ戦争」平定のために、マプーチェ居住地区に立てられていたコンセプシオン、インペリアル、ビジャ・リカを初めとする都市に在住するエンコメンデーロはもちろんのこと、より安定した植民地支配が早くから確立

していた中央部のサンティアゴ市や北部のラ・セレーナ市に在住するエンコメンデーロたちも、ほとんど毎年のように戦役に駆り出されたり、資金や物資の徴発を迫られていた。

もちろん、ペルー副王領やスペイン本国から援軍や武器などの物資が時折送られてくることはあったが、戦争遂行の主な担い手はやはり植民地の富裕層である彼らエンコメンデーロたちであった。その結果、恒常的な戦事義務によりエンコメンデーロ層は貧困化の一途をたどって行った。16世紀の後半にペルー副王やスペイン国王に対して彼らが送付した数多くの書簡は、自分たちがいかにチリの平定のために努力と資金をつぎ込んできたか、そして現在いかに自分たちが窮状に苦しんでいるか、といった切々たる訴えに満ち満ちている。

こうして、植民地軍を構成する兵士の中でも富裕なはずのエンコメンデーロ層が貧困化する一方、民間から徴募された一般兵士の窮状にはそれを上回るものがあった。彼らの給与の資金の大部分もエンコメンデーロ層を中心とする植民地市民層からの徴募に依存していた。その富裕市民層が貧困化していったのだから、徴募兵に対して当初約束されていた給与が不払いとなり、食糧にも衣料にも事欠くといった状況が日常茶飯事となるのは当然であった。(18)

こうした事態に対する兵士たちの不満は大きく、1576年にバルディビア、ラ・インペリアル、ビジャ・リカ、オソルノの3都市を巻き込んで発生した謀反を皮切りに、1580年、1585年、1588年、1589年、1593年にも、兵士の謀反や謀反未遂事件が起こっている。(19)

こうした事態をさらに悪化させていたのが兵士の規律の低さである。挑発された兵士の中には、ペルーから強制的に連れて来られるものが多かった。しかし平穏な状況が続くペルーの住民の間ではマプーチェの反乱が続くチリのイメージは極めて劣悪で、アラウコ戦争にかり出される位なら犯罪人のようにガレーラ船を漕いだ方がいいといった風潮が定着していた。したがって、リマから時折送られてくる援軍の中には、強制的に徴兵された犯罪人や浮浪者などが多く含まれるようになっていた。(20) このような兵士そのものの規

律の低さも、脱走の問題に拍車をかける要因となった。

こうした状況を見かねて、16世紀の末にはペルーからの兵士ではなく、直接スペイン本国から規律の高い兵士を援軍として送るように国王に要請する植民地当局の書簡が数多く見いだせる。(21)

窮乏状態に規律の低さが重なれば、敵側脱走まであと一歩である。

1577年には、アロンソ・ディアスというメスティーソ兵が脱走して反乱マプーチェ側に投降したのち、敵軍の1部隊を指揮して植民地軍を攻撃する計画を立てている［CDIHCh, II：353］。この時には攻撃は未遂に終わっているが、これ以降メスティーソやムラートの他、白人の兵士の中にも敵側に投降し、反乱軍を指導して植民地軍側に戦闘をしかけるというケースがしばしば観察されるようになる。(22)

このようにエンコメンデーロ層の貧困化を一因として、民間主導の植民地軍による戦闘続行が多大な困難に直面する状況の中で、1594年にリマのアウディエンシアが制定した法令により、彼らの戦事義務は食糧の拠出に限定され、さらに1597年には国王の勅令によって戦事義務を免除されることになった［Jara：106］。市民に基礎を置いた民間型の植民地軍は事実上解体されたのである。

そして第2次大反乱中の1600年には、4年間という限定付きではあったがペルー副王領から毎年定額の費用がアラウコ戦争平定のために送付されることになった。しかしマプーチェの反乱が続行する状況の中で、ペルーからの援助費は結局恒常的なものになった。こうしてアラウコ戦争平定のための植民地軍は、民間主導の臨時的な性格のものから、公的性格の常備軍に変身したのである。

しかし常備軍が設置された後も、植民地軍兵士の不満は相変わらず解消されることはなかった。なぜなら、常備軍費の分配を利用して商人や大土地を所有する軍の上層部が衣料や食糧などの必需品を高利を上乗せして兵士たちに売りつけたり、常備軍費の到着が大幅に遅れたりすることによって兵士たちへの給与が未払いであったり、衣食の必要に駆られて給与を前借りして借

金が累積したりするなど、さまざまな窮乏を経験していたのである。(23)

こうして、17世紀に入って植民地軍が常備軍に様変わりした後も、不満を抱いた兵士が反乱マプーチェ側に脱走するという問題は続行することとなった。(24)

ゴンサレス・デ・ナヘラは、17世紀の初頭の段階で常備軍の恒常的な物資不足に不満を持つスペイン人やメスティーソ兵の中には、反乱マプーチェ地域に逃亡して彼らに軍事的な形で協力するようになったものが約50名いたと計算している。そしてこれら逃亡兵の中には鍛冶の技術を持つものがおり、マプーチェ戦士たちが彼らに鉄製の武器を製造させていたと指摘している[González de Nájera：114]。

この指摘を具体的に裏付ける資料がある。ゴンサレス・デ・ナヘラが活動した時代にチリ総督を務めていたアロンソ・デ・リベーラは、1602年2月25日に国王に宛てて執筆した手紙の中で、植民地軍が擁する兵士の減員数を地域別に報告している。その報告の中で、敵マプーチェ軍側へ投降した兵士としてリベーラが挙げている兵士の数は、未遂の1名を除いて6名であり、そのうちの1名、アラウコ要塞から敵側へ逃走し後に処刑されたガルダメスなる人物は鍛冶職人であったことが記されている[CDIHCh, VII：297]。

また、同じくリベーラ総督が1605年に作製した植民地軍戦士者・逃亡者リストを見てみると、敵側へ投降した兵士は5名で、その中の1名、フアン・ヌニェスなる人物もやはり鍛冶職で、アラウコ要塞から脱走し後に絞首刑に処されている[CDIHCh, VII：575]。

さらに逃亡者だけではなく、戦闘で反乱マプーチェの捕虜になった兵士の中にも鍛冶の技術を生かして生き延びた者がいた。ゴンサレス・デ・ナヘラは、17世紀当時反乱マプーチェが、女性捕虜のほか男性捕虜の場合でも、鍛冶の技術をはじめ自分たちにとって何らかの利となる場合にはこれを殺さないで生かしていたと指摘している[González de Nájera：54]。また、捕虜になった後にマプーチェ戦士たちのために鉄製武器を製造させられ、筆者のチリ滞在中（1606年以前）に解放された兵士ニエトの例も挙げている[Ibid.：

121]。

17世紀のチリに関する重要なクロニスタであるイエズス会のロサレス神父も、高貴な家族出身の兵士でしばらくの間マプーチェの間で捕虜として過ごした後、1621年に脱走して生還したグレゴリオ・イニストローサの例を挙げている。イニストローサは、ある戦闘で反乱マプーチェの捕虜になった後、鍛冶の技術を生かして気に入られ、マプーチェたちは彼の奉仕に対して褒賞を与えたり女性を提供したりして手厚く報いていたという[Rosales, II:981]。

このような逃亡者や捕虜の積極的利用は、全体としては敵対の対象であった植民地社会に対し、反乱マプーチェ社会の態度が一定の変化を経験したことを物語っている。

初期の記録者であるビバルやマルモレホも、征服および植民当初の時期には、マプーチェたちが戦闘で植民地軍の兵士を捕虜にした場合、これを全員殺害していたと指摘している [Vivar:246. Marmolejo:127]。また逃亡者の例に関しても、初期においては同じ先住民出身者であるヤナコーナ以外の例は記録されていない。

しかし1566年には、メスティーソ逃亡者と思われる人物が当時の反乱マプーチェの牙城であったカティライの地に滞在していたことを示唆する叙述をマルモレーホが行っている [Marmolejo:239]。さらに1570年代後半からは、先に見たアロンソ・ディアスのようなメスティーソやムラートなどの混血、あるいは白人の脱走者や捕虜に関するより具体的な叙述がしばしば記録されるようになるのである。

キロガ総督は、1578年1月26日にペルー副王のトレドに宛てた手紙の中で、コユンコ地区のカシーケとの間で交わされた始めての「捕虜交換」の経験に言及している。このカシーケはある兵士を捕虜として5年間も手元においており、当時行われたある戦闘で捕虜となった自分の妻子と交換するという条件で、この兵士を解放することに合意している。

キロガはこの捕虜交換の件について、こうしたことは当地が発見・征服されて以来前代未聞であること、なぜなら「インディオたちは極めて残酷なの

で、スペイン人を捕虜にした際にはこれを殺害するのが常であるから」と述べている［CDIHCh, II：353-354］。

しかしこれ以降、何らかの意味で自分たちの利になる人物、そして交換の際に高い「値」をつけられる高貴な人物を捕虜とした場合には、これを生かしておいて積極的に活用するという態度が反乱マプーチェの間で確立されていく。こうして捕虜交換の習慣は既に17世紀前半の時点で、公式の制度として両社会によって完全に認知されるようになった。

1599年のバルディビア市陥落の際に捕虜となり1614年に解放されるまで、実に15年間反乱マプーチェの間で過ごしたドミニコ会のフアン・ファルコン神父の例、そして1629年のラス・カングレーハスの戦いで捕虜となり、厚遇されたのちに捕虜交換を通じて生還し、「幸せなる捕虜生活」という回想記を書き残したピネーダ・イ・バスクニャン隊長の例は有名である。(25)

以上、反乱マプーチェによる騎馬兵対策用の武器の開発についてまとめておこう。マプーチェ戦士たちは、征服者スペイン人の騎馬隊に対抗するために有効な武器を思考錯誤した結果、長槍を選び取った。そして、戦利や闇取引などを通じて植民地軍から剣やナイフなどの鉄器を大量に入手し、鍛冶技術を持つ植民地軍の脱走者や捕虜を積極的に利用することによって、鉄製の尖頭を付けた槍を大量に保有するに至った。こうして、強力な鉄製尖頭槍を戦闘の際に組織的に使用することにより、植民地軍の騎馬兵に対する防衛・攻撃能力を増すことに成功したのであった。(26)

そして遅くとも16世紀末には、植民地側の軍人たちが「槍」こそマプーチェ戦士の主要な武器であると認識していたことを示す言語上の証拠がある。

1590年1月30日にはチリ植民地軍の管理官兼会計官であったフアン・デルガディージョが、アラウコ戦争に関する報告書を作製している。この報告書の中で、当時戦闘に参加したサンティアゴ市民のディエゴ・ディアスなる人物が、反乱中の先住民の兵力に関する質問に対し、「槍を手にすることのできるものが1万5千名以上いるに違いない」（下線筆者）と答えている［CDIHCh, IV：46］。ディアスは、「マプーチェ戦士＝槍兵」という認識のもとに返答し

ているのである。

さらに1593年4月には、植民地軍に所属するミゲル・デ・オラバリーア隊長が作製した報告書の中で、敵マプーチェ戦士の数を挙げる際に「槍」、「槍兵」の両方の意味を持つ「ランサ lanza」というスペイン語を使って、「800名のランサ」、「4000名のランサ」、「600名のランサ」という表現が用いられている［CDIHCh, IV：292,293,296,302］。こうした表現から、オラバリーア隊長も「マプーチェ戦士＝槍兵」と理解していたことがわかる。

これらの事実は、植民地軍の軍人にとって、最も手強いマプーチェ戦士の武器が他ならぬ槍であると認識されるようになっていたことを示唆する事実である。なお後述するように、槍はマプーチェ歩兵の主要武器になっただけではなく、後に騎馬兵と化したマプーチェ戦士たちにとっても主要な武器になる。

以上、植民地軍の騎馬兵に対抗するために反乱マプーチェが採用した戦略や武器の開発について見てきた。しかし、この段階でもまだ消極的な意味での「馬」の同化に過ぎない。なぜなら「馬」は未だに対抗すべき要素であり、自分たちが利用あるいは活用すべき要素にはなっていないからである。

そこでいよいよ次に積極的な意味での「馬」の利用、つまりマプーチェによる騎馬技術の修得と騎馬隊編成のプロセス、そしてそれがマプーチェ社会や植民地社会に与えた影響について見ることにしよう。

＜2＞マプーチェ騎馬隊：馬の積極的同化

第1章：王室による規制

スペイン王室は、先住民の征服の過程で「馬」が多大な威力を発揮したことを明確に認識し、武器と同じように、征服初期の時代から先住民が馬を保有することを禁止する法的措置を採用していた。

1528年と30年の二度にわたり、国王はメキシコのアウディエンシアに指示

を送り、管轄領域の内外を問わず、インディオに馬や武器を与えたり売却したりすることを禁止させている [Encinas:Lib. V:347]。1528年といえばピサロによるペルー征服が始まる3年前、そしてバルディビアによるチリ遠征から12年以上も前のことである。

チリ南部征服の拠点コンセプシオン市の建設の翌年にあたる1551年にも、ペルー副王領に設置されたリマのアウディエンシアにあてて、ペルー諸州において先住民がアルカブス銃や石弓などの武器を保有したり、馬に乗ることを禁止する内容の勅令が発布されている [Encinas, Lib. IV : 347-348]。

しかし、こうした度重なる禁止令にもかかわらず、スペイン王室は新大陸植民地各地の先住民による馬の保有を阻止することはできなかった。

1568年と70年にも、それぞれヌエバ・エスパーニャのアウディエンシアとリマのアウディエンシアにあてて、先住民が馬に乗ることを禁止する目的の勅令が発布されている [Encinas, Lib. IV:348]。そしてこの勅令はすでに、日常的に馬に乗る先住民の存在に言及しているのである。

ただしこの勅令の中で先住民の乗馬によって生じる害として指摘されているのは、余計な出費がかかること、生産活動がおろそかにされることなどの経済的な問題にすぎず、先住民が戦闘目的で馬を使用しているという事ではない。

だがこれらの法的措置が、経済的な配慮のみならず植民地の保全を維持するという軍事的な配慮を含んでいたことは、この問題がしばしば同じく先住民による武器保有の問題と関連して処理されていることからも明らかである。

すでに1555年にフランシスコ会のモトリニーア神父は、メキシコのトラスカラの地からカルロス5世に宛てて執筆した書簡の中で、先住民による馬の保有がもたらしうる軍事上の脅威に言及している。神父は、当時メキシコの各地で多くの先住民が実際に馬に乗っていることを指摘し、乗馬を高貴な身分の先住民に限るべきである旨を提言している。そしてその理由として神父が挙げているのは、このまま放置しておけば、火器と並んでスペイン人に軍事的優位を保証する重要な要素であった騎馬隊を多くの先住民が修得するこ

とにより、スペイン人に対抗しようとするようになりかねないという軍事上の懸念である [Motolinía：213]。

つまり、先住民が軍事的な目的で馬を使用することにより、植民地軍に対抗しうる軍事力を保有するような事態が発生することを恐れ、国王に予防措置を取るように提言しているといえる。

そしてモトリニーア神父の懸念は、ほぼ20年後、メキシコよりはるか南に位置するチリの地において、まさに現実のものとなるのである。

第2章：反乱マプーチェによる馬の調達

安定的な植民地支配に対する軍事的な脅威となりうる先住民による馬の保有という現象は、マプーチェの間でも極めて早い時期から起こっていた。

まず征服当初の時期に、反乱マプーチェ戦士たちがどのような方法で馬を調達していたかを見ていこう。

初期の反乱の時期に、彼らが馬を獲得していた主なルートは、鉄製武器と同様に戦利であった。

マルモレホの叙述によれば、バルディビア隊を壊滅させた1553年のトゥカペルの戦いに参加したマプーチェ軍戦士のうちアンゴル市近辺に居住する者たちが、すでに戦利品として数頭の馬を獲得している [Marmolejo：119]。

また1555年に、反乱マプーチェ軍は再建されたコンセプシオン市に再度攻撃をしかけ、これを再び放棄させることに成功している。そしてロベーラは、その後1557年に赴任したウルタード・デ・メンドーサ総督のもとに和平を申し出た先住民が、同市放棄後の戦闘によって住民から押収したという「馬1頭」を、帰順の印として進呈したことを記している [Lobera：372]。

一方マルモレホは、1554年のアンダリカンの丘の戦いに関するマルモレホの叙述の中で、戦闘の最中に打倒された兵士の馬を味方の陣地に引き入れようとするマプーチェ戦士の姿を記している [Marmolejo:126]。さらに1558年にプレン峠において実行された奇襲攻撃が、初めから馬を含むスペイン人側

の家畜や武器の略奪を目的として計画されていたとマルモレホは記している[Ibid.：163]。

もしマルモレホのこれらの指摘が事実だとすれば、かなり初期の時期からマプーチェの間で馬を積極的に活用しようという発想が生まれていたことになる。

さらに少し後の時期になると、植民地の集落や都市が放棄されることによって、マプーチェ戦士たちがより大規模な形で馬を獲得するケースも発生するようになる。

1560年代の末には、反乱マプーチェ戦士たちに大量の馬の獲得を可能にさせた2つの集落の放棄が起こっている。いずれも海岸部に建てられていたアラウコ要塞とカニェーテ市である。

1568年には、ビオビオ川の南に位置し戦略上重要な基地であったアラウコ要塞が、マプーチェ軍の長期に渡る包囲の末に放棄されることになった。この際要塞の兵士たちは、陸路で脱出することが不可能であると判断し、海路で脱出することを余儀なくされた。こうして彼らは不本意にも大量の馬を敵方に放置することになる。この放置馬の数に言及する同時代の証言のうち、少なく見積もったものでも60頭、多めに見積もった証言では100頭という数字を挙げている［CDIHCh, Ⅰ：187,208,238］。

マルモレホもこの事件に言及し、迫り来るマプーチェ戦士たちの姿に恐れをなしたスペイン人兵士たちは、馬を船に乗せる余裕すらなく60頭の馬を「鞍もあぶみも付けたままの状態で」放置した、と記している。なおマルモレホは、この時マプーチェたちが獲得した馬の大部分は食用として消費したものの、何頭かは「使役用」に留保したと付け加えている［Marmolejo:290-291］。

また同年、海岸部に位置する都市カニェーテがやはり長期にわたる包囲の末に放棄された際にも、住民は海路脱出することによって多数の馬を放置している。この時に住民が放置した馬の数について、同時代の証言は150頭から300頭以上という数字を挙げている［CDIHCh, Ⅰ：187,208,238］。

再びマルモレホの言葉を借りれば、このときカニェーテ市民たちは「王領

にいる馬の中でも最上の300頭の馬」を泣く泣く野原に置き去りにしてコンセプシオン市行きの船に乗船したという［Marmolejo:291］。一方ロベーラもこの一件に言及し、切羽詰まったスペイン人たちが、脱出の際にやはり「鞍を付けたまま」の状態で馬を放置したことを記している［Lobera：465］。

ロベーラやマルモレホが言うように、これだけ大量の馬が馬具を付けたままで放置されたとすれば、あとはマプーチェたちが乗馬技術を修得するようになるまでもう一歩といえるだろう。

だがマプーチェたちは、馬をこのように軍事的衝突や集落放棄の結果として偶発的な形で獲得していただけではない。より計画的な方法、すなわち「馬泥棒」という方式も早くから採用していたからである。

1562年には、カニェーテ市の市街区域に入り込んだ先住民の集団が、歩哨の目を盗んで「1頭の馬」と多数の山羊・豚を略奪して逃走するという事件が起こり、カビルドにおいて市の警備体勢の弛緩が告発されている［Marmolejo: 191-192］。

また、同市が放棄される1569年以前に先住民による馬の略奪という現象が日常的に発生していたことを旧市民の一人が証言している［CDIHCh, I:150］。

一方ロベーラはアラウコ・トゥカペル地区のマプーチェに言及し、彼らが1563年の段階でコンセプシオン市近郊のエスタンシアを恒常的に襲撃し、家畜を略奪していたことを記している［Lobera：437］。マルモレホも、1560年代の末には、しばしば先住民が徒党を組み、馬を含む家畜を略奪する目的でコンセプシオン市を襲撃し、獲物を携えては山岳地へ逃走していたことを記している［Marmolejo：294-295］。

さらに1577年の初頭には、やはりアラウコ・トゥカペル両地域の反乱マプーチェ戦士団が他地域の帰順インディオを装うことによって大量の馬を略奪するという事件が発生している。この時彼らが獲得した馬の数について、ペルー副王トレドにフアン・デ・メルカードが書き送った書簡では「1500頭以上」、キロガ総督が国王あてに執筆した書簡によれば「2000頭」以上という数字が挙がっている［CDIHCh, II：348,357］。

なおロベーラもこの事件に触れ、この時マプーチェ側が略奪した馬の数を「2000頭以上」と記している。そして、この略奪事件はアラウコのコロコロ地区のマプーチェ戦士たちが、反乱マプーチェ側に脱走していたメスティーソとムラートの2名の元植民地軍兵士の助言にもとづいて実行したものであったことを指摘している。つまり、和平を装って略奪行為を繰り返し、わずか数日の間に武器や大量の馬を獲得したというのである［Lobera：493-494］。

なおこのメスティーソというのは、1577年に植民地軍に対する襲撃計画を立てたあのアロンソ・ディアスである。既に鉄製武器の製造の箇所でも指摘したことであるが、こうした馬の略奪の側面でも、植民地軍から脱走したメスティーソ、ムラートといった混血層の兵士たちが反乱マプーチェ戦士たちに協力していたことがわかる。

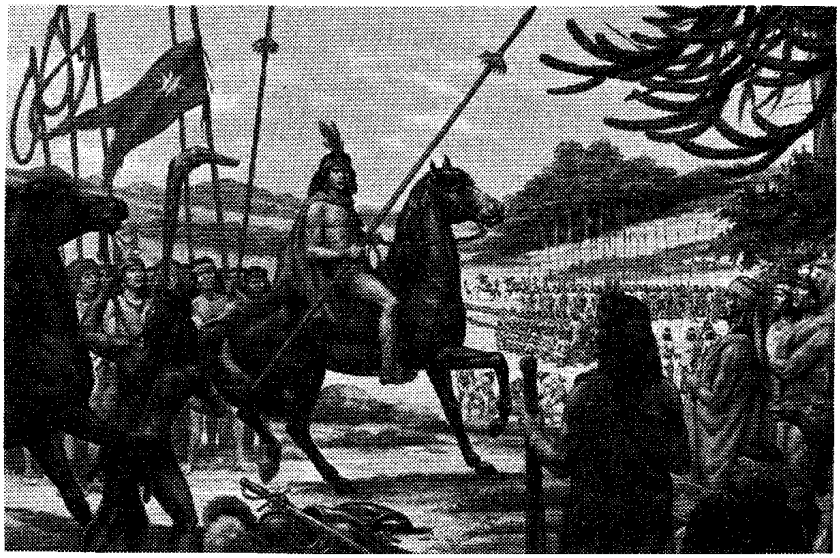
以上の考察から、初期の時期より戦勝、要塞・都市の放棄、あるいは略奪の結果として相当な数の馬が反乱マプーチェ戦士たちの自由になっていたことは間違いない。スペイン人の軍事的優位性を保つために、先住民による馬の所有を禁止していた王室の理念に反する事態は、チリ南部の先住民マプーチェの間でもかなり早くから出現していたのである。(27)

第3章：馬に乗った少数のマプーチェ

戦利、都市放棄時の放置、略奪などの手段による馬の獲得と平行して、遅くとも1550年代の後半には、少数ながら馬を乗りこなす反乱マプーチェの例が記録されるようになる。

その最初の例が、本書で既に登場しているラウタロである。トゥカペルの戦いの際に反乱マプーチェ側に投降したラウタロは反乱軍の指導者の一人となり、征服者軍に対する幾多の戦闘で勝利を治めた。そして1556年、いよいよチリ中央部のサンティアゴ市を攻略すべく数百名の先鋭マプーチェ戦士を率いて北上したラウタロは、マウレ川の畔に到達したところで地元の先住民たちを反乱に誘うために演説を行う。

同時代の軍人の記録者マルモレホは次のように記している。この時ラウタロは戦利品として植民地軍から獲得したトランペットを吹き鳴らし馬に乗って戦士たちの中央に立った。そして、自分たちを隷属状態に閉じこめておこうとするスペイン人に対して雄々しく立ち上がろうではないか、と彼らに呼びかけたという［Marmolejo：143］（絵3）。



絵3．馬上で演説するラウタロ［González y López：17］

ラウタロはもとヤナコーナであり、チリの征服者ペドロ・デ・バルディビアその人に馬丁として仕えていたのだから、反乱マプーチェ軍に投降する以前に乗馬技術を修得していたとしても不思議ではない。

そして、同様の例はラウタロ以外にも記録されている。同じくマルモレホの記録によれば、1566年にイタタ川付近のレイノグエレンの地でペドロ・デ・ビジャグラ率いるスペイン人軍に攻撃をしかけた先住民軍の中にも、あるヤナコーナがいた。ということはラウタロと同じ脱走者ということになる。そしてこのヤナコーナは、スペイン人兵士の一人が誤って落馬したのを見ると彼の馬を奪い取り、マルモレホの言葉を借りれば「まるでアンダルシアの騎士のように」巧みに馬を操り始めたという。結局このヤナコーナは形成不利と見るや馬に乗ったまま山岳地に姿を消し、後を追ったスペイン人騎士二名は追跡空しく帰還したという［Marmolejo：228-229］。

この2例は、一旦スペイン人社会に統合されていた先住民のヤナコーナたちが、馬術を修得したのちに反乱マプーチェ側に逃走したというケースである。

ヤナコーナ以外に、エンコミエンダを通じて征服者たちに委託されていた

先住民の中にも同様の例が存在した可能性は高い。

既に見たように、バルディビアによる南部地域の平定からトゥカペルの戦いの起こる1553年までの3年間の平静期の間、スペイン人征服者の支配のもとにおかれた先住民は、エンコミエンダ制度のもとで鉱山労働を初めとするさまざまな労働を強制されていた。ロベーラは、このようなエンコミエンダの先住民の中にも馬丁として働く者たちがいたことを指摘している [Lobera: 329]。

したがって、具体例は見いだせなかったものの、エンコミエンダの先住民の中にも馬に関する一定の知識と技術を修得した後に反乱に加わった者がいても不思議ではない。

いずれにせよ、スペイン人の支配に一旦は服したヤナコーナを初めとする先住民の一部が、馬術を修得したのちに反乱を起こした先住民の社会に復帰するという現象が初期の時期から発生していたことは間違いない。

とすれば、これらの先住民が他の反乱マプーチェ戦士に馬に関する知識や乗馬技術を伝授していたという可能性も十分に考えられる。

絵4．乗馬技術を指導するラウタロ。
右側には砲撃訓練を行う戦士の姿が描かれている。
[Instituto Geográfico Militar : 表紙]

この意味で興味深いのは、有名なエルシージャの叙事詩「ラ・アラウカーナ」の一節である。エルシージャによれば、1557年に和平の使者としてラウタロ軍のもとを訪れたマルコスなるスペイン人兵士の眼前で、ラウタロが自らの手で騎士に仕上げていた6名の若いマプーチェ戦士の巧みな馬さばきを見せつけるという場面が出てくる [Ercilla : 239-240]。

(絵4)

エルシージャは、翌58年にメンドーサ総督に従ってチリ南部への遠征に兵士として参加しているので、マルコスを初めとする征服軍関係者から新鮮で直接的な証言を得ることは容易であったと思われる。ただ彼の作品が叙事詩という形式を取っている以上、叙述内容をそのまま信じるわけにはいかないのも事実である。(28)

しかし、元馬丁として馬の扱い方を熟知していたラウタロが、反乱マプーチェのもとに逃亡したのち、マプーチェ戦士たちに乗馬法を教えていたということは理屈の上では十分に考えられる。

他方やはり同時代の軍人記録者であるロベーラは、翌1558年にミジャラプエの地でガルシア総督軍との間に一戦交えたマプーチェ軍を指揮したカウポリカンが、白馬に乗って戦闘を指揮したと記している［Lobera：377］。カウポリカンは、征服者側の戦略に関する幅広い知識を修得していたラウタロに大きな信頼を置き、自分の右腕として厚遇していた。したがってカウポリカンがラウタロの指導を通じて、ロベーラが叙述するように乗馬技術を修得していたとしても不思議ではない。

これらの記録から遅くとも1557年～58年の時点で、馬術の知識に通じたヤナコーナ脱走者などを媒体として、反乱マプーチェ戦士の間でも軍事指導者など少数の者が例外的、実験的な形で乗馬技術を修得していたものと考えられる。

だが既に指摘したように、単に先住民が馬を保有したり乗馬していたというだけのことなら何もマプーチェに限ったことではない。また、一部の特権者が馬に乗って戦闘に参加するということも例外的なことではなかった。例えば、ペルーで征服者に対する抵抗を組織したマンコ・インカも乗馬技術を修得し、スペイン人の武器を操っていた。

そして他ならぬ王室も先住民のカシーケ層については、彼らが果たす王室と先住民共同体との仲介者という役割を重んじて、乗馬や武器携帯などの特権を認めていたのである。

だがマプーチェの場合、馬の使用はそうした一部の特権的な階層のみにと

どまることはなかった。いよいよ次節では、反乱マプーチェの間での騎馬隊誕生のプロセスを検討することにしよう。

第4章：マプーチェ騎馬隊の出現

（1）従来の見解の検討

こうしてついに、乗馬技術が一部のものから広く一般の戦士たちにも伝播し、実践力として馬を組織的に戦闘に使用する段階がやってくる。マプーチェ騎馬隊の登場である。

マプーチェの騎馬隊が始めて実戦に投入された時期に関しては、従来の研究において様々な指摘がなされている。だが、十分な同時代の資料の検討に基づいた信頼に足る見解は未だ確立されていない。

まず、17世紀のチリにおける最も重要なクロニスタであるイエズス会のディエゴ・デ・ロサレス神父の記録には、既に1570年のプレン平原での戦いの時にマプーチェ騎馬隊が出現してミゲル・デ・ベラスコ率いるスペイン人隊を誘い出し、待ち伏せをする歩兵本隊のところまでおびき出すことに成功したという叙述が見られる［Rosales, I：583］。また神父は、同年に行われたコンセプシオン市への襲撃の時にも、海岸に位置するタルカウアーノ方面を襲ったのが騎馬隊であったという記述を残している［Rosale, I：584］。

だが、これらの戦闘の同時代に軍人として生きた記録者であるマルモレホとロベーラの両名は、それぞれがこの二つの戦闘を記述しているにもかかわらず、マプーチェの騎馬隊については一言も触れていない。特に1575年で叙述が終わっているマルモレホの記録の場合、これを通して読んで見ても、マプーチェが実践の戦闘の場で騎馬隊を使ったという叙述は一度も出てこないのである。一方、前述したように「未公開資料集」に含まれている同時代の書簡の多くがプレン平原の戦闘に触れているが、反乱マプーチェ軍の騎馬隊に言及しているものは一つもない。

これらの記録者はいずれも軍人や植民地当局者であり、先住民側の重要な軍事力向上を意味する馬の実戦における使用に無関心であったはずはない。したがって、もしこの戦闘でマプーチェ軍側が騎馬隊を使用したのであれば、必ずその点を特筆していたはずである。

ゆえに、1570年代の初頭に発生したこれらの戦闘の際にマプーチェ軍が騎馬隊を投入したというロサレスの叙述は信憑性に欠けると判断できる。

またロサレスの1世紀後の18世紀の後半に、やはりイエズス会のイグナチオ・モリーナ神父が執筆した記録の中で、1568年頃に始めて反乱マプーチェが数個の騎馬隊を実戦に投入したと指摘している [Molina:159]。だがモリーナ神父の場合も依拠した資料を明らかにしておらず、同時代の他の記録と対照する限り信頼に足る指摘とはいえない。

次に現代の研究者たちはこの問題をどのように論じているだろうか。

まず今世紀の初頭にマプーチェに関する歴史学および文化人類学的研究を行ったトマス・ゲバラについて見てみよう。ゲバラは「チリ先史時代（1929）」と題する著作の軍事組織に関する章の中で、マプーチェによる騎馬隊の導入に触れ、植民地軍側から習得した軍事要素の中でマプーチェ軍の攻撃力の向上に最も寄与したのが馬であったことを指摘している。ただ、具体的な騎馬隊の使用に関しては、ゴンサレス・デ・ナヘラの記録に基づいて、17世紀初頭には4千頭の馬をマプーチェが戦闘に使用できるようになっていたことを記しているだけで、マプーチェ騎馬隊の出現時期には言及していない[Guevara, 1929, I：360]。

次に、トマス・ラゴスは、「チリのインディオの間における馬」と題して1951年に刊行した論文において、18世紀後半に執筆されたイエズス会士のモリーナ神父のクロニカ（1787年完成）に基づいて、マプーチェが初めて馬を実戦に投入したのが1585年であると論じている [Lagos：75]。

しかし上に記したように、実際にモリーナ神父の記録を読んで見ると、アラウカーノスが初めて馬を実戦に投入してスペイン人隊と対戦したのは1568年のこととされている。つまり、ラゴスが依拠した記録は一次資料ではない

上に、引用の仕方も不正確であるといえる。

一方歴史家のアルバロ・ハラは、アラウコ戦争がチリ植民地社会に及ぼした影響に関する古典的な研究「チリにおける戦争と社会」の中で、ブラーボ・デ・サラビア期、すなわち1560年代末には既にマプーチェ騎馬隊が出現していたと述べているが、文献上の根拠は示していない [Jara:60]。そして、文献を明記する形で示しているのは、同時代の軍人ロベーラの記録に記された1594年のインペリアル市攻撃の例のみである [Ibid. : 60]。ところが後述するように、ロベーラの記録にはマプーチェの実戦における騎馬隊投入に関して、ハラが挙げているよりも早い年代に相当する複数の具体例が記されている。

さらに、文化人類学者のアルトゥーロ・レイバはマプーチェによる馬の同化をテーマとして近年発表した論文の中で、ミゲル・デ・オラバリーア隊長が1594年に作製した報告書に記されているインペリアル市襲撃に関する情報を根拠に、16世紀末をもってマプーチェ騎馬隊初登場の時期と判断している [Leiva : 187]。

しかしレイバの断定も、同時代の記録を充分に検討した結果得られたものとは言いがたい。なぜならば、より早い時期からマプーチェが実戦で騎馬隊を用いていたことを示す同時代の複数の資料が存在するからである。

以上から、マプーチェ騎馬隊の導入の時期に関して従来の研究の中でなされてきた指摘は、いずれも説得力のあるものとはいいがたい。

（2）マプーチェ騎馬隊の出現とその初期の機能

そこで、以下同時代の資料に基づいてマプーチェ騎馬隊の登場時期を可能な限り実証的に確定して行こう。筆者が目を通すことのできた一次資料の範囲内に限ってではあるが、マプーチェによる騎馬隊の実戦への投入が確定できる最も早い時期は1577年である。

当時チリ総督であったロドリゴ・デ・キロガは、1578年１月26日付けでペルー副王のトレドに宛てて執筆した書簡の中で、前1577年度におけるアラウ

コ戦争の状況を報告している。この報告によれば、総督軍がプレン地区に対して遠征した際、遭遇した総督軍との戦闘に敗れたマプーチェ軍の残党の大部分が、今度はインペリアル市に向け襲撃を行った。ところが、この時市を襲撃したマプーチェ戦士のうち200名以上が「馬に乗り」、その多くの者が「立派な鎖鎧」に身を包んでいたという［CDIHCh, II：353］。「鎖鎧」というのは、これ以前の植民地軍との戦闘において戦利として獲得していたものであろう。

ただ、この騎馬隊形式による襲撃の成果については、「帰順していた何名かのインディオの畑の作物を少々荒らしただけに過ぎない」と記し、極めて限定的な評価しか与えていない。つまり、この時の騎馬隊は実質的な戦闘の要素というよりも、単に植民地当局を挑発する目的で使用されたのであろう。

キロガの叙述にも、敵が騎馬隊を投入したという事実に対する警戒の意識は感じられない。おそらく、その後騎馬兵が反乱マプーチェ軍の主戦力となり、植民地軍にとって多大な軍事的脅威となることは予想していなかったのだろうと推測される。

なお、もう一つ興味を引かれる事実が同じ書簡の中に見いだされる。それは、既に触れたメスティーソ逃亡兵のアロンソ・ディアスが指揮するマプーチェ部隊や、ペルー出身の先住民兵士で数日前に植民地軍から脱走したばかりのフアン・デ・レボなる人物が指揮する別の先住民部隊による襲撃行為にキロガが言及していることである［Ibid.］。

この両部隊とも、インペリアルを襲撃したマプーチェ騎馬隊とは一応区別して言及されてはいるものの、実用に足るレベルの騎馬技術が一般の戦士層にも伝播し、騎馬隊が編成され始めるプロセスで、やはり植民地軍からの脱走兵が何らかの重要な役割を果たしていた可能性を示唆する事実だといえるだろう。特にディアスの場合は、前述したように同じ1577年にアラウコ地区のマプーチェに策略を与え、1500頭から2000頭以上もの馬を略奪させるという事件を起こしている。したがって、この時に略奪した大量の馬を使って、ディアスが自分の指導する反乱マプーチェの間に騎馬隊を組織していたとし

ても全く不思議はない。

一方、16世紀後半のクロニスタの中で最も早い時期のマプーチェ騎馬隊使用に関する叙述を残してしているのはマリーニョ・デ・ロベーラである。

ロベーラは、1580年にアラウコ地区のマプーチェが夜間にチジャン市に対して行ったという奇襲攻撃に言及している。そして、明確に「騎馬兵」という表現を用いているわけではないものの、この奇襲に参加した300名のマプーチェ戦士の一隊が騎馬隊であったことを暗示する叙述を残している。そしてこの隊は、やはり300名の弓矢歩兵からなるもう一つの部隊とともに、奉仕インディオを殺害したり集落へ放火したりするといった被害をもたらしたという［Lobera：525］。

なお興味深いことに、この夜襲を指揮していたのがあるムラート脱走者であったことをロベーラは指摘している［Ibid.］。

さらに1584年の冬季、ビオビオ川南岸に建設されたばかりの要塞から草と薪を調達するために出発した人員を護衛するために数名の兵士が出動する。そして、近隣地域のマプーチェ戦士たちがこの護送隊に対して奇襲攻撃をしかけるのだが、この時のマプーチェ軍が騎馬隊と歩兵隊の混合部隊であったことをロベーラは記している［Lobera：540］。結局夜まで激しい戦闘が続いたのち、馳せ参じたスペイン人騎馬兵フアン・デ・ラ・クエバの果敢な攻撃により、護送隊はマプーチェ軍を撤退させるのに成功する。

しかしこの戦闘に関する叙述の直後に、ロベーラは次のように書き足している。

> 「…すでにこの頃には多くの反乱インディオが極めて上手に馬を操るようになり、馬に乗ったままどんな状況のもとでも、まるでヘレス生まれの騎士のように突撃したり退却したりすることができるようになっていた。」[Ibid.]

同じ頃はるか南方、バルディビア市から南東の方角に位置するランコ要塞

の近辺でも、近隣のジベン地域のインディオ戦士たちが騎馬兵と歩兵の数個の部隊に分かれて行軍していたという例もロベーラは記述している[Lobera: 541]。

さらにロベーラは、同じ頃プレン近辺のカシーケであるカティグアラが300名の騎馬兵と多数の歩兵の混合部隊を率い、建設中のプレン要塞とラ・インペリアル市を脅かすという事件にも言及している [Lobera：543]。なおこの事件の後、討伐にでかけた植民地軍の一隊に対し、カティグアラは100名の騎馬兵を率いて応撃し、自軍の多くの戦士とともに殺害されたとロベーラは記している [Ibid.]。

一方、ソトマヨール総督がペルー副王に宛てて1586年2月7日、および同25日に執筆した書簡にも、それぞれ前1585年に起きたプレン要塞の襲撃や、86年に実行されたアンゴル市の襲撃に関する記述の中で、マプーチェ騎馬隊の投入に関する情報が見いだせる。

総督によれば、プレン要塞の襲撃には20名の騎馬兵が投入され、和平先住民を装って近づいて数名の帰順インディオを殺害し牛や馬を略奪した。そして控えていた300名の歩兵隊にこれを渡し、待ち伏せしていたもう一つの300名からなる歩兵隊とともにこれらの家畜を連れ去ろうとしたというのである[CDIHCh, III：293]。

またアンゴル市を襲撃したマプーチェ軍の方は100名の騎馬隊と歩兵隊からなり、3方から市を襲って集落内の家々に放火したことを総督は記している[CDIHCh, III：296]。

なお総督は、アンゴル市の襲撃行為がかつてスペイン人に奉仕していた「ラディーノ・インディオたち」の発案によるものであったことを付け加えている。「ラディーノ・インディオ」とは、スペイン語をはじめとして征服者側の文化要素や行動様式を身につけた先住民を意味するが、この場合はおそらくヤナコーナを指しているものと思われる。

つまりここでも、先述のメスティーソやムラート脱走兵の例と同様に、一旦植民地社会に統合された人物が反乱マプーチェ側に逃亡して、騎馬隊に関

わる軍事戦略を伝授するという事実が観察されるのである。

ただし、この2つのケースのいずれにおいても、騎馬隊が果たした役割は厳密な意味において軍事的なものではなかったことに注意しておこう。なぜならこれらの襲撃において、騎馬隊は馬の略奪の先鋒を務めたり集落の放火行為の一翼を担うことにあったに過ぎないからである。おそらく迅速な移動が可能であるという特徴を見込んで、これらの目的のために騎馬隊が投入されたのであろう。

さらに1590年代の前半にも、マプーチェ騎馬隊に関する記録は残されている。ミゲル・デ・オラバリーア隊長は1593年4月に作製した戦況報告書の中で、同年1月にマプーチェ軍が同時に決行した3つの要塞に対する襲撃に言及している。そのうちアラウコ要塞を包囲攻撃したマプーチェ隊は4000名の槍歩兵（lanzas）隊 と600名の騎馬隊から、そしてある別の要塞を攻撃したのは、600名の槍歩兵隊と300名の騎馬隊から構成されていたと記している[CDIHCh, II：302]。

なおロベーラもアラウコ要塞近辺で行われた戦闘に言及している。彼によれば、やはり300名の騎馬隊を従えたマプーチェが、秩序の取れた形で撤退することによって、600名の歩兵戦士を結集した本隊のところまで要塞守備隊を誘い込むオトリの役割を果たしている [Lobera：551-552]。

この戦闘はアラウコ要塞付近で行われたという説明になっているので、オラバリーアのいう「もう一つの要塞」への襲撃とは攻撃対象が異なることになる。ただ少なくともマプーチェ軍の構成人数に関してはまったく一致しているので、実際には同一の隊による襲撃行為に言及しているものと思われる。

これらの襲撃の対象は要塞や要塞守備隊、すなわち植民地軍施設そのものであり、その点では騎馬隊も一応軍事的な役割を果たしたといえる。ただ、ロベーラの指摘が正しいとすれば、少なくとも300名の騎馬隊の方はあくまでも歩兵本隊のところまで敵軍を誘い出すためのオトリに過ぎず、マプーチェ軍の実質的な戦力の中心は、やはり歩兵隊にあったといえる。

さらにロベーラは、1594年にも200名のマプーチェ戦士が構成する単一騎馬

隊が、白昼堂々と決行したインペリアル市の襲撃に言及し、この時、マプーチェ軍が市内のあらゆる街路を通り抜けながら多くの家に放火したにもかかわらず、100名を超える市守備隊の兵士がこれを食い止めることができなかった、と記している［Lobera：561］。この時も騎馬隊が果たした役割は民家への放火であり、守備隊そのものに対する攻撃ではなかった。

以上の考察から、筆者が参考にすることの出来た同時代の資料の範囲内では、遅くとも1577年にはすでにマプーチェが実戦の中で騎馬隊を使用し始めたこと、そして既に1580年代の後半には、複数の地域のマプーチェの間で騎馬隊の使用がかなり普及していたこと、そして初期に騎馬隊が果たしていた役割は、厳密な意味での軍事攻撃というよりも、主力である歩兵隊の補助戦力として用いられることが多かったといえる。そして、この騎馬隊導入の初期の過程でも、やはり植民地軍からの脱走兵たちがしばしば重要な役割を果たしていたことがわかる。

第5章：クララバの奇襲と第2次大反乱

（1）新しい戦闘スタイルの出現

このように、反乱マプーチェ軍が騎馬隊を使用するようになってから間もない1580年代の後半から1590年代にかけて、複数の植民地関係者が反乱マプーチェたちの採用するようになったある新しい戦闘スタイルに言及している。

1586年当時にチリ総督であったアロンソ・デ・ソトマヨールは、2月7日付けでペルー副王宛てに書簡を執筆している。その書簡の中で彼は反乱マプーチェの戦闘能力の向上に言及し、当時すでに彼らが馬に乗って昼夜の別なく都市近郊にある帰順先住民の集落を襲ったり、「8～10レグア（約40～50キロ）も離れた地点」に夜襲を行ったり、情報を収集したりしていると指摘している［CDIHCh, III：293］。

その数年後の1592年にも、フランシスコ・ルイス神父が国王に書簡を書き送り、騎馬技術の修得によって反乱マプーチェ側が達成した戦闘能力の向上に言及している。神父は彼らの襲撃方法について、「夜間に騎馬形式で行なうことによって、身を危険にさらすことなく襲撃を行っている」と述べ、彼らの襲撃の巧妙さがスペイン人以上であること、メンドーサ総督期（1558年）の時代の戦争の状況とはまるで異なるものになっていることを指摘している[CDIHCh, IV：190]。

翌1593年には、軍人のミゲル・デ・オラバリーア隊長がロヨラ総督の命を受けて、ペルー副王のために戦闘状況に関する覚え書きを作製している。その中でオラバリーアは、当時マプーチェ戦士が「より大きな被害をもたらすある戦闘法」を採用していたことを記している。その戦闘法とは「馬に乗ることによって迅速に行う夜襲」であり、「夜間の間に12～14レグア（約50～60キロ）」移動することによって「最も安全な場所で襲撃行為を行う」ことができること、そして植民地軍側がこれに気が付いて応戦命令を出す頃には「馬の軽快さと迅速さにまかせて危険のない地点まで逃げ去ってしまっているので、これを攻撃することもできない」、といささか自嘲気味に記している[CDIHCh, IV:295]。そして、こうした夜襲によって彼らが日常的に畑を荒らしたり、馬を略奪したり、奉仕先住民を連行したりしているとも述べている[Ibid.]。

また、やはりオラバリーア隊長が同じ1593年に作製した軍事状況に関する報告書にも、マプーチェ騎馬隊が植民地に及ぼしていた被害が記されている。それによれば、彼らが馬に乗って10～12レグア（約40～50キロ）も離れた地点に夜襲をしかけ、公道を襲撃したり、スペイン人の集落に放火したり、スペイン人に奉仕する先住民を攻撃したりしていたという[CDIHCh, IV:406]。

これらの情報を総合すると、反乱マプーチェが騎馬隊を導入することによって、従来の歩兵による質実剛健な攻撃方法とは根本的に異なる新しい戦闘スタイルを生み出していたことがわかる。

それは要するに、騎馬隊の迅速さを生かした奇襲攻撃である。そして、初

期の時期にこのタイプ奇襲攻撃の主な標的になっていたのは、上の証言にも指摘されているように民間の施設であった。

従来の歩兵隊の場合、移動の時間は植民地軍が擁する騎馬隊に比べて劣っていた。したがって、植民地軍との戦闘になることを前提としてこちらから出陣するか、あるいは相手が遠征に出かけた際に堅牢な土地で待ち伏せして奇襲をしかけるか、そのいずれかしかありえなかった。いずれにしても植民地軍そのもの、あるいは要塞などの軍事施設を主要な攻撃の標的に設定するほかはなかったのである。

それに対し、すでに騎馬隊を導入していた16世紀末当時のマプーチェ軍には、相手の軍と衝突することなく植民地への襲撃を実行することが物理的に可能となったのである。

上の証言が示しているように、迅速さに秀でた騎馬隊を投入することによって、わざわざ軍事施設を標的とすることなく、帰順先住民の集落、都市、牧場、公道など民間の施設を奇襲的に攻撃することが出来るようになった。なぜなら、植民地軍側が情報を聞きつけて出動する前に逃げ去ってしまえば勝ちだからである。

もちろん、こうした単一騎馬隊による奇襲戦法が敵方の軍事施設を攻撃するために使用できないわけではない。敵方の軍事施設に対しても単一騎馬隊の形式を取ることによって、より奇襲性の高い攻撃を実行することが行われるようになる。

こうしたタイプの攻撃が極めて大きな効果を生んだ例として、次に第2次大反乱の発端となる1598年のクララバの奇襲について見てみよう。

（2）クララバの奇襲と第2次大反乱

強力な鉄製槍の開発や騎馬隊の導入によって戦闘能力を飛躍的に向上させていた反乱マプーチェ戦士たちが、チリにおける植民地経営の運命を大きく変えてしまう時がやってくる。前述した1598年に始まる第2次マプーチェ大

反乱である。ほぼ6年にわたるこの反乱により、彼らはビオビオ川以南の全地域をスペイン人の支配から実質的に回復するのに成功してしまう。そしてこの大反乱の契機となったのが、1598年のクララバの奇襲である。

第2次大反乱は、トゥカペルの戦いと征服者バルディビアの死を契機として始まる第1次大反乱のほぼ半世紀後に発生している。以下二つの大反乱の発端となったトゥカペルの戦いとクララバの奇襲を、それぞれの戦闘に参加したマプーチェ戦士の数と戦略の点で比較してみよう。

第1次大反乱の契機となった1553年のトゥカペルの戦いにおいてチリの征服者ペドロ・デ・バルディビア率いるスペイン人部隊を壊滅させ、第1次大反乱の契機を作ったカウポリカン率いるマプーチェ勢はいうまでもなく全員「歩兵」であった。そして、その数についてビバルやマルモレホは5万人以上、ロベーラは15万人以上という数字を挙げている [Vivar:288. Marmolejo: 113. Lobera : 334]。

この時代のクロニスタは、王室関係者に対してスペイン人征服者の軍功を意図的に強調する傾向があるので、敵軍の戦士数を誇張している可能性が高い。したがって、これらの数字をそのまま鵜呑みにすることはできないが、この戦闘に参加した反乱マプーチェ軍が極めて多数の歩兵戦士から構成されていたことだけは確かであろう。

それに対し約半世紀後の1598年に実行されたクララバの奇襲攻撃の場合はどうであろうか。

アンガナモンとペランタロ率いるプレンの戦士たちは、インペリアル市からアンゴル市に向かう途中クララバ盆地に逗留したオニェス・デ・ロヨラ総督の部隊に奇襲攻撃をかけ、これを壊滅させることに成功する。

1599年3月12日付けの書簡でロヨラ総督の死亡を国王に報告したアントニオ・デ・ビクトリア神父は、この襲撃を実行したマプーチェ隊が「300名の騎兵」であったと記している。神父はこの襲撃に関する情報を、この戦闘で唯一生きて捕虜となりのちに捕虜交換を通じて生還した兵士から得たと記している [CDIHCh, V : 88]。一方、ロサレス神父の記録では、「400名の騎馬兵」

という数字が挙がっている［Rosales, II：684］。

仮にこれらの数字が何らかの理由で故意に過小評価されたものだと仮定しても、トゥカペルの戦いの時のマプーチェ戦士数とは比べものにならない位小さいものであることは明白である。

また戦闘法についても明らかに相違が見られる。トゥカペルの戦いの時の反乱マプーチェ軍は、討伐に出陣したバルディビア隊をトゥカペルの地に待ち伏せて攻撃している。一方クララバの奇襲の場合は、マプーチェ軍の方が夜間に長距離を走破ことによって気づかれることなく総督軍に接近し、翌早朝に攻撃をしかけているのである。まさに騎馬隊の機動力が可能にした新しいスタイルの奇襲であったといえる。

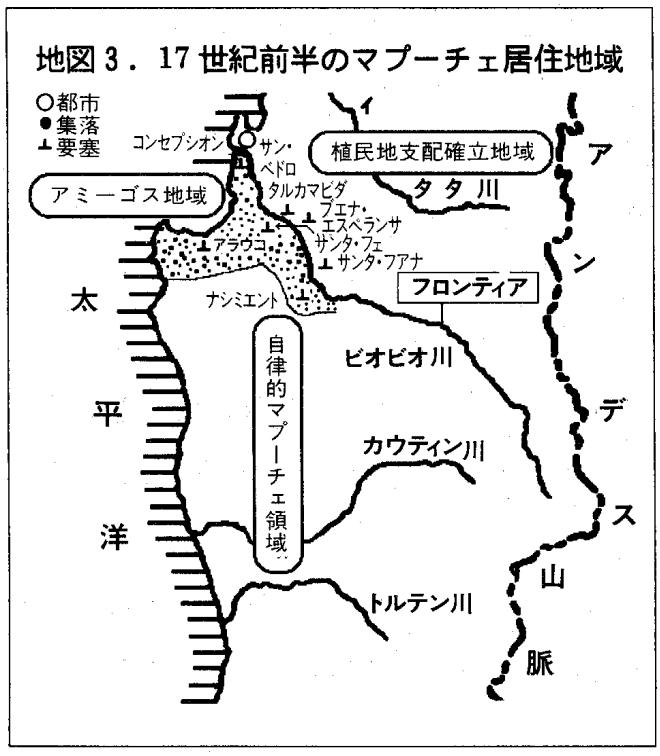
これらの違いは、征服当初の時期からほぼ半世紀の間に騎馬隊を導入することによってマプーチェ戦士たちが達成していた軍事力の向上を象徴する事実だといえる。

当時チリはペルー副王領に属する総督領であった。そしてロヨラは奇しくも、ペルーのビルカバンバの地で植民地支配に対する抵抗を続けていた最後のインカ皇帝トゥパク・アマルの捕獲に貢献した功労者であった。この功績によりロヨラはポトシやラ・プラタなど新大陸の各地で要職を与えられたのち、1591年にチリの最高権威である正規の総督に任命されていたのである。

ペルーにおける植民地支配の安定に貢献したロヨラ総督が、皮肉にもチリにおいて、征服以後最悪の結果を植民地社会にもたらす大反乱の発端を開いてしまったのである。

実際ロヨラ総督殺害に始まるこの第2次大反乱は、トゥカペルの戦いを発端とする第1次大反乱をはるかに上まる決定的な打撃をチリの植民地社会にもたらすことになった。ビオビオ川よりも南の地域にスペイン人が建設し、曲がりなりにも植民地経営が行われていた7つの都市が全て破壊または放棄され、要塞の大半も破壊される。その結果、ビオビオ川が両社会を隔てる実質的なフロンティアとして確立されることになるのである（地図3）。　そして結局のところ、植民地時代から19世紀の末に至るまで、ビオビオ川以南に

居住するマプーチェは実質的な独立状態を保持したのである。



地図3．17世紀前半のマプーチェ居住地域

このように決定的な打撃を植民地社会にもたらすことになる第2次大反乱の最中に行われた数々の戦闘においても、騎馬隊は反乱マプーチェ軍の戦略の中で中核的な役割を頻繁に果たしている。

このようなスペイン人にとって屈辱的ともいえるこうした状況を維持せざるを得なかった要因はいろいろあるが[29]、少なくともその一つが騎馬隊の導入を初めとするマプーチェ軍側の軍事力向上にあったことは間違いがない。

「もし（マプーチェが）馬に乗ったら、奴らを打倒することはもはやできなくなるだろう。」、アロンソ・デ・ソトマヨール総督（1583～92年）はしばしばそう口にしていた、とリベーラ総督は回想している [GayDoc., II: 260]（カッコ内筆者補足）。しかし、ソトマヨール総督の危惧はまさに現実のものとなってしまったのである。

第6章：軍事組織の拡大

上で見たようにマプーチェによる騎馬技術の導入は、チリ植民地社会の運命を大きく変える要因の一つとなった。しかしそれと同時に、マプーチェ社会の構造にある大きな変容を促す要因にもなった。

ロヨラ総督殺害を発端とする第2次マプーチェ大反乱の規模の大きさは、16世紀の末までにマプーチェ軍が広域にわたって効果的な軍事行動を起こすことを可能にするような、ある大規模な軍事組織の出現を想起させる。

ところで冒頭で述べたように、征服当初の頃マプーチェ民族全体を統率するような権威やヒエラルキー構造は不在で、彼らは小地区ごとに分かれて生活を営んでいた。

ペドロ・デ・バルディビアは、1551年9月25日にカルロス5世に宛てて執筆した書簡で、マプーチェ社会が「レボ levo」という単位に分かれていることを指摘し、この「レボ」を単位としてエンコミエンダの付与を行った旨を報告している［Valdivia：170］。

一方、バルディビアに従ってチリ征服に参加した軍人クロニスタのビバルの指摘によれば、当時マプーチェ社会は「レボ」または「レウエ」と呼ばれる1500名～2000名の人口を要する小地区に分かれていた［Vivar：265-266, 272-273］。

それに対し、もう一人の同時代の軍人クロニスタであるロベーラは、レボよりもさらに下位の「カビ cabí」という社会単位の存在を指摘している。各カビには一人の首長がおり、400名の先住民を擁していたという［Lobera:321］。

いずれにせよ、複数のレボあるいはレウエを統括して支配するような上部権威は不在で、各地区の住民たちはそれぞれの首長のもとに独立して生活を営んでいたのである。その点で、自民族集団はもとより多くの他民族集団を単一の権威のもとに結集し、一大領域を築きあげていたインカとは極めて対照的な社会構造をしていたといえる。

こうした地区ごとの独立性は軍事的な側面にも反映されていた。各地区の戦士たちは、自地区の首長の召集に応じて戦闘に参加する義務は有していた(30)ものの、他地区の首長の召集に応じる義務はなかったのである。

ただし、共通の敵といえるスペイン人の征服や支配に対して共闘するということはしばしば行われていた。すなわちある地区の首長が他の地区の首長に使者を送り、その戦士たちを宴会に招いて飲食をふるまい、共闘を呼びかけるという習慣である。こうした戦時協力はすでに第1次大反乱の時から見られた。しかしながら、このような戦時協力はあくまでも臨時的な性格のものであった。つまり、複数の地区の戦士を平時から統合するような軍事組織

は存在しなかったといえる。

だが、遅くともその40年後の1590年代の前半には、レボあるいはレウエよりも一段レベルの高い軍事組織が成立していたことを示す同時代の資料がある。

前述のロヨラ総督の統治期にあたる1593年の4月にミゲル・デ・オラベリーア隊長が作製した軍事情勢に関する報告書はその一つである。この報告によれば、アラウコ、トゥカペル、ビオビオ川周辺の3つの地域は、それぞれ「レボ」を9つ集めた「アイジャレグア」という組織にまとめられており、この3つのアイジャレグアを結集すれば6千～8千の槍兵が召兵できると記している［CDIHCh, IV：292］。なお「アイジャ」とはマプーチェ語で「9」を意味する数字である。

また、同年7月20日に古参の軍人であるマルティン・ルイス・デ・ガンボア提督が著した意見書にも、プレンを筆頭としてリデネゴア、ジョイジーオ、レロモ、ランガロエ、クラロア、ティロア、リクーラ、アンゴリーノという全9地区からなる「コスタ（海岸部）のアイジャレグア」の存在が指摘されている［CDIHCh, IV：308］。

そしてロヨラ総督も1591年に赴任したのち、アラウコ戦争の現状を調査してスペイン国王に報告を行い、反乱地域の軍事構造に関するより包括的な情報を伝えている。1593年4月1日付けで執筆されたその書簡には、当時反乱を維持していた25レグアの範囲の地域には5つの州（provincia）があり、各州には9つの地区（parcialidad）が含まれること、そして軍事面を除いてそれぞれの地区の間に何ら忠誠や従属の関係はないと記されている［CDIHCh, IV：313］。

こうしてみると遅くとも1593年までには、軍事面に限るとはいえ反乱地域の先住民たちが地区であるレボあるいはレグエを9つ集めた、「アイジャレグエ」というより広範な地域に組織化されていたことが明らかになる。

そして、こうした地区レベルを越えた広範な地域を統合する軍事組織が確立される上で、マプーチェが修得していた騎馬技術が重要な役割を果たした

ものと考えられる。

1600年に大反乱の真っ直中にあるチリに赴任したリベーラ総督は、10月12日付けで国王に書き送った書簡の中で、反乱マプーチェ軍の士気の高揚と戦闘行為への習熟に言及し、「彼らは馬に乗っているので、どのような目的のためであっても極めて容易に集結することができる」と指摘している［CDIHCh, VII：24］。

馬に乗ることによって、遠隔の地区に住む首長に戦闘への召集意志を伝えたり、戦事情報を伝達したり、あるいは戦士が移動するために要する時間が飛躍的に短縮されたことは間違いがない。したがって、乗馬技術の導入がより広い地域に居住する戦士を統合する恒常的な軍事組織の形成を促す一因となったことは間違いがない。

こうして彼らは、能率的な戦事召集を可能にする大規模な軍事組織を通じて第2次大反乱を決行し、広範な地域に建設されていたスペイン人都市や要塞の多くを同時期に包囲・攻撃し、事実上ビオビオ川以南の地域からイスパノクリオーリョ系住民を放逐してしまうことに成功したのであった。

なお、こうした軍事組織は17世紀の前半にはさらにその規模を拡大する。アイジャレウエを5つ集めた、より広範な軍事上の領域単位が出現するのである。(31) この領域単位は、「ウタンマポ Utanmapo」、「ブタン・マプ Butan Mapu」、「ブタルマプ Butalmapu」などという名称で文献に記されている。

この広域の軍事領域単位に関する情報は、すでに1629年に捕虜となったピネーダ・イ・バスクニャン隊長の回想に記されている。隊長によれば当時すでに海岸部、平地部、アンデス山脈山麓部の3つの地域を南北に走る3つの「ウタンマポ」という軍事領域が存在していた［Pineda y Bascuñán:40, 144］。

17世紀末に軍人ヘロニモ・デ・キロガが残した記録（1692年執筆）でも、やはり互いに独立した海岸部、平野部、アンデス山麓部の3つの「ブタン・マプ」の存在が指摘されている［Quiroga：27］。

しかし18世紀後半の記録になると、アンデス山脈地域のそれを含めた4つのブタルマプの存在が記され(32)、さらに19世紀の初頭のある記録になると、

より南部に居住する先住民集団ウィジチェのブタルマプを含めた、5ブタルマプ体制の存在が指摘されている(33)。

マプーチェの場合、スペイン人が到来した後の時期に植民地社会と長期にわたって敵対していく過程で、軍事的な側面に限ってではあるが、より規模の大きい社会組織を徐々に形成していったといえる。その意味において、マプーチェ社会はむしろヨーロッパ人による「征服・植民」以降の時期に社会発展を遂げたといってもいい。そしてマプーチェ戦士による騎馬技術の修得は、広範な地域の間の緊密な連絡を物理的に可能にすることによって、このような社会構造の変容を支える重要な要因の1つとして働いたといえる。

第7章：騎馬兵数に勝るマプーチェ

第4章で見たように、クララバの奇襲はそれ自体がマプーチェ軍の戦力の一定の向上を象徴する事件であった。しかしそれと同時に、それを契機として勃発する第二次大反乱が彼らの軍事力をさらに飛躍的に向上させるという結果をもたらすことになった。鉄製尖頭槍の開発に関してはすでにこの事実を指摘したが、騎馬隊の規模に関しても同様な効果を生んだのである。

その第1の表れは、第2次大反乱を境に植民地側と反乱マプーチェ側の馬の保有数の関係が完全に逆転していることである。

大反乱直後の17世紀初頭、マプーチェとの戦闘の最前戦にあたるミジャポア要塞の守備隊長を努めていたゴンサレス・デ・ナヘラは、当時すでに植民地軍が投入できる馬の数をはるかに上回る数の馬を反乱地域のマプーチェたちが保有していたことを示唆している。

同隊長によれば、こうした変化が起こった直接の原因の一つが第2次大反乱にあった。この反乱中に起こった幾多の戦闘で死亡した兵士が乗っていた馬はもとより、放棄されたビオビオ川以南の諸都市や要塞付きの牧場で飼育されていた大量の馬が短期間の間に反乱マプーチェの手に渡ったというのである [González de Nájera：110-111]。

実際に大反乱当時に書かれた記録がゴンサレス・デ・ナヘラの証言を裏付けている。1599年に書かれた多くの記録には、すでに反乱マプーチェ側が大量の馬を植民地側から獲得していたことが指摘されている。(34) そして、1600年に書かれたある書簡によれば、それまでにマプーチェ側が獲得した馬の数は1万頭以上(35)、翌1601年に赴任したリベーラ総督が開催した軍事委員会における軍人たちの証言では、1万5千から2万頭という数字が挙げられている。(36)

これらの数字に多少の誇張は含まれているとしても、反乱マプーチェ軍が極めて多数の馬を短期間に獲得したことは間違いがないだろう。

ロヨラの後を継いで臨時総督の任を務めたキニョネスの功績に関して1599年に作製された調査書の中で、証人となった軍人たちは、マプーチェたちが大量の馬を獲得した結果敵軍の保有する馬の数が植民地軍のそれをはるかに上回っていると証言している［CDIHCh, V：164,175 ］。

またこの時期には、既に16世紀後半に始まっていた馬の略奪法も、略奪行為そのものに騎馬技術を利用することによって向上し、多様化していた。

すでに見たように、1585年には20名のマプーチェ騎馬隊が帰順先住民を装って遠征隊に近づいて多数の馬と牛を連れだし、同伴した600名の歩兵とともにこれを略奪しようとする事件が起きている［CDIHCh, III：293］。

ゴンサレス・デ・ナヘラは、17世紀当初に反乱マプーチェたちが実戦していた次のような略奪テクニックの数々を挙げている。

第一に、夜間植民地軍の本営内に地面に這いつくばって気づかれないように侵入し、牧場で草を食べている馬を連れ去るという方法。

第二に、植民地軍の本営が山岳地に囲まれた地に設置されている場合には、次のような方式も採用された。足首にあらかじめ拍車を履き、槍を足に縛り付けておき、白昼堂々と牧草刈りに精を出すインディオのふりをして現れ、涼しい顔で目星をつけた馬のところまで近づく。そして馬の足枷を外し、電光石火の早業で顎紐をかけ槍を手に持ち変えてその馬に飛び乗ると、スペイン人が追跡をする頃にはもう山岳地に逃げ込んでいるという寸法である

[González de Nájera : 112]。これは上に挙げた1585年の襲撃の時にも使われたテクニックである。

そして最も大胆不敵なテクニックとして、騎馬形式による「強奪」を挙げている。すなわち、やはり白昼堂々と山岳地から軽装の馬に乗った一群の戦士が全速力で牧草地を襲撃し、放たれている馬を槍で追い立てながら力ずくで連れ去ってしまうというものである。この場合にも、追撃するころには山岳地に姿を消しているという [González de Nájera : 112]。(37)

このように、騎馬技術を修得したことが馬泥棒の技術そのものを高めさらに多数の馬を獲得することを可能にしていたことがわかる。

こうした戦利や略奪の他に、既に大量の馬を保有していた反乱マプーチェの間で可能となる、もう一つの馬保有数の拡大要因があった。

同時代の記録者であるアロンソ・フェルナンデス神父は、1605年に反乱マプーチェが多数の馬を投入して決行した大規模な襲撃行為に言及し、彼らが多数の馬を保有するに至った理由として略奪のほか、彼らが保有する雌馬が出産することによる増殖という要因を挙げている [Suárez de Figueroa:35]。

また1612年から実行されていた「防戦」政策（後述）に関して、クリストバル・デ・ラ・セルダが1621年に作製した報告書の中でも、当時のマプーチェ側の馬の増大の要因として、略奪の他に自然増殖が挙げられている [GayDoc., II : 303]。

このように戦勝、集落の放棄と破壊、略奪、そして自然増殖という様々な方法を通じて、17世紀初頭の段階でマプーチェ戦士たちが保有する馬の数は飛躍的に増大していた。そしてその結果、彼らが実戦に投入しうる馬の数、すなわち騎馬隊の規模も急速に拡大していった。

ミゲル・デ・オラバリーア隊長は1594年に作製したアラウコ戦争に関する報告書の中で、当時のマプーチェが「もう500名から600名もの騎馬兵を結集するようになっている」と記している [CDIHCh, IV : 406]。この数値は、騎馬隊が参加した具体的な襲撃に関する前述の情報ともほぼ合致している。なおオラバリーアは、「500～600名」という数字を大きなものという意味を込め

て挙げているのだが、その後のマプーチェ騎馬隊が達成した規模に比べればまだまだ小規模なものであった。

それに対し、大反乱の初期にあたる1599年に、戦況に関して証言を求められた複数の軍人が「インディオ側」の投入可能な騎兵の数を1000名以上と答えており、中には 2000 名という数字を挙げている者もいる［CDIHCh, V：151,160,171,179,193］。

これが翌1600年になると、敵側の騎兵数を7000～8000名、あるいは10000～12000名と推定する証言すら見られる［CDIHCh, V：277,283］。

一方ゴンサレス・デ・ナヘラは、17世紀の初頭時の段階で通常一度の戦闘にマプーチェ側が結集する馬の数は2000から3000頭に達し、少し無理をすれば4000頭もの馬すら戦闘に投入することが可能であったと記している［González de Nájera：108］。また既に挙げたフェルナンデス神父の記録には、1605年に諸都市を攻撃した時のマプーチェ軍が、6000名を超える数の騎馬兵を擁していたと記されている［Suárez de Figueroa：35］。

これらの情報を総合すると、第2次大反乱の前後で反乱マプーチェ軍側が戦闘に投入できる騎馬兵の数は数百名から、どんなに少なく見積もっても2000～3000名に増加したことは間違いがなさそうである。

その反対に、植民地軍側の騎馬隊の規模は大幅に縮小してしまった。

ロベーラは、植民地軍の保有馬数に余裕があった1576から1577年の時点で、戦闘および使役用に投入できる馬の数を1万頭以上と記している［Lobera：488,493］。

また、1591年1月20日に作製された軍事委員会の合意書でも、当時植民地軍が保有していた馬の数として、荷役馬を含めて「4000頭」という数字が挙がっている［CDIHCh, IV：139］。またその2年後の1593年に赴任したばかりのロヨラ総督が遠征のために結集した馬の数を、ロサレス神父は3500頭と記している［Rosales, II：665］。

それに対し、大反乱直後の1599年7月15日付けでキニョネス臨時総督が国王に宛てた書簡には、スペイン人側が結集できる騎馬兵の数がせいぜい40名

に過ぎないのに対し、反乱マプーチェ側が2000名もの騎馬兵を結集することができると記されている [CDIHCh, V : 117]。

これらの数字は、臨時総督であるキニョネスが国王に窮状を訴え、援軍を要請する目的で誇張したという可能性もあるが、少なくともマプーチェ軍側の騎馬兵数が植民地軍側のそれを圧倒的に上回っていた事だけは確かだろう。

ゴンサレス・デ・ナヘラも、17世紀初頭当時毎年夏に行われていた遠征の際にスペイン人側の部隊が結集できる馬の数は通常400頭未満で、要塞守備隊が保有する馬を無理に引っぱり出しても600頭に満たない状況であったと回想している [González de Nájera : 108]。

こうしたイスパノクリオーリョ軍側の保有馬の減少に関し、ゴンサレス・デ・ナヘラは、既に見たように反乱の過程で多数の馬が反乱マプーチェ側の手中に移ったこと以外にも、次のような理由を挙げている。

第一に、馬係として奉仕するエンコミエンダのインディオやヤナコーナが、調教馬を柵の中に乱暴に入れるため、雄馬が足を折ったり、雌馬が流産することがしばしばあったこと。第二に、大反乱後チリに派遣された多数の兵士に分配するため、成長していない幼馬をも駆り出したため、増殖が阻害されたこと。第三にこうして調達された馬も幼馬であるゆえ戦闘には使いものにならず、遠征の途上に疲弊し屠殺されていたこと。第4に、毎年の遠征時、100レグアも離れたサンティアゴ地域で調達された馬の場合、目的地に到着するまでにその多くが死亡するほか、生きて到着しても疲労困憊しており、実戦の役に立たない場合が多かったこと。そして最後に、奴隷やエンコミエンダのインディオとして奉仕していた先住民が反乱地域に逃亡する際、歓迎されるために最良質の馬を略奪し、敵に手渡していたことである [González de Nájera : 108-109]。

なお、チリの総督だったフアン・ハラケマダが国王に宛てた手紙の中にも、この最後のケースに当たる事件が記録されている。それによれば、ビオビオ川北畔に位置するグアルキのエスタンシアのヤナコーナたちが、あるラディーノ・ヤナコーナの扇動でタルカマビダ地区のインディオと共同で反乱を計画

し、2名のスペイン人兵士を殺害したのち、馬を奪って敵方に逃走したいう[GayDoc., II：253]。

同じくハラケマダ総督は1611年当時、ペルー副王に宛てて作製した2通の報告書の中で植民地軍の馬不足状態を促進する経済的要因に言及している。すなわち大土地所有者層が個人的な利潤を追求して、馬よりもラバの飼育を優先させていること、そしてその結果稀少となった馬の価格が高騰し、常備軍の兵士の給与ではとても購入できない状態にあることである[GayDoc., II: 172-173, 247]。

このようにさまざまな要因が重なって発生していたイスパノクリオーリョ軍側の馬不足を解決するために、1608年には当時のガルシア・ラモン総督は、トゥクマンやパラグアイ地方から毎年500頭の馬を調達することをを提案している[GayDoc., II:172-173]。また1611年には、ペルー副王の指示でパラグアイからの馬の調達が実施されていたが、ハラケマダ総督はパラグアイ産の馬の軍事的効用を評価せず、チリ産馬の飼育を奨励するよう副王に提言している[GayDoc., II：247]。

以上見たように、第2次大反乱を境として大量の馬を保有することに成功した反乱マプーチェ軍は、植民地軍をはるかに上回る数の騎馬隊を戦闘に投入することが可能となった。こうして征服期以来、植民地軍の軍事的優位性の一角を構成してきた騎馬隊の相対的効果が消失した結果、植民地当局は騎馬隊に基礎を置いたそれまでの戦略を再検討する必要にも迫られることになる。

第8章：騎馬隊保有がもたらした戦略上の影響

植民地側の軍隊をはるかに上回る規模の騎馬隊を保有したことで、マプーチェ戦士たちの間にはどのような心理上・戦略上の変化が生じただろうか。

大反乱の収拾に当たったアロンソ・デ・リベーラ総督は、1602年7月20日付けの国王への書簡の中で援軍の必要を説き、次のようにその理由を述べて

いる。

「…なぜなら、この敵は大勢で武装も充分であり、スペイン人に対する恐れもかなり喪失してしまっているのです。そして彼らは、保有する多くの馬を使って極めて迅速に当方の制圧地域に出入りするのですが、多くの場合我々はこれをどうすることもできず、どんなに彼らを追跡しようとしても彼らを見つけることすらできないのです…」[CDIHCh, VII : 368]

マプーチェ戦士たちがもはや植民地軍を恐れず、騎馬隊の迅速さを生かして軍からの応撃をかわしながら植民地に対して襲撃を加えていたことがわかる。これは民間施設への襲撃行為に言及しているものと思われる。

またリベーラ総督の時代に、反乱マプーチェ軍に対する戦闘の最前線で活動した軍人ゴンサレス・デ・ナヘラは、インディアス枢機会議議長に宛てて1614年に作製した報告書の中で、次のように述べている。

「これほど大規模な騎馬隊を保有することによって敵の意識に生まれた士気は極めて大きく、騎馬隊を擁して我が方の護衛隊やその他いかなる部隊に対しても、たとえこれが戦闘態勢にあったとしても敢えて攻撃を加えてくるのです。かつて火器に対して畏怖や恐れを抱いていた彼らですが、こうした感情もかなり消失してしまったのです。」[González de Nájera : 113]

こちらの証言からは、騎馬隊の大規模な導入によって飛躍的に軍事力を向上させたしたマプーチェ戦士たちが大いに士気を高め、植民地軍そのものに対しても正面から攻撃して来るようになったことがわかる。

このように、多数の騎馬隊を保有することによって士気を高めたマプーチェ軍が戦略の幅を広げ、対象を選ぶことなく自由に攻撃することができるよう

になったことがわかる。

さらにゴンサレス・デ・ナヘラは、大量の馬を保有した反乱マプーチェたちが「あまりにも勝ち誇り高慢になっている」ので、いかなる和平条件を呈示しようとも帰順の見込みはないだろうと述べ、彼らがしばしば口にしていたという「カスティーリャにまで攻め込もう」という合い言葉にも言及している［Ibid.：116］。

このように騎馬隊の充実によって士気の上がるマプーチェ軍に対し、植民地軍が採用すべき戦略に関してゴンサレス・デ・ナヘラが発している警告は極めて示唆的である。

> 「我がスペイン人軍が犯しているもうひとつの過ちは、敵インディオと初めて出会った頃、彼らが戦闘に長けず、今ほど充実した武器も持たず大胆でもなかったので、初期の軍事的蓄積に欠けていた頃のイメージで彼らの姿を想像していることにある。だから多数の騎馬兵を備えたことで彼らが空を駈けるような機動力を我がものにしたという事実を問題にしようとせず、敵の騎馬隊に関して取るべき慎重な処置を何ら取っていない。こうして敵の騎馬隊に対しては、堅牢な土地において歩兵隊で迎え討つことが極めて有効であることに気がつくこともなく、マスケット銃と槍で武装した（歩兵）兵士を堅固な隊列に組み、秩序ある形でこれに抗戦することがいかに大事なことかに留意しようとしないのである。」**[Ibid.：124]**（下線および小カッコ内訳者）

下線部に注目して頂きたい。こうした戦略をどこかで見てはいないだろうか。征服者が擁する騎馬隊に対抗する戦術として、当時「歩兵」であったマプーチェたちが最も初期に採用した地理的条件の利用である。これは、馬の威力を削ぐために「平地を避け」、「堅牢な土地」に「敵の騎馬隊を誘い込む」という戦法であった。征服者の到来から半世紀たったこの時点で、両者の立

場が完全に逆転してしまっていることに気がつくだろう。

そして、ゴンサレス・デ・ナヘラの提案を数年前に実行した人物がいた。彼が軍人としてチリで活動している時に総督を務めたアロンソ・デ・リベーラである。第2次大反乱の最中の1600年に赴任したリベーラは、アラウコ戦争における騎馬隊重視の戦略の無効さを見抜き、当時ヨーロッパで進行中のフランドル戦争で主流となっていた戦略を参考に、植民地軍を歩兵中心へと再編成したのである［CDIHCh, VII：534,581］。

リベーラは複数の集落をマプーチェ居住地域に渡って林立させるこれまでの植民地経営方式を放棄した。そして、ビオビオ川の両岸に複数の要塞を設置して歩兵中心の守備隊で固め、効果の薄い騎馬隊による無節制な南方遠征を控えることによって、まず同川以北の地域の安定の確立を図ったのである［CDIHCh, VII：493］。こうした戦略のもと、総督はビオビオ川周辺や海岸部のアラウコおよびトゥカペル地区の反乱先住民を和平させ、同地域の戦士たちを植民地軍に対する軍事協力者「インディオス・アミーゴス」に変質させることに成功している。

騎馬兵は征服の時代から軍の花形であり、植民地社会に君臨する上流層のステータス・シンボルでもあった。それゆえ敵マプーチェ軍の戦力向上という厳然たる事実を直視してリベーラ総督が実施した「歩兵重視」戦略を嫌う植民地当局者も少なくなかった。

トマス・デ・オラバリーア隊長は、1602年11月12日に国王に宛てて執筆した書簡の中でリベーラによる歩兵重視の戦略を批判している。この書簡の中で隊長は、敵方が騎馬戦法を採用し、小規模編成でさかんに夜襲を行って家畜を奪うなどの被害をもたらしていると指摘し、だからこそ追撃を行ったり敵地へ乗り込んで懲罰するための騎馬隊がなおさら重要なのだと主張している［CDIHCh, VII：172］。

また、大反乱の最中の1602年から1607年にかけてラ・インペリアル司教としてチリに赴任したドミニコ会のリサラガ神父も、やはり敵地への遠征を重視する観点からリベーラ総督が実行した歩兵重視戦略を批判している［Liza-

rraga：466]。

このように実施当時から植民地当局者らの批判を受けていた歩兵重視の戦略は、リベーラの後を継いだ総督たちによって必ずしも継承されたわけではなく、ゴンサレス・デ・ナヘラ隊長は数年後に同様の指摘を繰り返さざるを得なかったのである。

ただ、歩兵重視戦略の客観的な軍事効果がどうであったかは別にして、征服期以来騎馬隊を主力とする敵地への遠征を戦略の基礎としてきた植民地軍が、マプーチェ軍による騎馬戦略の導入という事実に直面して、戦略や軍の編成に関する根本的な再検討を迫られたことだけは確かだといえる。

そして少なくとも、むやみに敵地に遠征を行う前にビオビオ川を要塞線で固めることによって敵軍の侵入を防ぎ、同川以北の植民地領域の保全を確立するというリベーラの基本方針は、結局のところ植民地時代の末まで基本的には維持されることになる。

第9章：騎馬隊利用法の変遷

既に見たように、第2次大反乱以降植民地軍をはるかに上回る規模の騎馬隊を保有したマプーチェ軍は、いよいよ騎馬隊を戦略の中枢に据えて各地で戦闘を展開するようになる（絵5）。

ここで、騎馬隊が実戦に投入されるようになった16世紀の末から、大反乱を経て17世紀中葉に至るまでの約半世紀間において、反乱マプーチェ軍が具体的にどのような形で騎馬隊を利用していたのか、そしてその利用法がいかに変遷していったのかを観察することにしよう。その際、個々の戦闘における騎馬隊使用の特徴をわかりやすく把握するために筆者が作製した「表1」を参考にする。

この表を作製するにあたって参考にした資料の大半は、書簡、報告書、クロニカ、回想記などの同時代の記録である。それぞれの戦闘の情報源として利用にした資料は、右端の列に記してある。また可能な限り情報の偏りを避

けるために、いくつかの戦闘についてのみではあるが、複数の情報源を参照している。その場合には文献ごとに波線で区切ってデータを区別してある。

絵5．1629年のラス・カングレヘーラスの戦い。絵の上半分にマプーチェ騎馬隊の姿が見える．[Pineda y Bascuñán : 23]

戦闘・襲撃場所の欄で「(植)」とあるのは、植民地軍がマプーチェの居住する地域に遠征を行った際にこれを応撃したマプーチェの騎馬隊に関する情報であることを示している。

「対象」の欄は、マプーチェ騎馬隊が攻撃あるいは襲撃した対象を示している。

また「形式」の蘭で、「単」というのは騎馬隊が単一編成で投入されているケース、「混」というのは騎馬隊が歩兵隊との混合形式で投入されているケースを指す。また「割合」の欄は、混合形式の場合の騎馬隊と歩兵隊の規模を数の上で比較するために設けている。

「？」の記号は、その項目に関するデータが情報源に明示されていないことを示す。

この表に表れる戦士の数については、それぞれの記録が書かれた目的や記録者の立場、あるいはその情報が直接的なものであるか間接的なものであるかなどの要因によって誇張されたり過小評価されたりする場合も少なくないだろう。また筆者が同時代の全ての軍事記録を参考にできたわけでもない。したがって、これらのデータから一体どの程度事実が抽出できるのかという批判がなされうることは筆者も十分に承知しており、以下の結論を断定的なものとする意図もない。

しかし、マプーチェ騎馬隊について書かれてきた過去の研究を検討して見ると、少数の戦闘に関する不十分なデータに基づいて、安易にさまざまな一般的結論を導き出している場合が多い。したがって、こうした形で資料を明

示し年代を追ってマプーチェの騎馬隊使用に関する情報を具体的に呈示すること自体に一定の意義はあると考える。騎馬兵の数に関する個々のデータは不正確な場合が少なくないにせよ、マプーチェによる騎馬隊使用の全般的な特徴やその変遷の大まかな傾向を把握することだけはある程度可能であると思うからである。

（1）騎馬隊の重要性の拡大

まず始めに、騎馬隊の規模と反乱軍の編成の両側面から、反乱マプーチェの戦略全体の中で騎馬隊が占める重要性が拡大したことが指摘できる。

第1に、第7章でも指摘したことだが、第2次大反乱を契機として戦闘に投入される騎馬兵の数が飛躍的に増大している。反乱以前の時期の騎兵数は100～200名から多くともせいぜい600頭程度であった。ところが、第2次大反乱を契機として、より大規模な騎馬隊がほぼ恒常的に、そして広範な地区の戦闘で観察されるにようになっていく。

少なくとも同時代の情報によれば、一度の戦闘に投入される騎馬兵の数は1599年の大反乱の最中に始めて1000名という数が記録され、翌1600年には、異なる地点で8000、6000、3000という騎兵の大軍が観察されている。これ以降もマプーチェの騎馬隊はしばしば1000名を超える規模で記録に現れる。

そして第二に、マプーチェ軍の兵力全体の中で騎馬隊の占める重要性が歩兵隊のそれを凌駕したことが挙げられる。

大反乱以前には、マプーチェの騎馬隊は歩兵隊との混合形式で投入されるケースが多かったことが表からわかる。そして、騎馬隊は数の上で歩兵隊よりも小規模であり、機能の点でも歩兵隊の前衛として敵陣に対する威嚇や挑発を行ったり、敵陣を要塞からおびきだすためのオトリとなるなど、やはり主力である歩兵隊を補助するための副次的な役割を果たす場合が多かった。(38)

表1　マプーチェ騎馬隊変遷

年代	戦闘・襲撃場所	対象	戦士の居住地	形式	騎馬兵人数	歩兵人数	割合	騎馬隊の役割	補足事項	データ出所
1578	インペリアル市	帰順民先住民の畑	プレン	単	200			畑の作物荒らし	メスティーソ、先住民脱走兵の影響？	CDIHCh,II: 353
1580	チジャン市	市街	アラウコ	混	300	300	歩＝騎	威嚇のみ	ムラート脱走者の指導	Lobera: 525
1584	ビオビオ川南岸要塞付近	草薪収集護衛兵	ミジャポア	混	?	?	?	待ち伏せ攻撃の一翼	護衛隊は兵士数名	Lobera: 540
1584	アイジャキーナ岬付近	?	ジベン	混	?	?	?	?	?	Lobera: 541
1585	建設中のプレン要塞	帰順先住民集落、牧場	プレン	混	20	300+300	歩＞騎	ヤナコーナ殺害、家畜略奪の前衛	略奪した家畜は歩兵隊に委託	CDIHCh,III: 293
					100[300]	多数	歩＞騎	要塞前での挑発、応撃	マプーチェ騎馬兵多数死亡	Lobera: 543
1586	アンゴル市	市街	?	混	100	?	?	（歩＋騎）住居への放火	脱走先住民による作戦伝授	CDIHCh,III: 296
1591	プレン要塞	軍隊	?	混	300	600	歩＞騎	オトリ		Lobera:551-552
1592	アラウコ要塞	要塞	アラウコ、クラキージャ、レボ	混	600	4000	歩＞騎	（歩＋騎）要塞包囲		CDIHCh,IV: 302
1592	ある要塞	要塞	同上	混	300	600	歩＞騎	（歩＋騎）襲撃、破壊	アラウコ要塞包囲と同時	CDIHCh,IV: 302
1592	ロンゴトロ要塞	要塞	マヨコ、ペテレペ	単	50			襲撃	ムラート逃亡兵2名、メスティーソ逃亡兵1名の指揮	CDIHCh,IV: 384
1592	ファン・ベルトラン隊長の要塞	要塞	マケゲア、マヨーコ	混	110	90	歩＜騎	（歩＋騎）要塞	ムラート逃亡兵の指導	CDIHCh,IV:384
1592	モルチェン要塞	要塞	マヨコ、ペテレペ、コユンカビ	単	60			襲撃	ムラート逃亡兵3名の指導	CDIHCh,IV:384
1594	インペリアル市	市街(守備隊)	?	単	200			放火	ヤナコーナ殺害	Lobera:561
1594	ヘスス要塞	要塞	プレン	単	500÷3			放火、襲撃		Rosales,II:672
1598	クララパ盆地	総督隊	プレン	混?	400	多数？	歩＞騎？	馬・兵士への奇襲		Rosales,II:684
1599	コンコタル、モルチェン	要塞守備隊	集落の元アミーゴス、プレン衆が召集	単？	400-600				守備隊兵士殺害、元アミーゴスが参加	Rosales,II:696
1599	ビジャ・リカ市	都市	プレン、ビジャ・リカ、トルテン	?	?	?	全10000	要塞の包囲		Rosales,II:703
1600	アンゴル（未遂）	都市？	?	混	8000	6～7000	歩＜騎	?		CDIHCh,V:290
1600	ドニャ・フアナ小川畔	総督隊	?	混	6000	4000	歩＜騎	白昼、平地で正面から攻撃		CDIHCh,V:328,361,364,368
1600	タポン川盆地	総督隊	プレン	混	3000	7000	歩＞騎	白昼、平地で正面から攻撃		CDIHCh,V:329,342,361,369
1600	ビオビオ川南畔	総督隊	コンセプシオン	単	400			攻撃		CDIHCh,V:369
1600	ブエノ川畔	軍隊	?	単	1500-α			待ち伏せ攻撃	捕虜交換を利用	Rosales,II:719
1601			バルディビア、オソルノ	?	300+700	?	全3000	待ち伏せ攻撃		GayDoc.:141-142
1600	ユンベル	軍隊	コユンチェス、プレン？	混	600	4000×2+α	歩＞騎	前衛、挑発、歩兵隊の側面に配置		Rosales,II:727-728
1601	マウレ（計画）	帰順先住民、畑	キネル近辺	混	3000	1000	歩＜騎	和平先住民の挑発、畑荒らし	総督隊侵攻の情報で解散	CDIHCh,VII:139,139
1601	ヘスス要塞	要塞	カティライ	混	[全2000]		歩＜騎?	襲撃		Rosales,II:744
1602	ビジャ・リカ市	要塞・リンゴ採集隊	?	混	[1]	[1]	?	待ち伏せ攻撃、敵の分断	スペイン人捕虜	Rosales,II:756
1602	タルカウアーノ要塞	要塞・エスタンシア	?	?	?	?	?	馬30頭略奪		CDIHCh,VII:498
1602	トメ要塞	要塞・アミーゴス	?	?	?	?	?	アミーゴス住民捕獲		CDIHCh,VII:498
1602	タキグア	帰順先住民地区	チジャン山岳、アンゴル	?	?	?	?	家畜・先住民捕獲		CDIHCh,VII:498-499
1602	キンチャマリ	エスタンシア	カティライ	?	?	?	?	畑の焼き払い、先住民2名捕獲		CDIHCh,VII:499
1602	イタタ（未遂）	エスタンシア	コインチェス、イタタ	?	?	?	?	エスタンシア焼き払い（計画）		CDIHCh,VII:499
1603	「我らがハリ+B35の婦人」要塞建設地付近		?	混	40－600	4000～5000	歩＞騎	偵察＋攻撃（前衛？）	スペイン人、メスティーソ、ムラート逃亡兵十数名が指揮	CDIHCh,VII:353-354
		麦藁収集隊	モルチェン	混	40－700	4300		偵察・オトリ＋前衛隊		Rosales,II:766-767
					1000	4000				Rosales,II:767
1604	アラウコ要塞付近	草刈り護衛4小隊	アラウコ・トゥカペル	混	（前）1000	（前）1000	歩＝騎?	正面攻撃（全5000名）		Rosales,II:781-782
1604	コンセプシオン市	エスタンシア、アミーゴス集落	アラウコ、トゥカペル	?	?	?	?	牛・馬の略奪、アミーゴス住民50～60名捕獲		CDIHCh,VII:499
1604	国王のエスタンシア	エスタンシア	カティライ	?	?	?	?	スペイン人1名捕獲、小型家畜500頭略奪		CDIHCh,VII:499
1604	ゲアルキ、キラコーヤ	アミーゴス集落	カティライ	?	?	?	?	先住民10～12名捕虜、作物刈り取り		CDIHCh,VII:499
1604	タルペルカンガ	アミーゴス集落	コイネチェス	?	?	?	?	先住民女性数名連行		CDIHCh,VII:499
1604	コンセプシオン、チジャン、ビオビオ川畔	アミーゴス集落	アラウコ、カティライ、アンゴル	?	?	?	?	アミーゴスの扇動、アミーゴス、およびその妻子を捕獲		CDIHCh,VII:499
1605	ユンベル要塞近辺	軍隊	?	混	?	?	?	騎兵隊、歩兵隊が同時攻撃	イスパノクリーリョ側が多数の槍と馬を戦利獲得	CDIHCh,VII:557-558

1606	コイプの丘の戦い	総督遠征隊	ブレンその他	混	100-α?	1800-α?	歩>騎	オトリ－攻撃		Rosales,II:805-807
1606	ボロア要塞近辺	要塞守備隊	ボロア、インペリアル、ブレン、ビジャ・リカ、オソルノ他	混	600	3000	歩>騎	待ち伏せ攻撃？	2名の脱走兵の先導	Rosales,II:815-816
		要塞守備隊(木炭収集)	?	単?	多数	―	―	待ち伏せ攻撃	1名のメスティーソ脱走兵の先導	Gonzalez:74-75
1608	パイカピ盆地	軍隊	ブレン、海岸	混	少数－?	1800?	歩>騎	オトリ－歩兵隊の側面に位置		Rosales,II:826
1609	（植）遠征、旧ブレン要塞跡	軍隊	ブレン、インペリアル、トルテン、ビジャ・リカ、アラウコ	混	?	?	(全4000+α)	待ち伏せ攻撃		Rosales,II:835-836
1610	レボ	アミーゴス集落	?	?	?	?	全150以下	襲撃、住民殺害、40名以上捕虜		GayDoc:199-200
1611	（植）ティルーア遠征	遠征隊	ティルーア、コスタ、インペリアル	混	400	1000	歩>騎	攻撃		Rosales,II:845
1611	モンテレイ要塞近辺	要塞	?	単	1-100			挑発・オトリ－待ち伏せ攻撃		Rosales,II:848
1611	（植）バイジャグエン遠征	遠征隊の警護隊	ブレン、インペリアル、トルテン、ボロア	混	?	?	?	護衛隊出発後、本営襲撃の計画(失敗)、戦利目的(銀食器、金の鎖)		Rosales,II:849-850
1612	エリクラ	和平先住民地区、イエズス会士	ブレン	単	200			襲撃、先住民女性90名・子供捕虜		Rosales,II:922
1612	ナシミエント要塞	要塞、アミーゴス集落	ブレン	単	2000			襲撃		GayDoc:316
1612	レボ要塞	アミーゴス集落	チチャコ	?	?	?	?	襲撃、妻子連行、反乱扇動		GayDoc:279
1613	ユンベル	アミーゴス集落	?	単	30			襲撃、先住民女性１名連行		GayDoc:275
1613	モンテレイ平原	?	?	混	80	?	?	?		Rosales,II:930
1613	ビオビオ川以北地域	?	ブレン、インペリアル	混	?	?	?	襲撃	略奪	Rosales,II:931
1613	モンテレイ、ピクル要塞	アミーゴス集落・要塞	ケチェレグア？	単?	40?	?	?	襲撃、要塞放火、先住民女性４名捕獲	追撃不能	Rosales,II:934
1615	カユグアノ（ビオビオ北岸）	アミーゴス集落	?	混	?	?（全200）	?	襲撃	羊略奪	Rosales,II:944
1616	ピクル（ビオビオ川南岸?）	アミーゴス集落	?	単	50			襲撃、アミーゴス住民12名捕獲		Rosales,II:947
1616	ロンゴナバル（アラウコ州）	アミーゴス集落	ブレン	単	200			襲撃、アミーゴス住民20名捕獲	追撃不能	Rosales,II:947
1616	（植）マケゲア遠征（ゲエヌクーカ）	遠征隊	マケゲア？	単	400			応撃(準備)		Rosales,II:947-948
1616	アラウコ要塞近辺	要塞部隊、アミーゴス集落	インペリアル、ブレン	混	1200	600	歩<騎	オトリ＋攻撃		Rosales,II:948-949
1616	パンギアンカの集落（ビオビオ川北岸）	アミーゴス集落	マジョーコ、ブレン	単	240			襲撃、アミーゴス住民60名＋スペイン人女性捕獲１名		Rosales,II:950
1617	（植）ブレン遠征（ルマグエ）	総督遠征隊	ブレン？	混	α-30+400 [3000]	600 [3500]	歩>騎	攻撃＋オトリ＋待ち伏せ		GayDoc:255-257
1617	（植）ブレン遠征（レニーコ）	遠征隊	ブレン	単	大騎馬隊			攻撃		GayDoc:255
1617	ケデーコ盆地	遠征隊？	ブレン	単	9			情報収集		GayDoc:258
1619?	コルクーラ	アミーゴス集落	?	?	?	?	?	集落の襲撃		GayDoc:307
1619?	カヨグアノ要塞	アミーゴス集落	?	?	?	?	?	集落の襲撃		GayDoc:307
1621	ユンベル要塞（ビオビオ川北岸）	ユンベル部隊	ブレン	単	1000			挑戦、正面攻撃、牛134頭、馬90略奪、ﾔｸｺｰﾅ10名捕獲		Rosales,II:977-978
1621	旧アンゴル市跡近辺?	情報収集遠征隊	ブレン？	単	300			襲撃、スペイン人５名捕獲		Rosales,II:979
1621	ネクルゲエノ（ビオビオ川北岸）	要塞・ｱﾐｰｺﾞｽ集落	ブレン	単	1000÷2			ｱﾐｰｺﾞｽ女性・子供120名、ｽﾍﾟｲﾝ人兵士・子供・女性各１名捕獲		Rosales,II:979-980
同上	サンタ・フェ要塞（ビオビオ川北岸）	要塞	ブレン	単	100			ユンベル部隊撹乱、略奪、捕虜	追撃不能	Rosales,II:980
1623	（植）ブレン襲撃	ユンベル部隊	ブレン	単	500			攻撃		Rosales,II:988
1626	アラウコ	アミーゴス集落	エリクラ、海岸	単	230			襲撃未遂	（植）まで追撃	Rosales,II:997
1627	ラハ川北岸	サン・クリストバル要塞歩哨	?	単	40+60			攻撃	馬略奪、追撃不能	Rosales,II:1014
1627	（植）インペリアル襲撃	上級曹長遠征隊	インペリアル	単	700			四方攻撃、捕虜回復、牛・馬・衣類略奪、ｱﾐｰｺﾞｽ隊長捕虜		Rosales,II:1025-1026
1627	キネル（ビオビオ川北岸）	アミーゴス集落	山岳？	単	200			襲撃、情報収集、ｱﾐｰｺﾞｽ住民12名捕虜		Rosales,II:1027
1628	チジャン	エスタンシア	ブレン（遠隔）	単	300			襲撃、多数の宝石・家畜略奪、屠殺人夫捕獲	山脈道利用、ペウエンチェス協力	Rosales,II:1030
1628	ラハ川北岸	エスタンシア？	ブレン	単	200			略奪(未遂)？	（植）待ち伏せ失敗	Rosales,II:1031
1628	国王のエスタンシア付近（ビオビオ川北岸）	エスタンシア	?	単	300			略奪、先住民２名捕獲	追撃不能	Rosales,II:1031
1628	アラウコ要塞、サン・ロセンド要塞	要塞	ブレン	単	400+500+α			２要塞同時攻撃、撹乱攻撃		Rosales,II:1034
	ロンゴナバル	歩哨	ブレン	単	100			上計画発覚、作戦変更、歩哨４名殺害	山岳地へ撤退;追撃不能	Rosales,II:1034
1629	チジャン	エスタンシア？	（遠隔）	単？	?			襲撃、略奪？		Pineda:21-22
		エスタンシア						先住民多数と家畜を略奪		GayDoc:362-363

表1．マプーチェ騎馬隊変遷

1629	ラス・カングレヘーラス	エスタンシア、ユンベル部隊	海岸、平原、山岳	単(混)	800 [<1000]	(?)		襲撃、応撃、スペイン人捕虜		Pineda:22-26
		エスタンシア、採集集隊	?		1000			襲撃、応撃、スペイン人37名、ヤコーナス、アミーゴス兵多数捕虜、多数の家畜・武器獲得		Rosales,II:1038-1039
	コンセプシオン市周辺～ラス・カングレヘーラス	エスタンシア、ユンベル部隊	プレン	?	?	?	?	襲撃、応撃、エスタンシア焼き払い、住民連行；スペイン人・アミーゴス兵多数連行		GayDoc:362
1629	クラーロ川畔	エスタンシア？	?	単	200			襲撃？、略奪目的?	(植) 馬170頭以上押収	Rosales,II:1042
1629	コルクラ要塞	アミーゴス集落、エスタンシア	?	?	?	?	?	襲撃、集落住民の半数を連行、馬700頭略奪		GayDoc:363
1630	ピクルエ（アラウコから３レグア）	アミーゴス集落＋軍隊	海岸、山岳	混	2000	1500	歩<騎	挑発目的で集落襲撃、スペイン人兵捕獲、多数の馬・武器獲得		Rosales,II:1045-1046
					3000	2000	歩<騎	（歩、騎？）集落襲撃、アラウコ部隊と戦闘、部隊兵死亡・捕虜計		Tesillo:18-20
	アラウコ	軍隊	?	?	?	?	全4000	部隊兵25名死亡、25名捕虜		GayDoc:354,371
1630	コヤンコ	アミーゴス集落	プレン	単？	?			襲撃、応撃、住民60名以上捕獲		Rosales,II:1047
1630	（植）プレン遠征（ロス・ロブレス）	総督隊	プレン？	単	400			待ち伏せ攻撃、スペイン人兵捕虜		Rosales,II:1047
1630	サン・フェリペ部隊近辺	エスタンシア	プレン	単？	500			襲撃、多数の財、捕虜獲得		Tesillo:25-26
1630	アラウコ	アミーゴの自宅	?	単？	?			アラウコ部隊の情報収集	馬略奪	Tesillo:36
1630	ランカグア	エスタンシア	プレン及び周辺地区（遠隔）	単	ー			襲撃(中途挫折)、略奪、白人女性捕獲(予定)	元捕虜先住民の指導、山脈道利用、プエルチェに馬を委託	Rosales,II:1061
			?	単？	3000			襲撃（中途挫折）	ー	GayDoc:354-355
		?	?	?	?	?	全1000	ー	サンティアゴ市民が防衛に出動	GayDoc:390
	サンティアゴ	エスタンシア	?	?	?	?	?	事前に捕虜や戦利を分担		Tesillo:46
1631	ペタコ（ラ・アルバラーダ）	要塞	プレン	単？(混)	5000		(歩>騎)	オトリ作戦、騎馬式歩兵	(植) 鞍・ハミ付き馬1500頭押収	Rosales,II:1054-1055
			プレン	?	?	?	全7000		(植) 捕虜、武器、馬多数獲得	Tesillo:38-42
1632	カランパンギ集落	アミーゴス集落	?	?	?	?	?	アミーゴス女性を数名連行		Tesillo:57
			プレン	?	?	?	?	住居放火		GayDoc:396
1633	チジャン	エスタンシア	?	単？	?	?	?	略奪		GayDoc:400
									首謀者クランポア、少人数によるエスタンシア略奪の名人	Tesillo:63
1633	サン・フェリペ隊本営近辺	牧場	?	単？	30	?	?	牧場襲撃、馬略奪（未遂）		Tesillo:71
1635	カティマロの集落	アミーゴス集落	プレン	単	1000以上			襲撃、放火、住民殺害（未遂）		Tesillo:83
1635	クリレボの集落	アミーゴス集落	?	単	?			馬の略奪		Tesillo:83
1635	コルクラ集落	アミーゴス集落	ティルーア	単？	?			馬の略奪		Tesillo:84
1636	フロンティア地域	フロンティア地域	?	単	300			襲撃、情報収集、馬の略奪（未遂）	アミーゴ脱走兵の情報で撤退	Tesillo:93
1937	ビオビオ川北	フロンティア地域	プビンコ	単	200			軍事情報収集	アミーゴ脱走兵の発案、（植）捕虜、馬、武器押収	Tesillo:98
					200(300)				（植）馬・武器押収	Rosales,II:1095-1096
1639	コンセプシオン	市郊外	?	単？	少数？			通行人に対する略奪	元和平先住民が実行	Tesillo:102-103
1639	ネグレテ	守備隊兵士少数	プビンコ	単？	?			馬略奪（計画）、騎馬兵への攻撃、スペイン人兵５名捕獲殺害		Tesillo:103-104

ところが、1600年のアンゴル市への襲撃計画を皮切りに、混合編成の場合であっても騎馬隊は大規模な一隊を形成するようになり、数の上で歩兵を上回るというケースも珍しくなくなっていく。

1600年に行われたドニャ・フアナ小川の戦い、タボン川の戦いという2つの事例では、同時代の証言によればそれぞれ6000名、3000名という大規模な数の騎馬隊が歩兵隊との混合で投入され、平原地帯で正面から堂々と植民地軍に戦闘を挑んでいる［CDIHCh, V：361,368］。

そして、特に1610年代の後半頃からは、「単一騎馬編成」による攻撃や襲撃が圧倒的に多くなって行く。

ただ一口に単一騎馬隊といっても、基本的に二つのタイプに分けることができる。

一つは1000名をこえる大規模な編成であり、主に軍事施設を対象とした本格的な軍事攻撃を目的とする場合に利用されていた形式である。つまり、フロンティア地域に位置する要塞を攻撃したり、反乱地域に遠征攻撃を行う植民地軍に対して応撃を加えたりする時に採用されていた編成であるといえる。

こうした大規模な単一騎馬隊による攻撃の代表的な例として、1621年のユンベル要塞攻撃のケースを見てみよう。

1621年に、フロンティアであったビオビオ川よりも北側、つまりスペイン人が安定的に支配していたはずの領域に位置するユンベル要塞に反乱マプーチェ軍が姿を現した。この時のマプーチェ軍は、リエントゥールが指揮する1000頭の騎馬兵から構成されていた。かつて友好的インディオとしてビオビオ川近辺の集落に居住し、軍事奉仕していたリエントゥールは、ある時植民地軍兵士の不正行為がもとでプレンの反乱先住民地区へ逃亡する。そこで、スペイン人側の軍事体制に関する正確で豊富な知識を生かし、たちまち反乱マプーチェの統率者にのし上がっていたのである。(39)

ロサレスの記録によれば、リエントゥールは要塞隊長に平原で正面から戦うように決闘を申し込むが、兵力不足から形成不利と見たユンベル隊側は静観を決めこむ。あらゆる愚弄の言葉で挑発したにも関わらず応撃なしとみた

マプーチェ隊は、要塞近辺で飼育されていた134頭の牛、90頭の馬、そしてスペイン人に仕えていたヤナコーナ10名を略奪し、意気揚々と帰還したという[Rosales, II：987]。

ユンベル要塞は、当時2部隊から構成されていたチリ植民地常備軍の一方が常駐する、植民地南部の平原部防衛の要所であった。そのユンベル要塞に正面から白昼堂々と勝負を挑み、しかも植民地軍側がこれに対して応撃することすらかなわなかったのである。

これはゴンサレス・デ・ナヘラも指摘していたように、もはやマプーチェ軍が歩兵隊に頼ることなく、もっぱら騎馬兵のみの編成で本格的な軍事施設に戦闘を挑むだけの戦力と自信とを備えていたことを象徴する出来事であったといえるだろう。そしてここでも、やはり植民地軍の軍事事情に通じていた元「アミーゴ」の脱走者がマプーチェ騎馬隊を指揮していることに注意しよう。

一方、こうした大規模編成の騎馬隊による戦闘行為に対し、軍事能力こそ小さいものの、投入頻度の上からいえばむしろより重要な位置を占めるようなったのが小規模編成の単一騎馬隊による襲撃行為である。

勅撰史官のトリバルドス・デ・トレドは、1609年にペルー副王とチリ総督のガルシア・ラモンの間に交わされたアラウコ戦争に関する戦略上の議論を記録している。それによれば、反乱マプーチェ領域との境界地帯に複数の都市と要塞を建設し、そこから敵を攻撃するという副王の提案に対し、総督はその必要性に基本的には同意しながらも、こうしたタイプの襲撃行為に対する懸念を表明している。

すなわち、敵はどこからでもわずか100頭か200頭の騎馬編成でしばしばやって来てはスペイン人を攻撃をしたり、その領地を荒し回っていること、そして彼らがこうした襲撃を、日を変え場所を変え誰にも気づかれず妨害もされずに実行しており、この上なく過酷で骨の折れる戦闘行為である、と[CHCh, 4：43]。

第4章で見たように、こうした少人数編成の単一騎馬隊による襲撃は第2

次大反乱以前から観察されてはいたが、反乱後その頻度をさらに増し、機動力にものを言わせてフロンティア地域においてさまざまな被害をもたらすようになったのである。

（2）単一騎馬形式による経済的性格の襲撃

表によれば、こうした単一騎馬形式による襲撃行為は第2次大反乱以降、特に1610年代から頻発していることがわかる。そして、この種の襲撃の主要な標的となっているのが軍事施設ではなく、2つのタイプの民間施設であることがわかる。それは植民地軍に軍事協力する先住民集団である「インディオス・アミーゴス indios amigos」が居住する集落と、「エスタンシア estancia」と呼ばれる広大な牧場である。

まず、アミーゴス集落への襲撃について見てみよう。

ハラケマダ総督は、1611年5月1日に副王に宛てて作製した報告の中で、当時の反乱マプーチェの標的が植民地軍ではなく和平地域の先住民にあったことを指摘している。そして、こうした襲撃の目的は彼らに圧力をかけて反乱に誘うこと、そして捕獲し連行した住民を奴隷として耕作労働に従事させることである、と総督は記している［GayDoc., II：241-242］。

ハラケマダの後を継いだガルシア・ラモン総督も、ほぼ2年後の1613年4月17日にスペイン国王に宛てた書簡の中で同様の点について指摘を行っている。ラモンは、海岸部に設置されていたパイカビ要塞を撤退したことが同要塞の庇護のもとに帰順していたトゥカペル地区の先住民に与えた否定的な結果を次のように説明している。

> 「…（敵は）我々にではなく、ただ帰順したインディオに対して攻撃をしかけてくるのです。そして、我々が彼ら全てを防衛することはできないので、時にはある地区、時には別の地区へと襲撃を加え、結局何らかの戦利を持ち去ってしまうのです…」[GayDoc., II:271]

アミーゴスを主な標的とした襲撃が大反乱以降の時期に特に盛んに行われるようになるのは、この時期におけるマプーチェの間でのアミーゴス集団の形成のプロセスと関係があるものと思われる。また、植民地当局が1612年から開始した「防戦 guerra defensiva」と呼ばれる穏健的な戦略も、この種の襲撃を促進する一因として働いたと思われる。

そもそも「インディオス・アミーゴス」とは、もともとスペイン人による征服に加担した友好的な先住民集団を指す名称であった。アステカ征服の際にコルテスに協力したトラスカラやインカの征服に助力したエクアドルのカニャリなどの先住民集団を初めとして、スペイン人に協力した先住民の例は新大陸の各地で観察されている。

チリに遠征を行ったアルマグロやバルディビアも、少数のスペイン人兵士の隊に、ペルーのヤナコーナ先住民を多数同行させていた。また、チリ中央部サンティアゴ地域の先住民首長で、一旦は征服者に対して反乱を起こしたミチマロンゴも、のちバルディビアの忠実な協力者としてマプーチェが居住する南部地域への遠征に随行し、軍事的な形で奉仕している。

さらに16世紀の末になると、マプーチェ集団の中にもアミーゴスの例が観察されるようになる。第2次大反乱以前の当時、ビオビオ川以南に存在していた複数の都市や要塞の周辺に居住する集団が、他の地区の反抗的なマプーチェ集団を植民地軍が攻撃する際、これに軍事協力を行うというケースが複数記録されているのである [CDIHCh, III : 231, 447. V : 9.]。

ただ、この時期のマプーチェのアミーゴスは、決して恒常的な性格のものではなかった。マプーチェ居住地域に対する植民地支配そのものが安定していなかったために、ある地域の集団が一時期にアミーゴスであっても、何らかの契機によってのちに反乱を起こすことが頻繁に起こっていたからである。

したがって結局、16世紀後半の植民地軍にとって最も重要なアミーゴスは、早くから植民地支配が確立されていたチリ中北部、すなわちサンティアゴ市およびラ・セレーナ市の管轄内に居住する先住民集団であった。エンコミエンダを通じて個人に委託されたこれらの先住民の一部が、強制的に兵役にも

従事させられていたのである。

だがこの地域の先住民集団は、征服者のもたらした疾病やエンコミエンダを通じて課せられた過酷な労働、さらには永続化するアラウコ戦争のための物資徴発や兵役によって疲弊していった。そしてすでに16世紀末には、この地域のアミーゴスの数は激減し、その戦略的重要性も最小限のものになっていた。(40)

こうして、イスパノクリオーリョ軍の軍事行動を側面から支えていた中北部のアミーゴス集団が事実上崩壊してしまった状況の下で第2次マプーチェ大反乱が勃発する。そして、同反乱によってビオビオ川以南の7都市が破壊されたのち、既に見たようにリベーラ総督の構想に基づき、同川の両岸に複数の要塞が建立される。こうして、ビオビオ川が植民地社会と反乱マプーチェ社会とを隔てる実質的なフロンティアとして確立されることになった。

中北部の先住民がもはや当てにできない状況のもとで、アミーゴス政策のターゲットはフロンティア地域にあたるビオビオ川周辺、およびビオビオ川南岸近郊の海岸部の集団に絞られていく。そして植民地当局は、アミーゴス集団の安定的な軍事協力を確保するため、中北部に居住するエンコミエンダの先住民とは区別された優先的な法的地位を彼らに保証して行くことになる。(41) この点については後述しよう。

こうして、第2次大反乱勃発後の比較的早い時期からビオビオ川両岸地域に居住する集団が和平に応じていたのに続き、1605年にはより南の海岸部に位置するアラウコやトゥカペル地区の先住民も和平を受諾している。これらの地域の帰順先住民たちは、要塞の近くに建てられた集落に集住し、植民地軍に軍事協力を提供するアミーゴスに変質していった。

さて、この時期のアミーゴス集落は地理的にはビオビオ川両岸地域、およびアラウコ地区を中心とするビオビオ川南岸付近の海岸部に位置しており、反乱マプーチェ地域と植民地当局制圧地域の中間にあたる、緩衝地帯を形成していた（地図3）。

それに対し、プレンなどビオビオ川からより遠隔の内地に居住する反乱マ

プーチェ集団にとって、アミーゴスは同じ血を分けた同朋でありながら敵スペイン人に協力する「裏切り者」であり、大きな憎悪の対象であった。

こうした背景から、アミーゴスに対する憎悪を晴らしつつ彼らを蜂起に扇動するために、内陸の反乱マプーチェ集団がアミーゴス集落に対して盛んに襲撃行為を行うようになったのである。そして、この種の襲撃を実行するのに特に好都合な状況を提供したのが、1612年から植民地当局が実施した「防戦 guerra defensiva」であった。

反乱マプーチェに対し実質的な自治を認める「防戦」政策(42)は、境界線を越えて侵攻して来る敵に対し、植民地軍側は応戦してビオビオ川以南に放逐することはできても、境界線を越えて敵地に侵攻することはできないと規定していた。だから反乱マプーチェの立場からいえば、植民地側の制圧地域への襲撃を終えたのち、植民地軍の追撃を受ける前にビオビオ川を越えてしまえば安全ということになる。

こうした防戦の防衛的特徴に触発され、「少人数・単一騎馬隊形式」によるアミーゴス集落に対する襲撃行為が頻発するようになるのである。これらの襲撃の主要な目的は、アミーゴスに対する復讐と彼らの反乱への挑発にあったが、それを果たすための具体的な方法としては、集落に住む女性や子供など一般住民の捕獲・連行、あるいは家畜の略奪という形を取ることが多かった。

そして、こうした特徴を備えた襲撃を実行するのに最も適切な形式は、「単一騎馬隊」の中でも特に「少人数」の編成であった。軍事施設への攻撃が目的ではなく一般先住民の居住地区がターゲットなのだから大編成である必要はない。むしろ少数の方が機動性が高く、敵の要塞守備隊にも気付かれにくい。敵軍がかけつける前に戦利を奪って逃げ切りさえすればこちらのものというわけである。

以下、こうしたタイプの襲撃行為の実例をいくつか観察してみよう。

1612年には、「防戦」の一環として和平を受け入れイエズス会士の派遣に合意したエリクラ地区の先住民集団に対し、反乱の続行を主張するプレン地区の戦士が襲撃を行っている。ロサレス神父は、この襲撃を行ったのがアンガ

ナモン率いる200名の騎馬隊であること、3名のイエズス会士が殺害され、エリクラ地区の先住民女性90名と子供たちが捕虜として連行されたことを記している［Rosales, II：922］。

またリベーラ総督は1612年当時、海岸部に位置するレボ要塞近辺に集住する先住民集落に対して、チチャコ地区の反乱マプーチェがしきりに襲撃を行い、彼らを殺害したり妻子を連れ去ったりすると同時に、蜂起するように彼らに要請していたと記している［GayDoc., II：279］。

一方、リベーラの後を継いで総督となったガルシア・ラモンが1613年4月17日付けで国王に書き送った書簡によれば、同年2月、30名の敵騎馬隊がユンベルのアミーゴス集落に襲撃を行ない、アミーゴス戦士2名を殺害し、先住民女性1名を連行している［GayDoc., II：275］。

またロサレス神父は1616年に発生した複数のアミーゴス集落襲撃について記述している。6月9日には、反乱マプーチェ騎馬兵50名がビオビオ川南岸に位置するアミーゴス集落のピクルを襲撃し、女子供12名を捕虜として連れ去ったという［Rosales, II：947］。

さらに6月25日には、プレンの反乱マプーチェが200名の騎馬隊を組んでアラウコ州のアミーゴス集落の一つロンゴナバル地区を襲撃し、住民の捕虜50名を殺害し、約20名を連行している。翌朝植民地軍が被害を受けたアミーゴスを引き連れて追撃したが、敵は既に撤退したあとであったという［Rosales, II：947］。

そして同1616年、マヨコ地区のマプーチェもプレン地区の戦士を召集し、240名の騎馬隊を編成した。こうしてビオビオ川岸に位置するアミーゴのカシーケ・パンギアンカの集落を襲撃し、60名の先住民とスペイン人女性1名を捕虜にして連行したとロサレスは記している。ただし、ユンベルから出動した総軍曹隊がビオビオ川のネグレテの浅瀬まで追撃すると、捕虜を解放して逃亡したという［Rosales, II：950］。

なお、「防戦」を推進したバルディビア神父に関する報告書を作製したクリストバル・デ・ラ・セルダは、「防戦」が開始された1612年から報告書が作製

された1621年までの10年間に、反乱マプーチェ集団がアミーゴス集落に対して220回もの襲撃を繰り返し、何千人というアミーゴが殺害されていること、そして彼らの妻子が捕虜となり、その財や耕作地も荒らされたり略奪されたりしたと記している［GayDoc.，II：300］。

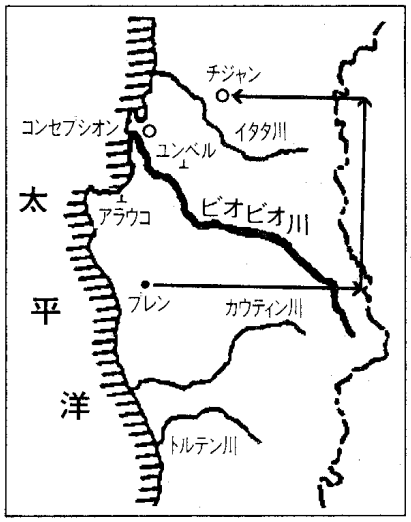
先述したように、アミーゴス集落に対する襲撃の元来の動機は、スペイン人に協力する先住民に対して復讐したり、これに圧力をかけて反乱に誘うことにあり、その意味では軍事的な性格の襲撃であったといえる。

だがそれと同時にこの種の襲撃は副産物として女子供を中心とする一般先住民の捕虜や家畜などを「戦利」としてもたらすものであった。こうした「戦利」は、これらの襲撃が軍事的性格と同時に経済的性格を同時に兼ね備えていたことを示唆している。

次に、エスタンシアに対する襲撃について見てみよう。

エスタンシアに対する襲撃行為も第２次大反乱の最中から観察されてはいた。だが同時代の記録による限り、この種の襲撃が頻度を増すのはやはり第２次大反乱以降である。

地図４．チジャン襲撃（1928年）



大反乱の後に不完全ながらもビオビオ川がフロンティアとして確立すると、大牧場であって農産物の生産も行うエスタンシアが多数存在するコンセプシオン市の周辺やビオビオ川北畔地域、そしてさらに北方に位置するチジャン市周辺地域は、植民地社会南部の住民や常備軍の兵士に食糧や家畜を供給する重要な穀倉・牧畜地帯に変貌して行った。

そして、これらの地域のエスタンシアを標的とした単一騎馬隊による襲撃行為が、少なくとも「単一騎馬隊形式」による襲撃であることを明記する形で頻繁に資料に記録されるのは1620年代末以降のことである。

既に見たアミーゴス集落の場合、植民地のフロンティアに位置し反乱地域

と接しているので、地理的には襲撃しやすい標的であるといえる。ただ、アミーゴス戦士や少数の植民地軍兵士が駐屯する要塞の近くに集落が築かれている場合が多いので、いくら民間施設への襲撃とはいえ反撃される可能性も少なくはない。

それに対しエスタンシアの場合は農村の開かれた空間に位置するので、一旦ビオビオ線を突破して侵入しさえすればアミーゴス集落への襲撃よりも軍事的な脅威は少ない。

ただ、地理的には緩衝地帯であるアミーゴス集落よりもさらに北方の、植民地社会のコントロールが一応確立している地域にあたるため、アミーゴス集落への襲撃以上に機動力が成否を分ける要因になるといえる。

おそらくこうした距離上の困難さから、エスタンシア地域への襲撃はアミーゴス集落への襲撃よりも少し遅れて1620年代の末頃から、やはり単一騎馬編成の、そしてしばしば小人数の形態で頻繁に行われるようになった。

以下、反乱マプーチェが決行した遠隔地に位置するエスタンシアへの襲撃の典型的な事例を二つ観察しよう。

まず、1628年に行われたチジャン市のエスタンシアへの襲撃のケースを見てみよう。チジャンといえば両社会の実質的な境界線であったビオビオ川より約百キロ北方に位置する都市である。そのチジャン市のエスタンシアにこの時襲撃を行ったのはプレン地区の騎馬戦士たちで、それを指揮したのは前述した元アミーゴのリエントゥールであった。

ロサレス神父によれば、リエントゥールはこの時アンデス山脈地域に居住する「ペウエンチェ pehuenche」という異民族から通行許可を取りつけている。こうしてチリの植民地当局に気づかれることなく、山脈内の道を北方に移動したのち、一気に駈け降りてチジャン市の郊外にあるエスタンシアを襲撃する。こうして、多数の牛と屠殺人夫数名を捕虜として連行し、ペウエンチェの居住地区に帰還したというのである（地図4）。翌日報告を受けた総督は、スアソ隊長率いる300名の騎馬隊を討伐に派遣するが、敵は既に帰還した後で追撃空しく帰還する他はなかったという［Rosales, II：1030］。

この襲撃には興味深い点がいくつかある。

まず一つは、これが山脈を利用することによって植民地軍に気付かれることなくビオビオ線を超えて遠隔地をねらうという、単一騎馬隊編成ならではの「迅速さ」と「奇襲性」に富んだ襲撃であったことである。

また、元アミーゴ先住民であったリエントゥールが敵方の騎馬隊を率いて実施していることが挙げられる。おそらく、山脈道を利用するという戦略も植民地側の軍事事情に通じたリエントゥールの提案だったのだろう。これも、マプーチェが馬を同化する長いプロセスにおいてしばしば観察されてきた脱走者の軍事協力の例にあたるといえる。

そして最後に興味を引くのは、反乱マプーチェたちがもともとは異民族であったペウエンチェと軍事的な目的のために接触を行っていることである。ペウエンチェは、通説によれば17世紀後半以降、言語を始めとする文化変容を経て「マプーチェ化」して行ったと考えられている。(43) そして、この事例はすでに17世紀前半から始まっていたこうした軍事面での接触がペウエンチェのマプーチェ化の契機の１つとなった可能性を示唆している。なお、18世紀後半の記録によれば、すでにペウエンチェが「マプーチェ系の地域集団」として「４ブタルマプ体制」の一角を構成するようになっていたことは既に見た。

なお、ラソ・デ・ラ・ベガ総督期の戦闘情勢に関する報告書を1634年３月16日付けで作製した同時代の軍人ロレンソ・デ・アルネンもこの襲撃に言及し、この時の襲撃隊が多数の先住民と家畜とを連れ去ったこと、出撃したチジャン市のコレヒドールが、息子や婿の一人とともに殺害されたことを記している [GayDoc., II：362-363]。

またアルネンは、翌1630年当時のコンセプシオン市域の情勢に言及し、反乱マプーチェによる襲撃の頻発によって、同市域内のエスタンシアが荒廃状態にあったことを記している [GayDoc., II:371-372]。同じ時期に活動した軍人の記録者サンティアゴ・テシージョも、1630年に赴任したラソ・デ・ラ・ベガ総督の軍事業績に関して作製した記録の中で、チジャンのエスタンシア

が同様の状況にあったことを記している　[Tesillo：28]。

次に、騎馬隊の迅速性を生かした遠距離襲撃の中でも最も興味深い例である1630年4月のランカグアのエスタンシア襲撃未遂事件について見てみよう。この襲撃は、参加した騎馬兵の人数が多いので「小規模騎馬隊」による襲撃にはあたらないが、遠距離移動、奇襲性などの点で単一騎馬隊の特徴をフルに活用したものとなっているのでここで取り上げておく。当時の植民地関係者を大いに警戒させたこの事件に関しても、複数の記録者が記述している。

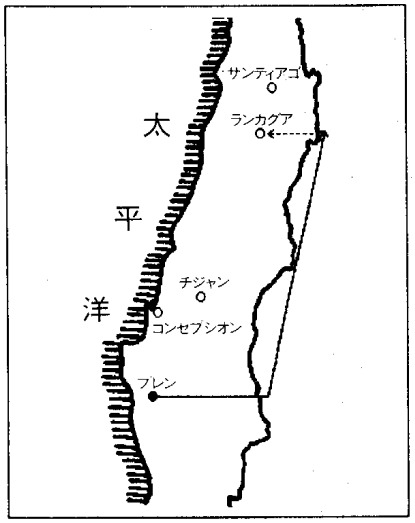
まず、襲撃を計画した首謀者であるグイリパンギという先住民からこの件の一部始終を聴き出したロサレス神父の叙述を見てみよう。それによれば、この襲撃は1631年にプレン地区の反乱マプーチェが決行したもので、チリ中央部サンティアゴ市のすぐ南に位置するランカグア地方の、ある軍人の所有するエスタンシアを襲撃する予定であった。かつて戦争捕虜としてこのエスタンシアで奉仕させられていたグイリパンギが、恋愛沙汰から敵方に脱走してカシーケとなり、プレン周辺の戦士たちに大きな利潤の上がる次のような襲撃計画をもちかけたのである。

まず、プレンからアンデス山脈の東側の道を北上することにより、ランカグアまでの100レグア（400～500キロ）の距離を気づかれずに進行する。そしてランカグア州の緯度まで到達したところで再び山脈を横断し、ふもとにあるガスパール・デ・ソト連隊長のエスタンシアを襲撃する。こうしてグイリパンギは、目当ての白人女性マリア・デ・コルドバを捕獲し、他の参加者も多くの財を略奪する。このような計画であった（地図5）。結局、途中多くの山々や堅牢な道を通らなければならなかったために馬が足を負傷し、ランカグアへ向けて再び山脈を横断する段になって中止された。しかし襲撃参加者は、翌年再びこの計画を実施する予定で山岳に居住する先住民集団プエルチェに馬を託している。結局計画は立ち消えとなったが、この襲撃に関する情報はサンティアゴ市の住民にも伝わり、当局者に市の防衛強化の必要性を認識させたことをロサレスは記している [Rosales, II：1061]。(44)

なお、当時のチリ総督ラソ・デ・ラ・ベガもこの襲撃計画に言及し、襲撃

隊の人数を3000名とした上で、計画中止の原因として馬の足の故障のほか、収穫前の時期ゆえの食糧不足という兵糧上の要因を挙げている［GayDoc., II：354-355］。

地図5



またロレンソ・デ・アルネンも、同総督の統治に関する報告書の中でこの襲撃計画に触れている。アルネンは襲撃隊の人数を1000名とした上で、山脈からランカグアに抜ける峠口を防衛するために、サンティアゴの市民が武装して実際に出動したことを記している［Ibid.:390］。

この襲撃計画の例は、反乱マプーチェが馬を導入することによってチリ中央部という極めて遠隔の、当時のチリ植民地経営の中枢をなしていた地域にまで襲撃を決行する機動力を備えたことを示している。

また、この襲撃を指導した人物がやはり元捕虜奴隷のマプーチェ脱走者であったことも示唆深い事実である。

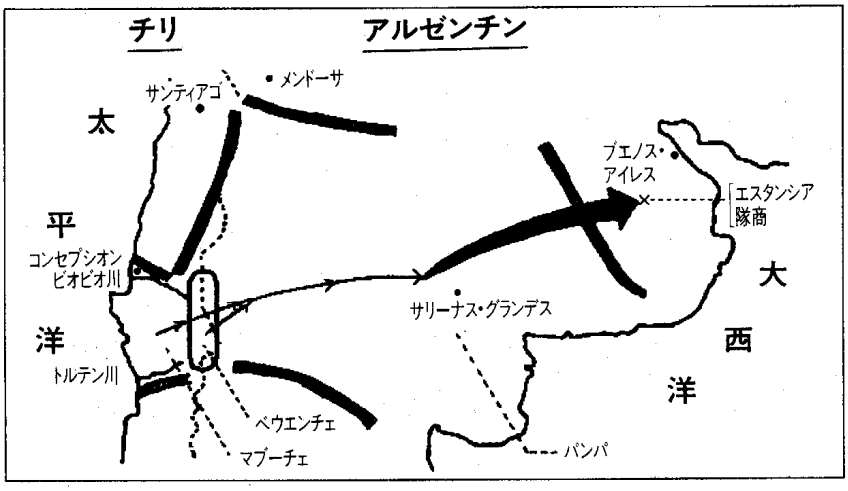
そして襲撃の動機に着目すれば、これが明らかに白人女性の捕獲と家畜などの財の略奪を始めから目的としたものであり、軍事的な性格は希薄で、経済的な性格が濃厚であったといえる。

以上、第2次大反乱以降、特に1610年代頃から単一騎馬隊形式の形でマプーチェ軍が盛んに行っていたアミーゴス集落やエスタンシアへの襲撃について観察した。これらの襲撃の共通点の一つは、主要な「副産物」として先住民の女性や子供、白人の女性、あるいは家畜といった人的・物的な戦利をもたらすことにあった。その意味では、軍事施設の攻撃を主な目的とする伝統的な攻撃とは異なる、経済的な性格を備えた襲撃であったといえるだろう。そして、この種の襲撃を行うのに極めて好都合なのが機動力に富む単一騎馬隊の編成であった。

なお、経済的な性格を備えた単一騎馬隊形式による襲撃行為は、18世紀か

ら19世紀にかけて衰えるどころかむしろ地域的な拡大を見せる。すなわち、チリ側からアンデス山脈を越えて東側に抜け、山脈地域やパンパ地域に住む「マプーチェ化」された先住民と協力しつつ、今日のアルゼンチンにあたるラ・プラタ地域の西側に位置するメンドーサやコルドバ、さらには東側の大西洋岸に位置するブエノス・アイレス市の管轄地域にすら到達し、エスタンシアや商隊を標的とし、白人女性や家畜などの略奪を主な目的とした襲撃行為を繰り返すようになるのである（地図6）。(45)

地図6．18～19世紀の襲撃



こうした民間人を標的とした襲撃行為は、植民地社会や独立後の共和国の存続そのものを危機に陥れるような軍事的な脅威ではなくとも、社会的秩序を著しく乱すという点でチリやラ・プラタ地域の当局者にとっては頭痛の種であったことは間違いない。

植民地時代も末期に近い1784年に、ロンキルモの地においてチリの植民地当局者とマプーチェ代表者たちとの間で開催された交渉「パルラメント」の合意条項の第4項には次のような文句が唱われている。

「4。ブエノス・アイレスのパンパ地域のスペイン人集落に襲撃を行うものは、これを罰するものとする。」[CHCh, X : 147]

なお、17世紀の前半から観察され、18世紀から19世紀にかけてピークを迎えることになるマプーチェの単一騎馬隊によるこうした襲撃行為は、マプーチェ社会のさまざまな側面に変容を促す要因の一つともなった。この問題を本書で詳しく扱う余裕はないが、3つの点について簡潔に指摘しておこう。

まずこうした襲撃が経済面でもたらした変容として、「職業」としての「襲撃」の認識を挙げることができる。そして遅くとも19世紀には、マプーチェが「襲撃行為」を農耕や牧畜といった通常の労働以上に社会的威信に満ちた「正当な職業」として認識していた。

今世紀の初頭にゲバラの編纂で各地のマプーチェがマプーチェ語で残した証言集には、19世紀の中葉において各地のマプーチェたちがこうした襲撃行為を正当な経済活動と見なして習慣的に実行していたことを示唆する証言が見いだせる [Guevara, 1913]。

例えば、19世紀の中葉の時期にテムコに居住していたリエナン一族の創始者ナウェルウェンの生活ぶりに関して、一族の血を引くラモン・リエナンは次のように回想している。

> **"8. ... Ka fentreñma meu akuli kiñe chiñurra Chillan tuglu ta Lorenza piŋelu. ... 12. Kakelu pu lonko egu fentren kullin niefuiηun, itro kümeke kawell muel, tufachi Temuco che re wechan müten ayikefuiηun. "**
>
> 「8。・・・(ナウェルウェンは) それからしばらくたって、ロレンサって名のチジャン出身のチニューラ (白人女性) を (捕獲して) 連れてきたんだ。・・・12。彼以外のロンコたちも多くの家畜を保有していた。それぞれがとびっきりの馬に乗ってな、このテムコもんたちは襲撃以外の事には目もくれなかったもんだ。」**[Guevara(a): 76-77]** (カッコ内筆者補足)

この証言からは、駿馬に乗って行う襲撃で獲得した白人女性を妻にめとり、同じく襲撃で獲得した家畜を生計の糧とすることを誇りとして生きるマプーチェ騎士の姿が浮き彫りになっている。

第二に、こうした襲撃行為はマプーチェ社会がある大きな構造上の変容を

被る過程において、少なくともその一因になったと思われる。社会構造上の変化とは、すなわち民族領域の西方への拡大である。

上記のエスタンシア襲撃の2つの例で、すでに17世紀の前半の段階でもともとマプーチェとは異なる民族であったアンデス山脈地域に居住するペウエンチェやプエルチェと関係を緊密化させていたことは見た。したがって、17世紀後半から18世紀にかけて起こるこれらの異民族や、さらにはアンデス山脈東側に広がるパンパ地域の先住民の「マプーチェ化」のプロセスにも、こうした遠隔地への襲撃の習慣が寄与したと思われるのである。(46)

そして最後に、この種の襲撃行為はマプーチェの社会制度の一つである婚姻の習慣にも影響を与えることとなった。マプーチェの伝統的な婚姻形態は婿方、嫁方双方の合意に基づく「購入婚」であったが、遅くとも18世紀の後半には馬に乗って行う「略奪婚」が最も正当な婚姻形態として確立されるのである。(47)

以上から、第2次大反乱以降の17世紀の前半の時期には、騎兵がマプーチェ軍の主力となったこと、純粋な軍事攻撃とは異なる経済的性格を伴う単一騎馬形式による襲撃行為が盛んとなったこと、そしてこのタイプの襲撃は習慣化することにより、のちにマプーチェ社会のさまざまな側面に大きな変容をもたらす1要因となったといえる。

第10章：「マプーチェ式騎馬兵」の誕生

すでに見たように、16世紀末から実戦に投入されるようになった騎馬隊は次第に戦闘要素としての重要性を拡大して行き、17世紀の前半には完全に反乱マプーチェ軍の戦力の中核の位置を占めるにいたった。

そして、このようにマプーチェの騎馬隊が成熟して行く過程で、ヤナコーナや植民地軍からの逃亡兵など敵方の人的要素がもたらした知識や戦術をマプーチェ戦士たちが積極的に採用してきたことはしばしば指摘した。

だが、彼らは単に植民地軍の騎馬技術の模倣に終止したわけではなかった。

なぜなら武器、馬具、馬の迅速さを促進する儀礼など様々な点で独自の工夫を加えることより、植民地軍の騎馬兵とは弁別されうる独自の「マプーチェ式騎馬兵」に変身して行ったからである。

（1）独特な長槍攻撃法

まず、マプーチェの騎兵が用いていた武器とその攻撃法の特徴を見てみよう。

マプーチェの騎馬隊が登場した1570年代末から80年代にかけての時期に関して、彼らが具体的にどのような武器を携えて戦闘に従事していたかを示す記述を見いだすことは出来なかった。初期における騎馬隊の主な機能が、主力である歩兵隊の補助にあったことを考えれば、記録者の目を引くような強力な武器を携えてはいなかったのかも知れない。

だが、遅くとも第2次大反乱が起こる数年前には、マプーチェの騎士が「槍兵」としての特徴を備えていたことを示す記録がある。

ミゲル・デ・オラバリーア隊長が1594年に作製した軍事報告書では歩兵用の武器と騎兵用の武器が区別され、それぞれ具体的に説明されている。それによれば、当時マプーチェ歩兵が用いていた槍の長さが28～30掌尺（6メートル前後）に達していたのに対し、マプーチェ騎兵が使う槍は「18～20掌尺（4メートル前後）」と短めの長さのものに過ぎなかったことを記している[CDIHCh, IV：406]。

この歩兵槍の長さは、すでに征服当初の時代からマプーチェが用い、植民地軍の騎兵に対抗するために鉄を刃先に用いることによって強化していた長槍のそれと一致している。

それに対し、当初マプーチェ騎兵が用いていた槍は、より短いタイプのものであったことがわかる。

一方、植民地軍の兵士が当時一般に用いていた槍は15～16掌尺（3メートル強）の長さのものであった[CDIHCh, IV：418]。とすれば、マプーチェ騎兵は当初スペイン人騎兵から奪った槍をそのままの形で、あるいはこれをほ

ぼ模倣して作った槍を使用していたのかも知れない。騎馬技術修得の初期の段階でもあり、歩兵と同じ強力な長槍を使うという発想も技術も持っていなかったのだろう。

いずれにせよ、第2次大反乱が発生した頃にはすでに「槍」が歩兵のみならずマプーチェ騎兵の間でも主要な武器として定着していたことを示す記録がある。

クララバの奇襲で殺害されたロヨラ総督の後を継いで臨時総督となったフランシスコ・キニョネスは、1599年7月15日に国王に宛てた手紙の中で、当時反乱マプーチェ側が「槍と盾で武装した2000名から3000名の騎兵」を投入できるようになっている、と記している［CDIHCh, V:117］。つまり、当時すでに騎馬兵は、歩兵用の長槍ほどの威力はないにせよ、「槍」という武器に特化して積極的に攻撃を行う戦士に化していたことがわかる。

しかし1610年代になると、すでに騎馬兵も歩兵が用いていたのと同じ「長槍」を用いるようになっていたことを示す記録が見いだせる。

1611年5月11日にハラケマダ総督が作製したチリ情勢に関する報告書によれば、当時マプーチェ騎馬兵が使用していた槍は、「33掌尺（7メートル弱）」もの長さのものであった［GayDoc., II:239］。これは従来マプーチェ歩兵戦士が用いていた長槍とほぼ同じ長さにあたる。もちろん、植民地軍兵士たちが用いていた槍よりもはるかに長いものであることは言うまでもない。

またハラケマダの後を継いだガルシア・ラモン総督が、1613年4月17日付けで国王宛てに執筆した書簡にも、当時の敵の大半が騎兵であり、彼らの使う槍が植民地軍兵士の槍よりもずっと長いものであることが記されている［GayDoc., II：266-267］。

つまり遅くともこの時期には、マプーチェ戦士たちが敵騎馬兵に対抗するための歩兵用の武器として開発されていた「長槍」を騎馬兵用の武器としても使用するようになっていたといえる。

こうした長槍を用いて彼らは独特の攻撃法を編み出した。マプーチェ騎馬兵の戦闘法についてロサレス神父は次のように叙述している。

「(彼らは) 極めて優れた騎馬技術を持ち、様々な形で転回したり、極めて巧みに槍を操りながら馬で進んでいく。そして戦闘の最前線に到着すると、綱を口でくわえ、その綱で馬を統御しながらあちらこちらに移動し、両の手で槍を握ってあぶみの上に仁王立ちになり、全身の力を込めて恐るべき打撃を繰り出すのだ。彼らの槍の長さといえば25掌尺(約5メートル)、あるいはそれ以上のものもあり、強い力を込めて突くので、どんなに強靭な騎兵でも倒されるかそうでなくとも体勢を崩され、誰か他のものが助けてやらなければやはり倒されてしまうのである。」[Rosales, I : 122] (カッコ内筆者補足)

あぶみの上に立ち、槍を両手で握って力一杯繰り出すという独特のスタイルによる攻撃の威力は相当のものであったと想像される。しかし、こうした戦闘スタイルは、常にマプーチェ戦士の望む効果を上げていたわけではなかったようだ。ロサレスは続けている。

「・・・そして、スペイン人の騎馬隊との間で、互いに槍を構えて戦う段になると、(彼らは) どんな槍兵とでも互角に張り合うことができる。そして彼らの槍の方が長いので、より遠くまで届くのだが、これを両手で握り締め、あぶみの上に立って全身で繰り出してくるので破壊力もより強い。しかし巧みなスペイン人兵ともなれば、この威力にも自分の槍を上回る長さにも怖じ気づくことはない。むしろだからこそ有利だと考える。なぜなら、彼らの攻撃を巧みにはねのけて接近してしまえば、もう彼らは槍を扱うことができなくなる。というのは、突きを繰り出してより遠くまで届くという利点を生むその長さが、槍を手元に引っ込めて再び攻撃を繰り出す際には逆に不利になるからである。」[Rosales, I:123-124] (カッコ内筆者補足)

相手が技術の高い槍騎兵で一度攻撃を交わされてしまうと、むしろこのスタイルと槍の長さゆえに、むしろ不利になることもあったということである。ただ、いずれにせよ、スペイン人の騎兵槍よりも長い槍で一発必勝の決意で突いて来る独自の戦法スタイルこそ、マプーチェ騎士が意識的に開発した方法であった。

（2）軽量馬具・携帯食・感染呪術

さて、こうした独特の武器と戦闘スタイルを用いることによる破壊力のほかに、もう一つマプーチェ騎馬隊はある独自の特徴を備えていた。それは、植民地軍騎馬隊に勝る機動力である。

マプーチェ騎馬隊の卓越した機動力を可能にした要因の一つは軽量な馬具にあった。

1599年8月21日にバルガス・マチューカが国王に宛てて執筆した前述の書簡には、当時マプーチェ騎馬兵が乗馬する際に用いていた3つのスタイルが記されている。すなわち、何も鞍を付けずに顎ひもだけを馬に付けて乗る場合、木製の棒で作った鞍枠のみを付けて乗る場合、そして植民地軍の騎馬兵から奪った鞍をそのまま用いる場合である［CDIHCh, V：121］。

この3番目の鞍は、鉄製の鞍枠を備えた頑丈だが重量の大きいタイプのものである。つまり初期の段階では、少なくとも一部の騎兵が敵から奪った重厚な鞍をそのまま使用していたのである。

それに対し既に17世紀初頭には、マプーチェ騎馬兵の間にはこうした鉄製の鞍を避け、意識的に軽量の鞍を用いるという習慣が確立されていた。

ゴンサレス・デ・ナヘラ隊長は1614年に執筆を完了した記録の中で、17世紀の初頭にマプーチェ騎兵が用いていた鞍の特徴を説明している。それによれば、彼らは重い鞍が馬の疲労を誘うと考え、植民地軍の騎士が用いていた鞍の代わりに木で作った鞍枠に毛糸で編んだクッションを当てたものを使用しており、その重さはわずか6リブラ（3キログラム）程度であった。また

鞍付きの馬を獲得した時にも、真っ先にその鞍を解体して取り除いたり、削ったり、厚さを薄くしたりして出来るだけ重量を軽減するようにしていたという［González de Nájera：114］。

一方ロレンソ・デ・アルネンは、その20年後の1634年に執筆した前述の報告書の中で、当時のマプーチェ戦士たちが用いていた武器を列挙し、鞍にも言及している。アルネンによれば、彼らが用いる鞍は単なる木の枠であり、その重さは1リブラ（約400グラム）以下に過ぎなかったという［GayDoc., II：368］。もし仮に両者の重量計算が正確なものだとすれば、ゴンサレス・デ・ナヘラの時期の木製鞍枠よりもさらに数倍軽量化したことになる。

また17世紀のチリに関する重要なクロニスタの一人であるイエズス会のオバージェ神父は、1646年に執筆終了したクロニカの中でマプーチェ騎士たちの優れた乗馬技術を特筆している。神父によれば、彼らは簡素な鞍を馬に付けるか、さもなくば何も置かずにそのまま馬に乗っていたにもかかわらず、極めて安定した形で馬と一体となり、丘の頂上や坂の上から駈け下る時にも「まるで釘で馬に固定されているかのように」体を起こして揺るぎもせぬ様子で馬に乗っていた、と叙述している［Ovalle：56-57］。

さらに、1674年にクロニカを書き終えたロサレス神父も、当時のマプーチェ騎馬兵の乗馬法に言及し、「粗悪な」鞍を置く場合、藁製のクッションを敷くだけの場合、そして何もつけずに直接馬の背に乗る場合の3つを挙げている［Rosales, I：122］。

こうしてマプーチェたちは、軽量タイプの鞍を置くか、あるいは全く何も馬の背に乗せない形で乗馬することにより、意識的に軽快な馬の走行の実現に努めていたことがわかる。

一方、マプーチェ騎馬隊の軽快さを促進したもう一つの要因として17世紀のクロニスタたちが特筆しているのは、騎士が携帯する食糧の軽微さである。

重武装で乗馬した植民地軍兵士が簡単に馬を疲労させてしまうと考えていたマプーチェ戦士は、食糧や食器などの装備をもなるべく少なくするように努めていたのである。

既に1611年にハラケマダ総督は、マプーチェ騎兵の荷物が水に溶かして「ウルポ」と呼ばれる飲料を作るためのトウモロコシや大麦の粉2リブラ（約1キログラム）を入れた袋だけであるために軽快な移動が可能であるのに対し、植民地軍の騎馬兵が牧草の調達、食糧や寝具の運搬、調理などの目的で各々3名もの下男を引き連れるといった重装備であるため、移動の際にいたずらに時間を浪費していると批判している［GayDoc.：239］。

ゴンサレス・デ・ナヘラも、マプーチェ騎兵は武器を全て各々が自分で運搬し、食糧も巾着状の皮袋に入れた「コカビ」と呼ばれる小麦粉だけであることを指摘している［González de Nájera：111］。

またオバージェ神父もそれからほぼ30年後に、マプーチェ戦士の食糧がトウモロコシの粉、塩、トウガラシのみであり、そして食器も「コカビ」を水に溶かして飲むためのヒョウタンだけであったことを記している［Ovalle：57］。

ラソ・デ・ラ・ベガ総督期（1630～39年）に戦闘の前線で活動したテシージョ隊長は、マプーチェの食糧の軽量さを特筆して「我々もこれに見習うべきである」と記し、常備軍兵士が贅沢な食糧を運搬するために装備が大規模になっている点を批判している［Tesillo：24］。

そして、ゴンサレス・デ・ナヘラはマプーチェ戦士たちがこのような軽装で出陣することによって、馬を疲れさせることなく戦闘に投入できることを指摘し、オバージェ、ロサレスは、同じ理由で彼らが馬を極めて軽快に疾走させることができるという点を特筆している。(48)

さらに、こうした物理的な工夫のほか、馬の疾走能力を増すためにマプーチェ騎士たちが実行していたのは魔術的な処置であった。

ロサレス神父の叙述によれば、彼らは馬の疾走速度を上げるために、鹿やグアナコなど迅速さを特徴とすると見なされていた動物の胆石を細かく砕き、馬に飲ませていた。また、こうした胆石やグアナコやファロージカの皮を馬の足にこすりつけたり、バアリやクレンクレンなど、俊敏に飛翔して果敢に獲物に挑みかかる鳥たちが食用とする草を水に煎じて馬に飲ませたり、これ

らの鳥の羽根でその体を摩擦することにより、これらの動物の敏捷な特徴を馬に伝えようとしていたという [Rosales, I : 120]。こうした処置は、いわゆる「感染呪術」の一種にあたるものだといえるだろう。

このようにして馬具、装備、魔術的処置の適用などさまざまな点で植民地軍の騎馬兵とは区別され、圧倒的な機動力を誇る「マプーチェ式騎馬隊」が誕生した。

すでに1602年、大反乱の収拾に当たっていたリベーラ総督は、国王に宛てた前述の手紙の中で、マプーチェ騎馬隊の神出鬼没的な性格について次のように述べている。

「・・・そして彼らの保有する多くの馬を使って極めて迅速に当方の制圧地域に出入りするのですが、多くの場合はこれをどうすることもできず、どんなに彼らを追跡しようとしても彼らを見つけることすらできないのです・・・」[CDIHCh, VII : 368]

こうして反乱マプーチェが、スペイン人騎馬隊を上回る機動力を備えた騎馬隊を保有していたことは、襲撃の情報を受けてこれを追撃しようとした植民地軍がしばしば空しく帰還していたことからもわかる（表１）。

例えばロサレス神父によれば、1628年に300名のマプーチェ騎馬隊がチジャン市の近郊に位置するあるスペイン人将校の所有するエスタンシアを襲っている。略奪の限りを尽くした上、２名の先住民人足を捕獲して撤退した襲撃隊を、総督自ら隊を率いて追撃するも空振りに終わってしまう。その理由をロサレスは次のように表現している。

「何故ならこのインディオたちはまるでタカなのだ。急旋回して獲物に襲いかかるかと思うと、次の瞬間には再び急転回してこれを連れ去ってしまうのだから。」[Rosales, II : 1031]。

猛禽類の羽根をこすりつけることによって、「飛翔するような俊敏な走行力」を馬に乗り移らせようとしていたマプーチェ戦士たちの努力は徒労ではなかったようだ。

第11章：「アラウカーノ騎馬隊」：マプーチェ騎馬兵との同盟

既に見たようにチリのマプーチェの間では、王室や植民地当局が恐れていた軍事的目的での馬の使用、すなわち騎馬隊の導入が遅くとも16世紀の末には起こっていた。そして、チリ南部における植民地制圧圏を大幅に縮小させる結果をもたらした第2次大反乱を成功に導いた主要因の一つが騎馬隊導入を中核とするマプーチェ側の軍事力の向上であったことも指摘した。

こうして、植民地法制とは裏腹に大規模な騎馬隊を保有する反乱マプーチェ戦士たちは、植民地当局にとって両刃の剣、つまり敵にしておけば脅威であるが、味方につければ頼りになる存在であった。

だが王室にとって、アラウコ戦争は単にチリ総督領内部の問題ではなく、国際的な観点からも真剣に考慮されなければならない懸案であった。なぜならこの問題は、新大陸におけるスペインの支配を脅かす外国の海賊の問題とも直接絡む可能性を多分に秘めていたからである。

（1）反乱マプーチェと外国人海賊の同盟

外国人の海賊が始めてチリの海岸部に到来したのは、第2次大反乱が起こるよりもずっと前の1570年代末、ちょうど反乱マプーチェが騎馬隊を実戦に使用し始めた頃の事であった。

1579年1月、有名なイギリス人海賊フランシス・ドレイクが南米南端のマゼラン海峡を迂回して太平洋を北上した。そしてドレイクの艦隊のうち一隻の船は途中トゥカペル地区の海上に浮かぶラ・モチャ島に上陸したのである。この時島のマプーチェたちは、彼らとともに住んでいた2名のスペイン人の

説得で海賊を攻撃し、撤退させている。(49)

このケースの場合、マプーチェはたまたま島に住んでいたスペイン人の説得に応じ英国人に対して敵対的な態度を取ったため、植民地当局者にとって大事には至ってはいない。

だが彼らは早い時期から、「内なる敵」である反乱マプーチェが「外なる敵」である英国やオランダなどプロテスタント諸国の海賊との間に利害の一致を見いだして軍事同盟を結び、チリにおけるスペイン人の支配を根底から覆えそうと試みることを恐れていた。

こうした懸念はすでにドレイク到来直後の1579年の4月1日にルイス・デ・ガンボア将軍がペルー副王に宛てて書き送った手紙や、アントニオ・カレーニョが国王に宛てて執筆した同年5月6日付けの手紙に表明されている[CDIHCh, II：395,405]。(50)

そして、こうした植民地当局者の懸念は空想の段階には留まらず、しばしば現実のものとなった。

フアン・デ・リバデネイラ神父は、トゥクマンの総督に宛てた書簡の中で、先述のドレイクがチリの海岸部で捕獲した数名の先住民を歓待したのち、使者として先住民の首長のところに送り返し、新大陸からスペイン人を追放するための武器供与や軍事同盟締結の意志を伝えさせたと記している[CDIHCh, III：156]。

こうした軍事同盟の希望は海賊側が一方的に抱いていただけではなかった。

1579年には、チリ在住のあるスペイン人の船が嵐にあいアラウコ地区のカルネロ港に漂着している。この船に乗っていたペレス・デ・バルデス神父が国王に宛てた手紙によれば、この時集まった地区の先住民を前に、航海士が機転を利かせて、彼らが「ルター派」であることを装ったという、そして、スペイン人の集落やコンセプシオン港の攻撃法を説明した上で、そのために先住民の兵員を集めているのだと説明することによって彼らから極めて友好的な待遇を受けたと報告している [CDIHCh, II：16-17]。

また、アロンソ・カンポフリオ・カルバハルが国王に宛てた10月16日付け

の手紙によれば、この時アラウコ地区の先住民は、コンセプシオン市襲撃を陸海から同時攻撃するため、「6000名の槍兵（lanzas）」を拠出することを「ルター派」に約束している［CDIHCh, III：89］。

このケースの場合、だまされた形ではあったものの、先住民の側もスペインと対立するプロテスタント系諸国の海賊の軍事同盟提案を積極的に受け入れる現実的な可能性を示唆していたといえる。

さらにドミンゴ・エラーソが国王に向けて作製した覚え書きの中で、1599年にはやはり英人海賊のリチャート・ホーチスの艦隊が太平洋を北上する途中ラ・モチャ島に立ち寄り、先住民から薪、水、食糧などの供給を受けたという事実を指摘し、太平洋沿岸の防備を強化するよう提案している［CDIHCh, V：17］。

問題はイギリス人に限られたことではなかった。

1599年末から翌1600年にかけて、800名のマスケット銃兵を乗せてロッテルダムを出発したオランダ人海賊オリーフェル・ノルトの艦隊の8隻の船のうち4隻が、マゼラン海峡を渡って太平洋岸のスペイン系植民地を脅かしている。1600年といえば、マプーチェによる第2次大反乱の最中のことである。

この4隻のうち1隻が嵐でチリ南部のチロエ島に立ち寄り、同船の海賊が共闘を提案すると島の先住民もこれに応じ、協力してカストロ市を一時に占領するという事件にまで発展している［CDIHCh, VII：185］。

またロサレス神父によれば、1615年にはモチャ島にオランダ人の船が投錨し、島の住民と友好的に交易を行っている。この時、彼らは島民と軍事同盟を結び、3年後に帰還してバルディビアに要塞を築くこと、スペイン人を駆逐するために軍事援助を行うことなどを約束したという［Rosales, II：945-946］。

1643年にもブラジルに拠点を築いたオランダ人がマゼラン海峡を回ってバルディビア港に上陸し、現地の先住民を集会に招いて彼らに軍事同盟の提案を行っている。この時艦隊を指揮していたオランダ人のブロゥエルとヘルクマンスが残した日記には、この集会にバルディビアの他、トルテン、インペ

リアル、ビジャ・リカ等各地のマプーチェのカシーケや戦士たちが参加したことが記されている［Brower y Herckmans：80-81］。

これらの事例から、イギリス人やオランダ人と反乱マプーチェとの同盟は、単なる杞憂には留まらぬ、極めて現実性の高い問題であったといえる。

（2）和平交渉と反乱マプーチェの「アミーゴ」化

こうした状況の中で、もし反乱マプーチェを敵として放置しておけば、外国人海賊が彼らと軍事同盟を結ぶことによってチリ総督領におけるスペイン人の支配権を覆し、さらには南米の植民地行政の中心地であるペルーの安定を脅かすような事態にもなりかねない。事実そうした懸念を、チリの植民地当局者のみならず王室関係者も早期からから抱いていた［Jara：115］。

結局チリの植民地当局は、騎馬隊の導入によって戦力を飛躍的に向上させ反乱を続けていたマプーチェたちを平定することが困難であるにしても、少なくともその一部を中立化し、さらには彼らを軍事協力者である「インディオス・アミーゴス」に仕立てる必要を強く認識するように至った。既に見たように初期の時代から安定的な形でアミーゴ兵の拠出に応じてきた中北部の先住民人口が激減していた当時の状況のもとでは、なおさらその必要性は大きかった。

こうして、反乱地域のマプーチェを「アミーゴ」に変貌させる必要に直面した植民地当局が彼らに対してどのような法的措置を採用していったのか、そのプロセスを年代を追って見ていくことにしよう。その際、大反乱勃発前の16世紀末から、植民地当局がしばしば開催するようになる「パルラメントparlamento」と呼ばれる和平交渉に注目しつつ、特に従来の「インディオス・アミーゴス」研究では扱われてこなかった「友軍騎馬兵」としてのアミーゴの機能に焦点を当てながら考察を進めていこう。

1591年にチリ総督として赴任したオニェス・デ・ロヨラは、現地の軍人や総督経験者らが提供した軍事情報に基づき、1593年に和平交渉を開催してい

る。この時和平に応じたのは、コンセプシオン市とビオビオ川の周辺、そしてインペリアル市周辺の地区に居住する先住民の首長たちで、それぞれの地区ごとに個別的な形で3つの和平交渉が開催されている。

この時の和平条約の内容を筆記した同時代の資料によれば、当局側が呈示してマプーチェ側が受諾した合意内容の中には、エンコメンデーロに対する労働義務が含まれており、その意味では中北部の先住民に対する待遇との間に何ら差異は見いだせない。

唯一特筆すべき点は、「反乱地域のインディオに対する戦闘を行うために、国王のために便宜をはかり援助する」という項目が含まれている点だろう。また、インペリアル市近辺の先住民との間での個別交渉では、植民地軍が彼らを防衛するという目的で、マケグア要塞の近辺に「集住する」という義務に関する項目も挙げられている［CDIHCh, IV：378-381］。

要するにこの時の和平は、エンコミエンダの義務を課されたままで、同時に軍役にも協力するという伝統的な「アミーゴ」の待遇を反乱マプーチェ側が受け入れるという性格のものであったといえる。

その数年後、ロヨラ総督の死亡を皮切りに始まった第2次大反乱の最中に、リベーラ総督がコンセプシオン市からビオビオ川周辺にかけての地域に居住するマプーチェ集団との間に和平を実現している。この時も、1593年のパルラメントと基本的に同様の条件が呈示され、受諾されている。(51)

その中にはやはり「サンティアゴ市で実施したものと同様の」、エンコメンデーロに対する労働奉仕の義務や、国王の名において総督が課した義務に服するという条項が含まれている。もちろん、戦時にアミーゴ兵を提供する義務も忘れられてはいない。

そのほか敵と交わることを禁止し、敵が侵入した時には当局に報告する義務、領域内を通過する当局側の使者やその他のスペイン人の安全を保障し道案内をする義務など、1593年の和平の時には挙げられていなかったより具体的な戦略上の義務を規定した条項もいくつか含まれている［CDIHCh, VII:439］。

次に、大反乱がビオビオ川周辺地域では鎮火しつつあった1605年、リベー

ラの後を継いだガルシア・ラモン総督は、ビオビオ川のすぐ南部の海岸部にあたるアラウコ・トゥカペル両地域の軍事指導者やカシーケたちに使者を送り、トゥカペル地区内のパイカビの地において、複数のパルラメントを地区ごとに開催している。

これらのパルラメントの場で示された重要な提案の一つは、マプーチェたちの反乱の主な原因であったエンコメンデーロへの強制労働奉仕を廃止し、その代わり「少額の租税（トリブート） tributo moderado」を支払うという条件が定められていることである。ただ労働奉仕義務を廃止して租税に置き換えるという措置は、エンコミエンダを通じて私人に委託されている他地域の先住民に対しても勅令で規定されており、特に特権的な条件とはいえない。

また軍役の義務が唱われている点はこれまでと同様だが、興味深いのは、反乱が起こった際に「国王陛下のために武器を携え、馬に乗って馳せ参じる」と表現されていることである［Rosales, II：786-787］。

つまり、これから和平を結ぼうというアラウコやトゥカペル地区のマプーチェ戦士に対し、彼らを武装解除して馬を没収するのではなく、逆に「国王のために」「騎馬兵」として戦闘にあたることを義務付けているのである。

（3）「アラウカーノ騎馬隊」の登場

既に述べたようにチリでも征服期以来アミーゴ兵は常に存在してきたが、その軍事的な形態はここに至って大きく様変わりしたことになる。

1577年1月2日にキロガ総督が国王に宛てて執筆した手紙には、当時結集することが可能な兵力が、スペイン人500人と1500名の「インディオス・アミーゴス歩兵 infantes indios amigos」であったことが記されている［CDIHCh, II：310］。

このアミーゴ兵がどの地域の先住民であるかは明記されていないが、おそらくその大半がサンティアゴやラ・セレーナといった中北部の先住民で、当時南部に建設されていた諸都市の近辺に居住する、一部のマプーチェ集団が

その残りを占めていたものと思われる。

これらのアミーゴス兵が全員「歩兵」であるのは、当時反乱マプーチェの側ですら少なくとも騎馬隊の本格的な導入は始まっていない頃なのだから当然といえるかも知れない。だが少なくとも当時の植民地当局には、アミーゴ兵に馬術を伝授して積極的に彼らを「騎馬兵」に育てるという発想はなかったのだろう。同時代の総督や軍事関係者の記録にもそうした考えは一切見られない。

しかし1601年に赴任したばかりのリベーラ総督がコンセプシオン市で召集した軍事委員会の議事録には興味深い証言が含まれている。反乱マプーチェの状況について証言した軍人のうち2名が、大反乱以前にアミーゴであったマプーチェの中に「騎兵」として奉仕していた者たちがいたことを示唆しているのである。

そのうちの1名フランシスコ・ガルダメス・デ・ラ・ベガは、当時存在していたアンゴル市の管轄領域内には3000名の帰順先住民がおり、反乱地域に戦闘を行う際に彼らの間から歩兵・騎兵合わせて600名の兵を出動させていたことを証言している［CDIHCh, VII：58］。

一方もう1名の証言者であるフランシスコ・エルナンデスは、やはり反乱で消失したサンタ・クルス市、アンゴル市、ラ・インペリアル市、およびアラウコ地区内に合わせて2000名以上の帰順インディオが住んでおり、戦時に歩兵･騎兵合わせて400名を拠出して本隊を援護していたと証言している［CDIHCh, VII：76］。

両者の証言には、当該する帰順先住民の地理上の範囲、人口数、そしてアミーゴ兵の数においてくい違いが見られる。ただ共通しているのは、大反乱の以前からマプーチェの間にもアミーゴがいたこと、そして少なくともその一部がすでに「騎馬兵」として出動していたという事実である。

大反乱以前の段階では反乱マプーチェが擁する騎馬兵の数は未だ少数であったので、この時期の「アミーゴ騎馬兵」が植民地軍当局者から意図的に騎馬技術の指導を受けたものなのか、あるいは以前反乱していた時期に彼らが習

得していた騎馬技術を、和平に応じてアミーゴとなったのちに、植民地軍当局がそのまま利用したということなのかはわからない。

ただ上で見たように、1605年にアラウコ・トゥカペル両地区の先住民との間で交わされたパルラメントでは、合意条件の中に「騎兵」として戦闘するという義務を明記することにより、公的な形で「アミーゴ騎馬兵」の存在を制度化したともいえるだろう。

ロサレスの記録によれば、その前年の1604年にはアラウコ地区のカシーケたちがトゥカペル地区の戦士の協力を得て騎馬兵1000名と歩兵1000名の混合大部隊を結成し、アラウコ要塞から出発した植民地軍の護送隊を襲撃している [Rosales, II:781-782]。つまりこの両地区は、和平を通じて彼らと同盟できれば実践的な戦力として即時的な効果を発揮しうる規模の騎馬兵を擁していたのである。そして地理的にもこの両地区はフロンティアにあたるビオビオ川に南接する海岸部に位置し、反乱マプーチェに対する防波堤の機能のほか、海路到来する外国人の侵入を封じるという国際的な防衛戦略の視点からも重要な機能を果たしうる存在であった。

したがって、和平に応じたばかりのアラウコ・トゥカペル両地区の元反乱マプーチェ集団をそのまま「騎馬兵」という形で積極的に活用するという方針は、実践的な計算の上になされた選択だったといえるだろう。

そしてロサレス神父は、このパルラメントの後、実際にアラウコ地区の戦士たちがチリ植民地の常備軍に直属する「アラウカーノ騎馬隊 Caballería Araucana」と称する隊に編成され、同地区のカシーケであるナグエルグアラが「将軍 general」の地位に任命されたことを記している [Rosales, II:971-972]。

エルシージャが叙事詩「ラ・アラウカーナ」の中でスペイン人の支配に対するその不屈の戦いを高く唱い上げた「アラウカーノス araucanos」は、すでに17世紀初頭には「騎馬兵」としてスペイン人に軍事協力する強力なアミーゴ兵士に変身していたのである。

（4）フロンティア地区のアミーゴ騎兵の確立

ただ、こうした植民地当局によるアミーゴ政策はそれほど順調にいったわけではない。

すでに見たようにパイカビの和平でリベーラ総督が呈示した条件は、他の地域の先住民と比べて特別に有利な性格のものではなく、むしろ反乱を続ける奥地のマプーチェ集団に対する恒常的な軍事協力の重圧のみが際だっていた。したがって、大反乱の直後から帰順していたこの地域のアミーゴ兵たちはこうした軍役に疲弊し、些細な原因から反旗を翻すことも少なくなかった。

ロサレスの記録によれば、1605年の和平終結後間もない時期に、「アラウカーノ騎馬隊」の「将軍」ナグエルグアラはアラウコ要塞隊長ディエゴ・シモンから受けたある些細な仕打ちがもとで山岳地へ逃亡し、反乱の嫌疑をかけられている。この時には実際には反乱の意図はなかったことが判明し大事に至ってはいない［Rosales, II：791-792］。

だが、翌1606年1月に和平に応じたばかりのモルチェン地区の100名のアミーゴ騎馬隊の場合、同年植民地軍に同行して奥地のボロア地区に要塞を再建する目的で行った遠征は悲惨な結果を生んだ。ロサレス神父によれば、目的地が遠隔であることの不満、そして自分たちを植民地軍の兵士たちみずからが殺害するか、敵の手で殺させるために遠征に同行させたのではないかという疑惑から新アミーゴたちが不満を抱いて反乱し、同騎馬隊の隊長を務めていたカシーケのナグエルブリを殺害してしまったのである［Rosales, II:797-798］。

一旦アミーゴとなった集団が不満を抱き、反乱マプーチェの共闘提案に応じて実際に反乱するケースはこれ以降もしばしば起こったため、当局はより有利な条件をアミーゴに呈示せざるを得なくなった。

反乱地域のマプーチェに対して1612年に実施することが決定された「防戦」に関連してペルー副王が呈示した新たな和平の条件の中には、既に和平に応じていた友好的な先住民に対するより優先的な待遇も含まれている。

すなわち、既に帰順してビオビオ川両岸の集落に居住する先住民集団を王

室の直属とし、エンコミエンダを免除する。そして彼らを国王への奉仕以外いかなる私的労働の目的でも駆り立てることはできず、その奉仕に対しては相当の報酬を支払うというものである［Rosales, II：878-880］。

つまり、フロンティア以北に居住する先住民が未だエンコミエンダの義務を負わされていた状況の中で、フロンティア地域の和平先住民はエンコミエンダを免除され、国王の直属になるという特権的な待遇を受けることになったのである。

エンコミエンダが規定する労働奉仕あるいは租税の支払いの義務に加えて過酷な軍事奉仕を強いられてきたアミーゴが、ここに始めてエンコミエンダを免除され、法的措置の上とはいえ軍事奉仕のみに専念できるようになったのである。

「防戦」の最中にあたる1618年に赴任してきたばかりのロペス・デ・ウジョア総督も、アミーゴを「騎馬兵」として活用している。総督はフロンティア近辺地域の巡回や敵方インディオによる境界侵犯を警備する目的で、アミーゴ兵による複数のマプーチェ騎馬小隊を編成したのであった［Rosales, II: 970］。

だが法制面での優遇措置は必ずしも実態における待遇向上を意味しなかった。前に反乱の汚名を帰せられたことのあった「アラウカーノ騎馬隊」も1614年には実際に反乱を計画している。ロサレスによれば、先に挙げた「防戦」の規定に反してさまざまな私的労働に駆り出されていたアラウコ地区の戦士たちは、ナグエルグアラ「将軍」らを扇動して反乱計画を練ったのである。結局この計画は発覚し、当局は「将軍」ら首謀者を投獄するに至っている［Rosales, II：943］。

このようにアミーゴ先住民に対する安定的なコントロールが未だ確立されていない状況の中で、1620年にはペルー副王によって新たな規定が発布され、アラウコ、トゥカペル、カティライなどフロンティア地域に居住する友好的先住民集団を具体的な地区名とともに指定し、彼らがエンコミエンダを免除されていること、国王直属という特別の地位を与えられていることを再度強

調した上で、国王のための奉仕労働の具体的な内容と報酬額とが明記された[Medina, I：137]。

こうして早い時期から植民地当局との和平のテーブルに着き、漸次的に法的待遇を向上していったビオビオ川周辺地域の集団や海岸部のアラウコ、トゥカペル地区の集団は、遅くとも16世紀の中頃には一応安定的なアミーゴに変貌し、しばしば「騎馬兵」として植民地当局に軍事奉仕を行っていた。

彼らは、個人のエンコメンデーロのもとで租税「トリブート」の支払いを義務づけられていた中北部の先住民と比較すれば、より特権的な法的地位を与えられていたといえる。

ただ、適当な報酬を受け取るという条件付きにせよ、軍役を初めとするさまざまな公的奉仕に従事することが規定されていること、そして居住形態も要塞への集住を義務付けられていることなどから、やはり基本的には植民地社会の支配システムの中にある程度統合されていたといえるだろう。その意味では、彼らを指す表現として18世紀の記録にしばしば見られる「国王陛下の兵士 soldados de Su Majestad」という表現は適切なものであったといえる。

このように、これらの地域の戦士たちが安定的なアミーゴとして定着し始めていた17世紀中葉のアミーゴ騎馬隊に関する情報が、ラソ・デ・ラ・ベガ総督(1630～39)の軍事的功績を年代記的に綴った二つの記録の中に見いだせる。

一つは、軍人であるサンティアゴ・テシィージョが同総督期の軍事情報を一貫して叙述した「チリの戦争 Guerras de Chile」である。そしてもう一つは、ベガ総督期の前半にあたる1630年から34年にかけての時期に関して、ロレンソ・デ・アルネンが作製した報告書である。この二つの記録には、「インディオス・アミーゴス」という漠然とした表現でアミーゴが参加した軍事行為に関するおびただしい量の記述が見られる他、特に「騎馬兵」と明示する形で彼らの働きを記述した具体的な戦闘の情報も複数含まれている。

テシージョによれば、1630年にはピコロエに終結した敵の大軍に対し、アラウコ地区のアミーゴ騎兵200名が同地区の「アミーゴ軍曹 teniente de ami-

gos」であったレンヘルのもと、30名のスペイン人アルカブス銃兵とともに植民地軍の前衛隊として派遣されている［Tesillo：19］。

一方アルネンによれば、31年の1月プレン地区の戦士を中心とする数千名の反乱マプーチェがアラウコ部隊本営を攻撃する目的で進軍する中、総督は兵を率いて敵が逗留するペタコの地に決戦に向かう。この時も総督は自ら前衛に回って、300名のアミーゴ騎馬兵に馬から降りて槍で戦うように指示し、彼らの側面をスペイン人のマスカット銃兵やアルカブス兵で固めさせている［GayDoc, II:381］。この事例については、テシージョも同様の記述を残している［Tesillo：39］。

同じくアルネンによれば、やはり31年に起こったペタコでの戦闘の後に総督自ら軍を率いて反乱地域に進軍した際、ウジマビダの地からスペイン人兵とアミーゴス混合の騎馬隊が前衛隊として派遣されている［GayDoc.,II:384］。

またテシージョは、1636年に総督が海岸部を南方に向けて遠征した際、アミーゴ騎馬兵100名が地理的な情報を収集するために前衛として派遣され、敵方との小競り合いの末5名の戦士を捕虜にしている。さらにこのアミーゴ隊は単独で前進し、ペルルクーラの地でも先住民の女子供60名と首長3名を捕獲したことを記している［Tesillo：91-92］

以上断片的な情報ではあるが、アミーゴ騎馬隊がその機動力と土地勘を買われ、植民地軍の本隊に先だって敵地に派遣され、情報収集や小規模な奇襲攻撃を単独あるいは少数の植民地軍兵との合同で行ったり、敵軍との戦闘の際に植民地軍の前衛隊を務めるなどの役割を果たしていたことがわかる。

（5）奥地のマプーチェ騎兵との軍事同盟

このようにフロンティア地域のマプーチェ、すなわちビオビオ川周辺およびアラウコ地区の集団が17世紀中葉からある程度安定的なアミーゴとして統合され植民地軍に奉仕していたのに対し、より南方の地域に居住する大半のマプーチェ集団の場合は事情が異なっていた。この地域はフロンティアから

地理的に遠隔であるため植民地軍の軍事的圧力が届きにくく、未だ和平に応じてはいなかったのである。単一騎馬隊を率いてチジャンやランカグアに遠征を行ったプレンの戦士たちはその好例である。したがって彼らを中立化、あるいはアミーゴ化したいという植民地当局者の希望は同じであっても、現実的な対応策は異なるものとならざるを得なかった。

これら遠隔地域の反乱カシーケたちとの間にはじめて大規模な形で和平交渉が成立するのは1641年のことであった。キジンの地で開催されたこの和平の席には、すでに信頼のおけるアミーゴと化していたビオビオ川近辺のサン・クリストバル、および海岸部のアラウコ地区から、それぞれの地区のアミーゴの首長が参加し、植民地当局側の代表の一人として、集まった反乱地域のカシーケ衆に和平を促す演説を行っている［Rosales, II：1135］。

この和平交渉の実現に尽力しまた交渉そのものにも列席したロサレス神父の記録には、この時の合意事項が具体的に記されている。

それによれば、この和平の条件にはエンコミエンダやトリブートの義務はもちろんのこと、国王のための奉仕の条項すら含まれていない。また、ラソ・デ・ベガ総督期の攻勢によって再建されていたアンゴル要塞も自主的に撤退することが約束されている。マプーチェ側が保有する捕虜についても、報酬と交換することを条件としてこれを解放することが要請されている。そしてマプーチェ側に課せられた唯一の義務といえば、国王の軍隊に反旗を翻す者に対して武器を取ることであった［Rosales, II：1136］。

もちろん植民地当局は表面的には反乱マプーチェを国王の臣下と見なす姿勢を崩してはいない。しかし彼らにとってこの和平の本質的な意図は、マプーチェに事実上の独立を認めることによって彼らが植民地に敵対することの意味そのものを消失させ、それと同時に軍事同盟的な関係を結ぶことによって、強力な騎馬兵である彼らの軍事力を必要に応じて利用できる道を確保することにあったといえる。

その意味では、植民地システムの中に実質的な形で取り込まれたフロンティア地域のアミーゴとは根本的に異なる、より対等な立場でのアミーゴス化の

試みであったといえるだろう。

外国人海賊の脅威が続く当時の状況の中では、植民地当局にとってこうした選択を取ることはやむを得なかったのであろう。事実、この和平の2年後の1643年にはオランダ人海賊がバルディビアに上陸し、近辺のマプーチェ集団に軍事同盟を提案するという事件が起こっている。

キジンの和平後も、植民地軍による先住民奴隷獲得を目的とする遠征が続行したこともあって、これらの地域のマプーチェとの間の敵対的な関係が全く消滅したわけではなかった。しかし17世紀の後半からさらに18世紀に入って「パルラメント」のシステムが「独立」した地域のマプーチェ集団との定期交渉の手段として制度化されると(52)、彼らとチリ植民地当局との関係もおおむね平和的なものとなって行った。また恒常的な形での交易活動やイエズス会を中心とする布教活動も一定程度の進展を見せて行った。

もともと軍事行動の際にフロンティア近辺のアミーゴ集団を指揮するために置かれていた「アミーゴス隊長 capitán de amigos」は、遠隔地に住むマプーチェ集団のもとにも配置されるようになり、両社会の意志疎通を円滑にする仲介係として重要な機能を果たすようになっていった。(53)

ただこのように植民地社会との友好的な関係を深めていったとはいえ、彼らがチリ植民地社会に統合されてしまったのではなかった。すでに指摘したように、18世紀はまさにチリ側のマプーチェがアンデス山脈を横断して行う遠距離襲撃の最盛期であった [León : 21-63]。騎馬隊の機動力を存分に生かし、マプーチェ化されたアンデス山脈地域の先住民ペウエンチェスやアルゼンチンのパンパ地域の先住民と協力しつつ、アンデス山脈東側近辺のメンドーサやコルドバ、さらには大西洋岸近郊のブエノス・アイレス州のエスタンシアや隊商などを襲撃し、何百頭という家畜や白人女性、あるいは装飾品などを略奪してチリ側に運び去っていたのである。

つまり、チリの植民地当局は軍事的な意味におけるマプーチェの脅威を解消することには成功したが、決してマプーチェを「骨抜き」にしたわけでも、植民地の支配システムに「統合」することに成功したわけでもなかった。植

民地の保全と王室権威の回復をめざすブルボン王朝期の植民地当局者、特にアルゼンチン側の当局者にとり、驚くべき地理的範囲を走破して彼らが頻繁に行っていたこうした襲撃行為が植民地社会の秩序を脅かす頭の痛い問題であることに変わりはなかった。

結局のところ植民地当局は、太平洋を暗躍する外国人海賊の活動という国際的な文脈の中で、武器の向上や騎馬隊戦術の修得によって戦力を飛躍的に向上させていた反乱マプーチェを同盟者に仕立てることを余儀なくされた。そして、フロンティア周辺の集団については一定の特権を認めることによって彼らを「国王の騎馬兵」に変身させることに成功した。しかし、より奥地に居住する大半の集団に対しては、事実上彼らに対する支配権を放棄する代わりに、彼らの軍事協力を確保するという道を選択した。

だが皮肉なことに、こうした王室とマプーチェとの軍事同盟が最も徹底的かつ持続的な形で発現したのは、チリのクリオーリョたちがスペインからの独立を求めて立ち上がった19世紀初頭のことであった。この戦争において大半のマプーチェ集団は軍事協力を求める王党派の呼びかけに応じ、1817年から23年の7年間にわたって独立派軍との間で血みどろの戦いを繰り広げたのである。(54)

もともと「内の敵」である反乱マプーチェや「外の敵」である英国やオランダを想定して結ばれていたマプーチェとの軍事同盟は、結果として新しい「内の敵」ともいえるチリ植民地のクリオーリョ支配者層との戦闘の際に始めて大規模な形で実現することになったのである。

かつてスペイン人の支配に対して徹底的に抵抗したマプーチェが、スペインからの独立をはかるクリオーリョ軍の鎮圧を意図する王党派にとって、最も重要な友軍として行動したのである。この事実は、植民地当局が「独立」的なマプーチェに対して、少なくとも軍事同盟の側面においては一定の影響力を及ぼすのに成功していたことを物語るといえる。「服せずといえども加勢する。」当時のマプーチェ戦士たちが王室に対して抱いていた意識はそのようなものであったのだろう。

そしてこの時王党派を援助するために参戦した各地のマプーチェ戦士たちが、全員騎馬兵であったことはいうまでもない。

第10章：「天に登った」マプーチェ騎馬兵

マプーチェは征服者スペイン人のもたらした馬を軍事的な目的で同化し、既に17世紀の初頭には植民地軍を上回る規模と機動力を誇る騎馬隊を確立していた。騎馬戦略の導入に象徴される軍事力の向上は、彼らが第2次大反乱を通じてチリ植民地社会の運命を大きく変え、彼らのうち大半の集団が事実上の独立を回復する大きな要因として働いた。

しかし「馬」という要素がマプーチェ社会にもたらした影響は、このような世俗的な側面における変化にとどまるものではなかった。

そこで第1部の叙述を終える前に、マプーチェの精神的・宗教的な世界への馬の統合について若干述べておきたい。ただ宗教的世界とはいっても、ここではあくまでも軍事的側面の延長上に位置する問題、すなわち来世観における戦士の霊魂に関する認識の問題に限って考察する。(55)

スペイン人がチリに到来した当時、マプーチェはどのような来世観、あるいは霊魂観を抱いていたのだろうか。また、戦闘中に死亡した戦士の魂はどこへ行きどのような生活を送ると考えられていたのだろうか。

この点に関して、16世紀の資料は極めて乏しい情報しか我々に投げかけてくれない。

戦闘に関する情報の記録に重点を置いていた征服当初の時期のクロニスタの中で、唯一葬礼に関する具体的な情報を記しているのはビバルである。ビバルは、コンセプシオン地域の先住民の儀礼が中央部のサンティアゴ地域の先住民のそれと同じであることを記している。すなわち、ある人物が死ぬと親類一同や友人たちが協力して大量の酒を準備し死者の弔いを行う。3～4日の弔い期間が過ぎると、故人が生前着用していた最も上等な衣服を遺体に着せて棺に入れ、手にはトウモロコシ、マメ、カボチャの種などを握らせ、

縄でしっかりと結びつける。そして、故人が最も気に入っていた場所へ運んで穴を開け、中に瓶、ナベ、椀を入れてやる。これらの品々を埋葬するのは、故人が来世で食べたり、種を蒔いたりするためである［Vivar：235-236］。

この叙述からマプーチェが霊魂不滅を信じていたこと、そして来世においても現世の人間と同じように食べたり土地を耕したりすると考えていたことがわかる。ただビバルの叙述では、征服者軍との戦闘で死亡した戦士の魂の運命については特筆されていない。

それに対し、フランシスコ会士のトラルバ神父とラバネーダ神父の両名は、1578年3月5日付けで国王に宛てて執筆した書簡の中で、当時の反乱マプーチェたちが「自分たちの自由を守るためにスペイン人と戦って死んでいった戦士」は誰でも、来世において神々とともに幸せな生活を送ると考えていたと記している［CDIHCh, II：370］。

また1594年にミゲル・デ・オラバリーア隊長が作製した報告書にも、戦死者が来世において現世よりも多くの妻に囲まれ、贅沢で富に恵まれた生活を送ると信じているので、マプーチェ戦士たちは死を恐れないと記されている［CDIHCh, IV：411］。

これらの情報からは霊魂不滅の観念の他、植民地軍との戦いにおいて死亡した者の魂が、来世において神とともに特権的な生活を送ると考えられていたことがわかる。

さらに、17世紀の後半に執筆されたロサレス神父のクロニカには、マプーチェ戦士たちの死後の運命についてより詳しい情報が含まれている。スペイン人との戦闘中に勇敢に戦って死んだ祖先の霊は雲のところまで登り雷や稲光となる。これらの霊は「ピジャン pillan」と呼ばれ、死後の世界でも現世と同じように戦士として生き続ける。そして、やはり雲に登ってピジャンとなったスペイン人兵士の霊と空中で戦闘を続行し、稲光を発射し合う。だからマプーチェたちは空中に雷がとどろくと、マプーチェ戦士のピジャンがスペイン人兵士のピジャンと戦闘している証拠だと解釈するのだと神父は記している［Rosales I：155］。

ロサレスの叙述から、死亡した戦士の霊は来世でただ裕福な生活をするのではなく、植民地軍兵士の霊との間で戦闘を続けるという観念を当時のマプーチェたちが抱いていたことがわかる。つまり、現世における植民地軍とマプーチェ軍の間での戦闘は来世、あるいは霊の世界にまで持ち込まれていたといえる。

ただ、戦士の霊ピジャンが「騎馬兵」の姿で戦うことを示唆するような情報は一切含まれておらず、「馬の霊」の存在に関する言及もない。つまり、マプーチェが軍事的な側面では完全に馬を同化していた17世紀の後半の段階でも、死後の世界では彼らは馬に乗らず、あくまでも「歩兵」として戦うものと認識されていたと推定されるのである。言い換えれば、騎馬兵はあくまでも現世限りの姿に過ぎなかったと思われるのである。

この推定は、葬礼や埋葬品に関する情報によって裏付けることができる。やはりイエズス会士のオバージェ神父が1646年に刊行した記録によれば、葬礼の場では女性が遺体を囲んで長い間弔いの歌を歌い、墓穴には食糧やチチャとよばれるアルコール飲料、衣料や宝飾品を添えるという習慣があった[Ovalle:98]。一方、ロサレス神父もマプーチェたちの葬礼の習慣に言及し、故人が現世で身につけていた衣装、装飾品、あるいは武器を遺体とともに墓穴に埋め、故人の魂が空腹を感じないように羊（あるいはリャマ）や山羊を犠牲にしてその血を散布することが記されている［Rosales, Ⅰ：156]。

17世紀の中葉と後半に書かれたこれらの二つの記録の情報に共通しているのは、当時の葬礼において馬が犠牲にされたり何らかの意味で馬が重要な役割を果たしていたことを示す叙述は一切見られないことである。また埋葬品の中にも、武器が含まれる一方、拍車やあぶみといった馬具の類は含まれていない。そうしてみると、やはり戦士した人物の霊が来世に向かって馬で旅立つ、あるいは来世で馬に乗るとは認識されてはいなかったと考えられる。言い換えれば、馬は来世においては未だ存在空間を与えられていなかったのである。

しかしその１世紀後の18世紀後半には、戦士の霊はこれとは異なった姿に

変身していた。

イエズス会士のミゲル・デ・オリバレス神父は、1767年に著したクロニカの中でやはり空中でのピジャン同志の戦闘に言及している。ところが神父は、降雪が引き起こす鈍い音を「馬がヒズメを踏みならす音」であるとマプーチェたちが解釈していたことを記しているのである [Olivares:51]。つまり、マプーチェの戦士たちは来世でも馬に乗り、スペイン人兵士の魂との間に「騎馬戦」を展開すると認識されていた、と推定されるのである。

またオリバレスは葬礼にも言及し、ある男性が亡くなるとその葬儀の際には遺体とともに「故人が愛用していた馬のうちの一頭」と武器とを墓穴に埋めると記している [Olivares:52]。1787年にやはりイエズス会士のイグナチオ・モリーナ神父が執筆したクロニカにも同様の叙述が見られる [Molina：172-173]。

一方フランシスコ会のソルス神父が1780年に著した記録には、マプーチェが一般にチチャ、肉、炒り小麦粉などの食糧の他、馬具一式を墓穴に埋めるとする一方で、当時すでに「マプーチェ化」されていたアンデス山脈に住むペウエンチェたちの場合、これらの墓品を埋めた上でより大きな穴を開け、故人が愛用していた馬を「鞍もハミも付けた状態で埋葬する」と記している [Sors：186-187]。

これらの情報から、遅くとも18世紀の後半にはマプーチェ戦士が現世のみならず来世においても武器を手にして馬に乗り、騎馬兵として植民地軍兵士の魂との間に戦闘を続けると認識されるようになっていたといえる。

16世紀における征服者の到来当時「インカのリャマ」として認識され、長いプロセスを経てマプーチェが重要な軍事要素として同化していた「馬」は、ここに至って彼らの精神世界にも一歩を踏み入れたといえる。

なおさらに後の時代になると、マプーチェの精神的世界において馬が占める空間はこうした植民地軍との戦闘という軍事的・歴史的な含蓄を離れ、より一般的な性格の宗教儀礼のコンテクストにも広がっていく。すなわち、善悪二元論の発想に依拠して行なわれる祈願儀礼や治療の儀礼において、馬は

人間の生活にさまざまな悪い影響をもたらすと認識されている悪霊「ウェクフ wekufü」を除去したり駆逐したりするのに極めて有効な要素として認識されるようになるのである。

第1部結論

マプーチェたちが当初「インカのリャマ」として誤解認識した馬は、長いプロセスを経て征服者の恐るべき武器から頼りになる戦闘要素へと大きな変貌を遂げた。

征服当初の時期に、圧倒的な威力を誇るスペイン人の騎馬隊に対し、彼らは地理的条件を利用した戦略や武器の向上などの対抗的戦略を開発していった。しかしその後マプーチェはみずから騎馬技術を習得し、既に16世紀末にはこれを実戦で利用することを開始した。そして第2次大反乱達成後には大量の馬を保有することによって植民地軍の騎馬隊を数・機動力の点で上回る大規模な騎馬隊を出現させた。こうした騎馬隊は要塞や遠征軍に対する軍事的な攻撃における主戦力と化したのみならず、植民地当局に友好的な先住民の集落やエスタンシアを目標とした経済的性格を伴う襲撃行為もしばしば実行するようになり、植民地当局の頭痛の種となっていた。

こうした状況の中で、植民地当局は反乱マプーチェに対し、チリの他地域の先住民よりも特権的な条件を呈示することによって和平を結び、反乱時や外国人海賊の到来時に彼らの軍事力を積極的に活用する可能性を模索した。こうしてフロンティア近辺の集団はある程度統合することに成功したものの、より奥地に居住する大半のマプーチェ集団は実質的な独立状態を保持した。

17世紀の後半以降、パルラメントの制度化などを通じ両社会の関係はむしろ平和的な交流が優勢となっていく。しかし、それと同時に18世紀はマプーチェが騎馬隊の機動性をフルに生かして、アンデス山脈を超える遠隔地への襲撃行為を頻繁に行うようになった時期でもあり、チリ、ラ・プラタ両地域の植民地当局者にとって、マプーチェは王室の権威が極めて脆弱な形でしか

及ばない、自律的な存在であり続けた。

このようにマプーチェたちが独立性を保持するための重要な要因として働いた馬は、世俗的な戦闘のみならず、来世における戦闘において戦士霊が乗りこなす要素としても認識されるようになった。

本書では、ヨーロッパ人がもたらした「馬」という要素のマプーチェによる同化の問題を軍事的側面に限定して検討した。しかし、この要素の導入は軍事的な側面のみに留まらず、時間の流れとともにその機能は彼らの生活の他の諸側面にまで浸透していく。世俗的な生活に限っても食糧、衣料、住居の素材としての実利的な機能、婚資やステータス・シンボルの象徴としての社会的な機能、そしてフロンティア地域の植民地住民との交易における商品としての経済的機能などが挙げられる。また彼らの精神的・宗教的世界においても、祈願の儀式や治癒儀礼などにおける「魔除け」の要素として重要な役割を果たすようになる。つまり、馬はマプーチェの生活のありとあらゆる側面において、重要な要素として統合されるに至ったのである。

なお、今日の治療儀礼において馬が果たす役割については本書の「結び」で触れることにする。

第1部注

（1）カラウエにおけるギジャトゥン儀礼については、拙稿 (1995) 参照。

（2）マプーチェ文化における銀細工の宗教的機能については、拙稿 (1997) 参照。

（3）第1部の執筆にあたり、摂南大学の篠原愛人先生、大阪外国語大学の染田秀藤先生にお世話になった。篠原先生にはメキシコの先住民の馬に対する初期の反応に関する情報を含むサアグーン著「コディセ・フロレンティーノ」の英語対訳版を見せて頂いた。また染田先生は、先住民の馬の保有に関する王室の法的規制に関する情報と資料を提供して下さった。両先生に感謝致します。

（4）Lagos (1951). Leiva (b) (1981-1982).

（5）Villalobos y otros (b) (1982). León (1991). Ruiz-Esquide Figueroa (1993).

（6）軍事以外の側面における馬の同化の問題は、今後の課題の一つとして追求したいと考えている。

（7）赤澤他遍 (1992)、第1巻、p. 207. および、赤澤他遍 (1992)、第2巻、p. 219.

（8）なお、チリのヨーロッパ系住民にとっては、逆に「ウィンカ」という表現が

「差別用語」として認識されることもある。

私は1997年夏にチリ南部を訪れた際、ルマコに住むイタリア人移民の血を引く友人の家を訪れた。その時、会話の中で「ウィンカ」という表現を用いたところ、その友人の姉である中年女性に注意された。彼らにとって「ウィンカ」という呼び名は「泥棒」というニュアンスを含む差別用語だから使用するべきではない、という説明であった。

（9）Lobera, p. 269。

（10）ロベーラの記録では、この戦いにおいてマプーチェ隊は銅の先端をつけた槍を前に突き出して密に隊列を組むことによって騎馬兵の突撃を防ぐことに成功したことになっている [Lobera : 307]。おそらくロベーラはこの戦いをアンダリエンの戦いと混同しているのだろう。

（11）なおマルモレホによれば、これらの地域よりは北に位置するがビオビオ川よりは南にあたる平原の地プレンのインディオたちも、1553年にトゥカペルの戦いにおいてバルディビアが死亡したという情報を得た後に決起し、プレン要塞に駐留するわずか8名のスペイン人兵士隊に攻撃をしかけているが、やはりアルカブス銃と馬に恐れをなして敗走したと記している [Marmolejo : 119-120]。

（12）『ラ・アラウカーナ』には邦訳がある。（エルシーリャ著、吉田秀太郎訳、1992年、1994年）

（13）ロベーラによれば、ラウタロは1555年、2万5千名のマプーチェ部隊を率い、トゥカペルの戦いに続く戦闘の中で一旦放棄されその後再建されていたコンセプシオン市を再度攻撃する。この戦闘の最中にも彼は部隊を一時撤退させ、太陽熱が地面をより熱く照りつける時刻まで待たせて馬の動きを削ぐという戦略を実行し、戦闘を勝利に導いている [Lobera : 354]。

（14）Vivar, pp. 297-298. Marmolejo, pp. 124-126. Lobera, pp. 343-345. なおこの時マプーチェ部隊を率いた指導者は、マルモレホによればアラウコ地区の首長であるペテグエレン、ロベーラによれば総大将のカウポリカンであったということになっている [Marmolejo : 124. Lobera : 344]。

（15）ロベーラは、1550年のコンセプシオン要塞への襲撃の叙述の中でも、緊密な隊列を組み、「槍」を構えて馬の攻撃を防ぐマプーチェ戦士を描いている [Lobera:307]。

また同じく1550年、コンセプシオン市の建設後市内に築かれた要塞を襲撃した先住民の戦闘法にも言及し、「槍兵が固まり、騎馬兵に打破されないように槍を前方に突き出して構えたので、被害をほとんど受けることなく、馬を大いに傷つけていた」と記述している [Ibid. : 307]。

（16）17世紀のチリに関する最も重要なクロニカを残したイエズス会のロサレス神父も、征服当時にマプーチェが使用していた槍は、木製の先端を付けたものであったと指摘している [Rosales, I : 123]。

（17）なお少し時期は後になるが、勅撰士官のトリバルドス・デ・トレドも1637年に執筆を終えたクロニカの中で同様の叙述を行っている。トレドは当時、チリの先住民戦士がスペイン人から入手した短剣、ナイフ、剣の刃を使って多数の槍を製造して

いたこと、そして彼らがこれらの武器を戦利として獲得するほか、要塞に駐留する兵士の貧窮につけ込み、和平を装って物々交換を行うことによって彼らから入手していることを指摘している [Tribaldos de Toledo : 20]。

(18) 第2次大反乱前の植民地軍兵士の窮状については、19世紀後半のチリを代表する歴史学者ホセ・トリビオ・メディーナが編纂した「未公刊資料集 Colección de Documentos Inéditos」に多くの情報が見い出せる。(Tomo III, p. 114, p. 236, p. 450. Tomo IV, p. 200. Tomo V, p. 276. など参照。)

(19) CDIHCh, II, p. 303. III, p. 26, p. 289, p. 435, p. 450. IV, p. 286, p. 374.

(20) ペルーにおけるチリの悪評とアラウコ戦争への徴兵を嫌う風潮については、CDIHCh, IV : 332,425,433 ; V : 11. 参照。なお、ロドリゴ・デ・キロガが総督としてチリに赴任したときに随伴した援軍の兵士の氏名の一覧には、「リマから追放されたムラート、ビトリア」の名前が見える [CDIHCh, II : 298]。

(21) CDIHCh, IV, p. 433. V, p. 11.

(22) CDIHCh, II, p. 442. III, p. 232, pp. 259-260. IV, p. 159, pp. 382-390, p. 447. V, p. 266, p. 276, p. 329. VII, pp. 353-354, p. 438. 参照。

(23) GayDoc., II, 201-202,222,232-234,238,363,372,387-388. 参照。

(24) GayDoc., II : 162-163,248,266. 参照。

(25) ファルコン神父は解放された後、サンティアゴのカビルドで拘留中の体験や反乱マプーチェ側の状況について質問を受けているが、その時の質疑応答を筆記した一次資料がラ・フロンテーラ大学の学報に掲載されている (Leiva (a), 1982:165-178)。またピネーダ・イ・バスクニャンの回想録は、完全版と抜粋の二種類が出版されている（本書末参考文献参照)。

(26) アルベルト・マリオ・サラスは、新大陸の先住民の中でチリのマプーチェが、長槍で武装した戦士が密な戦隊を組むことによってスペイン人の騎馬隊に有効な形で対抗するに至った例外的な存在であると述べている [Salas : 134]。

(27) もちろんチリの植民地関係者も先住民による馬の保有という事実を無視していたわけではない。例えばアラウコ戦争の終結と先住民の平定の方法に関して1580年に書かれたある報告書では、戦争の終結を阻害している重大な状況の一つとして、反乱インディオ、帰順インディオのいずれもがスペイン人以上に多くの馬を保有しているという事実が指摘され、馬に乗るインディオを死刑にするという布告を出すべきだという提案がなされている [CDIHCh, III : 14]。

(28) 同じラウタロとマルコスの会見を扱ったロベーラの叙述には、マプーチェ騎馬兵のことは特筆されてはいない [Lobera : 356-357]。

(29) アラウコ戦争が永続化した原因としては、ヒエラルキーを欠くマプーチェ社会の構造、植民地軍の遠征を補助していた北中部の先住民の人口の激減、長期の戦闘によるエンコメンデーロ層の疲弊、イギリスやオランダなどの外国人海賊の横行などが挙げられる。

(30) Vivar, p. 273.

(31) 1614年に捕虜の身から解放されたファルコン神父が行った証言にはまだ「ウ

タンマプ」に関する言及はない。解放後、神父はサンティアゴ市のカビルドで行われた質問に答え、反乱マプーチェ軍の中心が、オソルノ、ビジャ・リカ、インペリアル、プレン、キチレグアスという5つのアイジャレグアから構成されていると証言しているからである [Leiva (a) : 172-173]。これらはいずれも内陸の平原部からアンデス山麓にかけての地域にあたる。

(32) Molina, p. 151.

(33) Martínez, pp. 25-26.

(34) CDIHCh, V, p. 91, p. 116, p. 133, p. 141, p. 174, p. 190.

(35) CDIHCh, VII, p. 20.

(36) CDIHCh, V: 59,64,77.

(37) この「強奪」方式に関してロサレス神父の記録には、やはり17世紀初頭のアロンソ・デ・リベーラ総督期に、反乱マプーチェがビオビオ川両岸に設置された植民地軍の本営にしばしば侵入し、さかんに馬を略奪していたことが記されている [Rosales, II : 741-742]。

(38) 1599年に開かれた軍事委員会で発言したベルナルド・デ・バルガス・マチューカ隊長は、当時のマプーチェ戦士による馬の使用が未だ未成熟の段階にあったことを示唆している。すなわち、彼らが馬を使っているといっても退却を迅速に行うためであったり、あるいは疲労することなく襲撃地まで到着するために過ぎないというのである [CDIHCh, V: 121]。もしマチューカの指摘が正しいとすれば、馬は「騎馬兵」の攻撃手段というよりも、「歩兵」の輸送手段という性格が強かったということであり、その意味において未だこの段階ではマプーチェ戦士たちが「歩兵」から「騎兵」へ移行する過渡的な段階にあったといえるだろう。

(39) リエントゥールは、ピネーダ・イ・バスクニャン隊長が自らの捕虜生活を綴った回想「幸せなる捕虜生活」にも登場し、勇敢な戦士であるとともに、戦勝の儀式で犠牲にされそうになった筆者を巧みな弁舌で救った心優しき人物として描かれている。

(40) チリ総代理人のドミンゴ・エラソ隊長が、第2次大反乱の最中の1602年に国王に宛てて執筆したある書簡には、かつて3000名いた両市のアミーゴスの数が当時わずか242名に減少していたことが記されている [CDIHCh, VII:180]。また同じ頃、大反乱の事態収拾に当たっていたリベーラ総督もしばしばアミーゴスの戦略的重要性に言及し、1602年3月19日付けで作製した手引き書の中で、かつて1500名から2000名いたアミーゴスの数がやはり242名に減少してしまったと記し、懸念を表明している [Ibid. : 323-324]。

(41) 1604年に作製された常備軍費の内訳表には、すでに300名のアミーゴスに支払った給与として1540ドゥカードの金額が計上されている [CDIHCh, VII : 521]。また翌1605年には、リベーラ総督が自らそれまでに平定した先住民の数を地域別に挙げた上で、戦闘に投入可能なアミーゴス戦士の総数を1500名と計算している [CDIHCh, VII:572]。一方、1606年2月20日付けで国王に送付した書簡では、リベーラは赴任当時利用できるアミーゴスがわずか20名にも足らなかったのに対し、これが4年間で1000名以上に膨れ上がったことを記している [CDIHCh, VII : 594]。

（42）「防戦」は、イエズス会のルイス・デ・バルディビア神父がペルー副王のモンテス・クラーロスの伯爵の支持を受けて実施にこぎつけた和解的な政策であった。ビオビオ川を植民地と反乱マプーチェ社会との間の境界線と定め、互いに境界線を侵害しない。ビオビオ川の南に居住する反乱マプーチェについては、エンコミエンダやトリブート（租税）を初め、一切の義務を免除する。ただし、修道会士による布教活動は受け入れる。これらが主な提案条項となっている。

（43）ペウエンチェの「マプーチェ化」については、Zapáter (1982) および Bengoa (1985), pp. 51-53. 参照。

（44）興味深いことに、こうしたアンデス山脈ルートを利用してチリ中央部を襲撃するという発想は、これより10年以上前にすでに反乱マプーチェの間で考案されていた。なぜなら、14年間にわたって反乱マプーチェのもとで捕虜生活を強いられたドミニコ会士のファルコン神父が1614年にサンティアゴのカビルドの場で行った証言に、これと極めて類似する襲撃の計画に関する説明が見られるからである。それによれば、当時反乱マプーチェの間で、ビオビオ川よりもかなり遠隔の南方に位置するビジャ・リカの地からアンデス山脈を東側に抜け、植民地当局に気付かれることなく進行してランカグア地区に出て、さらにサンティアゴ市を襲撃するというものであった [Falcón:174]。

（45）18世紀におけるパンパを初めとする遠隔地域への経済的性格の襲撃については、チリの歴史家レオナルド・レオンが近年の研究で詳しく扱っている [León:21-63]。

なおレオンは、経済的な性格の襲撃行為が、18世紀になってから発生したと指摘している [León : 21-22]。しかしすでに本書で見たように、少なくともチリ側ではそれよりもすでに1世紀早い時期から、経済的な性格の襲撃の前身にあたる襲撃行為がかなり遠隔の地へのそれも含めてすでに発生していたことを強調しておこう。

ただ、17世紀前半の襲撃行為が北方に拡大する傾向にあったのに対し、18世紀の襲撃行為は西方に向かってアンデス山脈を越え、広大なパンパへと広がっていったことに違いがあるとはいえる。18世紀が、チリの植民地当局と反乱マプーチェ集団との間に定期的に開催される「パルラメント parlamento」と呼ばれる交渉などを通じ平和的な関係が樹立されていった時期であることも襲撃圧力の膨張方向の変化を促した要因の一つであろう。そしてその意味では、南北方向における和平の確立が東西方向への膨張を促したというレオンの指摘は妥当なものといえる。

（46）パンパ地域の先住民の「マプーチェ化」については、Zapater (1982) および Bengoa (1985), pp. 51-53. 参照。

（47）経済的性格の襲撃行為がマプーチェの婚姻制度に及ぼした影響については、稿を改めて扱いたいと考えている。

（48）González de Nájera, p. 111. Ovalle, p. 57. Rosales, I, p. 122.

（49）CDIHCh, II, p. 376, p. 380, p. 384, p. 390. 参照。

（50）ガンボア将軍は、1580年3月31日に国王に宛てて執筆した書簡でも同様の懸念を繰り返している [CDIHCh, II : 482]。

（51）この時の和平の内容を筆記した記録には日付が付されていないが、おそらく1602年頃開催されたものと推定される。

(52) 18世紀におけるパルラメントの進展については、Méndez (1982), pp. 143-154. León (1991), pp. 143-188. を参照。

(53)「アミーゴス隊長」については、Villalobos, pp. 175-221. León (1991), pp. 160-175. を参照。

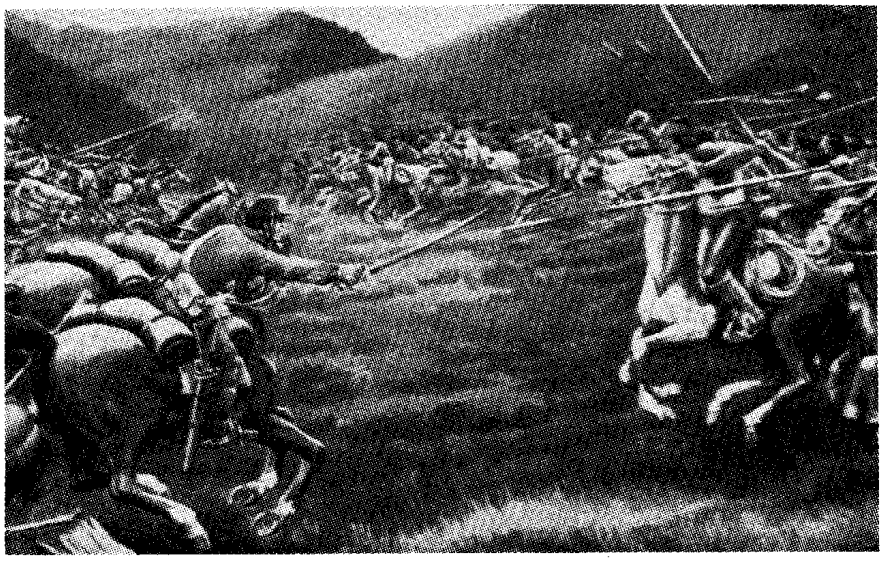
(54) 独立戦争へのマプーチェの参加については、Mackenna (1972)、Guervara (a) (1911) を参照。

(55) 馬は葬礼、祈願儀礼、治療儀礼、邪術認識などマプーチェの宗教生活の多岐に渡って重要な要素となっている。こうした宗教的側面における馬の導入のテーマについては、別の機会に論じたいと考えている。

第2部：「白い邪術師」と戦う先住民シャーマン
－疾病治療に見る土着と西欧の相互補完－

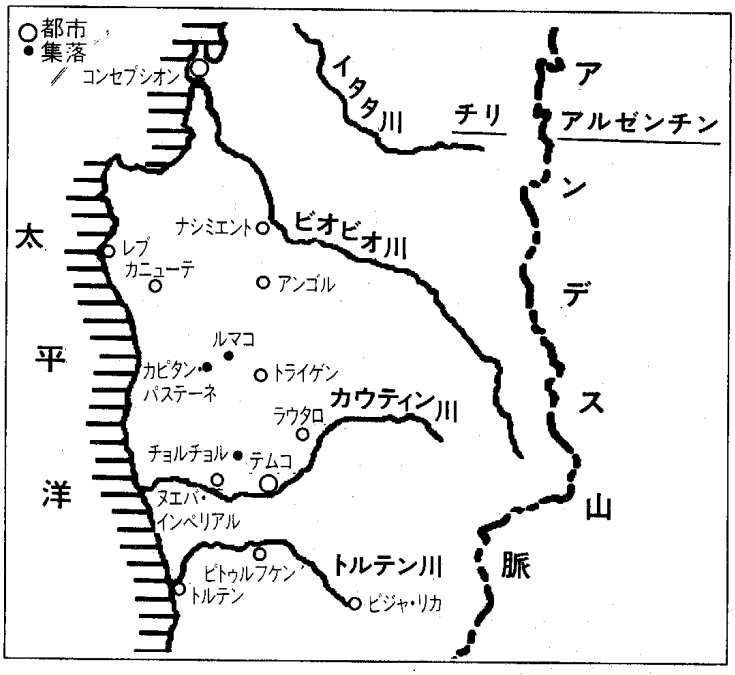
第1部で見たように、チリの先住民マプーチェは16世紀にスペイン人征服者が到来して以来、武器や馬を初めとする敵方の戦闘要素を積極的に同化することによって軍事力の向上を達成し、第2次大反乱を通じて植民地支配から脱却することに成功した。そして早い時期から和平を通じて統合されたフロンティア近辺の集団を除き、大半の地域のマプーチェは以後300年近くにわたって事実上の独立状態を保持した。

絵6．『平定』戦争。[González y López：19]



しかしそのマプーチェにも、チリ独立後の19世紀後半には大きな転機が訪れる。欧米における産業革命の進展により、国際経済システムの中でチリが小麦の輸出国としての地位を確立すると、それまでマプーチェが占有してきた南部の広大な領域に対する圧力が急激に高まったのである。こうして、1862年から82年のほぼ20年間をかけて近代的なチリ共和国軍の手で実行された『平定 Pacificación』と呼ばれる軍事作戦により、マプーチェはそれまで保持してきた自律的性格の強い居住空間を喪失しチリ共和国の法政下に置かれることになった（絵6）。その結果マプーチェは、数家族ごとに狭い『共同体』に住まわされ、「ウィンカ」と彼らが呼ぶ白人・混血系の住民が住む集落や大土地アシエンダに包摂されて生活することを余儀なくされたのである（地図7）。[1]

地図７.『平定』後のマプーチェ住居地域



こうした『平定』後の状況のもと、マプーチェ社会の政治・経済・言語・宗教などあらゆる分野で、支配社会の保有する西欧的な文化体系に属する要素が、急速かつ体系的な形で導入されていった。

こうした変容は医療の分野にも及んだ。

マプーチェの伝統的な疾病概念や治療体系は独特の宗教観やシャーマニズムと密接に結びつき、西欧近代医療の体系からは明確に区別されうる様々な特徴を備えていた。しかしこの分野でも、『平定』以降特に今世紀の後半に入ってから大きな変化が急速に進行したのである。

私が現代マプーチェの医療の実態に始めて触れたのは、昨年の７月下旬から９月中旬にかけてチリ南部を訪れた時であった。この時、テムコ市とトライゲン市の２ヶ所を拠点に、近隣に位置するいくつかの先住民共同体に滞在する機会を得たのである。

この時のチリ滞在の目的の一つは、マプーチェのシャーマン『マチ **machi**』を中心とする先住民の伝統的な医療体系の現状、そして伝統的な医療体系と西欧系の近代医療体系との間の関係を調べることにあった。

マチは、薬草に関する豊富な知識と霊的世界との交信能力を用いて疾病の治療を行うシャーマン的医療師だが、天候や収穫など共同体全体の安寧に関わる事柄を契機として行われる祈願儀礼『ギジャトゥン **nguillatun**』の場で重要な役割を果たしている場合も少なくない。(2)

今回の調査では、チリ南部でマプーチェ人口が最も集中的に存在する第９アラウカニーア地域のうち、中央平原北部に位置するルマコ区とトライゲン

区、同南部のヌエバ・インペリアル区の3地区に居住する計6名のマチから直接的な証言を、そしてアンデス山麓地帯のラウタロ区に居住するマチの相手役を務める男性から、そのマチとやはりマチであった彼の母に関する間接的な証言を得ることができた。

ルマコ、トライゲン両区では慶応大学国際医学研究会第19次派遣団の3名の団員とともに病院、総合診療所、農村診療所などを訪れ、マプーチェや一般の白人・混血系住民、そしてイタリア系住民の患者らにインタビューを行うとともに、複数の共同体に住むマチを初めとする伝統医療師たちを自宅に訪れて対話を行った。(3) そしてルマコ区ピリルマプ共同体に居住する女性のマチ、エウダリア・ライマンは、治療儀礼「マチトゥン **machitun**」に参加する機会を我々に与えてくれた。

これらの経験を通して、私の印象に強く残った一見相反するように見える二つの事実がある。

一つは、すでに1970年代以降文化人類学者や医学者の研究において指摘されていることだが、都市に移住したマプーチェは言うまでもなく、農村の共同体に住むマプーチェの間にも西欧近代医療体系の影響が強力に浸透していることである。(4) この点は予想してはいたものの、疾病概念や治療行動など医療に関わるさまざまな側面で、西欧近代医療の影響が極めて強力に定着しているという印象を受けた。そしてこの傾向は、伝統医療師であるマチ自身やその家族も例外ではなかった。

この事実はそれだけを考慮すれば、先住民系伝統医療の弱体化と喪失、そして西欧医療による代替の必然性を示唆するように見える。

しかしながらもう一つ私の興味を引いたのは、この点に関する質問をすることができた3区4共同体の5名のマチ全員が「ウィンカ **winka**」、すなわちマプーチェではない白人・混血系チリ人の患者を日常的に治療すると指摘している事実である。

今世紀の初頭から中葉に調査を行った研究者によって書かれた古典的なマプーチェ民族誌のみならず、現代のマプーチェの宗教や医療に関して書かれ

た研究のほとんどが『マチ＝マプーチェの患者を治療する医療師』ということを前提として叙述を進めている。(5)

こうした傾向は、マプーチェの伝統文化を紹介する目的で『マチ』を直接的・間接的なテーマとして近年作製されたビデオにも受け継がれている。

例えば、「マプーチェ農民開発協会 SODECAM」と「21アウディオビスアレス社」の共作により1992年に作製された『マチ・エウヘニア』というビデオがある。このビデオでは、コジャウエに住むエウヘニアという年輩女性マチの生活や治療の様子が紹介されているが、夫の治療を受けるためにやって来る女性はマプーチェで、エウヘニアとこの女性の間での会話も完全にマプーチェ語で進められている。

またビデオスール社が文化人類学者や医者の協力を得て1986年に作製した『二つの世界の狭間で Vida entre dos mundos』というビデオがある。これはマプーチェの父とウィンカの母を持つメスティーソの青年が実際に経験した、ある精神疾病の治療のプロセスをテーマにしている。この青年は、はじめ都市の病院の精神科で治療を受けたが原因の究明には至らず、マチの治療を受けて回復したことになっている。しかしこの場合も、彼が西欧系医療だけではなくマチの治療をも受けたのは、『混血』である彼が半ばマプーチェの伝統を受け継いでいるからだという論理が映像の背後に流れているような印象を受ける。したがってこのビデオを見ても、『マチ＝マプーチェの医療師』という基本的なイメージはそれほど変わらない。

シャーマン的性格を備えた医療師であるマチは、先住民のマプーチェの間にしか存在しない。そして今日でも彼らの圧倒的多数は、チリ南部の農村地帯に位置する都市から離れた共同体に居住している。この意味では確かに、マチは白人・混血系の一般チリ人にとって「隔絶された」存在であり続けている。今回の調査の前にも、長年サンティアゴ市に居住するマプーチェ語の女性教師から「マチはマプーチェの患者しか見ないわよ。」と言われたこともあり、国際医学研究会のメンバーが希望していた「マチトゥンへの参加」はおろか、マチの話を聴くことすら困難かも知れない、そう私は覚悟していた。

事前に得ていたこれらの情報から、『マチ＝マプーチェの医療師』という閉鎖的なイメージを抱いたまま今回の調査に望んだ私は大きな驚きを受けた。ピリルマプ共同体での治療儀礼に参加することを許されただけでなく、その儀礼の場で我々が出会ったのは、数百キロ離れた首都サンティアゴ市からマチの治療を受けるためにわざわざ自動車で訪れた中間層の白人男性であったからである（地図1）。

つまり、少し前の時期までは確かにマチとは基本的に無関係であったウィンカが、ある種の疾病に対するマチの治癒能力を認識し、その治療を積極的に受けるようになっているのである。この意味において、今日のマチはかつてマチが占めていなかった新しい空間に進出していると言える。それにもかかわらず、マプーチェの宗教やシャーマニズム、あるいは医療に関して書かれてきた従来の研究は、この点にほとんど触れていないのである。

そしてこれと関連する事項に『邪術師 **kalku**』の問題がある。「邪術師」が行う邪術を霊的疾病の原因の一つとして考えること自体はマプーチェの伝統的認識である。だが、以前から認識されていた「マプーチェの邪術師」だけではなく、「ウィンカの邪術師」という別の行為者が存在するということ、そしてそれは「マプーチェの邪術師」とは質的に区別されるべき（より強力な）存在である」とする認識が、今回証言を得られた全てのマチに共通して観察された。しかも、こうした「ウィンカ邪術師」の問題は、マプーチェの患者ではなく「ウィンカ患者」の疾病を引き起こす行為者として認識される場合がほとんどであった。

言い換えれば、今日のマチはマプーチェ患者の疾病の治癒に当たるだけではなく、「ウィンカの邪術師」に邪術をかけられた「ウィンカ患者」の治癒、つまりウィンカ同士の邪術の問題においても積極的な役割を果たしているのである。

つまり、一方で70年代以降の研究によって指摘されている先住民の疾病治療世界における近代医療体系の浸透とそれに伴うマチの役割の縮小という現象と同時に、従来の研究ではほとんど指摘されてこなかったマチの新しい役

割が今回の調査によって明確に観察されたのである。

そして、こうした二つの医療体系の間でのマクロなレベルでの相互浸透の進展と同時に、個別的な疾病の治療においても、先住民の医療体系と西欧近代医療体系が様々な形で相互補完的に機能しているケースが少なくないことも筆者の興味を引いた。この点も、従来の研究で充分に検討されつくしてはいない事項の一つである。

以上のような実態と研究状況のギャップに鑑み、この第2部では次の2点を基本的な目的として叙述を進めることにする。第1に、現代のマチの治療の実態の諸側面を呈示し、特に従来の研究でほとんど扱われてこなかったマチの新しい機能を指摘すること。そして第2に、現在チリ南部の医療世界で展開されつつある土着の体系と西欧の体系の相互依存的な関係の一端を、具体的な事例に依拠して明らかにすることである。(6)

もちろん筆者が調査できた地域は複数とはいえマプーチェ居住領域の一部に過ぎない。その一部の地域の中でも、共同体と都市との距離、共同体と近代医療機関との距離、カトリック系やプロテスタント系の教会の影響の強弱などの要因に応じて事情は様々である。したがって、本稿で述べる事柄をアラウカニーア全域の状況であるかのように一般化するつもりはない。

ただ少なくとも、西欧近代医療の浸透という一般的状況の中で、先住民の伝統医療体系が被りつつある変容や新しい状況への適応の営みに関するいくつかの具体例を呈示するという意義はあると考える。

またマプーチェの文化変容という本書の統一的な視点から見れば、『平定』以降、現在に至る激変の時代に、マプーチェが医療の世界で西欧体系に属する様々な要素を吸収しつつ、伝統的な医療体系をどのように再編成してきたかという問題であると言い換えることもできる。

以下第1章では、農村に位置するマプーチェの共同体における西欧近代医療体系の浸透の実態について論じる。続く第2章では、近年マチが西欧系の住民「ウィンカ」に対して果たすようになった新しい機能について説明する。そして最後の第3章では、現在この二つの体系の間に発生しつつある相互依

存的な状況を、個別的な疾病治療の事例に即して呈示する。

なお第2部の叙述にあたり、主な資料としては今回の現地調査の成果を用いるが、参考資料として過去のマプーチェ文化に関する情報を含む一次資料、そして文化人類学者や医学者らの手による従来の研究も用いる。

第1章：マプーチェ社会における西欧医療体系の浸透

（1）マプーチェの伝統的な疾病概念：「邪術」と「悪霊」

植民地時代以来マプーチェの習慣に関して書かれてきた数多くの記録によれば、マプーチェたちは従来、人が病気にかかったり死んだりするのは自然的あるいは生理的な原因によるものではないと考えてきた。

過去に書かれた記録の情報に基づいて、病気や死の原因に関するマプーチェの伝統的な認識を大きく二つに分けて説明しよう。

第一に、すでに16世紀の記録を含めおびただしい数の記録の中で一貫して指摘されているのは人為的な原因であり、これはさらに「毒盛り bocado」と「魔術 hechicería」の二つに分けることができる。

「毒盛り」の方は、植物や爬虫類の臓器などを調合して作った「毒」を酒や食物などに混ぜて相手の体に物理的な形で導入し、病気にかけたり殺したりするというものである。(7)

一方「魔術」の方は、特殊な能力を備えた邪術師が魔術的な行為を通じて相手の体の中に有害な実体を導入し、病気にさせたり死に至らせたりするというもので、しばしば「不可視の矢を心臓に射る」という表現が用いられる。この場合導入されるのは、葦の茎や海草といった植物やクモ、カエル、トカゲといった動物など目に見える物質の場合もあるし、霊的な実態、つまり「悪霊」の類の形を取ることもある。また、ある種の悪霊が具体的な物質に具現して体内に導入されるという形を取る場合もある。(8)

ただし物理的に毒を盛る場合でも、その毒にはあらかじめ祈念が施される

と説明されることもあり、両者が渾然一体として区別が不可能な場合も少なくない。そこで本書では、便宜上この「毒盛り」と「魔術」を合わせて「邪術」という名称で呼ぶことにする。

疾病・死亡原因に関する第2の伝統的認識は、霊的な実体あるいは力が独立した形で作用するという考え方で、比較的後の時期の記録に観察される。

その一つは、神聖な霊的存在の「怒り」によって疾病が引き起こされるという認識で、日本で言えばいわゆる「カミの祟り」にあたるものである。ただ、このタイプの疾病概念を明示的な形で指摘しているのは、18世紀後半の記録者であるフランシスコ会のソルス神父（1780年）のみである [Sors:184]。また現代のマプーチェたちの間でも、本来善良な性格の神格的存在が積極的な意味で一般の先住民の疾病の原因となるという考え方は希薄である。

ただし、遅くとも今世紀初頭以降の記録にしばしば見いだされるのは、シャーマン的医療師であるマチその人がこのタイプの疾病を経験するという記述である。すなわち、神が夢や幻影を通じてマチに『指名』した人物がマチになることを拒否したり遅らせたりしていると、神がこれを催促する目的で彼らを重度で原因不明の病的状態に陥れるという説明である。(9) これはいわゆる『巫病』で、マプーチェのマチに限らず、沖縄のユタを初めとする世界中各地のシャーマンに広く共通して観察される現象である。

したがって、マチの候補者という特殊なケースに限ってではあるが、「神による祟り」という疾病原因の存在も一応認識されているといえる。私が直接対話することのできた各地のマチたちも、異口同音にみずからの『巫病』の経験について語っている。

そして霊的存在を疾病原因とするもう一つの説明は、自然現象に宿る邪悪な霊や力、あるいは人間や動物の形をした霊的存在が影響を与えたり体内に入り込んだりすることで病気にかかるという認識である。こちらの方は、特に『平定』以降の時期に書かれた多くの記録や研究の中で指摘されている。(10)

以上を要約すれば、人為的な「邪術」を疾病原因とする認識が古い時代から観察されているのに対し、霊やある種の力の自律的な作用が病因になると

いう考え方が比較的後代になって発生した可能性はあるが、いずれにせよ、人間の疾病や死が「非自然的な」原因によって引き起こされるという考え方がマプーチェの伝統的な疾病認識であったことがわかる。

なおこれとは逆に、人の健康を維持したり疾病を治療したりする機能を備えた神的な存在の認識や、これらの「神」に祈念することによって疾病の治療にあたる人物に関する叙述もかなり初期の時代から記録されている。

初期の記録者の中でこれらの点に関する最も詳しい情報を提供しているのはルイス・デ・バルディビア神父である。神父は16世紀末から17世紀初頭にかけてマプーチェの間で布教活動に従事し、第1部で触れた「防戦」実施の最高責任者でもあった。神父は1621年に出版したマプーチェ語による説教書の中で、当時のマプーチェたちが「ピジャン Pillan」や「ウェクボエ Huecuvoe」などの「神」を信奉し、これらの存在が人間に健康を付与したり、疾病を治癒したりすると考えていたことを記し、こうした考えが「悪魔 diablos」の吹き込んだ誤謬であると強い調子で批判している [Luys de Valdiuia (b) : 26,32,45]。

「ピジャン」というのは、第1部の叙述の中でも雲の上でスペイン人兵士の魂と戦闘を繰り広げる戦士の霊、そして特に18世紀の記録には「騎馬兵の霊」という姿で登場していたあの「ピジャン」である。

このピジャンは今世紀の初頭に至るまでのあらゆる記録において、自然現象や作物の実り、あるいは人や家畜の誕生を管理し、健康の維持を初めとするあらゆる益を与えてくれる祖先霊あるいはマプーチェ民族の最高神として記されてきた。またピジャンはマチが治療儀礼の時に祈念し、これに憑依する存在としてもしばしば登場している。

一方「ウェクボエ」については、やはりバルディビア神父が1606年にペルーのリマで出版したマプーチェ語の語彙集に興味深い情報が含まれている。「ウェクボエ」そのものは語彙として挙げられていないが、"huecuvoe mupin" という熟語が"*adivinar*"という訳語とともに載っている[Luis de Valdivia(a)]。"*adivinar*"は「予言する」という意味のスペイン語だが、マプーチェ語の原表

現である "huecuvoe mupin"を直訳すれば、「ウェクボエの意志を忠実に言葉にする」という意味になる。ここから、「ウェクボエ」という存在が、「神託」の機能を果たしていたことがわかる。

また、少し後の1646年にローマで出版されたイエズス会のオバージェ神父の記録でも、「グエクブ guecub」はマプーチェの最高神ピジャンの下位にひかえる神格として、人に益をもたらす属性を付与されている [Ovalle: 327]。

つまり、「ウェクフ」という概念が文献に現れる最も初期の17世紀前半の記録を見る限り、「ウェクフ」は疾病の治癒を始め人間に益をもたらす善良な神格、あるいは霊として認識されていたことがわかる。

このように、もともとマプーチェにとって人間に益をもたらす霊的存在であった「ピジャン」や「ウェクフ」は、スペイン人到来以降のキリスト教の布教活動の影響によって、その性格を大きく変容させていった。

まず、いにしえのマプーチェにとってスペイン人との戦闘における援助や健康維持、病気治癒などさまざまな益をもたらしてくれる最も重要な霊的実体あるいは神格であった「ピジャン」は、今世紀の初頭から中葉の時期にかけて、一旦「邪悪な霊」という否定的な属性を付与されて記録されたのち、今日のマプーチェの間ではほとんど認識されない影の薄い存在になってしまった。

一方、やはりピジャンと並んで善なる神的存在であった「ウェクボエ」の方は、既に18世紀の記録の中では疾病、旱魃、害虫をはじめさまざまな不幸を人間にもたらす邪悪な霊的実体に変質した形で登場している。そしてピジャンとは対照的に、今日に至るまで「ウェクフ wekufü」の名で、邪悪な霊的実体を意味する総合名称として強烈な生命力を保っている。

さて以上見たように、マプーチェの伝統的な治療・疾病概念は、人間の故意に発する邪術や霊的存在の介入に関する認識に特徴付けられていた。そしてキリスト教の影響を受けて個々の霊的存在の属性が変質することはあったものの、疾病概念の根底にある基本的な発想そのものは今世紀の中葉までは維持されていたことを示唆するいくつかの民族資料がある。

マプーチェの間で長年キリスト教の布教活動に従事したドイツ人のホゥッセ神父は1937年に出版した記録の中で、当時マプーチェたちが「熱」や「痛み」などの症状を「ウェクブ」という悪霊が原因となっていると考えていたことを記している。神父によれば、これらの症状を解消するために彼らは「ウェクブ」の化身であるトカゲを捕まえて、罵倒の言葉を浴びせながら炎の中に投げ込み、これを燃やしていたという [Housse : 141]。

一方、1948年にチョルチョル地区で調査を行った米国人文化人類学者ティティエフによれば、当時同地区のマプーチェは、「結核」や「肺炎」などの疾病は邪術師が送り込んだ悪霊『チェルーフェ cherufe』に遭遇することによってかかると認識されていた。『チェルーフェ』は火山から噴出した石に宿り、羽根を生やして空を飛び、人の血を吸うと考えられていたという[Titiev:111]。

さらにヒルガーは、子供に関するマプーチェの習慣をテーマとして1957年に出版した研究の中で、小さいときに「麻疹」が流行してマチによる治療儀礼でマチトゥンを受けた数名の小学生の証言を挙げている [Hilger:116]。なおヒルガーは別の箇所で、邪術師による悪霊の操作を疾病原因と見なすマプーチェの認識を指摘している [Ibid. : 110]。また、ある患者の腹部腫瘍の原因を魔術的な行為に帰せしめたケースにもヒルガーは言及している[Ibid.:110]。

以上から、今世紀の中葉の段階でも様々な疾病が邪術や霊的実体の介入を原因とすると説明されていたことがわかる。そして、こうした非自然的な病因による疾病を有効な形で治療する能力を持つ唯一の存在と認識されていたのが「マチ」に他ならなかった。(11)

（2）『平定』と西欧医療体系の浸透

しかし、こうした伝統的なマプーチェの疾病認識と治療の体系は『平定』以降、特に今世紀の後半に入ってから大きな変容を被ることになる。『平定』によって政治的自律性を喪失したマプーチェ社会には、生活のさまざまな分野で西欧系の文化要素が急速かつ体系的な形で導入されていくが、(12) 疾病治

療の分野もその例外ではなかった。

『平定』によりビオビオ川以南の地域における安定的な布教活動が始めて可能になると、以前から不安定な形で活動していたカトリック系の修道会の他、19世紀末からアングリカン派やメソジスト派など米英プロテスタント系の諸宗派も共同体に居住するマプーチェの間で積極的な活動を開始する。彼らはアラウカニーア各地に学校を設立して布教や教育などの活動を行うかたわら、社会奉仕の一環として医療活動も行ってきた [Durán y Ramos]。このような教会関係者による医療活動が、キリスト教の浸透と相俟って、マチに代替する治療存在としての西欧近代医療に対する認識を一定程度浸透させたであろうことは想像にかたくない。

だが、国家の手で近代医療体系の整備が本格的に進むのは今世紀の後半に入ってからのことである。1952年に国家厚生局 (Servicio Nacional de Salud) が設立されて以来、共同体に住むマプーチェの間でも近郊の集落に建てられた医療機関で治療を受けたり、集落で売られている合成薬品を購入利用する事が習慣化する [Montecinos : 24-25]。

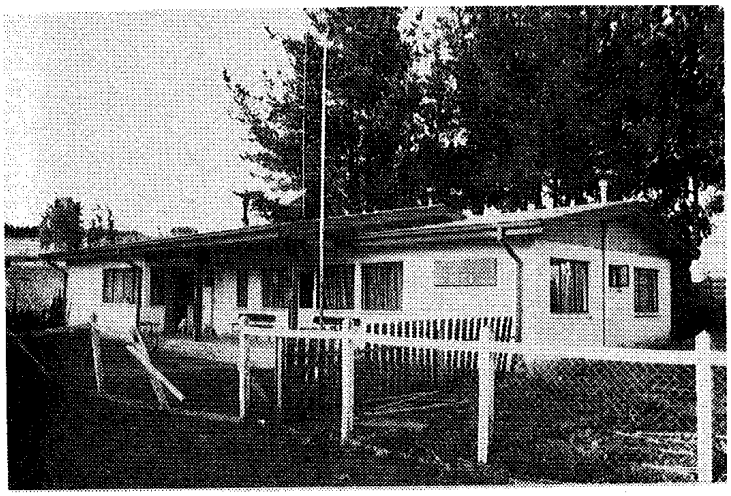
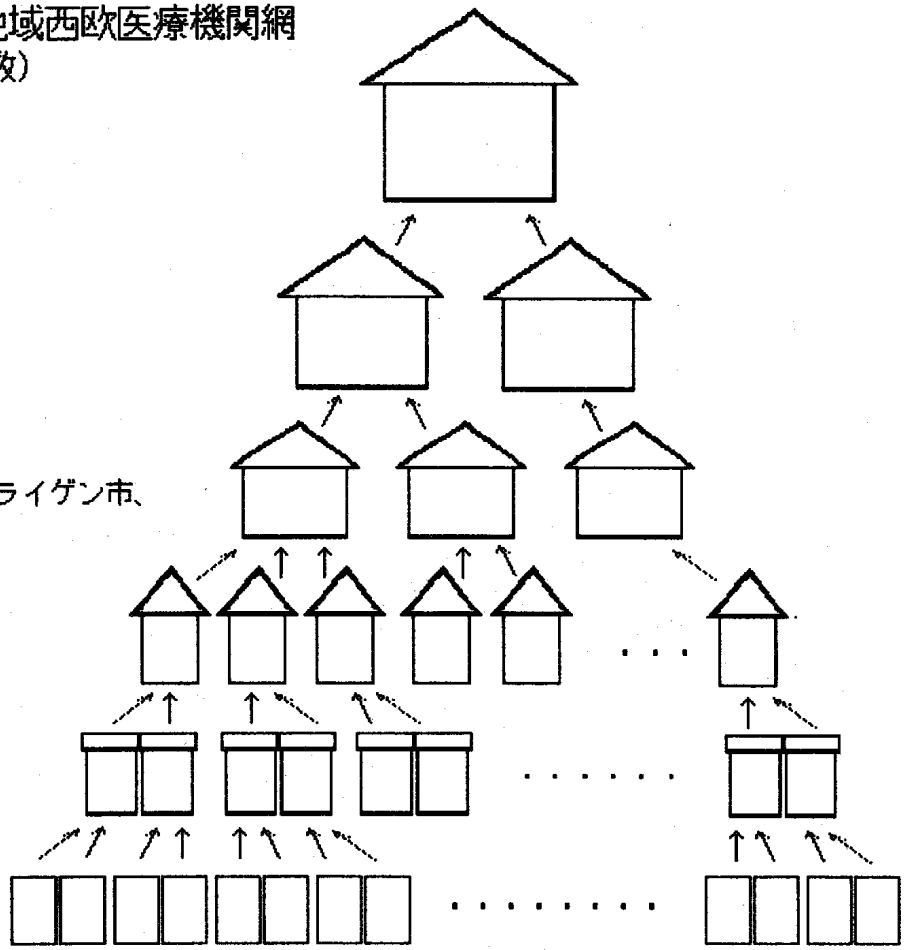


写真１．テムレム共同体内の中にある農村診療所。

さらに70年代の初頭には、農村地帯における疾病予防を主な目的とした『農村診療所 posta rural』の制度が発足する。その結果、現在では共同体の中に設置されたものも含め、アラウカニーア地域全体における農村診療所の数は204ヶ所を数える（写真１、図１）。[13]

図１．アラウカニーア地域西欧医療機関網
（（　）内は農村所在機関数）



テムコにある最高レベルの病院は心臓の外科手術など高度な技術を必要とする治療が可能な設備を備えている。以下、レベルが下がるごとに治療可能性は限られ、医者が１～２名しかいない総合診療所を経て、医療補助員のみが常駐する農村診療所に至る。

表2．マプーチェ人口地域別分布

地域	人数
第1タラパカ	9557
第2アントファガスタ	12053
第3アタカマ	6747
第4コキンボ	18010
第5バルパライソ	58945
第6解放者オヒギンス	35579
第7マウレ	32444
第8ビオビオ	125180
第9アラウカニーア	143769
第10ロス・ラゴス	68727
第11アイセン	3256
第12マガジャネス	4714
首都圏	409079
合計	928060
国民総数に占める%	6,95

（1992年度国勢調査より）
[Ministerio de Planificación y Cooperación Nacional de Desarrollo Indígena : 8]

こうした国家主導による医療網の整備により、不完全とはいえ遠隔地に位置する共同体のマプーチェ住民にも比較的容易に西欧近代医療の専門職者による診断や治療を受けることが可能となった。

一方、医療以外の分野でも近代化は急速に進展して行った。共同体の中、あるいは近隣に教会系や公立系の小学校が設立され、スペイン語のモノリンガル教育が推進されてきた。また1960年代からは電池式のラジオが、さらに近年にはバッテリーを使用したテレビといったマスメディア機器が多くのマプーチェの家庭に普及した。そして、道路の整備とバス路線の開通によって農村と近郊都市との連絡が密になり、若者を中心とする都市への移民も加速化していった（表2）。

このような生活の様々な側面における近代化の進展により、共同体に住むマプーチェの間でも西欧近代型の価値体系が急速に流布されて行った。直接医療には関係のないこれらの要因も、疾病・治療認識における合理的発想の流布に寄与したことは疑いがない。

（3）『ウィンカ病』と『マプーチェ病』

米国人文化人類学者ルイス・ファロンは、1950年代に行った調査に基づいて1964年に発表した「太陽の鷹」と題するモノグラフィーの中で興味深い指摘をしている。すなわち、当時マプーチェのインフォーマントたちが通常の疾病が自然的原因によって起こると証言することがあるものの、インフォー

マルな会話になると例外なく証言者みずからがこれを否定すると述べているのである [Faron:168]。つまり、表面的には近代的な病因認識が浸透しているように見えて、依然としてあらゆる疾病の「本当の」原因が「邪術」や「霊」にあると彼らが認識していたことを示す。これは、マプーチェの疾病認識変化における過渡的な状況を示唆しているのであろう。

しかし今日のマプーチェたちは、かなりの種類の病気が人為的な原因でも霊的原因でもなく「自然の」あるいは「生理的な」原因で発生することを明確に認識している。またマチの中にも、治療を受けるために訪れた病人がこのタイプの疾病にかかっていると判断した場合には、初めからウィンカの医者の治療を受けるように指示するものが少なくない。

以下、マチたちの具体的な証言に基づいてこれらの点を明らかにしていこう。

最初に、トライゲン区のテムレム共同体に居住する年齢50才前後の女性マチ、マリア・アネミージャの証言を見てみよう。マプーチェ語によるマリアの証言のうち、意識的にスペイン語で発せられている部分を明示するため、彼女の発言を原語のまま転記し、スペイン語の表現には下線を付した。また、日本語訳の中の対応する部分にも下線を付してある。以下、必要に応じて同様の形式で筆記することにする。

"Fei ta ñi, iñche ta ñi machitun ta naüpakei ta ñi Ngünechen ta wenu mapu meu, fei ta tukeeneu, fei ta nütramkapakei, ka mülei ta ñi <u>recibialu</u>, kangelu ta recibikei, fei mu ta adkunukei ta dungu, adkunupakei ta nütram, chumleal ta kutran, chem kutran nien, kom, mapu kutran nien, winka kutran nien ka kutran. Mai, epu rume kutran niekei ta iñ mapuche ngen. Mapuche kutran fei ta tütei ta, tutei ta machi, mapu lawen mu. Mapulawenmui ta tüfei. Fei ta winka kutran ta winka mu ta, winka <u>pulmonía</u> pingei, kutran mülekei, fei ta winkamukei. "

"Feichi mapu ta feilai kam, feichi winka kutran ta <u>tratakelan</u>....

Ka trataken mai ta mapun kutrañmulu ta mapu lawen mu, fei. Ka inaken lle mai. Tüfeichi pulmonía, tüfeichi dukulosa, ése ta mapu lawenmulai, pu. Ngelai mapu lawen ése winka mu deumangekei. " [Anemilla]

『だから、ワシがマチトゥンを行う時にはな、我が『グネチェン様』が天界から降りてこられ、ワシの体にお入りなさる。それでお言葉を下さるのだ。それから、その言葉を受ける者もいる。ワシとは別の者がお言葉を受けるのだ。そうして始めて事をうまくお運びになる。ありがたいお言葉を残されるのだ。病人の状態はどうか、何の病気にかかっているのか、あらゆることをな。マプ病にかかっているのか、それとも別の病気であるウィンカ病にかかっているのか、ということもじゃ。』

『そう、我々マプーチェがかかる病気には二つの種類があるのだ。マプーチェ病の方は、マチがマプ（大地、土地）の薬草で治す。マプ薬草向けの病気じゃ。それから、ウィンカ病の時はウインカのところで治療してもらう。たとえばウィンカ語で『肺炎』という、この病気の時にはウィンカのところで治療してもらうのだ。』

『それ（肺炎）にはマプの薬草は効かぬ。そういうウィンカ病の者は治療せん。…で、ワシが治療するのはな、マプ病の患者をマプの薬草で治療するのじゃ、うん。そして引き続いて療養も引き受ける。その肺炎とかその結核という病気、それはマプの薬草で治す病気ではない。そういうマプの薬草はないのだ。だからそれはウィンカのところで治療してもらうのだ。』（下線、小括弧内筆者補足）

マリアの体に憑依する霊的存在である『グネチェン **Ngünechen**』とは、語源的にはマプーチェ語の『統御する』という意味の動詞 **“ngünen"**と『人』を表す **“che"** という名詞とを組み合わせた合成語で、『人を統率する存在』と

いう意味である。

マプーチェの間に霊の憑依あるいは霊との交信によって様々な事がらを知ったり予言したりする人物がいたことは、すでにバルディビアの時代の兵士ビバルの記録の中で指摘されている [Vivar:266,274]。この人物はまだ「マチ」という名では現れず、「邪術師 hechiceras, hechiceros」というスペイン語でしか記録されてはいないが、機能的にはマチと重なる部分が多い。植民地時代の記録者たちは、しばしばこの「邪術師」が交信していた相手を「キリスト教の神」の敵である「悪魔 demonio」の名で表現している。

16世紀の末から17世紀の初頭にかけてマプーチェの間で布教活動にあたったルイス・デ・バルディビア神父は、1621年に出版した前述のマプーチェ語による説法書の中で、病気の治療にあたる人物「マチ」に言及し、マチが治療の際に交信する相手が前述の「ピジャン」であり「ウェウクボエ」であることを記している。

神父はこれらの霊的存在がキリスト教の「神」の敵である「悪魔 diablo」の化身に過ぎないと決めつけ、これらの存在に対する崇拝を放棄するよう説得している [Luis de Valdivia (b) : 11,26]。

バルディビア神父の時代からほぼ4世紀たった今日、マプーチェの改宗に情熱をささげる修道会士たちの努力は一定の成果を上げた。もはや今日のマプーチェが「ピジャン」を「神」として信仰することはない。また、修道会士たちが「悪魔」と呼んでいた「ウェクボエ」は、表面的には彼らの思い通り最も邪悪な霊的実体「ウェクフ wekufü」に姿を代えた。

それに対し、大半がキリスト教徒を自認する今日のマプーチェたちが信仰する主要な神格は「グネチェン」である。彼らは「グネチェン」をしばしばマプーチェ語の『父 chau』とスペイン語の『神 Dios』をミックスさせた『父なる神 Chau Dios』という名称で呼び、これを一応キリスト教の『神』に当たるものとして認識している。

ただ各地のマチたちの証言によれば、この『父なる神』は『夢』(14) を通じて伝統的な祈願儀礼『ギジャトゥン』の定期的な開催やマプーチェ語の保

持、そしてウィンカの装束の放棄と伝統的なマプーチェの衣装の使用などをしばしば命じるという。したがって『キリスト教の神』とはいいつつも、実際には『マプーチェの民族神』という性格が強い。(15)

そして何よりも、このマリアの例のように治療儀礼においてマチの体に直接憑依するという交信方法や、病因や治療手段に関する具体的な情報を伝達したりするというその機能において、かつての「ピジャン」が「グネチェン神」の中には生きているといえる。

ところでマリアは筆者との対話に当たり、自分はスペイン語が不得意なのでマプーチェ語で話すと述べている。実際にこの発言もほぼ純粋なマプーチェ語で行われている。

スペイン語で表現された部分はいずれも単語以下のレベルで、動詞の語幹が2つ、名詞が2つ、そして指示代名詞が1つだけである。

まず動詞としては、「受ける」という意味のスペイン語の動詞 **“recibir"**の語根 **“recibi-"**をマプーチェ語の名詞句の構成要素として使った **“recibi-a-lu"**（「言葉を受けるべき者」の意味）と、「（病気を）扱う」、あるいは「治療する」という意味の **“tratar"**の語根 **“trata-"**に、それぞれマプーチェ語の現在の習慣を表す動詞語尾の肯定形と否定形 **(-ken, -kelan)** をつけたもの（**tra-taken, tratakelan**）だけである。両例とも語幹はスペイン語だが、それぞれマプーチェ語式の語尾活用に、つまりマプーチェ語化された活用形になっている。

そして名詞についていえば、病名を示す2つの名詞 **“pulmonía"**（肺炎）と **“tuberculosis"**（結核）だけがスペイン語になっている。しかも『結核』の方は、音韻面でマプーチェ語の音韻的影響を受けて変容した形(**“dukulosa"**)になっている。

最後に「それ」を意味する指示代名詞 **“ése"**について見てみよう。

スペイン語の指示代名詞には男性、女性、中性の3種類があり、**“ése"**は男性単数形にあたる。ところが、エウダリアの発言の中で二度出てくる **“ése"**が置き換えているのは『肺炎 **pulmonía**』、『結核 **tuberculosis**』という二つ

の「女性」単数名詞である。従って、スペイン語の規範に従えば、男性単数形の“ése"ではなく女性複数形の「それら」にあたる“ésas"を使わねばならないはずである。しかし、マリアはスペイン語の『男性』でしかも『単数形』にあたる“ése"という形を使っている。

一方、マプーチェ語で「それ」を意味する指示代名詞は、文法上の性を持たない“fei"という表現である。そして数は、単数・双数・複数の3種類があるのだが、双数・複数を単数形で省略表現することも多い。したがって、この2つの“ése"の使い方には、明らかにマプーチェ語の指示代名詞“fei"の影響が見られるといえる。

このように、マリアはスペイン語の使用率が極めて少なく、しかもその少ないスペイン語の大部分もマプーチェ語の音韻上・統語上の影響を受けているのである。彼女は、今回筆者が直接対話した6名のマチの中で、最も伝統的な言語行動を保持するマチであった（表3）。

しかし、その伝統主義者のマリアも、病気を霊的存在の仲介を特徴とするマチの治療を受けるべき『マプ病』あるいは『マプーチェ病』と、ウィンカの医師の治療を受けるべき『ウィンカ病』の二種類に明確に分類しているのである。

1948年のティティエフの調査によれば悪霊に起因すると認識されていた結核や肺炎も、彼女の説明ではウィンカ医師によって治療を受けるべき『ウィンカ病』と認識されている。そして、この両方の病名がスペイン語で表現されているのも、むしろこれらの疾病を西欧医療が担当すべき疾病とマリアが認識していることの表れであろう。

一方、トライゲン区の西に境を接するルマコ区のレニーコ・チコ共同体に居住する55才のマチ、テレサ・パイネケオも、肺炎、貧血、風邪、気管支肺炎、発熱、そして手術で摘出しなければならない膿腫瘍の類は、全て医者が治療するべき疾病であると述べている [Painequeo]。このうち「発熱」は、ホゥッセ神父の叙述によれば悪霊「ウェクフ」が原因であると認識されていた。またヒルガーは、腫瘍の一つである腹部腫瘍について、これが魔術に起

表3．マチ比較

名　前		ｴｳﾀﾞﾘｱ・ﾗｲﾏﾝ	ﾃﾚｻ・ﾊﾟｲﾈｹｵ	ﾒﾚﾋﾙﾀﾞ・ｳｪﾝﾃﾗｵ	ﾏﾘｱ・ｱﾈﾐｰｼﾞｬ	ﾛｻﾘｰﾅ・ﾄﾗﾙｶﾙ	ｵｽｶﾙ・ﾚﾋﾟﾗｵの母	ﾛｻ・ﾊﾞｰﾗ	ｸﾛﾘﾝﾀﾞ・ｺﾘﾋﾟｰ
居住区名		ルマコ	ルマコ	トライゲン	トライゲン	ラウタロ	ラウタロ	N．ｲﾝﾍﾟﾘｱﾙ	N．ｲﾝﾍﾟﾘｱﾙ
共同体名		ピリルマプ	レニコ・チコ	テムレム	テムレム	ブランコ・ラピン	ブランコ・ラピン	ロムルウエ	コインコ
年　齢		53才	55才	69才	50才位	65才		67才	40才位？
マ チ 歴		3年	5年	50年以上	20年以上	3年	？	20年	途上
マプーチェ語運用能力	（3段階評価）	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
スペイン語運用能力	聴く（3段階評価）	○○○	○○○	○○○	○○○？	？	？	○○○	○○○？
	話す（3段階評価）	○○	○○○	○○	×	？	？	○○	×
	胆石	×	×？	×（△）	×？	×	×	○	
重度生理的疾病の治癒	肺炎	×	△	？	×	？	？	○	
	結核	×	×	？	×	？	？	○？	
軽度生理的疾病の治癒	風邪、頭痛、発熱	○	×	×	？	○	○	○	
霊的疾病の治癒	邪術病・悪霊病一般	○	○	○	○	○	○	○	
	『呼頭術』の執行能力	×	？	○	○	○？	○？	○	
	共同体内における診療所の有無	×	×	○	○	○	？	×	
西欧近代医療との関係	診療所医療補助員との関係	○	？	○	○	○	？	×	
	自分が治療を受ける	○	△	○	？	？	？	×	
	医療補助員の治療儀礼参加	△	？	○	○？	○	？	×	
1回の通常マチトゥンの費用		3万5千円(時価)	？	？	1万5千円	1万円	？	1万円	

因するという認識の事例を挙げていたことを思い出しておこう。

これ以外の疾病で特に筆者の注目を引いたのが「胆石」であった。何故なら、直接・間接的な証言を得ることができたマチのほとんどが、この疾病にかかった患者を病院で治療させると証言しているからである。

ルマコ区のピリルマプ共同体に住む53才の女性マチ、エウダリア・ライマンは、胆石の患者の処置について次のように述べている。

『ああ、それ（胆嚢結石）は「メディコ（医師）」の手で取り出されておる。そう、メディコが取り出すのだ。・・・病院で取り出すんじゃ、それはな。でもマチもおる。年輩のマチにもおる。胆石を取り出すことができる者がな。でもワシにはこの病は取りだせん。』
『ああ、もっと年輩のマチは薬草を使って流し出すんじゃ。うん、でも叔母にも「手術」はできん。他のマチ、他の年輩のマチでナイフを使ってこれ（結石）を取り出す者がおる。でもワシに教えてくれたマチもナイフで取り出すことはせん。なぜなら彼女もその術を修得しておらんからのう。でも薬草で「流し出す」ことなら確かにできる。ああ、薬草で「流し出す」ことはな。』**[Raimán]**

このエウダリアの証言からいくつか興味のある事実が指摘できる。

第1に、年輩のマチの中にはナイフを使って、つまり西欧医療で言えば外科的な手術を使って結石を取り出せるものがいること。第2に、やはり年輩のマチの中には、ナイフを使って取り出すことはできないが、薬草を使って結石を取り出せるものがいること。エウダリアは、自分を指導した叔母の例を挙げている。第3に、若い世代のマチである自分には、胆嚢結石の治療はできないこと。そして第4に、エウダリアはこの病気の患者は、基本的に病院へ回していること。

以上から、次のように推察できるだろう。

まず、1～2世代前までのマチの中には、外科的な切開技術を使って胆石

を手術する者もいたが、[16] 現在では西欧医療の浸透により、これが得意とする外科的処方を放棄しているマチが多いこと。この点に関連して、胆石ではないが、やはり切開手術を必要とする腫瘍系の疾病を病院で治療すべき疾病と認識するテレサ・パイネケオの例は既に見た。そして、外科的な手術はできないまでも、年輩のマチの中には薬草を使ってこの疾病を治せるものがいること。

つまり、いずれの方法にせよ、1～2世代前までのマチにとり、胆石はマチが担当し得る疾病の一つであったこと。

最後に、しかしながらより若い世代のエウダリアには胆石は治療できないため医師に任せているということ、以上である。

そしてエウダリアは例外ではなかった。何故なら、この点に関して証言を得ることができたマチ5名のうち、胆石の患者を自分で治療できると明言しているのは1名のみで、それ以外の4名はこの疾病の患者は病院に回すと証言しているからである（表3）。

例えば、今回の調査の中で69才と最年長で、マリアと同じテムレム共同体に居住し、高い治療能力を持つと評判のマチ、メレヒルダ・ウェンテラオは次のように述べている。

> **"Feichi vesícula, bien pürülu, bien anülu, fei ta, fei ta doctor ta operakei ka. Fei ta doctor ta operakei. Vesícula, por lo menos, bien duro se pone una piedra, ése no se puede sacarlo ... machitun mu, lawen mu no saca. Entonces el doctor mejora eso.**
>
> **Empezalelu puru, puru eso, cuando empieza la vesícula, el puro líquido, entonces ahí corre, pero no .. ¿Pa' que voy a decir tanto como los médicos? Lo hacen mejor esas cosas. Fei, pu. Para eso le dejaron los médicos"**

『その胆嚢の病気もな、かなり慢性化した、かなり居着いてしまった

段階ではな、その時にはやはりドクトールが手術する。その病はドクトールが手術するのだ。胆嚢はな、少なくとも石がとても硬くできてしまうと、それは・・・マチトゥンでは、薬草では取り出せぬ。その場合は、それはドクトールが治すのだ。

ただ始まったばかりの、ただそうしたものなら、胆嚢結石の初期の、単なる液体状のものなら流し出すことができるが、そうでなければダメじゃ・・・わしにもメディコたちみたいに治すことができるなどと言ったところで仕方あるまい。彼らの方がそういう治療はうわてなのだ。そうじゃ、うん。そのためにメディコはいるのだ。』

[Huentelao]

写真2．自宅の庭園で、夢を通じて『神』から伝授された薬草ピンダ・ラウエンを手に持つロサ・バーラ。腹痛に効能があるという。

筆者はメレヒルダに対してもマプーチェ語で質問を行っているが、それにも関わらず彼女の証言には下線を付した部分が極めて多い。スペイン語の使用が名詞、あるいは動詞の語幹のレベルに限られていたマリアに対し、メレヒルダの場合は完全なフレーズもスペイン語で発語している。彼女のスペイン語に見られるマプーチェ語の影響も、この発言の範囲内で言えば、わずかに、「単に」という意味のスペイン語の形容詞 **"puro"**が、語尾の **"o"**を嫌うマプーチェ語の音韻的特徴の影響を受けて **"u"**に変化している **(puru)** ことだけである。こうしたことからメレヒルダは、同じ共同体に住むマリアと異なり、チリの民衆的スペイン語に関してかなり高い運用能力を身につけたマチであると判断できる。

いずれにせよ、私が対話することのできた6名のマチの中でも最年長で、この共同体に住む5名のマチの中で最も腕が高いと評判のメレヒルダでさえ、初期段階でない限り結石は治療できず、初めから医者の所へ患者を回すと証言しているのである。もちろん、『胆嚢結石』という病名も、本来『胆嚢』を表すスペイン語の名詞 **“vesícula"**を用いて表現している。

胆石治療に関する証言を得られたマチの中で、唯一薬草を使って結石を摘出できると明言していのは、ヌエバ・インペリアル区のロムルウエ共同体に住む67才のマチ、ロサ・バーラ・カユルである **[Barra : No. 2]** (写真2)。またロサは肺炎に関しても、多数の薬草を調合したものを用いて治癒できると証言している **[Barra : No. 2]**。

私は5日間彼女の家に滞在し、多様な薬草が植えられた菜園の雑草除去作業を手伝うかたわら、治療にまつわるさまざまな実体験談を聴くことができた。だが、自分のところに来た患者を疾病の種類によっては医者に回すといった主旨の発言は一度も出てこなかった。彼女は、癌だけは治療できる薬草がないことを認めつつも、『わしはあらゆる病気を治す **Kom kutran ta küme elken.**』と証言している **[Barra: No. 2]**。つまり、彼女の認識の中には、他の大半のマチに共通して見られる「マチが担当する疾病」と「メディコが担当する疾病」という二分法は存在しないといえる。

ロサは今回の調査の中で2番目に年長のマチである。そして彼女の住む共同体には農村診療所はなく、他のマチのように自分が医者にかかったりすることも決してないという。また彼女はスペイン語も一応話すものの、音韻上も統語上もマプーチェ語の影響を強く受けたものになっている。つまり彼女、は西欧系医療機関との関係が希薄で、伝統的な習慣をかなり忠実に保持しているタイプのマチであるといえる。ただ少なくとも筆者の今回の調査の範囲内では、彼女のように伝統的な治療概念・行動を純粋な形で保持するマチはむしろ例外である。

以上から、今日のマチの間では胆石、結核、肺炎など、かつてはマチが治療を行ってきた一部の重度疾病を西欧医療の担当領域であると認識する傾向

が主流となりつつある、と判断できそうである。

また風邪や発熱、単純な頭痛、軽傷などの軽度疾病の治療の多くも、診療所や最寄りの病院で治療する場合も少なくないようだ。

写真3.テムレム共同体の農村診療所で働くウィンカ補助員フアン・カルロス（後列一番右の男性）の自宅の居間で。

例えば前述のレニーコ・チコ共同体のマチ、テレサの発言の中には貧血、風邪、発熱などの疾病名が出てきていた。

またテムレム共同体の最長老マチ、メレヒルダ・ウェンテラオは、共同体にある診療所に住み込みで働く補助員フアン・カルロス（写真3）が共同体のマプーチェに対して行っている風邪などの疾病に対する治療活動に感謝し、次のように述べている。

『この者はかなり昔から住んでおってな、この男はもう6年以上もこの地に住んでおるのじゃ。我々はみんなこの若者をよく知っておる。われわれのことを手助けしてもらうために居てもらっておる、ああ。共同体の手伝いをしてもらうのだ。そう。そのために居てもらっておる、ここにな。例えば風邪をひいた患者は、しばしばこの病気にかかるのだが、そんな患者は彼が治療するのだ。とにかく注射をうつやら薬を処方するやらしてな。』[Huentelao]（写真4）。

ただその一方で、風邪、頭痛、発熱などの疾病も薬草を使って治療すると証言しているマチもいるので、必ずしもこれらの軽微疾病が全てのマチの担当領域から完全に欠落したというわけではない（表3）。

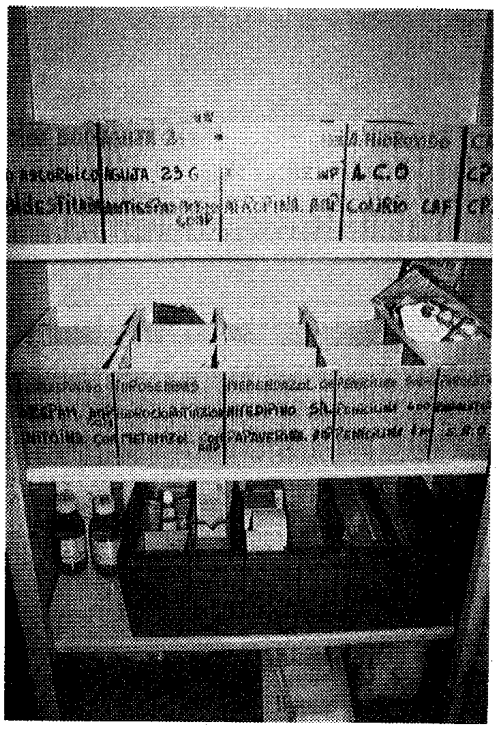


写真4．テムレム共同体の農村診療所に常置されている薬品類。扁桃腺感染に効くペニシリン、炎症に効果のあるパラセタモルなどの薬品名が見える。

ただ、かつてはやはりマチの担当領域であったこれらの軽微疾病の治療においても、農村診療所や集落にある病院の重要性が高まってきていることは全般的な傾向と考えて間違いないと思われる。

以上から、今日共同体に住むマプーチェの間でも生理的な原因で起こる疾病の存在が明確に認識され、生理的な原因による重度、あるいは軽度の疾病の治療の分野で、西欧近代医療による伝統医療の駆逐、あるいは伝統医療の西欧近代医療による代替という変化が起こりつつあるといえる。(17)

第2章：マチの新しい機能

（1）『マチ』の治療をうける『ウィンカ患者』

しかしながら、単に西欧近代医療が優勢となって伝統医療が衰退して行っているという単純な話ではない。なぜなら、近年になって逆に「ウィンカ」、すなわち白人・混血系の一般チリ人たちの間で、マプーチェの伝統医療を再評価する傾向が発生しているからである。その最も顕著な表れが、マチの治療を受けるウィンカ患者の存在である。

かつてウィンカ、特に西欧系医療機関が最も整備されている遠隔の都市部に居住するウィンカが、わざわざマプーチェの共同体まで足を運び、シャー

マン的医療師であるマチの診察を受けに来ることはなかった。(18)

ティティエフやファロンなどの文化人類学者によって今世紀中葉に書かれた古典的な民族誌に含まれるマチに関する叙述も、マチの患者が全てマプーチェであることを前提として書かれている。

ロムルウエ共同体に住む67才のマチ、ロサ・バーラも、昔はウィンカの患者が治療を受けるためにマチのところへやって来ることはなかった、と証言している [Barra : No. 2]。

ところが今日では、遠隔の都市部に居住する者も含め、マチの治療を受けるために共同体を訪れるウィンカが少なくないのである。

テムレム共同体に住む長老マチ、メレヒルダは次のように語っている。

『ああ、ウィンカの患者もくる。・・・ものすごく遠い所からやって来るのだ。・・・サンティアゴからもやって来る。あらゆるところから来るのだ。・・・あらゆるとこらから来た患者が治療を受ける。ワシが治してやるのだ。』[Huentelao]

ロムルウエ共同体の年輩マチで伝統主義的な性格の極めて強いロサも、身分証明書の写真を使った外国人の治療のケースを含め、複数のウィンカ患者を治療した経験を筆者に語っている [Barra : No. 1, No. 2]。

ウィンカたちは何故マチのところへやって来るのだろうか。どんな疾病を治療してもらうために、わざわざ遠隔の都市から農村の共同体にまで足を運ぶのだろうか。

この点についてテムレム共同体のマチ、マリア・アネミージャは述べている。

『ウィンカの患者もやってくるよ。ウィンカもマプーチェ病を断ち切るためにな。断ち切るのじゃ。マプ病にかかるとな、それを断ち切るためにウィンカもな。ウィンカであれ何であれ、こうしたマプーチェ病を断ち切るのだ。・・・ああ、悪霊病をな。これはウェクフ

病じゃ。それはウィンカの言葉では「悪魔」と言われるが、つまりウェクフのことだ。そうした病気を断ち切って、それで治るのだが、わしもそうした病気を治療するのだ。』[Anemilla]

前節で『マプーチェ』であっても『ウィンカ病』にかかって医者の治療を受けると指摘したが、今度は逆に、『ウィンカ』であっても『マプーチェ病』にかかってマチの世話になるというわけである。

写真5．ピリルマプ共同体のマチ、エウダリア・ライマンの治療を受ける白人男性V氏。写真上方に見えるのはエウダリアの補佐をするマプーチェ女性。

我々が参加する機会を得たピリルマプ共同体のマチ、エウダリアの自宅で行われたマチトゥンの場合も、患者は首都サンティアゴ市から彼女の治療を受けるために共同体を訪れた元警察官の白人男性であった(写真5、6)。彼の場合も、病院では治せない「魔術 magia」を原因とする疾病にかかっているという理由が事前に患者やその妻の口から、そして治療儀礼の最中にも霊の憑依を受けたマチやその相手役の夫から説明された。

この点に関する質問をすることができた6名のマチ全員が、マプーチェ患者の他に普段からウィンカ患者の治療を行うと述べている。つまり都市に在住するウィンカたちであっても、西欧近代医療では解決できない疾病に直面した際、医師にはない霊的治癒能力をマチに認め、その治療を受けるために遠隔の地からわざわざ共同体まで足を運ぶのである。

また中には、逆にウィンカ患者の要請で自ら遠隔の都市に出かけて治療を行うマチもいる。(19)

トライゲン地区の長老マチ、メレヒルダは、ウィンカ患者を治療するため

にサンティアゴ市を初めとする遠隔の都市まで出かけていくこともあると証言している [Huentelao]。

写真6．目隠しをして治療に当たるエウダリア。左手には小さなナイフ、右手には悪霊を包むために使う聖なる薬草『カネーロ』の葉を持つ。

また、ラウタロ地区のブランコ・ラピン共同体に住む40才のマプーチェ男性、オスカル・レピンはかつてマチであった自分の母親の『通訳』（後述）を務めていたが、あるウィンカの治療のために母に随伴して第7地域に位置するリナーレス市まで出かけた時の経験について証言している [Lepilao : No. 2] (地図1)。

（2）『ウインカ邪術師』と戦う『マプーチェ医療師マチ』

こうしたウィンカ患者の多くは、いわゆる「邪術」系の疾病にかかった者である。

しかし今世紀初頭までの資料や研究によれば、マプーチェにとって本来邪術は基本的にマプーチェ同士の問題であった。マプーチェの邪術師が一般のマプーチェに邪術をかけることによって疾病にかかる。それをマプーチェの治療師であるマチが治療したり邪術をかけた人物を特定する。要するにマプーチェたちにとって、邪術の問題はマプーチェ社会内部の閉じたサイクルの問題であった。

では、かつてのマプーチェたちはウィンカと邪術との関係をどう認識していたのだろうか。厳密な言い方をすれば、マプーチェがウィンカを邪術師と認識するというケースが皆無ではなかった。

例えば、バルディビアのチリ征服に参加したフランシスコ・デ・ビジャグラが、1558年にチリ総督に任命されてペルーから到着すると同時に天然痘が流行し、多くの先住民が犠牲者となった。同時代の記録者であるマルモレホによれば、反乱マプーチェたちはビジャグラが武力では自分たちに歯が立たないので、「邪術師 hechicero」としてこの疫病をもたらしたに違いないと考えていたと記している [Marmolejo : 180]。

さらに、第2次大反乱後に独立的な性格を回復したビオビオ川以南の地域に居住するマプーチェの間で巡回式の布教活動を続けたイエズス会の神父が、時にはマプーチェによって「邪術師」と認識されることもあった。

この点についてピントは近年の研究で、マチが神父たちの行う洗礼や告解などの秘蹟儀礼が自分たちを殺害するための魔術儀礼であると吹聴することがあったことを指摘している [Pinto : 56-58]。

こうしたことから、マプーチェが必ずしもウィンカを邪術と無関係な存在と見なしていたわけではなかったと思われる。

しかし、『平定』前のマプーチェ社会は基本的に自律的な社会であったためウィンカとの接触は限定的であり、上に述べたようなケースはやはり例外の域を出ていなかったものと思われる。

これに対し、初期の時期からマプーチェの重要な習慣として記録者たちが繰り返し言及しているのは、マプーチェ同士の邪術行為である。またこの問題に関連して、マプーチェの征服を困難にしている要因の一つに彼らが集落をなさず散在して居住することにあるが、彼らがこうした居住形態を尊重するのは隣人からの邪術を恐れるからである、といった指摘も記録されている。

そしてマプーチェの習慣に関して記述した数多くの同時代の記録による限り、マチの患者は全てマプーチェであり、死亡した患者に邪術の犯人として特定されるのも、全てマプーチェの邪術師という説明になっている。

したがって、例外的にウィンカが「邪術師」と認識されるケースがなかったわけではないものの、ウィンカは基本的にはマプーチェの邪術認識の外に位置する、あるいは邪術とは関連の薄い存在であると認識されていたものと

思われる。

18世紀後半にチリで布教活動を行ったフランシスコ会士のアントニオ・ソルス神父によると、当時マプーチェたちは病気の原因を全て邪術師 (brujo) の邪術が原因であると考え、ある患者を病気にさせた犯人であると特定された人物は、患者の家族の手によって報復を受け、殺害されていた。ただし、邪術師と裁定された人物が、運良くスペイン人の領域へ逃亡することを得たあかつきには、その者の持つ邪術的な性格は消滅したものと見なしている、と記している [Sors : 186]

また、『平定』後間もない1902年にチリ人民俗学者ルイス・アルデーアが残したマプーチェに関する習慣記述にも興味深いことが書かれている。当時のマプーチェも、あらゆる疾病は誰かが「毒を盛る」ことによって起こると考えていた。そして、病人がマチによる治療儀礼の甲斐なく死ぬと、マチはある霊的存在の力を借りて毒を盛った犯人をつきとめ、犯人と見なされた者は実力による制裁を受けていた [Ruiz Aldea : 63-64]。

しかし、当時既にウィンカはアラウカニーアに多数居住していたにもかかわらず、「『チリ人 chilenos（ウィンカ）』が犯人と認定されることは決してない」、とルイス・アルデアは付け加えている [Ruiz Aldea : 64]。

これらの情報から、少なくとも今世紀の初頭までのマプーチェたちの日常的な意識の中では、病気の原因となる邪術を行うのは同じマプーチェであって、ウィンカは邪術とはむしろ関係の薄い存在であると認識していたものと考えられる。つまり『邪術』とその治療は、基本的にマプーチェ社会内部の問題であったといえる。

今世紀中葉に書かれた民族誌研究が提供する情報でも、こうした傾向は基本的に維持されている。つまり、邪術をかける側もかけられる側も、そして邪術が原因で病気になった者を治療するのもマプーチェのマチであることを前提として叙述が行われているのである。

ただ唯一の例外は1950年代にマプーチェの間で調査を行った米国人文化人類学者ファロンである。彼は1964年に出版した『太陽の鷹 Hawks of the son』

という研究の中で邪術の問題に触れ、共同体に隣接する地域に住むチリ人農民（ウィンカ）や商人が邪術師の疑いをかけられることがあると指摘している [Faron (a) : 167]。ファロンによれば、これは主に殺人を目的とする最も悪質な邪術の場合だという [Ibid. 169]。

そしてファロンは、1968年に初版された「マプーチェ・インディアン」と題する研究で、より詳しくこの問題について説明している。それによればマプーチェはチリ人、特に医師、看護士、歯科医などの医療の分野に携わる専門職者を「強力な邪術師」と考えるため、例えばチリ人の住む集落を訪れた際、歯科医のところに抜かれた歯を置いてくることを嫌い、自ら抜歯することを好む、と述べている [Faron (b) : 88]。いうまでもなく、相手の身体の一部を使う「接触魔術」の発想である。またファロンは、ウィンカとマプーチェがお互いの邪術行為に対して抱く警戒心が、それぞれの民族集団の結束を高めているという効果にも言及している [Ibid. : 88]。

以上のファロンの指摘は、共同体に住むマプーチェが『外部者』であるウィンカに邪術の標的にされるという認識である。これは、『平定』後、ウィンカ社会からの影響が共同体にも急速に浸透していく中で、それまで交流の少なかった（認識の眼中になかった）一般チリ人もマプーチェの邪術観の中に取り込まれていったという状況を指しているのだろう。そしてファロンも指摘しているように、こうした認識はマプーチェの側から見れば、邪術の脅威を外部者であるウィンカに帰することによって、同じ共同体内に住むマプーチェ同志の精神的結束を強固にするという効果を生んでいたという側面もあったに違いない。つまり、外部脅威論的な『ウィンカ邪術師』認識である。

要するに、『ウィンカの邪術師』が認識されているとはいっても、それはあくまでも「マプーチェに対する邪術」という構図の中でのそれであることに注意しておこう。

そしてこの問題を指摘したファロンも、こうしたウィンカの邪術の標的とされたマプーチェの身に何が起こるのか、もし疾病にかかるとすると患者やその家族はどういう行動をとるのか、マチが治療するのか、そうだとすれば

マチはどのようにこれを治療するのか、といった具体的な叙述は一切行っていない。何故ならファロンも、マチの治療に関する具体的な説明は、疾病を引き起こすのがあくまで『マプーチェの邪術師』であることを前提として行っているからである。

また、特に医療関係者を強力な「邪術師」と見なすというファロンの指摘は、それまで関係の薄かった西欧近代医療関係者に対して、共同体に住むマプーチェたちが初期の接触の段階で抱いた警戒心の表現であると思われる。この意味で、ファロンの指摘する「ウィンカ邪術師観」は、両社会の交流が本格化していく過渡的状況において、未だ多分に未知の存在であったウィンカに対する脅威の意識を反映したものであるといえるだろう。

これに対し、今日のマプーチェたちはより客観的な形で「ウィンカ邪術師」をとらえている。ファロンが特に強力な邪術師として特筆している医療関係者に対し、今日のマプーチェはそうした属性を全く認識していない。むしろ、西欧近代医療の行為者である彼らをかなり客観的に認識し、その利点と限界点の両方を明確に把握している。この点については、以下の叙述で明らかになるであろう。

つまり、今日のマプーチェは「ウィンカ邪術師」が存在することを明確に認識している。しかし、その認識はファロンが指摘する「マプーチェ民族の敵としてのウィンカ邪術師」という外部脅威論的な構図ではもはや把握しきれないものになっている。

以下、これらの点を明らかにしていこう。

第1に、今日のマチはウィンカの邪術師を極めて重要な行為者として明確に認識し、邪術師（カルク **kalku**）を2種類に区別している。『マプーチェの邪術師 **mapuche kalku**』と『ウィンカの邪術師 **winka kalku**』である。

ウィンカの邪術師についてテムレム共同体在住のマチ、マリアは、やはり名詞・形容詞レベルでのスペイン語の単語の使用を除き、ほぼ純粋なマプーチェ語で次のように述べている。

"Mai, ka mülekei. Doi fuertengei mai fei. Mai, doi fuertengei ta winka. Estos winka ta, winka kara mu mülekei mai. Pueblo mu. Mai, eso pueblo mülekei. Pueblo meu. Campo mu ka ka. Campu mu ka mülekei. Doi weda fuertengei fei welu. Doi fuertengei ta, fei kom mapuche mu. Mapuche kalku mu. [Anemilla]

『ああ、ウィンカのカルクもおる。マプーチェのカルクよりも力が強いのだ。ああ、もっと力が強いのだ、ウィンカの方がな。これらのウィンカはウィンカの集落におる。集落にな。ああ、それは集落に住んでおる。集落にな。農村にも住んでおるがな。農村にもおるのじゃ。だが、彼らの方が強い悪い力を備えておる。もっと強力なのだ。どんなマプーチェよりもな。マプーチェのカルクよりもじゃ。』[Anemilla]

純粋なマプーチェ語を保持するマリアも、ウィンカ邪術師の所在を示す『集落 pueblo』、『農村 campo, campu』という表現はスペイン語の名詞を用い、また彼らの特徴を説明する表現にも、意図的にスペイン語の『強い』を意味する形容詞 "fuerte"を述語的動詞表現の語幹として用いている（～は強い：fuerte/ngei)。

またピリルマプ共同体のマチ、エウダリアは、カルクに関し筆者と次のような対話を行っている。

[autor] Fau püle ta mülekei ta kalku?

[Eudalia] Fau püle pütrilei kalku. Pütrilei re kalkungei reke che fau püle. Itrofill mu ka, pueblo mu ka mülei kalku.

[autor] Ah, pueblo mu ka?

[Eudalia] Ka mülekei kalku. Winka kafei kalkungekei tamién. Ejeje! Sí.

[autor] Winka ka, kalkungekei?

[Eudalia] Kafei kalkungekei winka. Fei doi adümkei winka kalku. Winka kalku doi küdaungei machitun meu. Sí. Doi küdaungekei, doi newenngekei ñi kalku winka.

[Mujer mapuche acompañante] Tiene más fuerza.

[Eudalia] Más fuerza, noike, küdaukei espíritu, "magia" mu küdaukei eso. Sí. Ese ... Winka kalku doi newenngei.

「筆者」このあたりに「カルク（邪術師)」はいるんですか。

「エウダリア」このあたりには「カルク」がうようよしとる。「カルク」みたいな者だらけじゃよ、この辺りは。どこにでも、集落にでも「カルク」はおるのだ。

「筆者」ほう、集落にもですか。

「エウダリア」ああ、やはり（集落にも)「カルク」はおる。ウィンカの中にも「カルク」はおるんじゃ。エへへ。そうなんじゃ。

「筆者」ウィンカの中にも「カルク」はいるんですか。

「エウダリア」そう、ウィンカにも「カルク」はおる。それでな、ウィンカの「カルク」の方がうわ手なのだ。ウィンカの「カルク」の方が、マチトゥンをやる時に骨が折れる。ああ、もっと手がかかる。ウィンカの「カルク」の方が力が強いからな。

「随伴したマプーチェ女性」より力が強いのね。

「エウダリア」より強い力を・・・。というのは、霊を使って、魔術を使って事を運ぶからのう。そうじゃ。その・・・ウィンカの「カルク」の方が力は強い。

この対話の中では、我々に随伴してくれた若いマプーチェ女性がスペイン語で語っているのに対し、エウダリアはかなり純粋なマプーチェ語を話している。

エウダリアの表現の中で興味を引くのは、邪術に関する表現である「霊 **espíritu**」、「魔術 **magia**」といった言葉がスペイン語で発せられていることである。

彼女はこの部分以外の発言でも、特に「ウィンカ邪術師のかける邪術」に言及する際に、しばしばスペイン語の『魔術』を意味する“**magia**"、あるいは『術』を意味する“**arte**"という名詞でこれを表現している。それに対し、マプーチェの邪術師の行う邪術を表現する際には、通常のマプーチェ語の動詞“**üñbitun**"（「邪術をかける」の意）を使っている **[Eudalia]**。

つまり、同じ邪術師の行う邪術であっても、マプーチェの邪術師の行うものとウィンカ邪術師の行うものとを言語上区別しているのである。事実、エウダリアは、上の証言からわかるようにウィンカのカルクが行う『魔術』の方がマプーチェのカルクよりも強力であると認識している。

ところで、植民地時代から修道会士たちが残してきた記録を見ると、マチの治療行為はしばしば、「魔術 **magia**」や「邪術 **arte**」といった否定的な表現で言及されてきた。(20) カトリックの神父たちにとっては、キリスト教の「神」とは異なる「ピジャン」を初めとする霊的実体の憑依に基盤を置くマチの治療儀礼は、悪魔と通じる「魔術」であり「邪術」に他ならなかったのである。

ところが今日のマチたちは、かつて自分たちを攻撃する目的でカトリック教徒が使っていたこれらのスペイン語表現を取り入れ、強敵である「ウィンカ邪術師」の行為に言及するための表現として意図的に使っているのである。「黒魔術 **magia negra**」、「邪悪な術の類 **wesake arte**」といった表現がそれである。

それに対し、自分たちが行う治療行為を表すのにマチがこれらの言葉を用いることはなく、通常の「仕事」、「職業」を意味する“**küdau**"という言葉を使う。

またチョルチョルの伝統主義者ロサも、邪術に関して純粋なマプーチェ語で説明している最中に、スペイン語の『邪術をかける **hacer mal**』という動

詞句を用いている。「邪術師」は、『人に邪術をかける者 **hacemalchelu**』というスペイン語の関係節にあたる形で、「邪術を受けた患者」は同じく受け身の関係節『邪術をかけられた者 **hacemalel**』という形で表し、完結した受動態の文章『(彼、彼女は) 邪術をかけられた **hacemalngei**』という表現も用いている [Barra:No. 2]。もちろんロサがマプーチェ語の "**üñbitun**"という表現を熟知していることは言うまでもない。

極めて伝統主義的な性格の強いマチといえる彼女のほぼ純粋なマプーチェ語による証言の中に、この部分だけがわざわざスペイン語表現を使って表現されているという事実は、やはりロサがウィンカ邪術師の存在をマプーチェの邪術師とは異なる特別な存在として想起するという事実を示唆している。

ウィンカの中にもカルクは存在する。そして、それだけではなく「ウィンカのカルク」と「マプーチェのカルク」は明確に弁別され、『ウィンカのカルクの方がマプーチェのカルクよりも手強い』と見なされている。これは、この点について証言の得られたマチ全員に例外なく共通する認識であった。

ラウタロ地区ブランコ・ラピン共同体に住み、地元のマチの『通訳』を務めるオスカル・レピラオも、ウィンカの邪術師の方がマプーチェの邪術師よりも力が強いことを認めている。そして、マチであった母親に同伴してリナーレス市に居住するウィンカ患者の治療のために出かけた際、逆に彼の母がウィンカの邪術師に術をかけられて危険な目にあったという経験について語っている (地図1)。

> **"Ta ti winka kalku muy fuertengei. Rume newenngei. A veces ta pepi nentukelai ta machi kutrankei. Iñche ta amun ta Linares. Linares mapu amun aquí en, tüfachi Chile mu. Puulu Linares, epu antüpui ta ñuke iñchuu. Fei ñi ñuke fei ta ti kutran rume poderngekei kalku. Umau ta kalkungekei. Fei ñi ñuke kutrani. Epe lapufui ñuke. Epe latukei. Kiñe pun tranalei. Iñche chum, chumwela, kimwelan. Rume weñankülen ahí. Layai chi ñuke pi-**

meken ... "

"Ta, un flechazo le dio ... ta ti winka kalku winka. Flechazo elueyu, fei mu ta epe lafui ñuke. Montufulayalu. "

『ウィンカのカルクはとても力が強い。とても強力なんだ。時には霊を抜き取ることができなくてマチが病気になることもある。僕は(母について）リナーレスに行ったんだ。ここの、このチリの地にあるリナーレスに行ったんだ。リナーレスに着いて、そこに僕らは2日間滞在した。それで母は病人を診たんだが、その病人に邪術をかけた者はとても強力だった。夜寝ている時に邪術をかけるんだ。それで僕の母も病気になってしまった。母はほとんど死んだも同然だった。あやうく死ぬところだったんだ。ある晩に倒れたんだけど、その時僕は一体どうしたらいいかわからなくて、とても悲しかった。母が死んでしまうって思ってたんだ・・・。』
『霊の毒矢を母に放ったんだ、・・・そのウィンカのカルクはな。毒矢を母に放ったんだ。それで母は危うく死んでしまうところだった。危うく助からないところだったんだ。』**[Lepilao : No. 2]**（括弧内筆者補足）

原文に付された下線の部分が少ないことからもわかるように、『通訳』を務めるこのオスカルも極めて純粋なマプーチェ語を保持する人物である。しかしそのオスカルも、ウィンカのカルクが持つ『強力である』という特徴を説明する際、本来のマプーチェ語の **"newen-ngei"**という表現の他に、わざわざ『強い』という意味のスペイン語の形容詞 **"fuerte"**や同じく『力』を意味する名詞 **"poder"**にマプーチェ語の述語動詞 **"ngen"**を付加して、マプーチェ語化した **"fuerte/ngei, poder/ngei"**という表現を用いている。こうした形容詞 **"fuerte"**の使い方は、上で見たテムレム共同体のマチ、マリアの場合と同じである。

またオスカルは、『(霊的な意味で) 毒矢を放つ』という場合も、マプーチェ語の **"ütrüfün"**という表現が存在するにも関わらず、わざわざ『矢の一撃』という意味のスペイン語の名詞 (**"flechazo"**)、あるいは『彼女に矢を放った』というスペイン語の一文をフレーズごとそのままの形 (**"un flechazo le dio"**) で用いている。

オスカルの証言に観察されるこうした言語上の特徴も、彼らウィンカの邪術師が極めて強い力を備え、マプーチェの邪術師とは質的に区別されるべき存在と認識していることの表れと見ることができる。

ほかならぬ「ウィンカの患者」のために手強い敵である「ウィンカ邪術師」に決死の戦いを挑む年輩の女性マプーチェ、そんなオスカルの母の姿が私の頭には浮かんで来た。

邪術の問題はもはやマプーチェ同志だけの問題ではない。またファロンが指摘する、外部者であるウィンカ邪術師が共同体のマプーチェに邪術をかけるといった、言い換えれば「ウィンカ対マプーチェ」といった「外部脅威論的」な図式で把握できるような「ウィンカ邪術認識」でもない。今日邪術の問題は、マプーチェ社会の外にあるウィンカ社会に属する者同志の問題としても明確に認識され、そうした本来無関係の問題であったウィンカ邪術師系の疾病の治療にも各地のマチたちは積極的に関わっているのである。

ウィンカ同志の問題であるにもかかわらず、それを解決できるのは自分たちだけである、これが私が対話する機会を得た全てのマチに共通する認識であった。そして医者や看護士には邪術を直すことはできない、という認識はマチだけではなく多くの一般のマプーチェの口からも耳にした。

ファロンが指摘したように、彼らが西欧医療の専門職者を「邪術師」として認識することはもはやない。むしろ本章の第1節で見たように、生理的疾病における彼らの優秀性を率直に認めている。マチたちもその例外ではない。

しかしそれと同時に、邪術系の疾病については彼らが無力、あるいは無知であり、自分たちマチだけがこれを治療することができる。こうしたある種の「客観性」、あるいは「合理性」に裏打ちされた自信が彼女たちの目にはあ

りありと感じられた。

だが、この自信が決して単なる彼女たちの一人よがりのホラではないことを、我々がマチトゥンの場で会った白人患者V氏やその妻の談話からも感じることができた。

写真7．V氏の体から悪霊を吸い出すエウダリアと、それを手伝う『通訳』のギジェルモ。

彼らは数年前に、強度の頭痛や関節痛など原因不明の病的状態に陥ったという。そして初めは、サンティアゴ市内の「バリオ・アルト Barrio Alto」と呼ばれる上流層地区にある「アレマン病院 Clínica Alemana」や「ラス・コンデス病院 Clínica Las Condes」といった最も近代的な設備を備えた有名な病院をいくつか回ったという。しかしどの病院でも彼らの疾病原因を確定することができなかった。そこで、結局エウダリアの叔母にあたるマチの治療を受けたところ、ある姻族のウィンカ女性が彼らの家族全体に『黒魔術 magia negra』をかけたということが判明したのだという。それ以来彼らはそのマチやエウダリアの治療を受け、病状が回復していると強く自覚している（写真7）。

V氏の妻は金髪で白い肌の、いかにもゲルマン系移民の血を引くといった風貌の持ち主である（写真8）。彼女は、我々に同伴した歯科医ダニエルに、自分も以前マチの治療を受け病状が回復したと語っている。そして当のV氏も『信じなければこんなことはできない』と認めた上で、『自分たち家族が今生きていられるのはただマチのおかげです』と断言したという [Daniel]。(21)

ウィンカの間には強力な邪術師がおり、同じウィンカに対して邪術をかけることがある。そして、ウィンカ邪術師が仕掛ける邪術に戦いを挑み、これを打ち破ることができるのはマチだけだ。こうした認識はマチ自身や一般の

マプーチェだけではなく、V氏や彼の妻を初めとする多くのウィンカ患者たちにとっても『真実』となっている。

ちなみに、1回のマチトゥンの費用はウィンカ患者にとっても決して安価ではない。その額はマチによってさまざまだが、今回の調査の範囲では1996年当時の日本円にして約1万円～3万5千円であった（表3）。都市にある区立の小学校で働く常勤教師の1カ月の給料が約3～4万円であることを考慮すれば、この額が決して小さなものではないことがわかる。

したがってウィンカ患者がマチの診察にかかる動機として、西欧医療よりも安いという経済上の判断が働いているのではないことは歴然としている。つまり、『ダメでもともと』といった安易な気持ちでマチトゥンを受けるのではない。また、『近隣にいるから気軽に治療を受けられる』といった地理的な動機が存在しないことは言うまでもない。彼らにとってマチトゥンを受けることは、真摯な決断と多大な出費を伴う意識的な選択なのである。

『平定』以降、共同体のマプーチェたちの間には西欧的文化価値が体系的な形で浸透していった。しかしその逆に、ウィンカ社会にも今まで遠い存在であったマプーチェ社会に関する情報がある程度伝わるようになった。このように両社会の相互認識が高まっていく中で、一方ではマプーチェの間での邪術観は拡大し、ウィンカ同士の邪術の問題が彼らの認識の中に導入された。また他方で、ウィンカ社会には今まで事実上未知の存在であったマチが、少なくとも西欧医療では治癒不可能な特定の疾病に悩む患者にとっては重要な役割を果たす有能な医療師として認知されたといえる。

これは別の角度から考察すれば、近代的な価値観がマプーチェ社会よりもずっと早い段階から、そしてより徹底的に浸透していたはずの白人・混血系のチリ人の間でも、合理的な治療では治せない病気、あるいは「邪術」に関する伝統的な信仰が消滅していないことを裏付ける事実でもある。

例えば「邪眼 mal de ojos」は、首都のサンティアゴ市内でも南部のウィンカ集落でも、あるいはイタリア系移民の集落でも、おそらく90%以上の住民にとって日常的に発生しうる疾病として認識されている。そして一般住民の

中には、スペイン語やイタリア語によるカトリック系の祈禱によって邪眼の患者を治す「サンティグアドール **santiguador**（男性）」あるいは「サンティグアドーラ **santiguadora**（女性）」という人物が、いたるところに見いだされる。

つまり少なくとも「邪眼」は大多数のウィンカにとって、「信仰」という表現が白々しく思えるほど現実味を帯びた「常識」として認識されている。またこの疾病はマプーチェの間でも **"trafentun"** という名称で知られ、マチが担当する治療の一つとなっている。

合理的な方法では解決のできない疾病が存在する。そうした認識はマプーチェだけではなく近代化が進んだ都市に住むウィンカ人口の間でも存続している。つまり、『非近代性』あるいは『非合理性』は先住民のマプーチェだけではなく、白人・混血系のチリ人たちの中にも根強く生きているのである。だからこそ、「非合理性」の象徴ともいえる「邪術」系疾病の治療に特異な能力を発揮するマチが、彼らにとって重要な機能を果たし得ているのだといえるだろう。(22)

（3）『霊の通訳』から『バイリンガル通訳』へ

さて、ウィンカの患者が多いということで一つ気になることがある。それは言語の問題である。

昔からマチトゥンにはマチの相手役を果たす人物が参加していた。この人物のマプーチェ語名称は地域によって様々だが、『ドゥグマチフェ **dungumachife**』あるいは『ドゥグルマチフェ **dungulmachife**』ということが多い。それぞれ「マチに話す **(dungun)** 者 **(fe)**」、そして「マチを話させる **(dungulün)** 者 **(fe)**」という意味のマプーチェ語である。つまり、憑霊して人格の変異（トランス）が起こったマチに話しかけて質問し、霊から病人の症状や病因、治療法などを聴き出す役割を負った人物ということである。

これを英語圏、スペイン語圏の文化人類学者たちはそれぞれの言語で『通

訳』という意味の言葉を使って“interpreter"、“intérprete" と訳してきたが、これらの表現は少し解説を必要とする。

降臨した霊は通常のマプーチェ語とは異なる儀礼的なマプーチェ語を話すため、マプーチェであっても理解できないことがしばしばある。

この点について、ロムルウエ共同体のマチであるロサの息子で彼女の『通訳』を務めるウンベルトは、興味深い発言を行っている。彼によれば、マチによって憑依する霊的存在は千差万別であり、言語表現を含む治療儀礼の作法も個人差が大きいものとなる。だから、それぞれのマチには自分（正確には「自分に憑依する霊」）の言葉使いを熟知した特定の『通訳』が必要である。だから他の地域のマチの『通訳』を務めることは難しいのだ、とウンベルトはいう [Barra:No. 3]。つまり、単に儀礼的な表現であるというだけでなく、個々のマチに憑依する霊のタイプによって生ずる差異も加味されるのである。

こうした事情で、霊の語る難解で個性の強いマプーチェ語を通常のマプーチェ語に直し、患者やその家族、あるいは他の参加者たちに伝えるという作業を行う人物が必要であった。それが『ドゥグマチフェ』 であり、『ドゥグルマチフェ』である。その意味においてのみ『通訳』という表現は妥当であったといえる。

しかし今日の『通訳』は、そうした特殊な意味における『霊の通訳』という伝統的な機能の他に、より通常の意味での『通訳』、つまり『バイリンガル通訳』の役割をもこなさねばならなくなっている。

先住民人口の多いアンデス高原地域では、白人や混血の住民の中にも先住民語、例えばケチュア語がある程度理解できたり話せたりする者が少なくないものだが、チリの白人系・混血系住民であるウィンカの場合、日常会話程度でもマプーチェ語を解する者はほとんど皆無に等しい。したがって、ウィンカ患者を治療することが通例化している現在の状況の中では、『通訳』が高いスペイン語の運用能力を持つことが、マチトゥンを成立させるためにほとんど必要不可欠な条件にすらなっている。

筆者が実際に親しく対話する機会を得た3名の『通訳』、ルマコ地区のギジェルモ、ラウタロ地区のオスカル、そしてチョルチョル地区のウンベルトは、いずれも高い同時通訳能力を備えた人物である。このうち少なくともギジェルモとウンベルトの二名は、自分が『通訳』を勤めている相手のマチよりも、特に『話す』能力においてはるかにスペイン語の運用能力は高い。またオスカルの言語的特徴に言及した時に指摘したように、彼らのマプーチェ語の能力が極めて高い水準にあることは言うまでもない。(23)

写真8．太鼓を叩き降霊した霊の言葉を吟ずるエウダリアの右で、V氏の妻と対話する『通訳』のギジェルモ（手前右の後ろ姿の男性）。

我々はその中の一人、ギジェルモの『通訳』ぶりをV氏の治療儀礼の場で実際に観察することができた（写真8）。助っ人の男たちの上げるけたたましい叫び声、マチが力一杯叩く太鼓の音などの喧騒の中で、彼は実に手際よく二重の『通訳』の作業をこなしていた。マチに降臨した霊の発する難解なマプーチェ語を、瞬時にしてわかりやすいチリの口語的スペイン語で患者の妻に伝えたり、逆に彼女がスペイン語で発する質問の内容を、極めて早口、かつ明快に発語された儀礼的なマプーチェ語でマチ、正確にはマチに降臨した霊たちに伝えていた。外国語大学の専攻の授業でスペイン語を教えるという職業柄、バイリンガル能力を持つ人物と接触することが多いはずの私にとっても、それはあまりにも見事な同時通訳のパーフォーマンスであった。この印象は、彼らの許可を得てマチトゥンを録音したミニ・ディスクを後で聴き直した今でも変わっていない。

つまり、ウィンカ患者の増大という状況の中で、『通訳』は『霊の通訳』という従来の機能に『バイリンガル同時通訳者』としての機能を付加すること

により、ウィンカの患者にも開かれた新しいマチトゥンの形態を生み出したといえるだろう。

以上から、マプーチェの伝統的な治療体系が、現代の要請に応じて新しい要素を取り入れつつ再編成されてきたこと、そしてそうすることによって、ウィンカ社会の中に一定程度浸透しつつあるといえるだろう。

第3章：両体系の相互補完

これまでの2つの章ではそれぞれ、ウィンカの医療体系のマプーチェ社会への影響、そしてマプーチェの伝統的医療体系のウィンカ社会への浸透の現象に着目し、マクロな意味での両体系の相互浸透的状況を説明した。

本章では、個々の治療の場において双方の医療体系に属する要素がどのように絡み合い、相互補完的に機能しているかを具体的な事例に即して呈示していこう。

（1）ウィンカ医師の治療を受けるマチ

8月13日に始めてルマコの診療所を訪れた時、筆者を驚かせたのはある女性マチの存在であった。冒頭で述べたように、極めて伝統主義的で閉鎖的なイメージの強いマチのイメージを抱いていた私には、マチが病院を来訪するという事など全く予測していなかったからである。

「あなたはマチですか。 **Eimi ta machi ngeimi?**」とマプーチェ語で声をかけると、はじめ彼女は困ったような顔をして数秒間沈黙を保った。おそらく、マチでありながら診療所に来ているのが恥ずかしいのであろう。

しかし、「そうみたいね。」と言って笑うと、「ええ、私はマチよ。確かに。否定したってしょうがないもの、だって確かにそうなんだから。」と自分に思い聞かせるようにつぶやくと、あとは全く平静に、時には音韻上も統語上もレベルの高いチリの民衆的スペイン語で、そして時には流暢なマプーチェ語

で質問に答えてくれた。彼女が、第1章の中ですでに登場しているテレサ・パイネケオである。今回私が直接対話する機会を得た5名のマチの中では、彼女が最も完璧なバイリンガルであった。

診療所から歩いて1時間の距離にあるレニーコ・チコ共同体に住む彼女は、心臓病にかかっている娘を、自分でも薬草を使って治療する一方で、診療所へ連れて来て診察してもらい薬品をもらうのだと話した **[Painequeo]**。マチである彼女が身内の疾病をメディコに治療させているのである。

このような例はマチの身内だけではない。マチ自身が西欧系医療者の治療を受けるということも少なくないと思われる。

例えばテムレム共同体の中にある農村診療所で働くウィンカの医療補助員フアン・カルロスは、マチのメレヒルダと次のような会話を交わしている。

> **[Juan Carlos]** Yo la sano a ella, y ella a mí.
> **[Merejilda]** Sí, tiene que ayudarse, uno con otro. **Epüñpüle kelluukei. Mai.**
> (フアン・カルロス)『僕が彼女を治し、彼女が僕を治してくれるんだ。』
> (メレヒルダ)『ああ、人は助け合わねばな、お互いに。人は双方で助け合うものだ。うん。』**[Huentelao]**

スペイン語しか解さないウィンカ補助員に対し、メレヒルダは「互いに助け合う」というフレーズを、スペイン語 **(tiene que ayudarse uno con otro)** とマプーチェ語 **(Epüñpüle kelluukei)** の両方で表している。こうした表現法もまさに同じ共同体に住むマチと医療補助員の相互依存的な状況を象徴している。

また、ルマコ地区ピリルマプ共同体のエウダリアは当時膀胱炎をわずらっており、トライゲンの病院で診察してもらった経験があった。彼女は自宅で行った治療儀礼マチトゥンの席でも、降臨した霊の力を借りて白人の患者を治癒するかたわら、同席したトライゲン市市街部の個人クリニックで働く歯

科医のダニエル（写真9）に対し、膀胱炎の治療を続けたいので、知り合いの医者に便宜を図って欲しいという希望を伝えている [Machituque en Pililmapu：No. 2]。

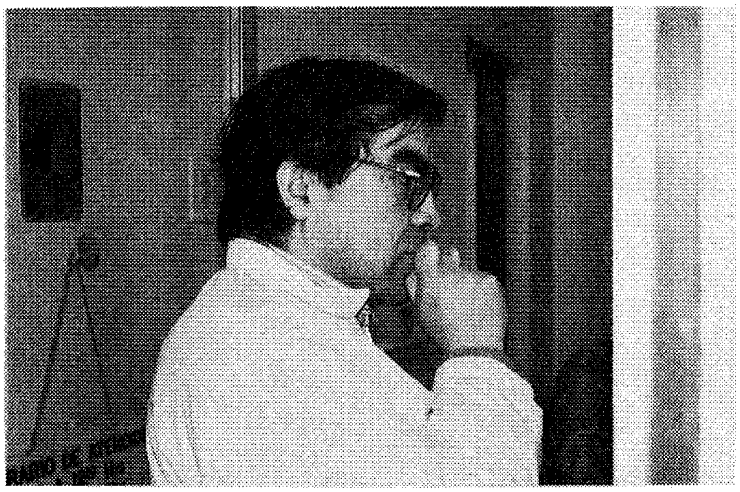


写真9．トライゲン市街の個人クリニックで働く歯科医ダニエル。

さらに興味深いのは、エウダリアが『呼頭術 mütrümlonkon』という邪術疾病治療の効果を持つ難解な術を修得するためにも膀胱炎を治すことが不可欠なのだ、とダニエルに語っていることである [Aracena]。

『呼頭術』とは、文字通りの意味としては『頭 lonko』を『呼ぶ mütrumün』ための術ということである。すなわち、特に強力な邪術をかけられて霊魂が体から離脱し、邪術師の方へ引き寄せられているような重度の霊的疾病患者に対する治療術を指す。この治療を行うためには、通常の治療儀礼マチトゥンの二倍の人員の協力が必要であり、各地のマチたちはこれを『大きな仕事 fütra küdau』、『大がかりな事 fütra dungu』、『二重のマチトゥン doble machitun』などの言葉で表現している。要するに、『呼頭術』はマチの得意とする霊的疾病治療の中でも最も骨の折れる仕事の一つに位置づけることができる。

つまりエウダリアは、マチである自分の『霊的治癒能力を最大限に高めるため』に『西欧近代医療の援助』を求めているのである。

（2）医師とマチの分業

さらに、マチの最も得意とする領域である「霊的疾病」患者の治療過程の一部を積極的に病院でやらせている者もいる。

娘の治療を自分で薬草を使って行うかたわら、ルマコ総合診療所で医師に

治療させているレニーコ・チコ共同体のマチの例は既に見た。

一方ピリルマプ共同体のエウダリアは、『自分が治療できない患者の場合には、病院へ行くよう助言しますか』という質問に対し次のように答えている。

『ああ、そうじゃ。うん。そういうこともする。そんな患者は（病院へ）行かせる。ワシがその患者を治せん時は、病院へ行かせるのだ。

その他にも嘔吐をさせて、それでウェクフ霊を除去した後、患者は体が弱っておる。気力がなくなって骨も弱り、元気も消失してしまう。だから、そのような時にも病院に回してやってな、それで骨をしっかりした状態にしてもらうのだ。病院にはそういうことについて指示があって、骨を回復させる治療をやっとる。それで、骨をしっかりした状態にしてもらう。それで病人は元気になるわけだ。うん。』**[Raimán]**（小括弧内筆者補足）

エウダリアは「骨」の治療に言及しているが、今世紀初頭に出版された海岸地域に位置するブディ地区のあるマチの身内のマプーチェ語による証言にも類似の表現が見られる。その証言者は、病人を治療する際にマチが行う祈禱の文句の中に、活力にあふれた健康な状態を表すために「頑丈な骨を持つ**newenforongen**」という表現を用いているのである **[Coña : 341,359]**。したがって、「骨」の治療を、打撲や骨折など単に物理的な意味での骨の疾病を超えた、あらゆる疾病の治療の大前提として認識する伝統的な疾病概念を、エウダリアも継承していることがわかる。

ただエウダリアの場合は、骨の治療そのものについては西欧近代医療の優秀性を認め、むしろ積極的にそれを利用するという姿勢が見られるのである。

またエウダリアの夫で彼女の『通訳』を務めるギジェルモも、ある人物にワインを使って「毒を盛られた」際、治療の過程で脆弱になった骨を回復させるために、トライゲン市街の病院へ治療を受けに行き、ビタミン剤の注射を打ってもらったという自身の経験を語っている **[Huenuchi : No. 2]**。

これらのケースは、霊的疾病や邪術的疾病の治療の過程の一部を西欧医療に任せるという、一種の分業を示唆している。

（3）『総合医療実行課』：西欧近代医療によるマチの再評価

『マチだって。マチってのは魔術を使って病気の治癒をすると言ってる奴らさ。彼らは薬草だって使わないよ。もちろん僕はマチなんて信じないし、ましてや患者を回すなんてことは絶対にしないさ。』
[1996年8月15日、トライゲン病院における談話]

写真10. トライゲン市公立病院の医者や看護士たちとの会合にて。

トライゲン市内の公立病院に勤める年齢20代後半と思われる若い医師は、『マチについてどう思うか』という質問にこう答えている(写真10)。『薬草を使わない』という発言は、彼がマチの治療方法について無知であることを暴露している。

ピリルマプ共同体でのマチトゥンの際にも我々に同行してくれた歯科医のダニエルは、かつてルマコ区にある診療所の所長をつとめた経験を持つ。彼によれば、大学の医学部で専門の医学教育を受けた医師たち、特に卒業したばかりの若手の医師たちの中には、自分が大学で学んだ西欧近代医療体系の理論を絶対視し、マチを初めとする伝統的民間医療の有効性を真っ向から否定する者が多いのだという [Aracena]。

マチのもとへやってくるウィンカ患者の大半は、まず都市の病院で治療を試み、手だてなしとして医者に「見離された desahuciado」後に、マチのところへやって来る。我々が知り合ったV氏の場合もそうであった。

だがこうしたケースのほとんどの場合、患者が自発的に代替手段としてマチを選ぶのであって、医者がマチのところへ行くように患者に指示しているわけではない。その点むしろマチの方が、ある種の生理的疾病については代替体系である西欧医療の有効性を積極的に認めるという柔軟な態度を取っているといえる。

また、先述したウィンカ住民の大半がその存在を確信している『邪眼』ですら、医師の大部分はこれを否定している。

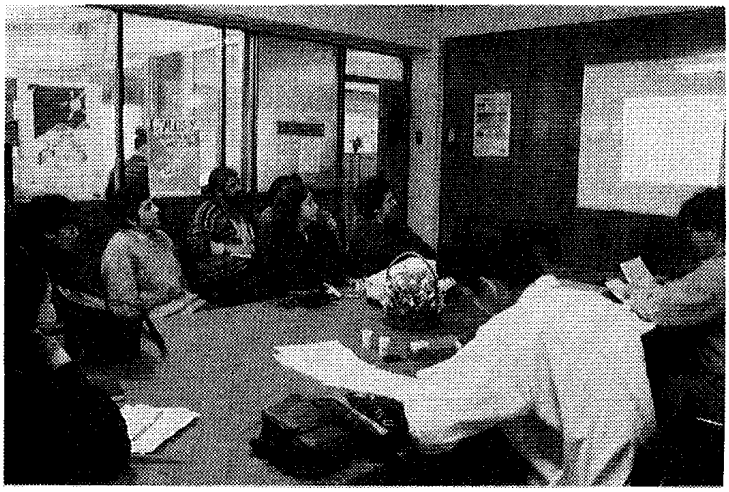


写真11. ＤＡＩＳの定例会合にて。

しかし、このように他体系に非寛容的な態度の目立つ西欧近代医療体系の内部にも、新しい傾向が生まれつつある。その代表的な例がアラウカニーア地域庁の中に設置された『総合医療実行課 Departamento de Acción Integral de Salud (DAIS)』である。

DAIS は医師、看護士、現地連絡官、マプーチェ出身の異文化調整官、文化人類学者など分野を越えたスタッフで構成され、西欧近代の医療体系を絶対視することなく、地域住民の健康状況を向上するため、薬草療法を初めとする伝統医療の中の有効な要素を積極的に導入して行こうという立場に立っている (写真11)。

こうした公的機関レベルでの変化と呼応して、少数とはいえ、大学教育を受けた医者の中にもある種の疾病に対するマチの有効性を認め、患者を彼女たちのもとへ送り込む者が出現している。こうしたケースに関して、今回私が知り合ったマチの中で唯一明言しているのは、テムレム共同体の長老格マチ、メレヒルダであった。彼女は言う。

『ワシのところにはいつも、ああ、患者を回して来る。時に頭がおかしくなった、気のふれた患者が出ることがある。そうするとメディコが、このわしのところにそういう患者を回してよこすのだ。というのは、治すのは大変なんでな・・・(病院には治療する）術がないのだ。ああ、ないのじゃ。なぜって、悪い事が起こってしばしば打撲したり「空気の流れ」に触れたり、そうした原因で気が変になったり頭がおかしくなるものが出る。「悪い風」に捕まったりして、それで気が変になることがよくあるのだ。頭を打ってそうなることもある。それで病気になる。いろいろな原因で病気にかかるのだ。』
[Huentelao]（小括弧筆者補足）

メレヒルダの言う『空気の流れ』、『悪い風』とは、マプーチェ語でいわゆる『旋風（メウレン） **meulen**』と呼ばれる風、およびその風に宿る悪霊のことを指している。(24)

エウダリアの証言から、この医者の場合、物理的原因（頭部打撲）、霊的原因（旋風）の両方を含め、精神疾病治療の側面でメレヒルダの行う治療の有効性を認識し、これに患者を委託していることがわかる。

ただ、こうした立場を取る医師や看護士が未だ少数に過ぎないことも事実である。

（4）マチに患者を回す診療所医療補助員

それに対し、西欧医療体系に属する専門職の中でも末端に位置し、共同体に住むマプーチェに最も近い存在である農村診療所の医療補助員たちには、マチを中心とする伝統的医療体系に積極的な効果を認めるという態度がより顕著に見られる。

例えば、テムレム共同体の診療所で働くウィンカの医療補助員フアン・カルロスの場合、彼自身が地元のマチ、メレヒルダの治療を進んで受けると証

言していることは既に見た。

ラウタロ地区のブランコ・ラピン共同体に位置する診療所の医療補助員は、同じ共同体出身のマプーチェ、ホセ・カユミルである。彼は、患者をマチのところへ回すことがあるかという質問に対し、次のように答えている。

> **"Mandakefiñ. Mandakefiñ. Kutran lonko. Wesa pensakelu. (Hospital meu) Newe adümkelai. Adümlai ta doctor. "**
>
> 『回すよ、回すとも。頭の病気にかかったもの、正常な思考ができなくなった患者だ。(病院では) うまく治せないからな。ドクターには治せないんだ。』**[Cayumil]**。(小括弧内著者補足)

彼もやはり精神的疾病の分野で、西欧近代医療にはない治療能力をマチに認め、これに患者を回していることがわかる。

写真12. イタリア人移民集落カピタン・パステーネにある農村診療所の前にて。向かって左から3人目がウィンカの診療所補助員カルロス・レイエス。

一方歯科医のダニエルは、ルマコ区の診療所医療補助員たちと区内のマチとの友好的な関係に言及している。彼によれば、区の医療補助員たちはマチが患者を治療することを禁止することなく、むしろ積極的にこれを勧めている。そしてその上で、自分が治療できない患者の場合には躊躇なく診療所へ回すように彼女たちに助言しているのだという。このように柔軟な態度を取ることによって、マチと近代医療機関との間に円滑な関係を築き上げ、結果として地域住民の健康状態の全体的向上につなが

る、こうした観点からダニエルは彼らの「戦略」を肯定的に評価している[Daniel]。この場合、マチに患者を回すわけではないので積極的な意味での分業とはいえないが、少なくともマチの治療を否定はしないという意味で、消極的ながらやはり両体系の分業的関係の構築に寄与しているといえるだろう。

こうした医療補助員たちの態度は、診療所と地域のマチとの間に友好的な関係が打ち立てられることに確かに寄与している。現に私や慶応大の国際医学研究会のメンバーがマチトゥンに参加できるようにエウダリアに交渉してくれたのも、ピリルマプ共同体に近隣するイタリア人移民集落カピタン・パステーネにある診療所のウィンカ補助員のカルロス・レイエスであった（写真12)。カルロスの場合マプーチェの共同体に住んでいるわけではなくマプーチェ語も全く解さないが、エウダリアとの間に友好的な関係を保っていることは治療儀礼の場でも感じることができた。

（5）マチの儀礼を支援する医療補助員

そしてさらに私の興味を引いたのは、診療所の医療補助員たちの中にはマチの治療を奨励したりマチに患者を回したりするだけではなく、積極的な形でマチの治療に協力するものがいることである。

ラウタロ地区の診療所補助員ホセ・カユミルは、マチの主催する治療儀礼マチトゥンの場に参加することはあるかという質問に対し、次のように答えている。

> **“Konken, pue, konken. Mai.... Lonkongeken. ‘Ya' pikefiñ ta pu weni. "**

> 『参加するさ、ああ、参加するよ。うん。・・・僕が統率係りを務めるんだ。仲間たちに「ヤア」ってかけ声を掛けるんだ。』**[Cayumil]**

マチトゥンの儀礼には、マチの他に患者の家族あるいはマチの親族や知り合いなどの中から『戦士 **pu kona**』と呼ばれる数名の助っ人役の男たちが参加する。彼らは、マチが邪術・悪霊系の疾病を治療する際に、『ルギ **rüngi**』とよばれる葦の棒や、マプーチェの伝統遊戯『パリン **palin**』の際に使われるスティックを握って、マチや病人の体の上で叩き合ったり大きな叫び声を上げたり、鉄砲を撃ちならしたりするという行為を行なう。これらの行為は、霊の憑依を受けるマチの魂を悪霊の攻撃から守ったり、患者の体内に巣くう悪霊を追い出したりするのに有効な手段と考えられているのである(写真13)。

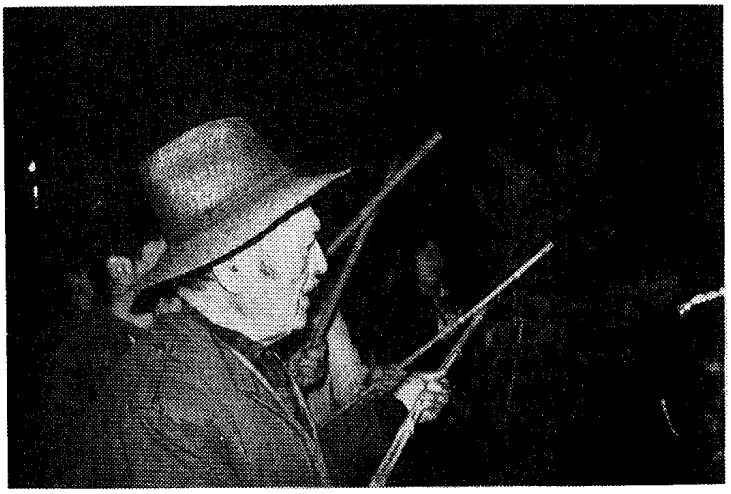


写真13.『パリン』のスティックや葦の枝を打ち鳴らし悪霊を追い払うために『ヤー・ヤー・ヤー』と叫び声を上げる参加者。

ホセが『「ヤア」ってかけ声を掛ける』と言っているのは、悪霊を退散させるために助っ人たちが発する「ヤア、ヤア、ヤア・・・！ **Ya, ya, ya** ...！」という叫び声の音頭を取ることを指している。つまり、マチトゥンに参加する助っ人役の男たちを統率し、悪霊との戦いに向けて彼らを鼓舞するという重要な役割を果たしているのである。

こうした例はマプーチェの医療補助員だけではなく、ウィンカの診療所医療補助員の中にも見られる。我々のマチトゥン参加を実現するためにマチに交渉してくれたカルロス・レイエスは、彼自身がマチトゥンに参加することは始めてだったものの、『通訳』のギジェルモの指示に従い、儀礼の中で葦の棒を打ち鳴らす『戦士』の役割を果たした (写真14)。

一方、テムレム共同体の医療補助員フアン・カルロスはウィンカでありながら、共同体内の最長老マチであるメレヒルダの主催するマチトゥンに普段から参加し、悪霊を追い払うための重要な手段の一つである『鉄砲撃ち』の

係を務めている（図2）。「僕がトラルカ（tralka 鉄砲）を撃ってウェクフを追い払うんだ。」、そうフアン・カルロスはスペイン語で誇らしげに私に語っている［1996年8月16日の証言］（写真15）。

写真14.『パリン』で使われるスティックや葦の枝をマチの頭上で打ち鳴らすマチトゥン参加者。後列左から2番目に見える男性は診療所補助員カルロス・レイエス。

写真15. フアン・カルロスの自宅の居間の壁に彼自身が描いたマチの絵。

（6）マプーチェとウィンカの共闘：槍と銃

ところで、これらの儀礼行為の中には戦闘に関する多くの要素が関係していることに気が付く。

第1に、儀礼の場で重要な役割を果たす助っ人役の男たちを指す『戦士 kona』という名称である。これはもともと、かつて植民地軍やチリ共和国軍を悩ませたあの「マプーチェ戦士」を指す言葉で、植民地時代に書かれた記録には原語をスペイン語表記した“cona"、あるいはスペイン語の『兵士 soldado』という表現で記されている。

第2に、彼らが用いる「ルギ」、「遊戯パリン」のスティック、そして鉄砲といった道具である。これらはいずれも、『平定』以前のマプーチェが植民地軍や共和国軍との間でしばしば繰り広げていた戦闘行為に密接に関わる要素である。

まず「ルギ」というのは第1部で見たように、16世紀後半からマプーチェ

の歩兵たちが、そして後には騎馬兵となった戦士たちが最も重要な武器として使用してきたあの「長槍」の名残である。19世紀末の『平定』戦争の時にも、各地のマプーチェはこの「ルギ」を手に、近代的な装備を備えたチリ共和国軍と戦い、多くのものが戦死している。

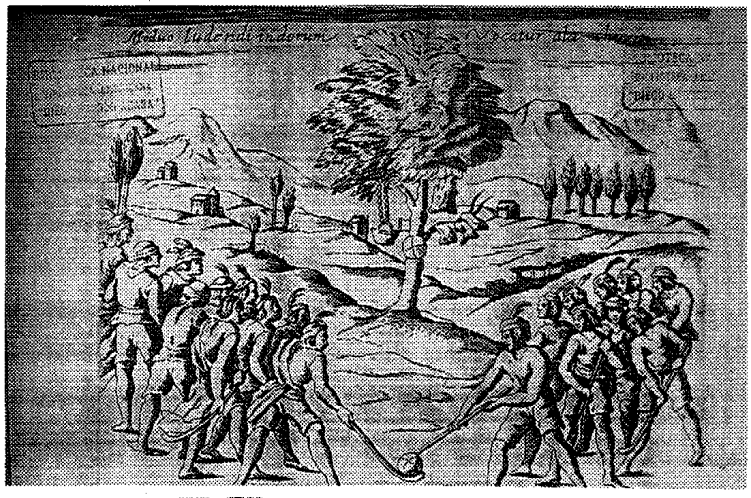


写真16. ホッケーに似たマプーチェの伝統遊戯『パリン』。

「パリン」はホッケーに似たマプーチェの伝統遊戯である（写真16）。植民地時代には筋力鍛錬の目的でマプーチェ戦士たちに好まれ、またその試合には複数の地区の戦士たちが集まることが多く、反乱の計画を練る場とし

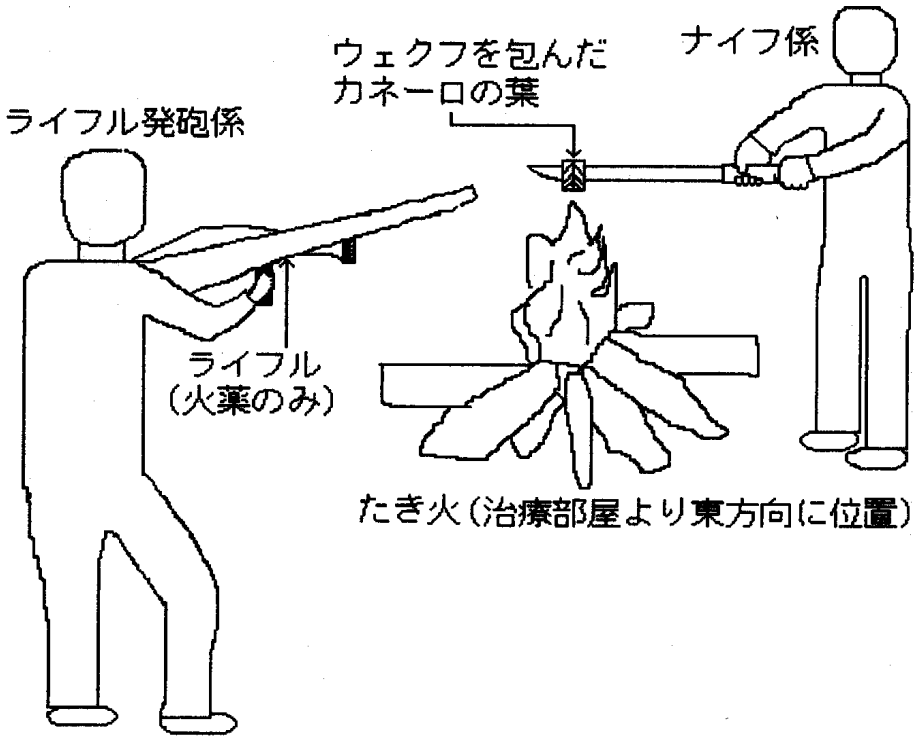


図2．病人の体から吸い出した悪霊ウェクフをナイフで突き刺して火にくべ、これを鉄砲で撃つ。（ビリルマプ共同体の治療儀礼に関する筆者のスケッチ）

ても利用されたので、しばしば植民地当局による禁止令の対象となってきた。(25)

一方、馬とならんで征服者スペイン人の強力な武器であった火器については、反乱マプーチェ戦士たちが馬と同様にこの武器をも同化しようと努めていたことを示唆する叙述は、古い時代の記録から見いだされる。

すでに1554年1月、反乱マプーチェの討伐遠征に出発したビジャグラ隊をアンダリカン（チビリンゴ）の丘で撃破したマプーチェ隊が、戦利として数台の大砲を獲得したという情報を同時代の3名の兵士の記録者全員が記している。(26) なおロベーラは、この時反乱マプーチェ軍が8丁の大砲の他、アルカブス（火縄）銃も戦利として獲得したと記述している [Lobera: 345]。

一方ビバルは、その数年後の1558年に行われたミジャラプエの戦いの際に、防護壁の背後にいた4千名の先住民たちが2台の大砲を備え、7～8名のものがアルカブス銃を実際に発射したこと、そして運良くスペイン人側に被害はなかったことを記している [Vivar: 353]。

またロベーラによれば、同じく1558年に海岸の地キヤポでの戦闘の終了後、ウルタード総督隊が敵のマプーチェ隊から押収した武器の中には、それまでの戦勝で彼らが獲得していたアルカブス銃やビジャグラ隊から戦利として獲得していた5台の大砲が含まれていた。また、火薬は彼らがヤナコーナを通じて入手していたことをロベーラは記している [Lobera: 398]。

こうして見ると、反乱マプーチェ戦士たちは、第1部で扱った「馬」などよりもむしろ早い段階から、戦利という形で、あるいはヤナコーナを利用することによって火器や火薬を調達し、これを実戦に使用していたといえる。

またマプーチェ戦士たちが火器の使用を修得するために、植民地軍の捕虜や脱走兵などの知識を利用していたことを示す記録もある。

1585年1月9日付けでソトマヨール総督が国王に宛てて執筆した手紙には、アラウコの地で総督隊を攻撃したマプーチェ軍の中にあるアルカブス兵がいたこと、そしてマプーチェ戦士たちは彼を捕虜として生かしておき、アルカブス銃の撃ち方を指導させていたことが記されている [CDIHCh, III:232]。

一方、17世紀初頭のリベーラ総督の時代に最前線で活動していたゴンサレス・デ・ナヘラは、当時エクアドルのキトからの徴募兵として戦闘に参加していたプリエトなるメスティーソが敵方に逃亡して火薬製造用の炉を作り上げていたというエピソードを書き残している [González de Nájera : 120]。

馬と並んで火器が征服者や植民地軍兵士の強力な武器であることを察知したマプーチェが、このような形で銃や大砲の同化をめざすのは当然のことであったといえるだろう。

だが結局のところ、「火器」はマプーチェにとって馬ほど一般的な武器となるには至らなかった。戦闘におけるその使用頻度は極めて限定的なものであり、ほとんどの記録者はマプーチェ戦士の使用する武器の中に火器を含めていない。本稿の第1部の中心的なテーマを馬に絞り、火器の導入の問題に触れなかったのもそのためである。

「馬」よりも早い段階から使用を開始していながら、火器の使用が馬や長槍ほど普及しなかった理由の一つは(27)、やはり技術的な問題にあるのだろう。チリ植民地軍ですら兵士たちの用いるアルカブス銃や大砲は極めて稀少であり、戦闘で消費されるとその都度本国スペインやペルー副王領から完成品を調達していた。したがってマプーチェ側も、もし銃を組織的に使用することを目指すのであれば、これを完成品の形で入手せざるを得ない。つまり、専ら戦利、略奪、あるいは密貿易に頼るしかないのである。

たとえ逃亡兵士や捕虜の協力を得たとしても、自分たちで製造したり修理したりするにはあまりにも問題が大きい。火器を製造するために必要な鉄の量も大量であり、製造や管理のためにも高度な技術が必要とされる。

それに対し「長槍」の場合、先端に鉄製の尖頭を装着するとはいえ、それに必要とされる加工技術は火器と比べれば単純で必要な鉄の量も限られているから、捕虜や脱走兵鍛冶職の技術で十分に可能であったのだろう。また「馬」の場合、略奪や戦利の他に17世紀の前半からは自然増殖も可能となっていたことはすでに見た。

マプーチェがウィンカと戦った最後の大戦闘であった『平定』の時にも、

各地のマプーチェが使用したのは、槍を初めとする伝統的な武器であった。

チョルチョルの伝統主義マチ、ロサ・バーラは、19世紀末の『平定』を実体験した同時代の証人である母方祖母から直接伝え聴いたマプーチェ語による伝承として、自分の祖父を含むチョルチョル近辺の戦士たちが皆「槍」で武装して『スペイン人たちpu español』との戦闘に出撃し、大半の者が死んでいったと回想している [Barra : No. 1]。

またラウタロ地区に住む65才のマプーチェ男性フアン・コネヘーロ・カリラフも、マプーチェ語によって語り継がれてきた伝承の中で、同地区の戦士たちが槍、こん棒、ボレアドーラと呼ばれるパンパ起源の投石器などで武装して『平定』戦争を戦ったと語っている [Conejero]。

つまり、すでに植民地時代から戦闘を初めとするマプーチェの生活の様々な場において積極的な形で同化されていた「馬」とは対象的に、「火器」は、少なくとも戦闘という世俗的な場で機能を果たす要素としてはついに十分な形で同化されることなく終わってしまったのである。言い換えるならば、「火器」は「物理的な戦闘」のコンテクストにおいては、最後まで敵ウィンカの最も強力な武器であり続けたということである。この点では、早い時期から火器を組織的に使用していた北アメリカ大陸大草原地域の先住民たちとは対照的であるといえる。

一方、治療儀礼である「マチトゥン」の場で鉄砲が使用されるようになったのは、やはり『平定』以後の時期と思われる。

この意味で興味深い情報を我々に提供しているのは、19世紀の中葉にバルディビアからアラウカニーアの南部を探検したドイツ人鉱山主トロイトラーが残した旅行記である。彼は、あるマチトゥンへの参加を許された際、彼を招待したカシーケの要請で「悪魔を追い祓う」ためにリボルバーの発射を余儀なくされたというエピソードを書き残している [Treutler : 358-359]。

強力な武器である火器が疾病の元凶である悪霊を駆逐するのに効きそうだという発想そのものは、すでに19世紀中葉当時のマプーチェたちの間にも漠然と存在していたのだろう。ただ、このマチトゥンの場でリボルバーの発射

という行為が実現したのは筆者がたまたまその場にいたからに過ぎず、突然頭上で強烈な爆発音を聞いたマプーチェの男女が恐怖にかられ、地面に伏せってしまったことをトロイトラーは記している [Ibid.:359]。この事実は、『マチトゥン』における火器の使用の習慣が未だ確立されていなかったことを示している。マプーチェの間での銃の保有そのものが散発的な状況にあったのだから、これは当然のことかも知れない。

しかし『平定』後の今世紀初頭に記録された海岸地域のブディ地区に住むあるマプーチェのマプーチェ語による証言では、すでに悪霊祓いの目的で『猟銃 kopeta』や『リボルバー revolver』がマチトゥンに必要不可欠な要素であることを前提として叙述が行われている [Coña : 366]。

この事実は、『鉄砲』が『スペイン人』との世俗的な世界における『戦闘』においてマプーチェが敗れたのちに、霊的世界における戦いともいうべき治療儀礼の場で、はじめて組織的な形で彼らによって同化された可能性を示唆している。

我々が参加したルマコ区ピリルマプ共同体でのマチトゥンの場でも、『通訳』のギジェルモが鉄砲撃ちの係を兼ねていた。また19世紀末の『平定』の時には鉄砲の使用が普及していなかったチョルチョルでも、今日伝統主義マチのロサが主催するマチトゥンの場ではやはり鉄砲が使われている [Barra : No. 2]。(28)

一方テムレム共同体の場合、鉄砲撃ちの係を務めているのがウィンカの診療所補助員であるフアン・カルロスであることは上で見た。かつて敵同志であったウィンカとマプーチェの戦闘が終焉した今日、マプーチェにもウィンカにも共通する敵である邪術師や悪霊に対して、ウィンカ補助員とマプーチェのシャーマンが一致団結して戦う。いささか図式的になるのを恐れずに表現すれば、テムレム共同体の例はそんな風に解釈することができるかもしれない。

かつて鉄砲はウィンカの強力な武器としてマプーチェを悩ませ続けた。しかし、現在のマプーチェたちは、伝統的な武器である「槍」とともにその「鉄砲」を用いて邪術師たちが送り込む悪霊を退治している。マプーチェの邪術

師よりも強力な「ウィンカ邪術師」の存在が明確に認識されている今、旧敵ウィンカの最強の武器であった鉄砲は、邪術系疾病治療のために特に有効な道具の一つとして認識されているのであろう。

『平定戦争』においてマプーチェ戦士の武器であった槍、そしてチリ共和国軍兵士の発射する恐るべき武器であった火器、この両陣営の『武器』は今日では治療儀礼に参加する『戦士』によってともに仲良く利用されている。また彼らが槍の穂先を向け、鉄砲の照準を合わせる敵はウィンカの兵士ではなく、マプーチェとウィンカを共通して悩ませる悪霊ウェクフである。そして、これらの武器を通じて彼らが救うのもマプーチェの患者のみならず、ウィンカの患者でもある。

『平定』前の時期にチリ南部に存在した『マプーチェ対ウィンカ』という二項対立的な図式は、少なくとも今日の疾病治療の世界ではかなり希薄化され、むしろ先住民の伝統的な医療体系と西欧近代医療体系の間にさまざまな形で相互補完的な関係が打ち立てられつつあるといえる。

第2部結論

19世紀末の『平定』によって自立性の高い領域を失ったマプーチェ社会には、支配社会の近代的な文化要素が体系的に流入し、彼らの生活の様々な側面で「ウィンカ化」が進展した。疾病と治療の世界もその例外ではなく、特に今世紀の後半に入ってから大きな変化が生じた。

一方で、西欧近代医療体系の影響が疾病概念や治療行動などの側面で顕著に見られるようになった。かつてマプーチェの間に支配的だった非自然的な病因論を特徴とする伝統的な疾病概念に変化が生じ、今日のマチたちは自然的原因による疾病と非自然的原因による疾病という二分法を採用している。そして、かつてはマチが担当してきた多くの重度および軽度疾病の分野で、西欧医療体系による代替が起こった。

しかしそれと同時に、かつてはマチとは無関係であったウィンカ社会の間

で、マプーチェの伝統医療に対する再評価の動きが起こっている。特に、白人・混血系人口の間で西欧医療では解決できないような邪術系の疾病に陥った際に、積極的にマチの治療を受ける者が増加しつつある。そして、こうした事態に対処するべく、バイリンガル能力を備えた『通訳』を特徴とする新しいマチトゥンの様式も生み出された。そして個々の治療現場でも、西欧近代医療の専門職者と先住民医療師であるマチとの間にさまざまな形で相互依存的な関係が確立されている。

19世紀末の『平定』以来マプーチェ社会が被ってきた近代化・西欧化の波の中で、マプーチェの伝統医療も西欧近代医療体系の影響を受けて大きく変化しつつある。しかしそれは必ずしも伝統医療の一方的な消滅を意味するものではない。少なくとも医療の分野において、西欧近代と土着は相互補完的な関係を結びつつあるように思われる。

第2部注

（1）『平定』の出発点となったアンゴル占領（1862年）に関する研究としては、Leiva (1984) がある。また『平定』の全過程については、Bengoa (1992), pp. 133-325. が詳しい。

（2）祈願儀礼「ギジャトゥン」におけるマチの役割については、拙稿 (1995) 参照。

（3）ルマコ、トライゲン両区における調査にあたっては、国際医学研究会第19次派遣団員の升田、古元、前野の3氏との対話からいろいろな刺激を受けた。またマチトゥンの説明で使用した写真の何枚かも彼らに提供して頂いた。3氏に感謝致します。

（4）Montecinos (1982). Oyarce (1988). Oyarce y otros (1992).

（5）Ruiz Aldea (1902). Guevara (b) (1908). Latcham (1924). Cooper (1947), Titiev (1948). Hilger (1957). Faron (1964). Ester Greve (1970). Noviello (1972). Faron (1986). Oyarce (1988). Foerster (1993). 箭内 (1995).

唯一の例外は、マプーチェ出身の研究者であるマルティン・アロンケオが1979年に出版したマプーチェ宗教に関する著作 Instituciones Religiosas Mapuches (1979) である。この研究の中で、著者はあるマチが実際に治療の際に唱えたものと思われるマプーチェ語の祈禱を掲載しているが、その中には治療を受けているのがあるウィンカの若者であることを示唆する文句が含まれている [Alonqueo : 77]。ただアロンケオもこの点を全く特筆してはいない。

（6）チリ南部には、西欧系近代医療体系とマチを中心とする先住民系の民間医療体

系の他にも、西欧起源と思われるさまざまな民間医療が存在する。その中にはスペインやイタリアの民間療法を起源とすると思われるもの、あるいはカトリック系やプロテスタント系の祈禱の利用を特徴とするキリスト教会起源と思われるものもある。また19世紀にドイツで開発され、『虹彩 iris』の検診によって全ての疾病を診断・治療する『イリオロヒーア Iriología』と呼ばれる体系もある。この体系の場合4年生の専門教育機関まであって、近代医療体系に準ずる存在といえる。

また共同体に住むマプーチェの中にも、薬草治療を特徴とする『メイカ meica』、出産を手伝う『助産婦 partera』、骨折・脱臼を治す『コンポネドール componedor』、キリスト教系の祈りを用いて、邪眼を原因とする疾病を治療する『サンティグアドール santiguador (-a)』など、スペイン語の名称で呼ばれ西欧民間医療体系の影響を強く受けたタイプの民間治療師たちも存在する。こうした西欧系民間医療体系とマチの体系、あるいは西欧近代医療体系との関係も興味あるテーマだが、別の機会に論じることにしたい。そして本稿では、いわば両極に存在するといえる西欧近代医療体系と先住民系の伝統的医療体系の関係に焦点を絞って論じる。

(7) CDIHCh, IV (1593), p. 386. CDIHCh, V (1600), p. 283. González de Nájera (1614) p. 49. Pineda y Bascuñán (1629), p. 107. Ovalle (1646), p. 326. Olivares (1767), p. 138. Molina (1787), p. 182. Cooper (1947), p. 751.

(8) CDIHCh, IV (1593), p. 260, p. 398. Lizarraga (1607), p. 467. Pineda y Bascuñán (1629), p. 107. Ovalle (1646), p. 326. Sors (1780), p. 185. Pérez García, I (1810), p. 57. Domeyko (1845), p. 729. Domeyko (1848), II, p. 729. Smith (1853), p. 144. Treutler (1861), p. 397. Ruiz Aldea (1902), pp. 61-63. Cooper (1947), p. 751. Titiev (1948), pp. 110-112. Hilger (1957), p. 110. Faron (a) (1964), p. 168. Faron (b) (1986), p. 70, p. 72.

(9) Coña (1930), p. 331. Housse (1940), p. 159. Hilger (1957), p. 113. Metreaux (1967), pp. 187-189.

(10) Guevara (b) (1908), p. 299-300. Guevara (a) (1913), p. 258. Housse (1940), p. 141. Cooper (1947), p. 751. Ester Grebe y otros (1970), pp. 6-8. Faron (b) (1986) : 70.

(11) マプーチェのマチの場合、治療に際しての霊との関わり方は、ほとんどの場合「憑依」という形態を取る。ただし、ある人物が『神』に『指名』されてマチになる途上にある時に、その魂が体を離れて天界へ飛翔し、治療に関する様々な知識を修得することを示唆する資料も少なくない。したがって、佐々木宏幹氏の表現を借りれば、マチは「脱魂型」の性格をある程度備えた「憑霊型」のシャーマンということができるだろう。(佐々木 (1993), p. 32)

(12) もちろん『平定』以前の時期にも、様々な西欧起源の文化要素がマプーチェ社会に導入されていった。第1部で扱った『馬』や鉄製武器などを初めとする実利的な要素はその典型である。

『平定』以前の両社会の間に戦闘や対立といった側面のみを見る伝統的なマプーチェ史観に対し、この時期にマプーチェ社会とイスパノクリオーリョ社会との間に発生し

ていた平和的な諸関係に着目する新しい研究の潮流は、歴史家セルヒオ・ビジャロボスらが1982年に著した論文集『アラウカニーアにおけるフロンティア的諸関係』を出発点として、今日までチリ内外の歴史家やエスノ・ヒストリー研究者たちの手で精力的に進められている [Villalobos (a), (b)]。

筆者も、西欧系社会との諸関係を通じて『平定』以前のマプーチェ社会とイスパノクリオーリョ社会との間に発生していた平和的な諸関係や、それを通じてマプーチェ社会の様々な側面で起こっていた変容を否定するわけではない。ただ、この時期はマプーチェ社会が独立的な性格を強く保持していたため、外来の要素を主体的に選択・受容することが可能であったといえる。

それに対し『平定』後はチリ共和国の法制に従属することにより、強制的な形で西欧系の文化要素が体系的に、そして急速に導入されて行くことになった。宗教、言語、医療など、マプーチェの伝統的価値観の根底をなす重要な諸側面で大きな変化が急速に進展するのはやはり『平定』以降の時期である。

(13) ルマコ区には、同区役所の1995年度の報告によれば6つの診療所があり、そのうちの4つは農村部に位置している。その他やはり農村部には、医師グループが月2度定期的に訪問する農村医療巡回所も5ケ所存在する [Municipalidad de Lumaco : 20]。また、ラウタロ区ブランコ・レピン共同体の診療所補助員ホセ・カユミルによれば、同区内には14の診療所が存在する [Curamil]。

(14) マチにとって『夢』が果たす機能については、拙稿 (1997年) 参照。

(15)『グネチェン』はマプーチェが昔から信奉してきた存在ではなく、これが彼らの間に組織的な形で浸透して行ったのは『平定』後それほど間もない今世紀の初頭の頃であったと思われる。マプーチェに対する布教活動に従事していたカトリック系の修道士たちが、『至高神』の概念を彼らに伝達するために『グネチェン』という言葉を創造した、と同時代の研究者であるラッチャムやゲバラは説明している。彼らは、マプーチェがもともと信仰していた祖先霊、あるいは雷や雨などの自然現象に関係の深い神格である『ピジャン pillán 』が『グネチェン Ngünechen』という至高神的な概念に代替される過渡的な状況に言及している [Guevara : 256-257,298. Latcham : 598-605]。

(16) 50年代に調査を行ったファロンも、治療の過程でマチがしばしば外科的な切開を行っていたことを示唆している [Faron (a) : 143]。

なお、現在でもナイフが治療儀礼に使われなくなったわけではなく、別の意味において重要な機能を果たしている。例えば我々が参加することを許されたマチトゥンの場で、マチのエウダリアは刃渡り40～50センチにおよぶ肉切り包丁を手に持ち、シンボリックな形で患者の体にはびこった悪霊を切り刻んで摘出するという動作を繰り返している。

そういう意味では、「物理的に皮膚を切る」という意味でのナイフの使用は衰退したものの、その「霊的な形での利用」は維持されているといえる。

(17) なお宗教的側面でも、伝統的な先住民文化に対してカトリック以上に許容度の少ないペンテコスタル派（エバンヘリコ）の浸透によって、一部のマプーチェの間で、

降霊を伴う治療儀礼を特徴とするマチに対する信頼が低下あるいは喪失した。こうした宗教的側面における変容が伝統医療体系に及ぼした影響は、今後の新たな調査を通じて研究したいと考えているテーマの一つである。

（18）ただし、マプーチェの共同体の近隣に位置する農村地帯に住む白人・混血系農民が、場合によってはマチの診察を受けるということはあったようである。例えば、チョルチョル付近のフンド（大土地）に生まれ育った32才のある白人系女性は、自分が子供の頃、そのフンドで働くウィンカ農民たちが、病気にかかった時に近隣の共同体に住むマチの治療を受けていたと証言している [Sáez]。ただ、その地区は診療所のある集落から隔絶しており、しかも通常ウィンカ農民の間にはめずらしくなかった『メイコ meico (男性)』または『メイカ meica (女性)』と呼ばれる伝統的な民間薬草医療師もいなかったという。したがってこのケースは、代替手段が完全に欠如していたためにマチに依存せざるを得なかったという特殊な状況を示唆しているように思われる。

（19）オヤルセも1988年に公刊した論文の中で、都市に出かけるマチに言及しているが、その治療対象は都市へ移民した身内のマプーチェの患者であるとされているに過ぎない [Oyarce : 40]。

（20）Ovalle (1946), p. 326. Rosales, I (1674), pp. 159-160. Coña (1930), p. 336.

（21）この患者の家族の病歴、およびエウダリアの自宅で行われたマチトゥンの様子については別稿で詳しく論じたいと考えている。

（22）ウィンカ人口の間で邪術系疾病を伝統的に治療してきたのは『メイコ』あるいは『メイカ』と呼ばれる薬草治療師であった。とすれば、実際には『メイコ』に『マチ』が代替するという変化が発生したということになる。こうした変化が発生するためには、その前にウィンカ社会の間での『メイコ』の衰退という現象が起こるか、あるいは『マチ』の方が『メイコ』よりも有能であるという認識が形成される必要があったはずである。この問題については、今後の調査によって明らかにして行きたいと考えている。

（23）マチや『通訳』の言語上の特徴、スペイン語の修得プロセスなどの問題は、今後の研究課題の一つとしたい。

（24）この『メウレン』は、もともとは善なる属性を備える神格として認識されていたようである。例えば、イエズス会士のモリーナ神父が1787年に出版した記録には、当時のマプーチェたちが「益をもたらし、人間を愛する神」として「メウレン」を認識していたことが記されている [Molina : 170]。同じくイエズス会士のゴメス・デ・ビダウーレ神父が1789年に出版した記録には、チリの先住民たちが病人が出た際に温泉地に現れるメウレンの魂にお供えを行い、これが受け入れられると病人が回復すると見なしていたこと、そしてマチの主催する治療儀礼の場でも、「メウレン神 (Dios meulen)」に対して祈念が行われていたことが記されている[Gómez de Vidaurre:318,319]。つまり当時のマプーチェにとって、メウレンは疾病の原因であるどころか、逆に疾病の回復に寄与する神格であると認識されていたと考えられる。

しかし、既に今世紀の初頭に書かれたゲバラの民族誌には、ある種の癲癇や精神病などの疾病はこの旋風『メウレン』に巻き込まれることが原因で引き起こされると当

時のマプーチェたちが認識していたことが記されている [Guevara (a) : 299]。

(25)「パリン」がマプーチェ社会にとって過去に果たした役割や、今日宗教儀礼でこれが果たす機能については拙稿（1997年）参照。

(26) Vivar, p. 298. Marmolejo, p. 126. Lobera, p. 345.

(27) チリ人の歴史家オラシオ・サパテルは、マプーチェが18世紀に至るまで戦闘目的で火器を導入しなかった理由に関して、『発砲する』を意味する動詞表現 (tralkatun) からわかるように、火器を彼らが畏怖する存在であった雷 (tralka) と同一視したためという宗教的動機を想定している [Zapater:96]。またホセ・ベンゴアは「マプーチェ民族の歴史」の中で、マプーチェが火器を本格的な形で導入しなかったのには、戦争の伝統に関わる儀礼的な要因があったという可能性を示唆している [Bengoa : 262, nota. 19]。

しかし、本文で呈示した文献上の情報から考えると、私にはこれらの推論が妥当であるとは思われない。

(28) 今回の調査対象地域の中で、マチトゥンに鉄砲が用いられないという情報が得られたのは、唯一ラウタロ区のブランコ・ラピン共同体だけである [Lepilao:No. 2]。

＜結び：馬に乗ったマプーチェの神々＞

第１部では、植民地時代初期を中心にマプーチェによる軍事的な側面における「馬」の同化のプロセスを分析し、騎馬隊の導入を初めとする軍事力の向上がマプーチェの独立回復の大きな１要因となったことを見た。そして最終章では、若干ながら精神的な世界における馬の導入の問題に触れ、18世紀後半における騎馬戦士霊「ピジャン」の出現に言及した。

しかし１世紀前、マプーチェは『平定』によってウィンカとの戦いに敗れた。もはや今日世俗的な戦闘のコンテクストにおいて馬が使用されることも、あるいは「戦士霊ピジャン」が馬に乗って「スペイン人兵士の霊」と天空において戦闘を繰り広げると認識されることもない。

共同体における土地の細分化の進展によって、マプーチェ１家族あたりが保有する土地面積は狭くなっていき、馬を飼育する余裕は喪失した。また、1960年代以降道路網やバス路線の整備が進むと、共同体の生活における馬の実用的効用も減退した。

現在では、馬を１頭でも飼うマプーチェの家庭は極めて少ないという状況

に至っている。つまりマプーチェの物質的な生活において馬は実質的にほぼ消滅したといっても過言ではない。かつてマプーチェ戦士たちにとって最も頼りになる武器であり移動の手段であった「馬」はその役割を終えてしまったように見える。

しかしながら、マプーチェにとって馬は決して死滅してしまったわけでも無用になったわけでもない。何故なら彼らの精神的・宗教的な世界において、馬は今日でも極めて重要な要素として生き続けているからである。

本書の冒頭でも指摘したように、今日しばしば複数の共同体が協力して行なう祈願の儀礼『ギジャトゥン』の場には、数十頭から時には数百頭の馬が結集し、人々の安寧を脅かす悪霊『ウェクフ』を駆逐する目的で『アウン awün』とよばれる疾走行為が勇壮に行われる。本物の馬が参加しない場合、木製の棒に馬の顔をあしらった「ホウキ馬」が用いられることもある。

また、第2部で扱ったシャーマン的医療師マチが主催する治療儀礼マチトゥンの場でも馬が、いや正確に言えば「馬の霊」が重要な役割を果たしている。私がこの事実に気づいたのは、ピリルマプ共同体のマチトゥン儀礼の場においてであった。

私は以前から『ギジャトゥン』の場で馬が用いられることは知っていた。また、19世紀中葉の米国人旅行者スミスが旅行記に描いたあるマチトゥンの場で、本物の馬に乗った若者たちが『アウン』に当たる疾走を行う様子が記されていたことも記憶していた [Smith : 143-144.]。

これらの情報から、私はエウダリアのマチトゥンでも本物の馬が疾走して悪霊を祓うに違いないと思っていたのだが、その期待は見事に外れた。先に見たように、この儀礼では葦槍やパリンのスティック、そして鉄砲などの道具は用いられたものの、本物の馬はおろか「ホウキ馬」の姿すら目にすることはなかったからである。

しかし、ある霊的存在がマチであるエウダリアの体に憑依して『通訳』の夫ギジェルモとの会話が始まると、思いがけない形で私は馬に遭遇することになった。

エウダリアに憑依した1体の神格または霊は、患者である白人のV氏に向かって「息子よ **fochum**」と呼びかけ、「神が私に『下界へ行きなさい。**Amuaimi naü mapu.**』と言われたので来た。」と述べたあとで、はっきりと「自分は馬に乗っておる。 **Pürakawellun.**」と告げたのである。そしてそのあと、この霊は「自分は『虹の男 **Azul Wirin Wentru**』である。」とみずからの正体を明らかにしている **[Machitun en Pililmapu, No. 1]**。

この霊のあいさつに対し、『通訳』のギジェルモも出席者一堂を代表して、「馬に乗ってお越し下さり結構なことでございます、ロンコ様方。**Kümei mai ta mi pürakawellun mai, chi pu lonko.**」と感謝の意を表している **[Ibid.]**。

「ロンコ様方」とは、最高神である「グネチェン」からマチであるエウダリアの治療を守護するために天界から使わされた下級の神格で、**"pu"**というマプーチェ語の複数形を示す前置詞が付けられていることから彼らが3名以上であることを示している。これは、私が事前に行ったインタビューで、自分の守護神格が「虹」、「火山」、「雷」の3体であるとエウダリアが証言していることと矛盾していない **[Eudalia]**。

このように、エウダリアの治療儀礼を援護すべく天におわす「グネチェン」神から使わされた3体の下級神は、「馬の霊」に乗って地上界に降り立ったのである。

それだけではない。マチトゥンが始まってから4時間ほど立ったところで、病状や治療法について直接「グネチェン」にお伺いを立てるために「ウェルケン **werken**」を天界に派遣するという儀礼が行われた **(写真17)**。「ウェルケン」とはマプーチェ語で「使者」を意味する名詞で、この儀礼の中では直径2センチほどの丸い形をした透明な石のことを指していた。まず、この「使者」に向かって患者に息吹を数度吹きかけさせ、その魂の一部を乗り移らせる。そしてこれを魔術的な方法で天界に送り込むことによって、患者の魂と「グネチェン」とが直接会話を交わすという寸法である。

そして「ウェルケン」が無事に天界に飛翔できるように、道中の間両脇でこれを支えるのが「カピタン **capitán**（隊長）」と呼ばれる2体の霊で、彼ら

も馬に乗って「ウェルケン」を天界まで護送するとギジェルモは説明している。

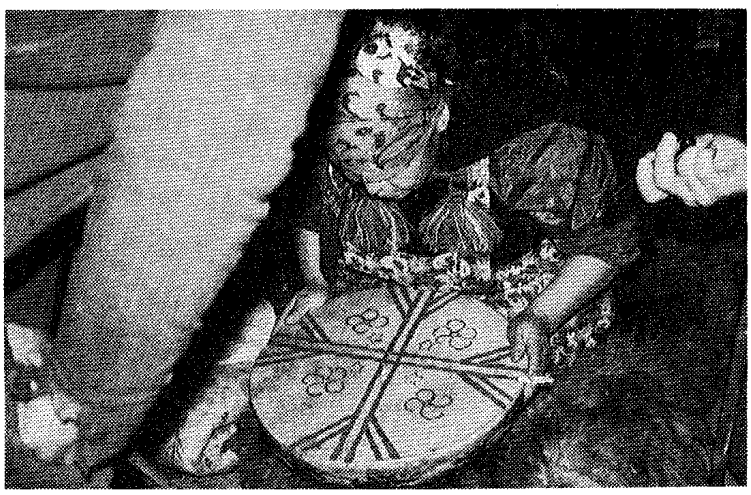


写真17. マプーチェの宇宙観を描いた聖なる太鼓『クルトゥルン』の中央に『ウェルケン』を置き、天界に通じると考えられている東の方向にこれを滑らせるマチ。

なお「ウェルケン」は「グネチェン神」との対談を無事に終え、翌早朝ふたたび「馬」に乗った「カピタン霊」たちの護送で地上界に降り立った。そしてマチの口を通じて患者の病因や治療法に関するさまざまな情報を我々に告げたのである。

これらの出来事は我々の目に見えるわけではなく、ただのまやかしではないかと一笑に付すこともできるだろう。ただ少なくともエウダリアやギジェルモを中心とするマチトゥン参加者の間で、『守護神』や『隊長霊』が天界と地上界を往復するために『馬の霊』が不可欠な手段であると認識されていることは事実である。そして、ウィンカの患者であるV氏や金髪の妻も、こうした認識を共有している。

18世紀の記録に現れる戦士霊の「ピジャン」も既に馬に乗っていたが、未だにスペイン人ピジャンとの戦闘という二項対立的な図式の中に位置づけられていた。

それに対し『平定』から1世紀が経過した今日、『マチトゥン』はマプーチェの患者だけではなく、ウィンカ患者を救うためにも行われている。マプーチェとウィンカの共通の敵ともいえる「邪術師」、あるいは「悪霊」に対抗するために、「馬」は「霊」に形を変えて生き続け、「グネチェン神」が送り込む「治癒の神々」や「隊長霊」を支えているのである。

『平定』によってマプーチェは軍事的には敗北し、支配社会に従属することを余儀なくされた。そして彼らが住む共同体には、激流のごとく支配社会の信奉する近代的価値体系の影響が流れ込んで来ている。都市に移民したマプー

チェの中には、ウィンカ文化に同化してマプーチェとしての自覚を捨て去る者も少なくない。共同体に残ったマプーチェの中にも、マプーチェ語を話すことができなくなってしまった者は多い。

一方、ウィンカ住民の中には共同体に住むマプーチェを「前近代性」や「後進性」の権化と見なし、彼らを自分たちと同じウィンカに変えてしまうことこそチリの発展につながると考える統合主義者は少なくない。先のピノチェ軍事政権もその一つで、マプーチェを一般のチリ人と変わりのない「市民」にすることを意図し、共同体の分割を促進した。

しかし、ウィンカ支配層がマプーチェの中に見いだし、撲滅しようとしてきた「前近代性」あるいは「非合理性」は、他ならぬウィンカ住民の中にも根強く生きていた。今日マチが彼らの間で医療師としての地歩を確立しつつある原因はまさにそこにある。

病院ではどうしても治せなかった疾病が、マチの治療を受けることで根治したと自覚するウィンカ患者は、近代性や合理性で割り切れない何かが自分の中に、あるいはこの世の中に存在することを発見する。「シャーマニズム」という最も「原始的な宗教体系」、すなわち近代とは相容れない文化要素のおかげで、そしてそれを体現するマプーチェの治療師マチのおかげで自分が助かったと実感するのである。疾病の治癒は抽象的な思考ではなく、明確な自覚をともなう具体的な体験であるがために、そうした感情は否定しがたい意識として定着することになるだろう。

そうすると、少なくともこれらのウィンカの場合には、「非合理的」あるいは「非近代的」であるがゆえに否定されるべき対象であったはずのマチ、あるいはマプーチェ文化一般に対する見方も変わってこざるをえない。こうしてマプーチェや彼らの文化に対してより寛容な、あるいはこれをより積極的に評価する態度が生まれてくるかもしれない。

少なくとも医療の世界に見る限り、先住民の体系が非近代的な要素を持つがゆえに否定されるのではなく、まさにそれゆえに再評価されることになるのである。実際に、医療の分野においてはすでにウィンカ社会とマプーチェ

社会の間に様々な補完的関係が築かれつつある。治療における伝統的な先住民の要素とウィンカの持ち込んだ近代的な要素の共存、マチと医療補助員の協力、医師の治療を受けるマプーチェ、マチの治療に依存するウィンカ等々がその好例である。

『平定』によって軍事的に敗北し、それ以来「近代化」の道を不可逆的に進むように見えるマプーチェだが、医療の世界ではまさに「近代」を体現するはずのウィンカたちによってマプーチェの「非近代性」が再評価されつつある。マチの治療を受ける患者は勿論のこと、アラウカニーア地域の官庁関係者や医療関係の専門職者の中にもこうした傾向は生まれ始めている。

医療の世界で近年観察されているこうした相互理解の傾向は1993年に「新先住民法」が制定されたことによってさらに促進される可能性がある。チリ国家の中に「一般チリ人とは異なる先住民が存在すること」が法的に保証されたのである。

ウィンカの支配に対して長期にわたって抵抗してきたマプーチェ。そして『平定』後、先住民文化の撲滅に向けて邁進してきたウィンカ。今日、この両者はようやく共存の道に向けて、遅すぎた第一歩を踏み出そうとしているのかも知れない。

参考文献

1．文献資料

（a）一次文献

Brower, Henry, y Herckmans, Elías, "Viaje al Reino de Chile, 1642-1643", en *Viajes Relativos a Chile*, Tomo I, Fondo Histórico y Bibliográfico José Toribio Medina, Santiago de Chile, 1962.

CDIHCh (Toribio Medina, José, *Colección de Documentos Inéditos para la Historia de Chile*), Tomos I-VII, Santiago de Chile, Fondo Histórico y Bibliográfico J. T. Medina, 1956-1982.

Coña, Pascual, *Testimonio de un cacique mapuche*, Pehuén, Santiago de Chile, 3ra edición, 1984.

De la Vega, El Inca Garcilaso, "Primera parte de los Comentarios Reales del

Perú", en *Colección de Historiadores de Chile*, Tomo XXIX, Imprenta Elzeviriana, Santiago de Chile, 1902.

Domeyko, Ignacio, *Mis viajes*, Tomo II, Ediciones de la Universidad de Chile, Santiago de Chile, 1978.

Encinas, Diego de, *Cedulario Indiano*, Lib. IV.

Ercilla, Alonso de, *La Araucana*, Santiago de Chile, Editorial del Pacífico, 2ª edición, 1970.

エルシーリャ、アロンソン・デ（吉田秀太郎訳）、『ラ・アラウカーナ（第一部、第二部）』、大阪外国語大学学術研究双書 5 ・12、1992年、1994年。

Febrés, Andrés, *Arte de la lengua general del reyno de Chile, con un diálogo muy curioso*, Lima, 1765.

GayDoc. (Gay, Claudio, *Historia Física y Política de Chile, Documentos*), tomo II, Museo de Historia Natural de Santiago, Santiago de Chile, 1852.

Góngora Marmolejo, Alonso de, *Historia de todas las cosas que han acaecido en el Reino de Chile y de los que lo han gobernado (1535-1575)*, Santiago de Chile, Ediciones de la Universidad de Chile, 1990.

González de Nájera, Alonso, *Desengaño y reparo de la guerra de Chile, Santiago de Chile*, Imprenta Ercilla, Colección de Historiadores de Chile y de documentos relativos a la historia nacional, Tomo XVI, Santiago de Chile, 1889.

Guevara Tomás (a), *Las últimas familias araucanas i costumbres araucanas*, Santiago de Chile, Imprenta, Litografía i Encuadernación "Barcelona", 1913.

Haenke, Thaddaeus Peregrinus, *Descripción del Reyno de Chile*, Nascimento, Santiago de Chile, 1942.

Havestadt, Bernardo, *CHILIDÚGÚ SIVE TRACTATUS LINGUAE CHILENSIS*, LIPSIAE IN AEDIBUS B. G. TEUBNERI, 1883.

Instituto Geográfico Militar, *Atlas histórico de Chile*, Instituto Geográfico Militar, Santiago de Chile, 1995.

Jara, Alvaro y Pinto, Sonia, *Fuentes para la historia del trabajo en el Reino de Chile - Legislación, 1546-1810*, tomo I, Santiago de Chile, Editorial Andrés Bello, 1982.

Leiva, Arturo (a), "El otro cautiverio:el relato de fray Juan Falcón y su oposición a la doctrina del padre Luis de Valdivia", en *Frontera*, Universidad de La Frontera, Temuco, 1982, pp. 165-178.

Leyes de Indias, tomo II, Madrid, Ediciones Cultura Hispánica, 1973.

Lizarraga, Reginaldo de, *Descripción del Perú, Tucumán, Río de la Plata y Chile*, historia 16, Madrid, 1987.

Lobera, Mariño de, "Crónica del Reino de Chile", en *Crónicas del Reino de Chile*, Biblioteca de Avtores Españoles, Tomo CXXXI, Madrid, 1960.

Molina, Cristóbal de, "Relación de muchas cosas acaecidas en el Perú", en *Biblioteca de Avtores Españoles*, Tomo 209, Madrid, 1968, pp. 57-95.

Molina, Ignacio, "Historia natural y civil de Chile", en *Colección de Historiadores de Chile*, tomo XXVI, Santiago de Chile, 1901.

Motolinía, Fray Toribio, *Historia de los indios de la Nueva España*, Editorial Porrúa, México, 1979.

Municipalidad de Lumaco, *Diagnóstico comunal Lumaco, Plan superación de la pobreza*, Lumaco, 1995.

Olivares, Miguel de, "Historia militar, civil y sagrada del reino de Chile", en *Colección de Historiadores de Chile*, tomo IV, Santiago de Chile, 1864.

Ovalle, Alonso de, *Histórica Relación del Reino de Chile y de las misiones y minisrios que exercita en la Compañia de JESUS*, Roma, 1646.

Pérez García, José, *Historia de Chile*, Tomo I, Colección de Historiadores y de documentos relativos a la historia nacional, Tomo XXII, Santiago de Chile, Imprenta Elzeviriana, 1900.

Pineda y Bascuñán, Francisco Nuñéz de (a), *Cautiverio Feliz y razón individual de las guerras dilatadas del Reino de Chile*, Santiago de Chile, Editorial Universitaria, 4ª edición, 1989.

Pineda y Bascuñán Francisco Nuñéz de (b), *Cautiverio Feliz*, Colección de Historiadores de Chile, Santiago, 1863.

Rosales, Diego de, *Historia General del Reino de Chile, Flandes Indiano*, 2 tomos, Santiago de Chile, Editorial Andrés Bello, 1989.

Sahagún, Bernardino de, *Florentine Codex*, Book 12, "The Conquest of Mexico", University of Utah, 1975.

Smith, Edmond Reuel, *Los Araucanos, Notas sobre una gira efectuada entre las tribus indigenas de Chile Meridional*, Santiago de Chile, Imprenta Universitaria, 1914.

Sors, Antonio de, "Historia del Reino de Chile, situado en la América Meridional", en *Revista Chilena de Historia y Geografía*, vol. 39, pp. 169-199.

Suárez de Figueroa, Cristóbal, "Hechos de don García Hurtado de Mendoza, cuarto marqués de Cañete", en *Colección de Historiadores de Chile*, Tomo V, Imprenta del Ferrocarril, Santiago de Chile, 1864, pp. 1-206.

Tesillo, Santiago, "Guerras de Chile", en *Colección de Historiadores de Chile*, Tomo V, Santiago de Chile, Imprenta del Ferrocarril, 1864.

Toribio Medina, José, *Biblioteca Hispanochilena (1523-1817)*, tomo I, Santiago de Chile, Fondo Histórico y Bibliográfico José Toribio Medina, 1963.

Treutler, Paul, *Andanzas de un alemán en Chile*. 1851-1863, Editorial del Pacífico, Santiago de Chile, 1958.

Tribaldos de Toledo, Luis, "Vista jeneral de las continuadas guerras:dificil conquista del gran Reino", provincias de Chile, en *Colección de Historiadores de Chile*, Tomo IV, Santiago, 1864.

Valdivia, Pedro de, *Cartas de relación de la conquista de Chile*, Santiago de Chile,

Editorial Universitaria, 3ra edición, 1986.

Valdivia, Luis de (a), *Arte y gramatica general de la lengva qve corre todo el Reyno de Chile, con vn Vocabulario, y Confessionario*, Lima, 1606.

Valdivia, Luis de (b), *Sermon en lengua de Chile, de los mysterios de nvestra santa fe catholica, para predicarla a los indios infieles de Chile*, Valladolid, 1621.

Vidaurre, Felipe Goméz de, *Historia geográfica, natural y civil del Reino de Chile*, Colección de Historiadores de Chile, Tomo I, Imprenta Ercilla, Santiago de Chile, 1889.

Vivar, Jerónimo de, *Crónica de los reinos de Chile*, Madrid, Historia 16,1988.

(b) 研究書、論文

赤澤、坂口、富田、山本編、『アメリカ大陸の自然誌』、第1巻・第2巻、岩波書店、1992年。

Alonqueo, Martín, *Instituciones religiosas del pueblo mapuche*, Ediciones Nueva Universidad, Santiago de Chile, 1979.

Bengoa, José, *Historia del pueblo mapuche*, Ediciones Sur, Santiago de Chile, 1987,2a edición.

Chiba, Izumi, "Un 'Machi-Nguillatun' en Chile Contemporáneo - modernismo y tradición - ", en *Estudios Hispánicos*, 20, Universidad de Estudios Extranjeros de Osaka, 1995, pp. 195-234.

千葉泉、「『マチ』と夢と銀細工ーチリ先住民伝統医療師の現状ー」『大阪外国語大学論集』第17号所収、1997年。

Cooper, John M., "The Araucanians", en Steward, J. (ed.), *Handbook of South American Indians*, Vol. 2, Washington, pp. 687-760.

Durán, Teresa y Ramos, Nelly, "Castellanización formal en la Araucanía a través de la escuela", en *Lenguas Modernas 15*, Universidad de Chile, Santiago, 1988, pp. 131-154.

Ester Grebe, María, Fernández, Joaquín y Piedler, Carlos, "Mitos, creencias y concepto de enfermedad en la cultura mapuche, en *Acta Psiquiátrica y Psicológica para América Latina*, XVII, 3, Buenos Aires, 1971, pp. 180-193.

Faron, Louis C. (a), *Hawks of the sun, Mapuche Moralitiy and Its Ritual Atributes*, Pittsburgh, Universitiy of Pittsburgh Press, 1964.

Faron, Louis C. (b), *The Mapuche Indians of Chile, Waveland Press*, Illinois, 1986.

Foerster, Rolf, *Introducción a la religiosidad mapuche*, Editorial Universitaria, Santiago de Chile, 1993.

Fuentes, J. y otros, *Diccionario Histórico de Chile*, Santiago de Chile,

González, Juan I. y López, Rafael E. (Ed.), *El pueblo mapuche : presente y futuro de una raza*, Santiago de Chile, Imprenta Instituto Geográfico Militar, 1989.

Guevara, Tomás (b), *Psicolojía del pueblo mapuche*, Imprenta Cervantes, Santiago de Chile, 1908.

Guevara, Tomás (c), "Los Araucanos en la revolucion de la Independencia", en *Anales de la Universidad*, Imprenta Cervantes, 1911, pp. 217-641.

Guevara, Tomás (d), *Chile Prehistórico*, tomo I, Santiago de Chile, Balcells & Co., 1929.

Hilger, M. Inés, *Araucanian child life and its cultural background*, Smithonian Institution, City of Washington, 1957.

Housse, Rafael Emilio, *Epopeya India*, ZIG-ZAG, Santiago de Chile, 1940.

Jara, Alvaro, *Guerra y sociedad en Chile*, Santiago de Chile, Editorial Universitaria, 1ra edición, 1971.

Lagos, Tomás, "El caballo entre los indios chilenos", en *Archivo de Folklore Chileno*, fasc. 3,1951, pp. 73-78.

Leiva, Arturo (b), "La araucanización del caballo en los siglos XVI y XVII", en *Anales*, Universidad de la Frontera, 1981-1982, pp. 181-203.

León Solis, Leonardo, *Maloqueros y conchavadores en Araucanía y las Pampas, 1700-1800*, Temuco, Ediciones Universidad de la Frontera, 1991.

Mackenna, Benjamín Vicuña, *La Guerra a Muerte*, Editorial Francisco de Aguirre, Buenos Aires, 1972.

Méndez Beltrán, Luz María, "La organización de los parlamentos de indios en el siglo XVIII", en Villalobos, Sergio y otros, *Relaciones fronterizas en la Araucanía*, Ediciones Pontificia Universidad Católica de Chile, Santiago de Chile, 1982, pp. 9-64.

Métraux, Alfred, *Religions et magies indiennes d'Amérique du Sud*, Editions Gallimard, 1967.

Ministerio de Planificación y Cooperación, y Corporación Nacional de Desarrollo Indígena, *Memoria 1995*.

Montecino, Sonia y Conejeros, Ana, *Mujeres Mapuches : el saber tradicional en la curación de enfermedades comunes*, Centro de Estudios de la Mujer, 1985.

Noviello, Oscar Rosa, "Reflexiones sobre el machitun araucano y sus antecedentes sociales", en *Revista de Ciencias Sociales*, No. 4, Valparaíso, 1972.

岡田峻、『アラウカーノ文化史』、北星堂書店、1959年。

Oyarce, Ana María, "Sistemas médicas que coexisten en la IX Región de Chile : una descripción general", en *Enfoques en atención Primaria #3*, año 3, Santiago de Chile, 1988.

Ruiz Aldea, Pedro, *Los araucanos i sus costumbres*, Guillermo Miranda Editor, Santiago de Chile, 1902.

Ruiz-Esquilde Figueroa, Andrea, *Los indios amigos en la frontera araucana*, Centro de Investigaciones Diego Barros Arana, Santiago de Chile, 1993.

Salas, Alberto M., *Las armas de la conquista*, Buenos Aires, Emecé Editores, 1950.

佐々木宏幹、『シャーマニズム』、中公新書、1993年。

Titiev, Mischa, *Araucanian culture in transition.* ANN ARBOR, University of Michigan Press, 1951.

Villalobos, Sergio, (a), "Tres siglos y medio de vida fronteriza", en Villalobos, Sergio y otros, *Relaciones fronterizas en la Araucanía,* Ediciones Pontificia Universidad Católica de Chile, Santiago de Chile, 1982, pp. 9-64.

Villalobos, Sergio, (b), "Tipos fronterizos en el ejército de Arauco", en Villalobos, Sergio y otros, *Relaciones fronterizas en la Araucanía,* Ediciones Pontificia Universidad Católica de Chile, Santiago de Chile, 1982, pp. 175-221.

箭内匡、『想起と反復－現代マプーチェ社会における文化的生成－』、東京大学総合文化研究科博士学位論文、1995年。

ユネスコ世界遺産センター（監修)、『ユネスコ世界遺産２：中央・南アメリカ』、講談社、1997年

Zapater Esquioiz, Horacio, "La expansión araucana en los siglos XVIII y XIX", en Villalobos, Sergio y otros, *Relaciones fronterizas en la Araucanía,* Editorial Universitaria, Santiago de Chile, 1982, pp. 87-105.

２．現地聴き取り資料（ＭＤ録音）

Anemilla, María, Comunidad Temulemu, Comuna de Traiguén. 16 de agosto de 1996.

Aracena, Daniel, Comuna de Traiguén. 21 de agosto de 1996.

Barra Cayul, Rosa, Comunidad Romulhue, Comuna de Cholchol. No. 1:25 de agosto de 1996. No. 2 : 26 de agosto de 1996. No. 3 : 27 de agosto de 1996.

Conejero Carilaf, Juan, Comuna de Lautaro. 7 de septiembre de 1996.

Curamil, José, Comunidad Blanco Lepín, Comuna de Lautaro. 29 de agosto de 1996.

Huenuche, Guillermo, Comunidad Pililmapu, Comuna de Lumaco. No. 2 : 3 de septiembre de 1996.

Huentelao, Merejilda, Comunidad de Temulemu, Comuna de Traiguén. 16 de agosto de 1996.

Lepilao, Óscar, Comunidad de Blanco Lepín, Comuna de Lautaro. No. 1 : 2 de agosto de 1996. No. 2 : 29 de agosto de 1996.

Machituque en Pililmapu, Comunidad de Pililmapu, Comuna de Lumaco, Nos. 1～4 : 17 y 18 de agosto de 1996.

Painequeo Huaiquil, Teresa, Comunidad Reñico Chico, Comuna de Traiguén. 13 de agosto de 1996.

Raimán, Eudalia, Comunidad Pililmapu, Comuna de Lumaco. 15 de agosto de 1996.

Sáez, Graciela, Comunidad Antonio Millalén, Comuna de Lautaro. 2 de agosto de 1996.

3。ビデオ

SODECAM y 21 AUDIOVISUALES, *MACHI EUGENIA*, 1992.
VIDEOSUR, *VIDA ENTRE DOS MUNDOS*, 1986.

著者紹介

千葉　泉（ちば　いずみ）

略歴

1959年　愛知県豊橋市生まれ

1982年　東京外国語大学外国語学部スペイン語学科卒業

1984年　東京大学大学院社会学研究科国際関係論専攻修了

1995年　大阪外国語大学地域文化学科中南米地域文化専攻助教授

専門分野

中南米の民族音楽、エスノ・ヒストリー

主要論文

「現代チリにおける幼児の葬儀『ベロリオ・デ・アンヘリート』ーサンティアゴの事例ー」『大阪外国語大学大学論集』第11号（1994年）所載。

「『マチ』と夢と銀細工ーチリ先住民伝統医療師の現状ー」、『大阪外国語大学大学論集』第17号（1997年）所載。

大阪外国語大学学術研究双書19
「馬に乗ったマプーチェの神々ーチリ先住民文化の変遷ー」

1998年2月27日発行

著　　者　千葉　泉（ちば いずみ）

発 行 所　〒562　箕面市粟生間谷東8丁目1番1号
大阪外国語大学学術出版委員会

印 刷 所　〒531　大阪市北区豊崎7丁目7番7号
㈱アイジイ

ISBN4－900588－19－9
無断転載を禁ずる。

大阪外国語大学学術研究双書　既刊

1.	レフ・トルストイと革命運動（1990）	エルヴィン・オーバーレンダー 法橋和彦	著 監訳・解説
2.	ロシア語アクセント研究（1990）	神山孝夫	著
3.	社会言語学（1991）	ハーガー／ハーバーラント／パリース 乙政潤	著 訳
4.	Dwelling Space in Eastern Asia (1991)	Richard ZGUSTA	著
5.	ラ・アラウカーナ（第一部)(1992)	吉田秀太郎	訳
6.	私の精神鑑定集（1992）	志水彰	著
7.	モンタペルティ・ベネヴェント仮説	米山喜晟	著
8.	古代ブルガリア語文法	イヴァン・ドブレフ 石田修一	著 訳
9.	世界の中のポルトガル語（1993）	河野彰	監訳
10.	ルーマニア語史概説（1993）	アレクサンドゥル・ニクレスク 伊藤太吾	著 訳
11.	ロマンス言語学入門（1994）	伊藤太吾	著
12.	ラ・アラウカーナ（第二・三部)(1994)	吉田秀太郎	訳
13.	Eine kontrastive Betrachtung der japanischen und deutschen Sprache	Jun Otomasa	著
14.	カスティリャ語文法	エリオ・アントニオ・デ・ネブリハ 中岡省治	著 訳
15.	バタビアの都市空間と文学	松尾大	著
16.	ポルトガルの歴史に残った女性像とブラジル文学に現れた女性像	有水博 平田恵津子	著
17.	タイ語の言語表現	宮本マラシー	著
18.	Learner Difference and Japanese Language Education	JUNKO MAJIMA	著

ISBN4－900588－19－9